



一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6

城ヶ谷遺跡(1区) 神谷遺跡 涼見E遺跡

2016年3月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

城ヶ谷遺跡（1区） 神谷遺跡 涼見E遺跡

2016年3月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

序

現在、一般国道9号の大田市朝山町～久手町間については、緊急時の代替路線の確保、医療・観光・物流活動の支援を目的として、中国地方整備局松江国道事務所では山陰自動車道の一部である朝山・大田道路を平成19年度に事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について鳥根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は平成26年度に実施した大田市久手町波根西地内に所在する神谷遺跡、同町刺鹿地内に所在する涼見E遺跡、城ヶ谷遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。

今回の調査では、城ヶ谷遺跡で古墳時代後期の集落跡および近代の窯跡を、神谷遺跡で7～8世紀の炭窯、涼見E遺跡で古墳を確認し、当時の大田地域に居住した人々の生活と、物作りの歴史を解明する資料が得られました。本報告書がふるさと鳥根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成28年3月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所長 小林 寛

序

本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、平成26年度に実施した一般国道9号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の結果をとりまとめたものです。

発掘調査を行なった城ヶ谷遺跡1区は、丘陵斜面に営まれた古墳時代後期の集落跡および近代の窯跡の複合遺跡で、近代の陶器窯・瓦窯を含む窯業関連の遺構が確認されました。また、神谷遺跡では7～8世紀の炭窯が発見され、石見地方東部における生産活動の歴史を解明する上で貴重な遺跡となりました。本報告書がこの地域の歴史を解明する基礎資料として広く活用されることを願っております。

遺跡の調査や報告書作成にあたっては、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめとする諸機関、多くの地元の方々に御協力をいただきました。関係の皆様には厚くお礼を申し上げます。

平成28年3月

島根県教育委員会

教育長 藤原 孝行

例言

1. 本書は鳥根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成26年に実施した一般国道9号（朝山大田道路）改築事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

城ヶ谷遺跡 1区（鳥根県大田市久手町刺鹿）	3,500㎡
神谷遺跡（鳥根県大田市久手町波根西）	330㎡
涼見E遺跡（鳥根県大田市久手町刺鹿）	140㎡

3. 調査組織

平成26年度現地調査

[事務局] 廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）、池淵俊一（管理課長）

[調査担当者] 林 健亮（調査第2課長）、宮本正保（調査第2課調査第3係長）、久保田一郎（企画員）、内田律雄（嘱託職員）、阿部賢治（調査補助員）、幸村康子（調査補助員）

平成27年度報告書作成

[事務局] 廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）、池淵俊一（管理課長）

[調査担当者] 林 健亮（調査第2課長）、宮本正保（調査第2課調査第3係長）、久保田一郎（企画員）、阿部賢治（嘱託職員）

4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、鳥根県教育委員会が株式会社トーワエンジニアリングへ委託した。

5. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。（順不同、敬称略）

田中義昭（元鳥根県文化財保護審議会委員）、大橋泰夫（鳥根大学法文学部教授）、上村武（岡山県古代吉備文化財センター）

6. 本書の編集・執筆は久保田・川原和人（嘱託職員）・阿部が行い、掲載した図表は、調査担当者及び遺物整理作業員が作成した。遺構・遺物実測図作成は、各調査員のほか飯塚由起（調査第2課臨時職員）、川原和人（調査第1課嘱託職員）、田中玲子（同臨時職員）、秦愛子（調査第3課臨時職員）、渡辺聡（調査第2課臨時職員）が行った。

7. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用し、Adobe社のAdobe InDesign CS5、Adobe Illustrator CS5、Adobe Photoshop CS5を用いて作業を行った。

8. 挿図中の北は、測量法に基づく平面直角第Ⅲ座標系X軸方向を指し、座標系XY座標は世界測地系による。レベル高は海拔高を示す。

9. 本書掲載の図面、写真、出土遺物は、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

10. 本書で使用した第2図は国土地理院の1/25,000地図（石見大田）を使用して作成したものである。

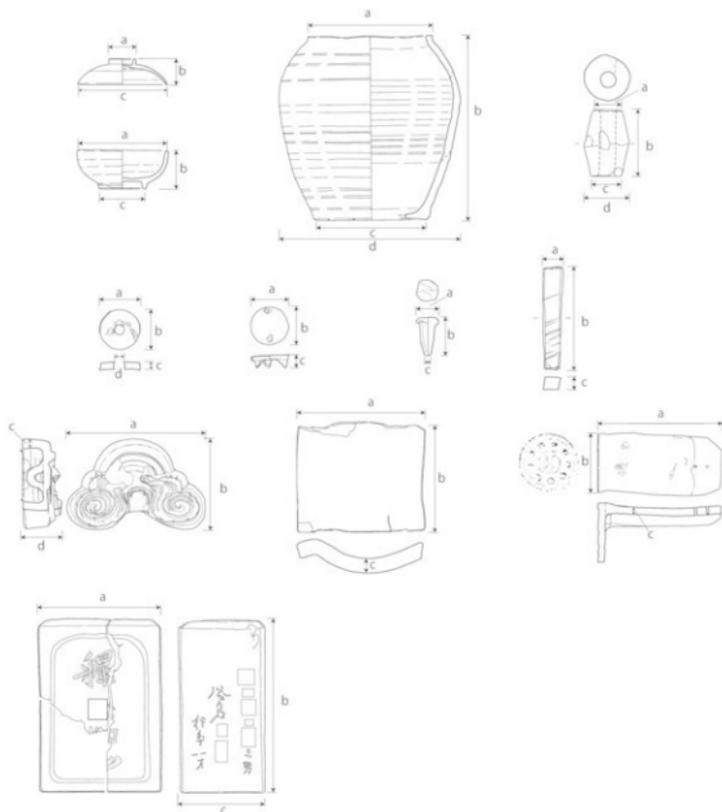
凡例

1. 遺構の略号は下記のとおりである。

SI：竪穴住居 SK：土坑 SD：溝状遺構 SX：性格不明遺構 SS：平坦面

2. 本文中・挿図中・写真図版中の遺物番号は一致する。

3. 遺物観察表の法量の計測値は、下図における a,b,c,d 各部分の計測値を記したものである。



本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過（久保田）	1
第2章 遺跡の位置と環境（久保田）	2
第3章 城ヶ谷遺跡（1区）	5
第1節 発掘作業と整理事業の経過（久保田）	5
第2節 北区の遺構（久保田・川原）	13
第3節 南西区の遺構（久保田）	24
第4節 窯業関連遺構（久保田）	27
第5節 窯関連出土遺物（阿部）	42
第6節 遺構外出土遺物（阿部・川原）	69
第4章 神谷遺跡	74
第1節 発掘作業と整理事業の経過（久保田）	74
第2節 遺構と遺物（久保田・川原）	78
第5章 涼見E遺跡	95
第1節 発掘作業と整理事業の経過（久保田）	95
第2節 遺構と遺物（久保田・川原）	103
第6章 総括（久保田・阿部）	105
第7章 自然科学分析（加速器分析研究所）	111
遺物観察表	114

挿図目次

第 1 図	遺跡の位置	1	第 32 図	城ヶ谷遺跡 2 号竪跡縦断面実測図 (S=1/80, 1/60)	35
第 2 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第 33 図	城ヶ谷遺跡 2 号竪跡横断面実測図 (S=1/60)	36
第 3 図	城ヶ谷遺跡の調査前地形・試掘調査位置・ 調査区位置 (S=1/1,000)	6	第 34 図	城ヶ谷遺跡物原縦断面実測図 (S=1/60)	37
第 4 図	城ヶ谷遺跡試掘確認調査トレンチ土層実測図 (S=1/80)	7	第 35 図	城ヶ谷遺跡 S X 0 1、S K 0 2 実測図 (S=1/40)	38
第 5 図	城ヶ谷遺跡トレンチ土層図 (全体 S=1/400, 土層 S=1/60)	8	第 36 図	城ヶ谷遺跡 S K 0 3 実測図 (S=1/40)	39
第 6 図	城ヶ谷遺跡調査後地形測量図 (S=1/400)	9	第 37 図	城ヶ谷遺跡 S B 0 1、礎石列 1、S D 0 2・ 0 7 実測図 (S=1/80)	40
第 7 図	城ヶ谷遺跡遺構配置図 (S=1/400)	10	第 38 図	城ヶ谷遺跡 S S 2 実測図 (S=1/160)	41
第 8 図	城ヶ谷遺跡基本土層図 (S=1/100)	11	第 39 図	城ヶ谷遺跡竪体内 (1 号竪跡) 出土遺物実測図 (S=1/3、1/4、1/6)	43
第 9 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 1 実測図 (S=1/40)	13	第 40 図	城ヶ谷遺跡竪体内 (2 号竪跡) 出土遺物実測図 (S=1/3、1/4、1/5)	44
第 10 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 1 出土遺物実測図 (S=1/2、1/3)	14	第 41 図	城ヶ谷遺跡階段、物原土坑出土遺物実測図 (S=1/3、1/4)	45
第 11 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 2 実測図 (S=1/40)	15	第 42 図	城ヶ谷遺跡焚口付近・S S 3 出土遺物実測図 (S=1/3、1/4、1/6)	47
第 12 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 2 竪実測図 (S=1/20)	16	第 43 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 1 (S=1/3)	49
第 13 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 2 出土遺物実測図 (S=1/3)	17	第 44 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 2 (S=1/3、1/4)	51
第 14 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 1・0 2 出土石材実測図 (S=1/6)	17	第 45 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 3 (S=1/4)	53
第 15 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 4 実測図 (S=1/60)	18	第 46 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 4 (S=1/3)	55
第 16 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 4 竪実測図 (S=1/20)	19	第 47 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 5 (S=1/4)	56
第 17 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 4 出土遺物実測図 1 (S=1/3)	20	第 48 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 6 (S=1/4、1/6)	57
第 18 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 4 出土遺物実測図 2 (S=1/3)	21	第 49 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 7 (S=1/3)	59
第 19 図	城ヶ谷遺跡 S I 0 4 出土石材実測図 (S=1/6)	21	第 50 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 8 (S=1/3、1/4)	61
第 20 図	城ヶ谷遺跡 S D 0 3・0 4・1 1、土器だまり 出土位置および出土状況図 (全体図 S=1/40、出土状況図 S=1/20)	22	第 51 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 9 (S=1/3、1/4)	62
第 21 図	城ヶ谷遺跡 S D 0 5 実測図 (S=1/60)	23	第 52 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 10 (S=1/3)	63
第 22 図	城ヶ谷遺跡 S D 0 6 実測図 (S=1/60)	23	第 53 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 11 (S=1/4)	65
第 23 図	城ヶ谷遺跡 S D 1 0 およびピット群実測図 (S=1/80)	24	第 54 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 12 (S=1/6)	67
第 24 図	城ヶ谷遺跡 S D 0 8・0 9 実測図 (S=1/80)	25	第 55 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 13 (S=1/6)	68
第 25 図	城ヶ谷遺跡 S X 0 2 実測図 (S=1/20)	26	第 56 図	城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 14 (S=1/3)	69
第 26 図	城ヶ谷遺跡 1 号竪跡平面実測図 (S=1/80)	28	第 57 図	城ヶ谷遺跡 S S 2 出土遺物実測図 (S=1/3、1/4、1/8)	71
第 27 図	城ヶ谷遺跡 1 号竪跡縦断面実測図 (S=1/100)	29			
第 28 図	城ヶ谷遺跡 1 号竪跡第 7 房正面実測図 (S=1/30)	30			
第 29 図	城ヶ谷遺跡 1 号竪跡縦断面実測図 (S=1/40)	32			
第 30 図	城ヶ谷遺跡 1 号竪跡断面実測図 (S=1/60)	33			
第 31 図	城ヶ谷遺跡 2 号竪跡平面実測図 (S=1/80)	34			

第58図	城ヶ谷遺跡SD01・02、SK01・03、調査区外出土遺物実測図 (S=1/3、1/4、1/6、1/8)	73	第72図	神谷遺跡3号炭窯実測図 (S=1/60)	90
第59図	城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物実測図—須恵器 (S=1/3)	75	第73図	神谷遺跡4号炭窯実測図 (S=1/60)	91
第60図	城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物実測図—土師器1 (S=1/3)	76	第74図	神谷遺跡SD01・SK01実測図 (S=1/60)	92
第61図	城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物実測図—土師器2 (1～5S=1/3、6S=1/4)	77	第75図	神谷遺跡出土遺物実測図1 (S=1/3)	93
第62図	城ヶ谷遺跡 遺構外出土遺物実測図—南西区ほか出土陶磁器 (S=1/3、1/4)	78	第76図	神谷遺跡出土遺物実測図2 (S=1/3)	94
第63図	1、2号窯生産遺物器種別組成一覧(1)	79	第77図	涼見E遺跡の調査前地形・試掘調査位置・調査区位置 (S=1/1,000)	96
第64図	1、2号窯生産遺物器種別組成一覧(2)	80	第78図	涼見E遺跡試掘確認調査トレンチ土層実測図 (S=1/80)	97
第65図	神谷遺跡の調査前地形・試掘調査位置・調査区位置 (S=1/800)	82	第79図	涼見E遺跡調査区および周辺地形測量図 (S=1/120)	98
第66図	神谷遺跡試掘確認調査トレンチ土層実測図 (S=1/80)	83	第80図	涼見E遺跡調査前地形測量図 (S=1/100)	99
第67図	神谷遺跡の基本土層・調査後地形測量・遺構配置図 (S=1/120)	84	第81図	涼見E遺跡調査後地形測量図 (S=1/100)	100
第68図	神谷遺跡の1～4号炭窯立面実測図 (S=1/100)	85	第82図	涼見E遺跡1号墳・2号墳セクション実測図 (S=1/60)	101
第69図	神谷遺跡1号炭窯サブトレンチセクション図 (S=1/60)	86	第83図	涼見E遺跡1号墳平面・立面実測図 (S=1/40)	102
第70図	神谷遺跡1号炭窯実測図 (S=1/60)	87	第84図	涼見E遺跡2号墳平面・立面実測図 (S=1/40)	103
第71図	神谷遺跡2号炭窯実測図 (S=1/60)	89	第85図	涼見E遺跡2号墳頂部集石平面・立面実測図 (S=1/20)	104
			第86図	涼見E遺跡出土遺物実測図 (S=1/3)	104

表目次

第1表	城ヶ谷遺跡南西部ピット群計測表	25	第3表	城ヶ谷遺跡出土遺物観察表	114
第2表	城ヶ谷遺跡1号窯計測表	27	第4表	神谷遺跡出土遺物観察表	122

写真図版目次

写真図版 1	城ヶ谷遺跡近景 (調査前) 城ヶ谷遺跡近景 (調査後・南から) 城ヶ谷遺跡近景 (調査後・南西から)	写真図版 15 写真図版 16 写真図版 17	城ヶ谷遺跡 S I O 4 出土遺物 城ヶ谷遺跡 1 号窯跡出土遺物 城ヶ谷遺跡 2 号窯跡出土遺物 城ヶ谷遺跡窯付属階段、物原下土坑出土遺物①
写真図版 2	城ヶ谷遺跡上部土層 城ヶ谷遺跡中部土層 城ヶ谷遺跡縦穴住居群	写真図版 18	城ヶ谷遺跡窯付属階段、物原下土坑出土遺物② 城ヶ谷遺跡窯焚き口付近、S S 3 出土遺物① 城ヶ谷遺跡窯焚き口付近、S S 3 出土遺物②
写真図版 3	城ヶ谷遺跡 S I O 1 検出 城ヶ谷遺跡 S I O 1 遺付け竈 城ヶ谷遺跡 S I O 2 検出	写真図版 19	城ヶ谷遺跡物原出土遺物① 城ヶ谷遺跡物原出土遺物② 城ヶ谷遺跡物原出土遺物③ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物④ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑤ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑥ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑦ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑧ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑨ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑩ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑪ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑫ 城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑬ 城ヶ谷遺跡 S S 2 出土遺物① 城ヶ谷遺跡 S S 2 出土遺物② 城ヶ谷遺跡 S D O 2 出土遺物 城ヶ谷遺跡 S D O 1 出土遺物 城ヶ谷遺跡 S K O 1、0 3 出土遺物 城ヶ谷遺跡 S S 2 調査区外出土遺物 城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物① 城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物② 城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物③ 神谷遺跡全景 (真上から) 神谷遺跡遠景 (南から) 神谷遺跡遠景 (北から) 神谷遺跡近景 (調査前) 神谷遺跡土層 (西部) 神谷遺跡 1 号炭窯検出 神谷遺跡 1 号炭窯焚き口付近石積み
写真図版 4	城ヶ谷遺跡 S I O 2 遺付け竈 城ヶ谷遺跡 S I O 4 遺付け竈	写真図版 20 写真図版 21 写真図版 22	
写真図版 5	城ヶ谷遺跡 S I O 4 完掘 城ヶ谷遺跡土器溜まり 城ヶ谷遺跡 S X O 2	写真図版 23 写真図版 24 写真図版 25 写真図版 26 写真図版 27 写真図版 28 写真図版 29 写真図版 30 写真図版 31	
写真図版 6	城ヶ谷遺跡南西区の遺構群 (西から) 城ヶ谷遺跡南西区の遺構群 (南から)	写真図版 32	
写真図版 7	城ヶ谷遺跡 1 号窯全景 城ヶ谷遺跡 2 号窯全景		
写真図版 8	城ヶ谷遺跡 1 号窯第 6 房 城ヶ谷遺跡 1 号窯第 7 房 城ヶ谷遺跡 1 号窯第 8 房 (東から)		
写真図版 9 1	城ヶ谷遺跡 2 号窯側面 城ヶ谷遺跡 S D O 1 セクション 城ヶ谷遺跡 S D O 1 完掘		
写真図版 10	城ヶ谷遺跡物原 (調査前) 城ヶ谷遺跡物原西壁セクション 城ヶ谷遺跡物原西壁セクション		
写真図版 11	城ヶ谷遺跡 S X O 1 城ヶ谷遺跡 S K O 2 セクション 城ヶ谷遺跡 S K O 2 完掘		
写真図版 12	城ヶ谷遺跡 S S 3 城ヶ谷遺跡 S D O 2 城ヶ谷遺跡 S K O 3 完掘		
写真図版 13	城ヶ谷遺跡 S B O 1 (礎石建物) 城ヶ谷遺跡 S S 2 (調査区外) 城ヶ谷遺跡土練機出土状況 城ヶ谷遺跡 S S 2 (西から)	写真図版 33 写真図版 34 写真図版 35 写真図版 36 写真図版 37	
写真図版 14	城ヶ谷遺跡 S I O 1 出土遺物 城ヶ谷遺跡 S I O 2 出土遺物 城ヶ谷遺跡 S I O 1・0 2 出土遺物	写真図版 38	

写真図版 39	神谷遺跡 1号炭窯縦断セクション 神谷遺跡 1号炭窯セクション (横口) 神谷遺跡 1号炭窯完掘 (西から)	写真図版 46	涼見 E 遺跡近景 (調査前) 涼見 E 遺跡近景 (調査前) 涼見 E 遺跡近景 (調査前)
写真図版 40	神谷遺跡 2号炭窯煙道検出 神谷遺跡 2号炭窯土器出土状況 神谷遺跡 2号炭窯完掘 (北から)	写真図版 47	涼見 E 遺跡東西セクション (西) 涼見 E 遺跡東西セクション (東) 涼見 E 遺跡区画溝セクション
写真図版 41	神谷遺跡 3号炭窯横口 4 付近 神谷遺跡 2号炭窯底面炭出土状況 神谷遺跡 2号炭窯完掘 (西から)	写真図版 48	涼見 E 遺跡南北セクション (南) 涼見 E 遺跡南北セクション (北) 涼見 E 遺跡填裾部石出土状況
写真図版 42	神谷遺跡 2号炭窯、3号炭窯 神谷遺跡 4号炭窯検出 (西から) 神谷遺跡 4号炭窯煙道部	写真図版 49	涼見 E 遺跡 1号墳北辺貼り石 涼見 E 遺跡 1号墳北辺貼り石 涼見 E 遺跡 1号墳西辺貼り石 (南から)
写真図版 43	神谷遺跡 4号炭窯煙道付近の横口 神谷遺跡 4号炭窯完掘 (西から) 神谷遺跡 4号炭窯完掘 (東から)	写真図版 50	涼見 E 遺跡 1号墳頂部主体部ブラン 涼見 E 遺跡 1号墳西辺貼り石 (西から) 涼見 E 遺跡 2号墳頂部集石
写真図版 44	神谷遺跡 S K O 1 石出土状況 神谷遺跡 4号炭窯完掘 (東から) 神谷遺跡 S D O 1	写真図版 51	涼見 E 遺跡 2号墳東辺貼り石 (東から) 涼見 E 遺跡 1号墳、2号墳調査後 (北から)
写真図版 45	神谷遺跡調査後 (東から) 神谷遺跡出土遺物 涼見 E 遺跡出土遺物		

第1章 調査に至る経緯と経過

国道9号は、京都市京都市から山口県下関市に至る総延長約750kmの山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。しかし、近年は都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、このため都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、その様相は鳥根県下の出雲市、及び大田市周辺においても例外ではない。特に出雲市と大田市境の仙山峠付近はいつもの急カーブがあり、交通事故が多発するなど、交通の難所であるばかりでなく、平成18年7月には地滑り災害も発生して全面通行止めが発生するなど、主要幹線としての機能に支障をきたしていたところであった。こうした状況のもと、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、また今日的な課題となっている防災時緊急連絡網としての機能をも発揮させるために、国土交通省により朝山大田道路（延長6.3km、大田市朝山町朝倉～大田市久手町刺鹿）の整備・建設が計画されて事業化が図られ、平成18年3月に都市計画決定された。

この計画・事業化にあたり、国土交通省から鳥根県教育委員会に、平成19年度に朝山大田道路建設予定地内の遺跡の有無について照会があった。これを受けて鳥根県教育委員会では大田市教育委員会の協力のもと、平成19年度以降、数次にわたり予定地内における遺跡の分布調査を実施した。その結果、9ヶ所の要注意箇所を含めて合計22カ所の調査対象地を確認し、国土交通省に回答した。以後、この結果をもとに、国土交通省と鳥根県教育委員会の間で適宜協議を行い、具体的な埋蔵文化財調査について検討を行ってきた。この協議の過程の中で、平成22年3月12日付け国中整松一官第272号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が文化庁長官あてに提出された。それに対し、平成22年3月12日付け鳥教文財第2号の74で、鳥根県教育委員会教育長から13

遺跡の記録保存のための発掘調査の実施が勧告された。

その後、工事と発掘調査の工程上の協議を経たうえで、平成22年度から予定地内の発掘調査を開始することとなった。

城ヶ谷遺跡1区は、平成23年度に試掘調査を行って調査範囲を確定し、平成26年度に本調査を実施した。神谷遺跡、涼見E遺跡は、平成25年度に試掘調査を行って調査範囲を確定し、平成26年度に本調査を実施した。本報告書は平成26年度調査を行った上記の3遺跡の調査報告である。なお、既に現地調査を終えている遺跡は、門遺跡、高原遺跡1区、中尾H遺跡、市井深田遺跡、荒瀬遺跡、鈴見B遺跡1区・2区がある。



第1図 遺跡の位置

第2章 遺跡の位置と環境

神谷遺跡、涼見E遺跡、城ヶ谷遺跡は大田市東部の波根町から久手町にかけて広がる平野の南に接した低丘陵地帯に所在する。現在広い水田地帯となっている平野部は、1951年の干拓以前は波根湖が広がっていた。

旧波根湖には、低丘陵地帯を開析して河谷を形成しながら諸河川が流れ込んでいた。城ヶ谷遺跡の西方から流下する市井川（江谷川支流）に沿った河谷に所在する中尾H遺跡では、前期（月崎下層式）から中期（船元式）をへて後期（緑帯文）に至る土器が出土している。この河川沿いが縄文人の主要な生活の場となっていた状況をうかがわせる。中尾H遺跡以外にも、江谷川流域の荒横遺跡、波根川流域の波根川遺跡で縄文土器が出土している。

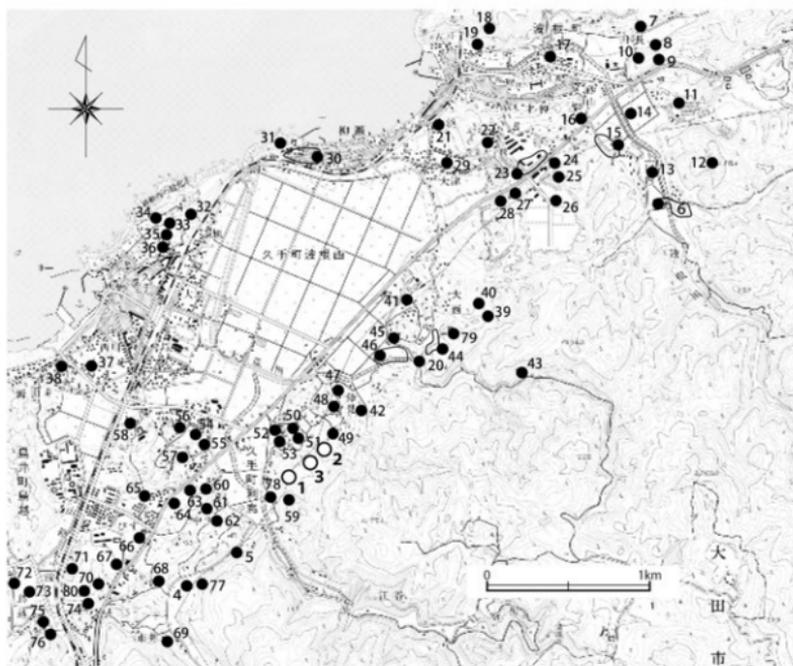
弥生時代の遺跡は大田市西部で土江遺跡、八日市遺跡がある。波根・久手地域では、江谷川流域の荒横遺跡で前期・中期・後期の土器が出土している。波根川の支谷に位置する高原遺跡、および市井川沿いの河谷に所在する中尾H遺跡で弥生中期後半から後期にかけての土器が出土している。縄文時代と同様に河川沿いが生活の場となったことがうかがわれる。一方で、大田市北部の鳥井南遺跡のような低丘陵上に営まれた集落の遺跡が、この時期から確認されるようになる。

古墳時代前期の遺跡としては、旧波根湖の周辺に位置する高原遺跡、柳瀬遺跡、大西C遺跡が知られている。このうち、発掘調査が行われた高原遺跡は古墳時代の中期、後期にも継続する。旧波根湖周辺では鈴見B遺跡で、また城ヶ谷遺跡西方では、荒横遺跡、門遺跡、中尾H遺跡で古墳時代中期、後期の土器が出土している。上記の遺跡のほか、古墳時代後期には丘陵緩斜面に市井深田遺跡が現れる。市井深田遺跡では、造付け甕を伴った加工段が多数確認されており、集落が古墳時代後期から平安時代前期にかけて営まれた。鈴見B遺跡でも、この時期から丘陵部でも遺構・遺物が確認されるようになる。発掘調査が行われた上記の遺跡のほか、低平な丘陵上の平坦部では大西A遺跡、大西B遺跡、大西D遺跡等広範囲で土師器・須恵器が採集され、古墳時代に集落が広がっていたことが推測される。神谷遺跡・涼見E遺跡の北に接する丘陵地帯でも、複数箇所土師器や須恵器が採集されており（涼見A、涼見B、涼見C、涼見D、鈴見上ヶA、鈴見上ヶB遺跡）、古墳時代には広範囲に集落が広がっていたことがうかがわれる。

古墳では竹原古墳があげられる。大田市東部の周知の遺跡で、古墳時代前半期に属する可能性がある古墳はこの竹原古墳のみであったが、今回調査した涼見E遺跡をこれに加えることができる。この他は、古墳時代後期に営まれた多数の横穴墓である。城ヶ谷遺跡の西方には諸友大師山横穴群、二中横穴群、中尾横穴などが知られる。遺跡の東方には熊屋谷横穴、中屋曾根横穴、松田谷横穴、銭神山横穴群、暮石横穴群、大西大師山横穴群等がある。旧波根湖南岸の低丘陵地帯に密集する傾向があるが、一部では大原川沿いに遡上した位置にも銅ヶ谷横穴群が知られる。

奈良時代の遺跡として、高原遺跡、荒横遺跡、門遺跡、中尾H遺跡、市井深田遺跡があげられる。いずれも古墳時代から遺構・遺物が確認される遺跡である。高原遺跡と中尾H遺跡では木簡が出土し、門遺跡からは墨書土器も出土している。当地域への文字の浸透が知られる。また、波根町には天王平庵寺が建立されており、仏教も浸透している。

『延喜式』兵部省には「波瀬駅」が記載されており、古代山陰道が通過していたこと及び同駅の



1 城ヶ谷遺跡	2 神谷遺跡	3 涼見E遺跡	4 中尾H遺跡
5 門遺跡	6 高原遺跡	7 前谷B遺跡	8 前谷C遺跡
9 幸迫谷横穴墓	10 前谷A遺跡	11 田長横穴墓	12 旭山城跡
13 波根川遺跡	14 田長遺跡	15 上川内遺跡	16 砂口遺跡
17 江奥遺跡	18 金比羅山横穴墓	19 東灘遺跡	20 六曾根遺跡
21 中浜遺跡	22 砂山遺跡	23 松田谷横穴群	24 天王平廃寺
25 高砂遺跡	26 西迫横穴	27 中山曾根横穴	28 熊屋谷横穴群
29 大津遺跡	30 柳瀬西遺跡	31 鱈走城跡	32 旭遺跡
33 刈田神社裏山B遺跡	34 刈田神社裏山A遺跡	35 刈田神社裏山遺跡	36 刈田神社横遺跡
37 新田B遺跡	38 新田A遺跡	39 暮石横穴群	40 銭神山横穴群
41 大西D遺跡	42 鈴見B遺跡	43 鍋ヶ谷横穴群	44 大西A遺跡
45 大西B遺跡	46 大西C遺跡	47 鈴見A遺跡	48 鈴見上ヶA遺跡
49 涼見上ヶB遺跡	50 涼見D遺跡	51 涼見B遺跡	52 涼見A遺跡
53 涼見C遺跡	54 竹原古墳	55 竹原B遺跡	56 竹原A遺跡
57 竹原C遺跡	58 市庭遺跡	59 岩山城跡	60 中尾C遺跡
61 中尾D遺跡	62 中尾E遺跡	63 森ノ上遺跡	64 辻遺跡
65 中尾B遺跡	66 諸友大師山横穴群	67 二中横穴群	68 中尾横穴
69 市井遺跡	70 山田庫夫宅裏横穴群	71 鳥越A遺跡	72 鳥越B遺跡
73 中祖遺跡	74 諸友西横穴群	75 鳥越C遺跡	76 栗林C遺跡
77 市井深田遺跡	78 荒横遺跡	79 大西大師山遺跡	80 鳥越城跡

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

設置が知られる。また、安濃郡「波瀬郷」「刺鹿郷」が成立しており（『倭名類聚抄』）開発の進展がうかがわれる。

中世の遺跡として、輸入陶磁器がまとまって出土した高原遺跡が調査されており、同遺跡の西方に広がっていた旧波根湖や、「大津」の遺称から想定される港湾との関連が指摘されている。城ヶ谷遺跡の西方では、荒瀬遺跡で中世の木棺墓が確認されている。門遺跡からは永楽通宝、中尾H遺跡からは輸入磁器、瀬戸美濃系陶器が出土している。

江戸時代以降、湖岸の小規模な埋め立てによる新田開発が行われ、旧波根湖の水面は徐々に縮小した。一方で潟湖の環境がもたらす豊富な資源の利用も盛んに行われ、当該地域の人々は、内水面と陸地の両方を有効に利用してきた。しかし、戦争に伴って食糧増産が至上課題となり、1943年に全面的な干拓が開始され、1951年には旧波根湖は完全に陸化して水田地帯となった。

【参考文献】

- 『鳥根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ 石見部製鉄遺跡』鳥根県教育委員会、1984年
- 『鳥根県中近世城館分布調査報告書 石見の城館跡』鳥根県教育委員会、1997年
- 『増補改訂 鳥根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』鳥根県教育委員会、2002年
- 『門遺跡 高原遺跡Ⅰ区 中尾H遺跡』鳥根県教育委員会、2013年
- 『市井深田遺跡 荒瀬遺跡 鈴見B遺跡Ⅰ区』鳥根県教育委員会、2014年
- 『鈴見B遺跡Ⅱ区』鳥根県教育委員会、2015年
- 『高原遺跡Ⅱ区』鳥根県教育委員会、2015年
- 長尾隼「潟湖がうつつた近代—干拓以前の波根湖をめぐる景観と生業の記憶—」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』鳥根県古代文化センター、2015年

第3章 城ヶ谷遺跡（1区）

第1節 発掘作業と整理作業の経過

1) 遺跡の位置

城ヶ谷遺跡は大田市北東部の久手町刺鹿に所在し、江谷川河谷から派生する支谷の一つに位置する。範囲は、支谷に面した南向き緩斜面から、尾根を超えた北側の緩斜面にかけて広がる。平成26年度本調査を行ったのは、南向き斜面の部分である。

2) 試掘確認調査の概要

試掘確認調査は平成23年12月7日から平成23年12月15日まで実施した。分布調査では、地表に露出した状態で確認された登り窯跡と、その周囲の平坦面を合わせた5,080㎡を要注意箇所とした。この範囲の中、7箇所にてトレンチ掘削による調査を実施し、4箇所のトレンチで古墳時代の遺物包含層を確認した。この調査結果から、3,500㎡について本発掘調査が必要であると判断された。

3) 発掘作業の経過

本調査は平成26年8月6日から平成26年12月26日まで実施した。表土掘削を重機で行い、遺構や遺物包含層の掘削は人力で行った。調査区中央に分布調査時から確認されていた登り窯が存在し、窯での作業に関連するとみられる平坦面も登り窯上端の右方および上方に認められた。登り窯は壁上半から天井にかけてのほとんどが崩落しており、天井を構成していた耐火煉瓦が焼成室内に落ち込んでいた。これらの煉瓦を除去して窯の内部を完全に露出させた。これと並行して関連遺構を検出するため窯体外側の堆積土を除去して精査を行い、上方に排水溝、平坦面SS2（成形や乾燥を行う作業場）、同平坦面へ上る通路、焚き口側の側方に階段状のテラス、外壁に隣接して覆い屋の礎石を検出した。窯体全体が露出した後、詳細図化を行った。詳細図は株式会社トワエンジニアリングに委託した元図を加筆修正して作成した。

登り窯右方には20m×15mの範囲で、物原が認められた。物原の堆積はかなり厚いことが予想されたので、トレンチ（幅6m）を掘削し、断面図を作成した。物原出土遺物の採集は器種、型式を代表する個体を必要最小限だけ持ち帰って記録することとした。登り窯上方の平坦面（SS2）では地表直下で礎石建物跡が確認され、さらに礎石列は調査区外まで続いていた。これら窯業関連の遺構が出そろった時点で、10月4日現地説明会を開催し、約30名の参加があった。

10月上旬から、登り窯下層の調査を開始した。調査区中央の登り窯の詳細図化と修正が完了した後、東半分を人力で崩し、中央を縦断するサブトレンチを掘削して縦断面セクションを観察した。このセクションが現れた時点で、登り窯の下層に古い段階の登り窯が遺存していることが判明した。セクション図を作成後上層の窯体、間層を除去して下層の登り窯を検出した。下層の登り窯の測量は遺跡調査システム「遺構くん」を用いて行い、12月上旬に測量を終了した。

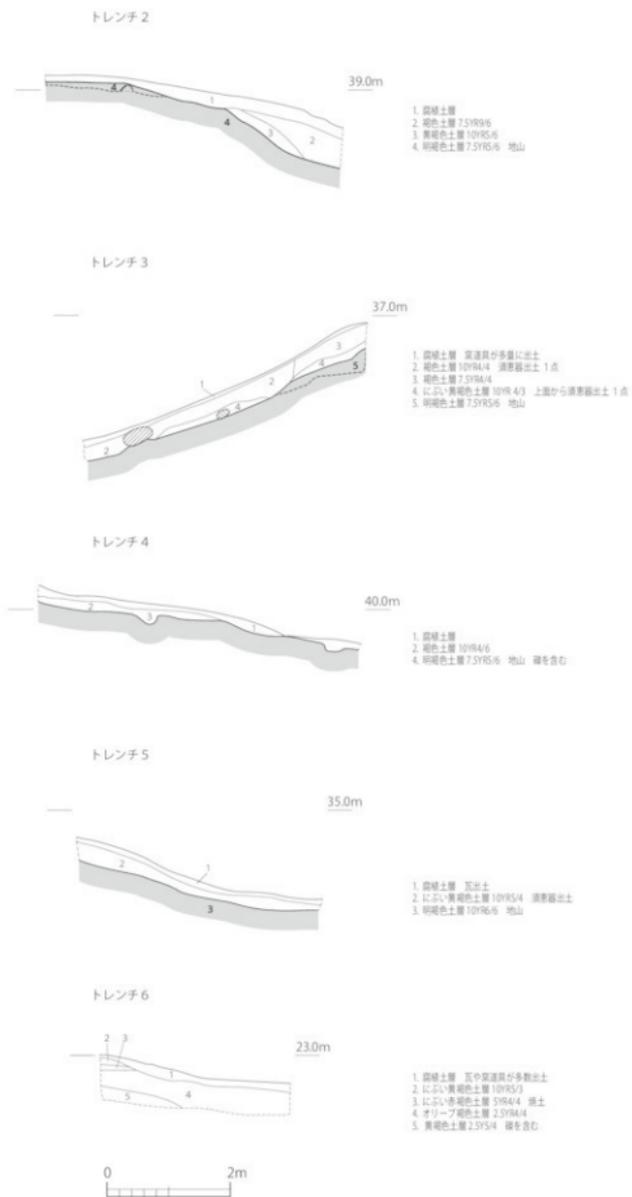
窯の下層の調査と並行して、10月から古墳時代の遺構、包含層、下層遺構の調査を開始した。調査区北部では大きく三つの面が認められた。上から順にSS1、SS2、SS3としている。尾根に近い最上部の面は緩斜面で、調査区北東部一帯を占める。この緩斜面では、表土の薄い堆積の下に灰オリーブ色を呈した古墳時代の包含層、および堅穴住居3棟等を含む古墳時代の遺構を確認した（第8図Bライン土層図）。調査区上端から10m強で小さな段差を経てやや平坦な面に移



第3図 城ヶ谷遺跡の調査前地形・試掘調査位置・調査区位置

行する。これをSS1とした。SS1の北辺で検出された古墳時代の竪穴住居(S102)の前方は、SS1の造成に伴って大部分破壊されている。SS1上では溝状遺構(SD05・06)が検出されている。SS1を削って前述のSS2が造成されている。SS2はSS1の南端を2～3mカットして水平に整地された面であり、調査区外へも続く。SS2上の礎石建物も調査区外へ続いており、ほかに溜め池等の遺構も確認された。これらについては地権者の承諾を得て倒木、竹等を片付け、測量を行った。

物原の上方には不良品の選別場とみられる平坦面SS3が広がっていたが、この平坦面は大規模



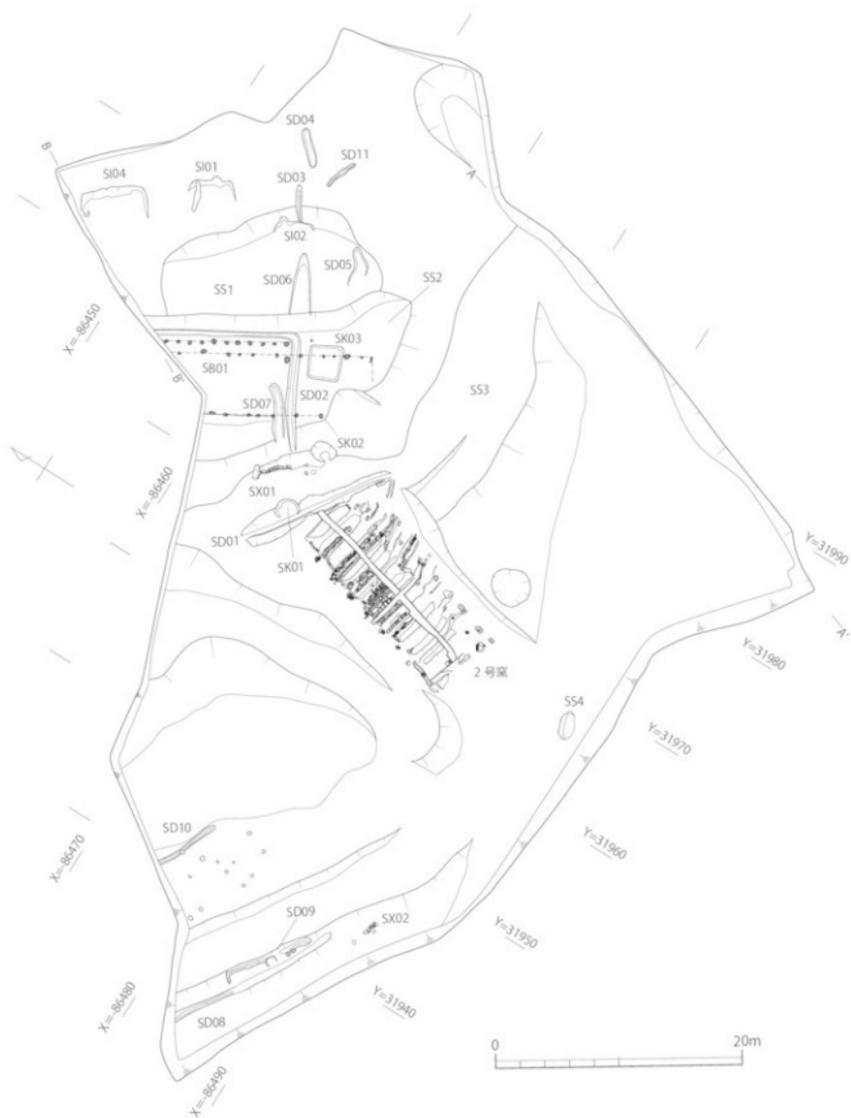
第4図 城ヶ谷遺跡試掘確認調査トレンチ土層実測図 (S=1/80)



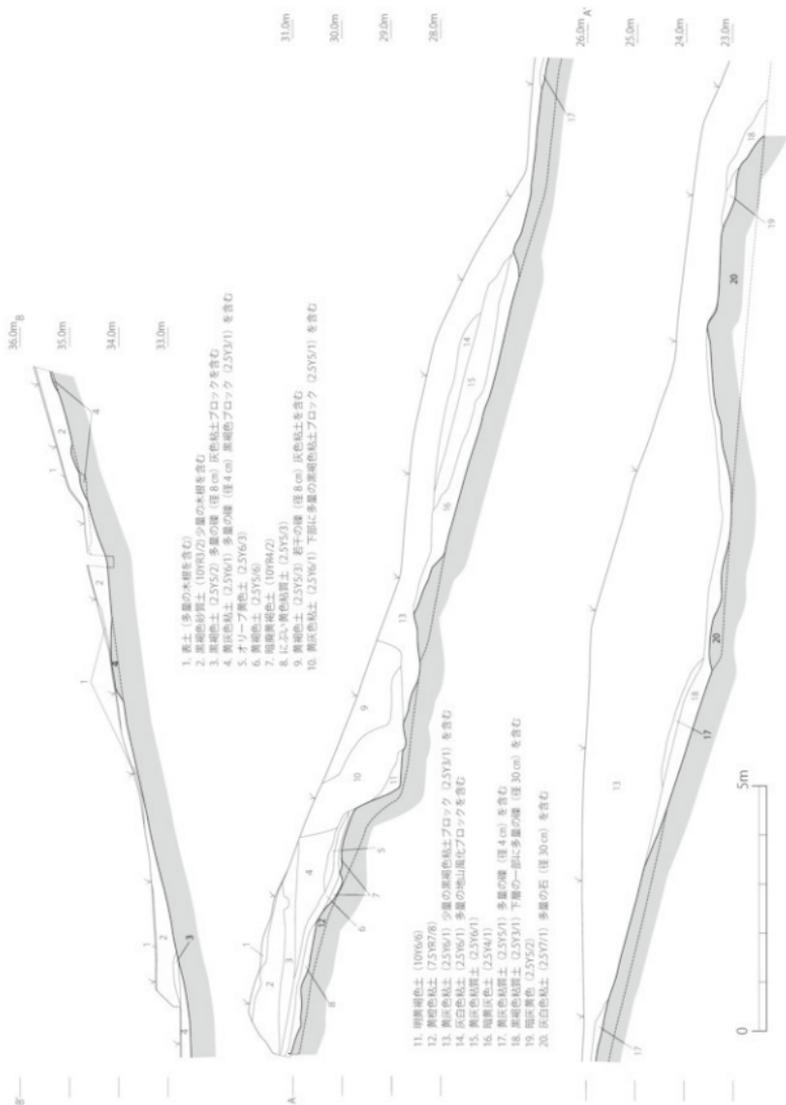
第6図 城ヶ谷遺跡調査後地形測量図 (S=1/400)

な地山削り出しと盛り土によって造成されていた。物原下方の調査区南東部の平坦部も、瓦・竈道具を含む土砂が厚く堆積していた(第8図Aライン土層)。これらの厚い堆積層を重機を用いて除去した後、古墳時代の包含層を人力掘削した。

調査区南西部は石垣を伴うもと水田であった。当初地山を削平して造成されたものと考えていたが、表土掘削にともなって堆積土が露出した旧水田法面の観察により、軟質なブロックを含む大量の盛り土によって造成されていることが判明した。この造成土を重機によって除去した後、中世の



第7図 城ヶ谷遺跡遺構配置図 (S=1/400)



第 8 図 城ヶ谷遺跡基本土層図 (S=1/100)

包含層と遺構を調査した。掘削を伴う作業は12月19日に終了した。その後調査区の地形測量および調査区外に広がる窯業関連の遺構の測量を、地権者の承諾を得て実施し、12月26日に調査を終了した。

4) 整理作業の経過

遺物の水洗、注記は発掘作業と並行して行った。遺構図の整理は平成26年度から27年度にかけて行い、遺物実測の大部分は平成27年度に行った。遺物写真撮影は平成27年度に行った。

古墳時代の出土品は、調査区北部で確認した遺構からの出土遺物のうち、実測可能な個体を全点実測した。調査区南東部の包含層出土品は、出土した種別・器種を網羅するように選別し、できる限り遺存状態の良い遺物を抽出して実測した。物原等から出土した窯業関連の遺物は数量が夥しいので、瓦や陶磁器のうちから、器種、型式を代表する遺物を各1点以上ずつ現地で選別し、埋蔵文化財センターへ持ち帰り実測した。窯体内出土遺物については、各房内での作業内容がわかる遺物を、各1～2点ずつ選び出した。これ以外の遺構、包含層から出土した遺物については、物原から出土していない器種・型式の遺物を優先して採集し、最終的に遺跡内から出土した器種・型式を網羅できるよう選別した。

第2節 北区の遺構

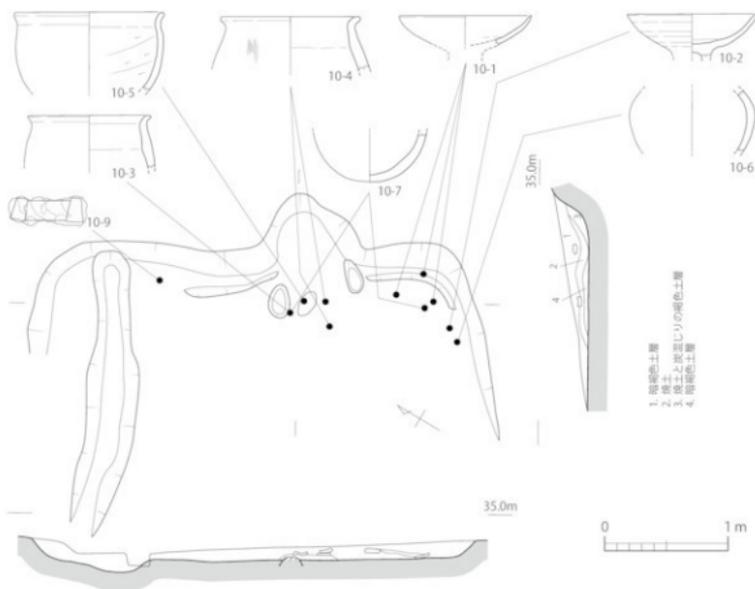
S101 (第9図)

調査区北東に広がる緩斜面の北東よりに位置する。斜面上側にあたる北東辺は良く残っており、一辺 3.6 m を測る。現状での奥行きは 1.6 m、検出面からの深さ 30 cm を測る。

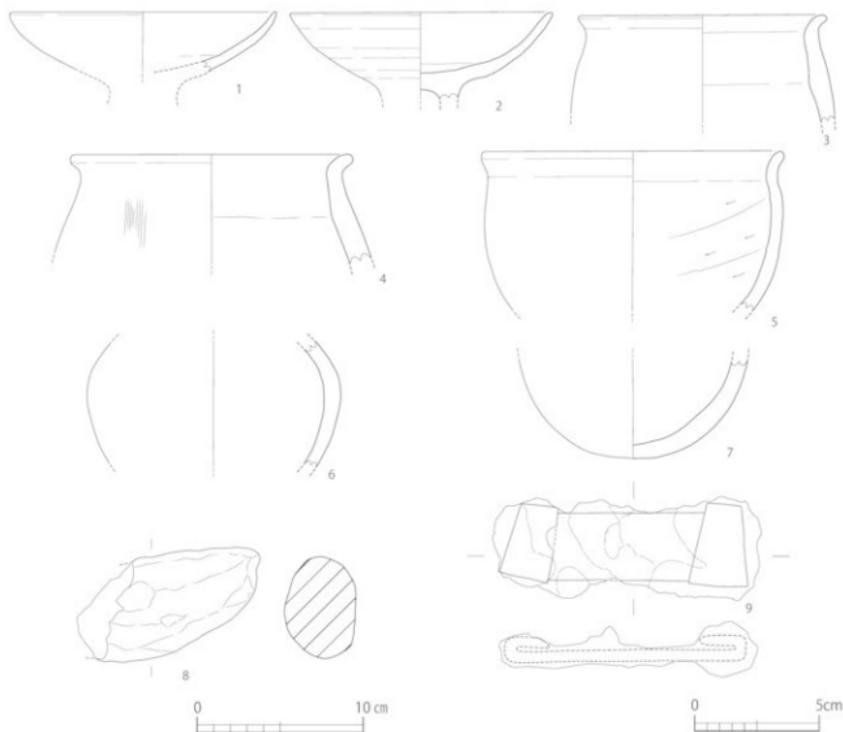
東側から北にかけて断続的に壁帯溝が検出された。幅 10 ~ 30 cm、深さ 2 cm を測る。また、北東辺のやや東に偏した位置で S101 の造付け竈を確認した。奥壁に近い床面の 60 cm × 40 cm の範囲が被熱により顕著に赤変しており、竈の火床にあたる。床面の掘り下げを進めた結果最終的に火床と同じレベルまで下がったが、火床は通常床面より下位まで掘りくぼめられることから、完掘した時点では本来の床面を超えて掘りすぎの状態になっていたと思われる。第9図のセクションで、焼土・炭混じりの土が床面から 2 ~ 6 cm 浮いた状態となっているが、上記の掘りすぎを考慮すると、火床から本来の床面にかけて連続して広がっていたものと考えられる。炭・焼土混じり土の広がりには竈の前方 1.3 m の範囲である。火床の右側方には長 30 cm の石が直立していた。竈の構築材と考えられる。ただ、現状で1点しか残存しておらず、他の構築材は S101 廃絶時に持ち出されたのであろう。左側方にも深さ 2 cm のくぼみがあり、同様に構築材の石が立っていた可能性がある。被熱部の後方は斜面上方へ向かって 40 cm 以上突出しており、竈の煙道部と考えられる。

柱穴は確認されなかった。

西辺には幅 40 cm、深さ 10 cm ~ 1 cm の溝が検出されたが、奥壁の一部を切っていることから S101 に伴うものではない。



第9図 城ヶ谷遺跡S101実測図 (5=1/40)



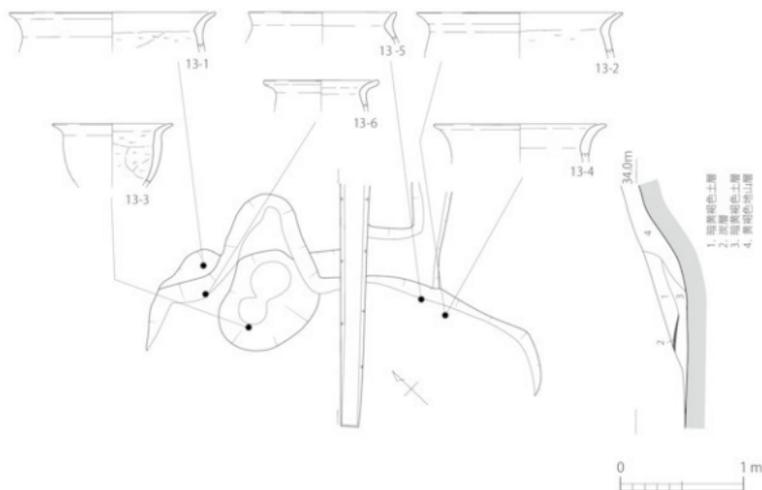
第10図 城ヶ谷遺跡S101出土遺物実測図(1~8:S=1/3、9:S=1/2)

S101出土遺物(第10図)

S101から出土した遺物には須恵器・土師器・鉄製品がある。第10図1・2は須恵器の高環。いずれも坏部片で、1はやや外側に開き、端部は尖り気味、2は1より内側に立ち上がって深く底部はやや丸い。脚部上方の一部が残っているが、透かしは不明である。

3~8は土師器の破片である。いずれも大粒の砂を含んでいることから同じ場所で作られたものと思われる。3~5は口縁部が短く外反する口径15cm~18cmの小形の甕片。3は口縁部の下のくびれ部から下に向かって器壁が厚くなり、胴部はあまり張り出さない。内面はケズリを施していると思われるが、風化のため不明。4は胴部がやや張り出し、器壁は3と同じように厚い。外面の一部にハケ目が残る。5は胴部が内湾した器高12cmあまりのもので、内面にはケズリが施されている。3・4よりは器壁が薄く、作りが丁寧。6は内湾した壺の破片、7はやや厚手の底部片である。いずれも胴部の最大径が15cm前後の小型品である。8は長さ10cmあまりの甕の把手片で、大型の甕になるものと思われる。

9は横幅9.6cm、縦幅3.7cm、厚さ2.2cmの鉄製品で、左右には鉄板を折り曲げた袋部がある。



第11図 城ヶ谷遺跡S102実測図 (S=1/40)

この袋部は、台形を呈し、縦方向の鉄板幅より広くなつてはみ出した形となっている。袋部に木製の部材を差し込んで使う道具ないし何かの金具の一部と考えられるが用途は不明である。

S101から出土した遺物は須恵器の高環や土師器甕の形態から7世紀後半ごろになるものと思われ、用途不明の鉄器や小型の土師器甕が多いのは興味深い。

S102 (第11図)

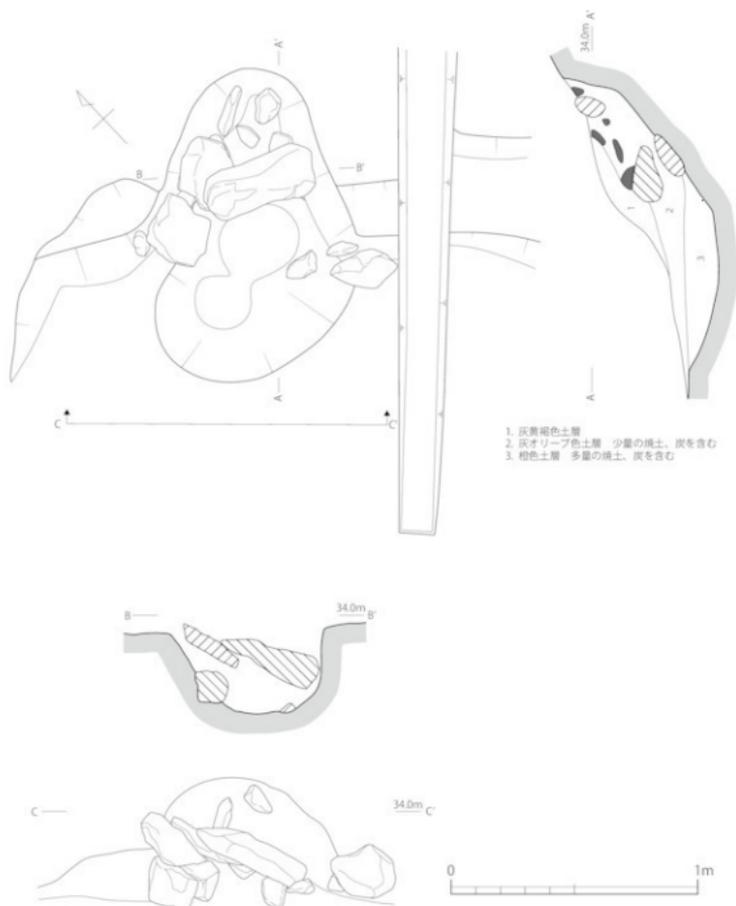
調査区北部に広がる平坦面S11の北辺に位置する。S11を造成する際に前方が大きく破壊されており、北東辺と造付け竈の煙道部だけが残る。現状での平面規模は、北東辺の幅3.1m、奥行き0.8m、検出面からの深さ30cmを測る。

北西隅に近い位置でS102の造付け竈を確認した。奥壁に近い部分の床面が、径70～80cmにわたって被熱により赤変している。中央部の赤変は縁辺部よりもさらに顕著で、この部分で煮炊きが行われたとみられる。煙道は被熱部から奥壁側へ60cm突出している状態で確認された。奥壁から煙道にかけて複数の石が出土した。竈の構築材であったとみられるが、出土状況は不規則で、原位置を若干動いているとみられる。横位で出土した長さ45cmの石(第14図5)は竈の焼き口上部を構成する「まぐさ石」に似るが、出土位置(煙道内部)は焼き口のあるべき位置からかなり奥側へ偏している。また、火元とは反対側の上面が被熱赤変し、火元側にあたる下面が焼けていないことから、この石が原位置を保っているとは認めがたく、転用の可能性が考えられる(大橋泰夫氏の御教示による)。S101と異なり一定数の石が出土しており、崩落して原位置を動いているが竈を構成していた石の大部分が残っているとみられる。

柱穴、壁帯溝は確認されなかった。

S102出土遺物(第13図)

S102から出土した遺物は「く」の字形の口縁部を持つ土師器の甕のみである。13図1・2



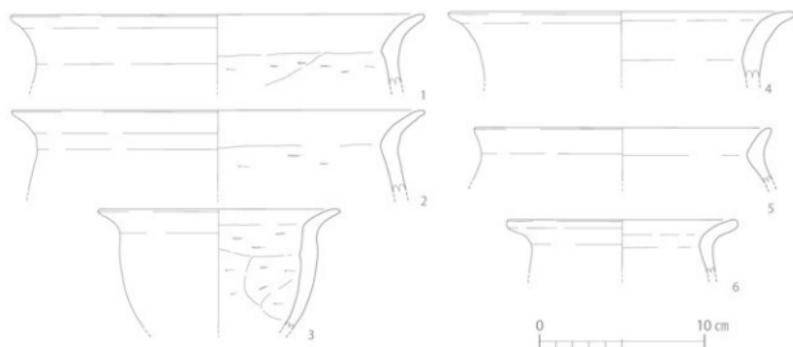
第12図 城ヶ谷遺跡S102竪実測図 (S=1/20)

は大きく湾曲した頸部から口縁部に向かって徐々に器壁が薄くなり、端部は丸い。頸部付近の内面にはケズリが施され、胴部はやや内傾する。3は1・2と同じ形の口縁部を持っているが、胴部は外傾し鉢状の形態を呈する。4の口縁は大きく外湾しており、器壁がやや厚い。5は口縁部が短く屈曲し、胴部がやや張り出す。6は口縁が大きく外反し、端部に面を持つ小形の甕である。

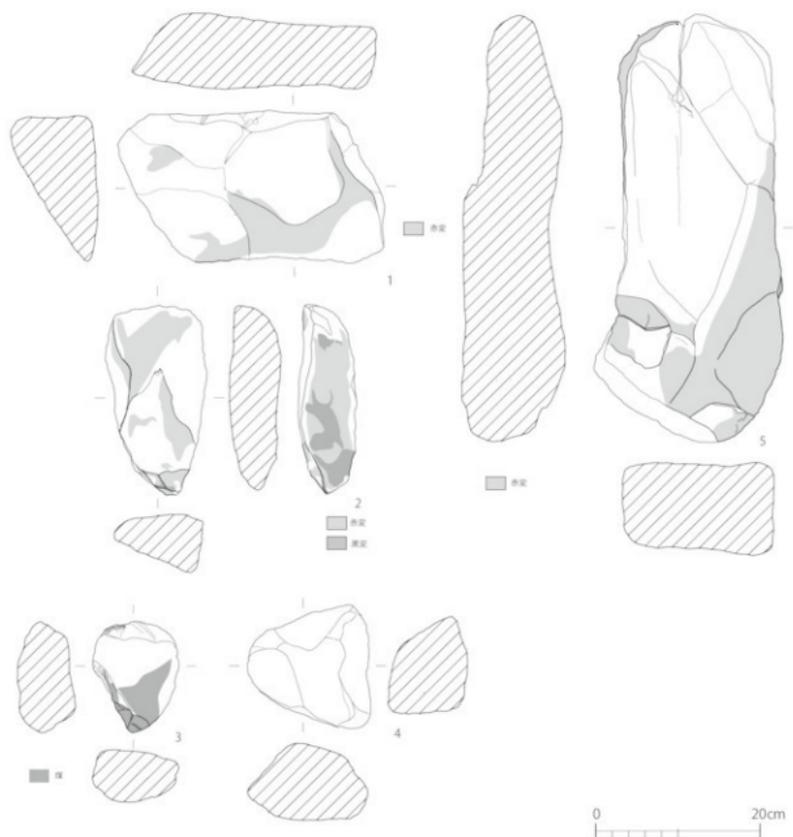
S102から出土した甕は、7世紀～8世紀にかけて形が変わらないものなので、時期を限定するのは難しいが、S101の7世紀後半に近い時期と思われる。

S104 (第15図)

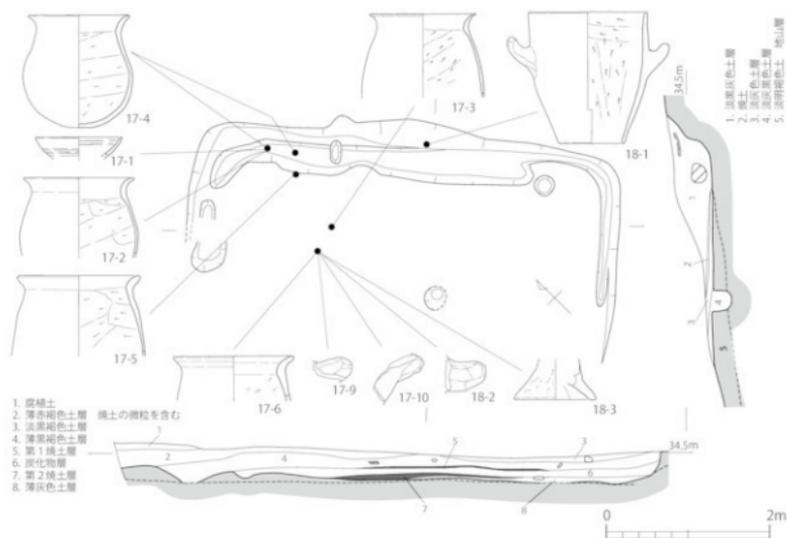
調査区北西隅に位置する。斜面上側にあたる北西辺は良く残っており、一辺5.2mを測る。現状



第13図 城ヶ谷遺跡S102出土遺物実測図 (S=1/3)



第14図 城ヶ谷遺跡S101・02出土石材実測図 (S=1/6)

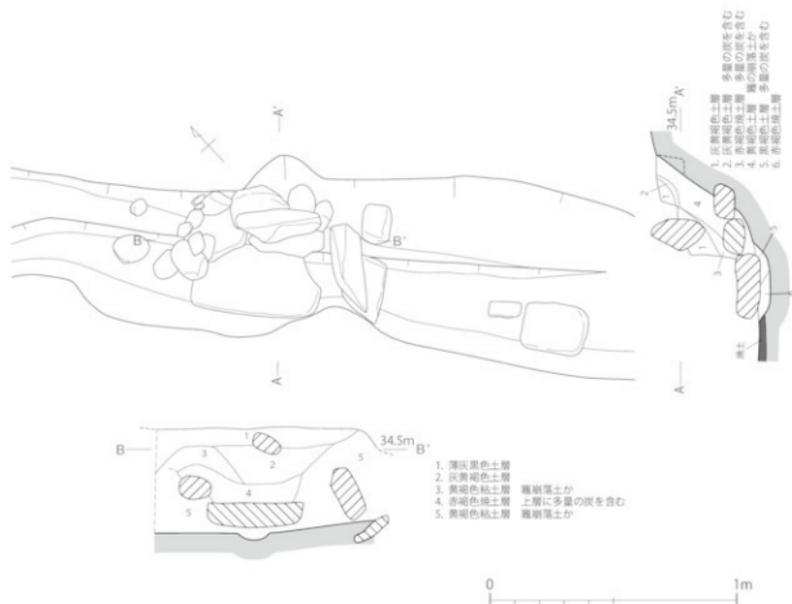


第15図 城ヶ谷遺跡S104実測図 (S=1/60)

での奥行きは2.4m、検出面からの深さ50cmを測る。検出した上場に沿って壁帯溝が検出された。狭い部分で幅10cm、奥壁側は広く40cm、深さは5cmを測る。床面中央で径25cmの柱穴を1穴確認している。他に柱穴は検出されず、このピットも主柱穴に当たるものか確定はできない。

北西辺のやや西に偏した位置で、S104の造付け竈を確認した。奥壁に近い床面が被熱により赤変しており、火床とみられる。火床の上を覆いかぶさるように長さ50cmの平たい石が出土したほか、竈の構築材とみられる石がまとまって出土し、複数の石が被熱赤変していた。竈の右側面に当たる位置には、小さめの石(10~20cm)が縦方向に置かれ、上に長30cmのやや大きい石が重なる。焚き口の右側壁の芯材とみられる。正面には、横方向に長い(50cm)薄い板状の石があり、焚き口上部を構成する「まぐさ石」に当たるとみられる。これより奥壁側には、同程度の厚さをもった石が3点ある。これらは竈の天井部を構成していた石材が、原位置直下の床面に崩落したものとみられる。崩落した天井部の石も右側壁の石も被熱により赤変していたが、いずれも火元からみて外側の面が赤く焼けている点はS102の竈の石材と共通している。これらは、一度竈の構築材として利用された石を再利用して竈を構築し、その際火をあまり受けていない面が火元側にくるように組み立てたのであろう。このほか、奥壁側左方からも小さめの石が複数出土している。竈後方の奥壁は現状で10cm強の突出部がみられ、煙道部とみられる。

竈の東60cmの位置からは、完形に近い土師器の甗、および直方体に近い石1点(第19図1)が出土した。石の下面はススが付着して黒くなっている。甗と近接した位置から出土していることから、この石も竈の構築材の可能性が考えられる。この石以外にも、甗の下層から複数の石がまとまって出土した。



第16図 城ヶ谷遺跡S104窟実測図 (S=1/20)

S104出土遺物 (第17・18図)

S104からは須恵器1点と土師器12点を検出した。第17図の1の須恵器は口径14cmあまりの高坏で、やや内湾する坏部片である。口縁部内側は少し下がったところでわずかに屈曲し、下に向かって器壁が厚くなる。外面下方には浅い2条の沈線が廻り、口縁端部は細くて丸い。

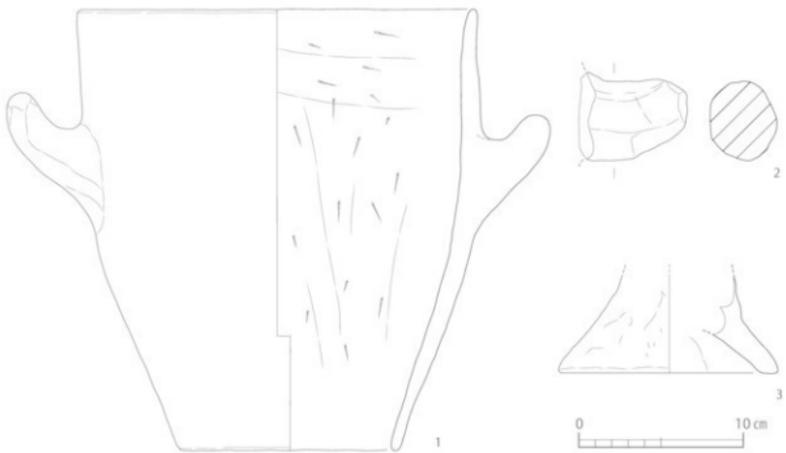
2～6は外反する口縁を持つ甕で、大粒の砂含む。2は口径13cm、胴部最大径19.3cmを測る。頸部から口縁部にかけて器壁はやや厚く端部は丸い。頸部付近の内面から下方は右上がり方向にケズリが施されて器壁は薄くなる。胴部外面の調整は風化のため不明、口縁部付近には横ナデがある。内面は橙色・褐灰色、外面は橙色・黒褐色をしている。3は頸部付近が最も器壁が厚く、頸部から口縁部にかけて徐々に薄くなり、端部は尖ったような形を呈する。口径21.6cm、胴部最大径24.4cmのやや大型の甕で、胴部の張り出しは少ない。4は口径16.5cm、器高18.5cm、胴部最大径17.9cmの全形の方かる甕である。胴部最大径は下方にあり、底部は半球状の丸底。内面のケズリは底部付近が下から上方向、その上方はやや右上がりに施されている。頸部内側付近は「く」字形に屈曲して口縁端部に向かっている。頸部から口縁部は器壁が厚い。外面の調整は上方にナデが施されているが、下方は風化のため不明。色調は内面褐色、外面暗赤灰・赤灰色を呈する。5は口径20cmあまりで、頸部から口縁部にかけては短く外反し、2～4と比べて器壁が厚い。端部は太くて丸い。頸部から胴部は張り出しは少なく、下方に向かって薄くなる。内面のケズリは右上がり方向に施した後に横方向に削っている。外面の調整は上方が横ナデ、下方がナデである。6は5と同じように頸部から口縁部にかけてが厚く、短く外反している。調整は内面ケズリ、外面横ナデ、ナデである。



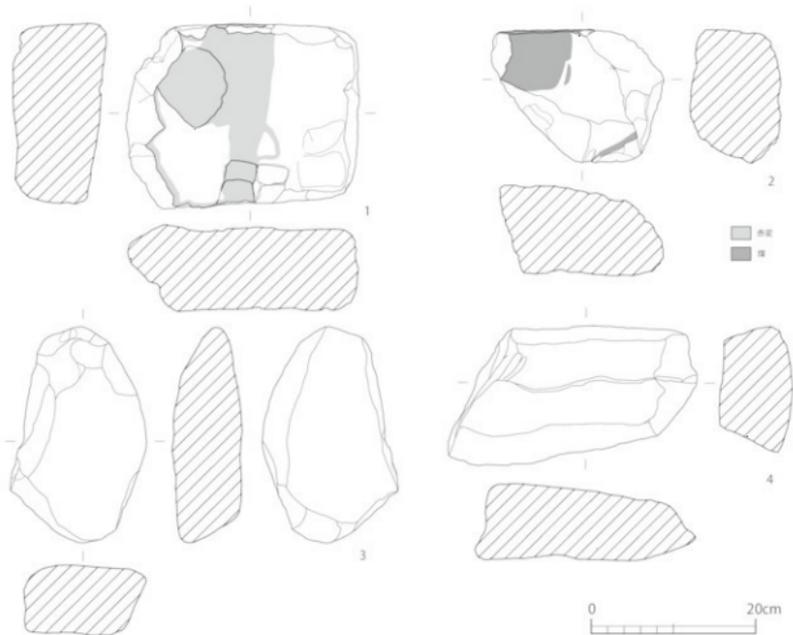
第17図 城ヶ谷遺跡S104出土遺物実測図1 (S=1/3)

7は口径20cmあまりの鉢形の形態をしたものである。頸部から口縁部にかけては大きく外側に開き、胴部は外側に倒れている。器壁は口縁部付近が厚く、胴部はやや薄い。調整は風化のため不明。胎土は大粒の砂を含み、色調は外面がにぶい赤褐、内面は橙色で一部が黒褐である。17図の8～10・18図2は瓶の把手の破片である。いずれも短くて太いタイプになるものと思われ、大粒の砂を含む。

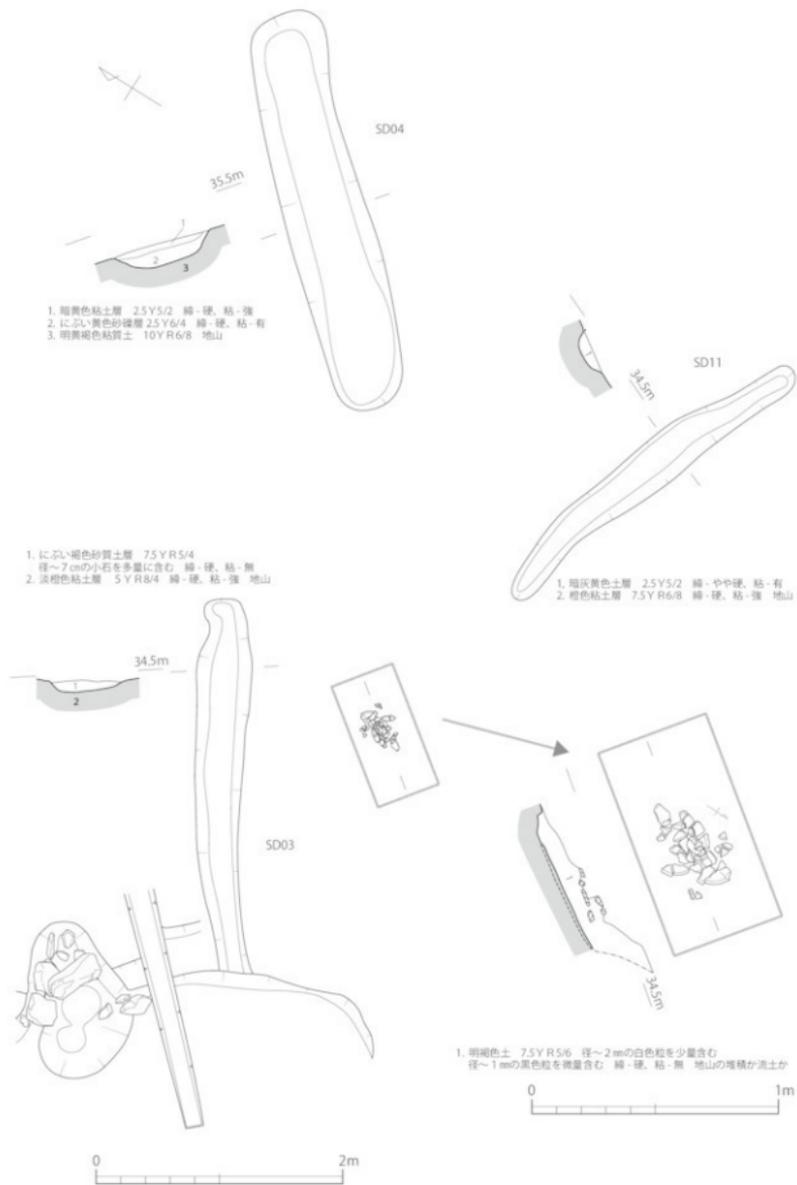
18図の1は全形の分かる甕である。口径24.2cm、器高27cm、底径13.2cmを測る。把手は外側に4cmあまり飛び出し、基部から1.5cm上方に伸びる。厚みは2.5cmあまりで、端部は丸い。把手の上方基部から口縁部にかけてはほぼ垂直に上がり、端部は丸い。底部から上方は外側に開きながら把手下方の基部にいたる。上方に行くにしたがって器壁が厚くなり、底部の端部は細くて丸い。



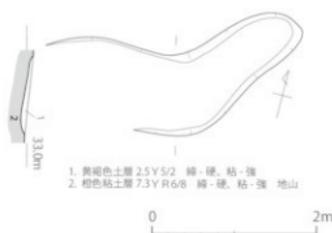
第18図 城ヶ谷遺跡S104出土遺物実測図2 (S=1/3,1/4)



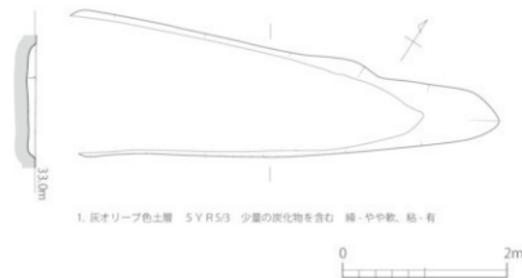
第19図 城ヶ谷遺跡S104出土石材実測図 (S=1/6)



第20図 城ヶ谷遺跡SD03・04・11、土器だまり出土位置および出土状況図
(全体図:S=1/40、出土状況図:S=1/20)



第21図 城ヶ谷遺跡SD05実測図 (S=1/60)



第22図 城ヶ谷遺跡SD06実測図 (S=1/60)

おり、S I O 2より新しい。S D O 4は長3.2m、幅65cmを測る。埋土は薄い灰オリーブ色土層の下が、堅く締まった黄褐色の砂礫である。S D I 1は長2.8m、幅30cmを測る。検出時は竪穴住居の壁帯溝と予想したが対応する柱穴も平坦部も認められず、溝状遺構とした。埋土は灰オリーブ色土で、他の古墳時代住居の埋土と共通しており、古墳時代に属する可能性がある。他の2条は埋土が異なり、またS D O 3はS I O 2を切っていることから、時期はS I O 2より新しいと思われる。S D I 1の下では土器だまりを1箇所確認している。土師器の甕あるいは甗の破片とみられるが、いずれも細片で復元できなかった。

S D O 5、06は、調査区北東寄りに広がる平坦面S S 1上で検出され、走向はいずれも等高線に直交する。S D O 5は先端が大きく湾曲しており、長3m、幅1.2mを測る。深さは最深部でも7cm程度で、上部は失われていると思われる。S D O 6は長5.2m、幅0.7～1.8m、深さ9cmを測る。出土遺物はなく緻密な時期は確定できないが、S D O 6の南端がS S 2の造成によって切られているのでS S 2よりは古い。また、溝が確認されたS S 1がS I O 2前方を壊している関係から、S I O 2(古墳時代後期)よりは新しいとみられる。

内面のケズリは、口縁部から6cmあまり下がったところまでは横方向、それより下は下から上に向かって施している。また、底部端から5cmあまり上まではナデている。外面は風化のため調整は不明である。胎土には砂粒を多く含む。3は土製支脚の脚部片と思われるものである。底径13cmあまりで「ハ」の字形に開く。器壁は厚く、外面には指でナデた痕跡が残っている。

S I O 4出土遺物は、須恵器の高環や土師器甕・甗の形態からS I O 1・02とほぼ同じ7世紀後半前後のものと思われる。

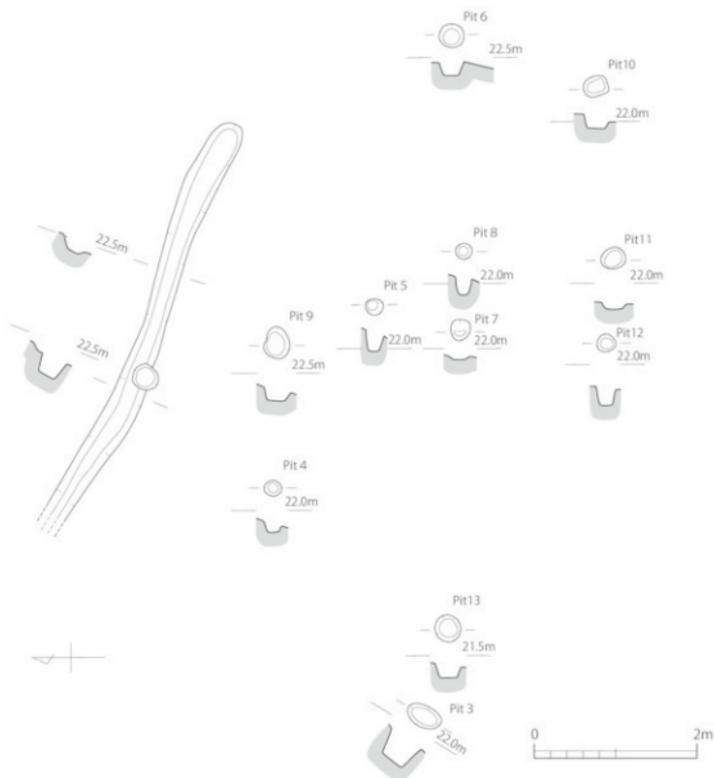
溝状遺構、土器だまり

緩斜面の東部、S I O 2の上方で溝状遺構を3条確認した。S D O 3、04は等高線に直交、S D I 1は等高線に沿う方向である。S D O 3は長3.3m、幅30～40cmを測る。埋土は硬い砂質土である。下方のS I O 2を切っ

第3節 南西区の遺構

SD10およびピット群 (第23図)

調査区南西部の、水田造成土の低位から検出された溝状遺構およびピット群である。水田面の南側は、地山上層に暗褐色土層が広がっており、この上に厚いところで1mをこえる土盛りをして

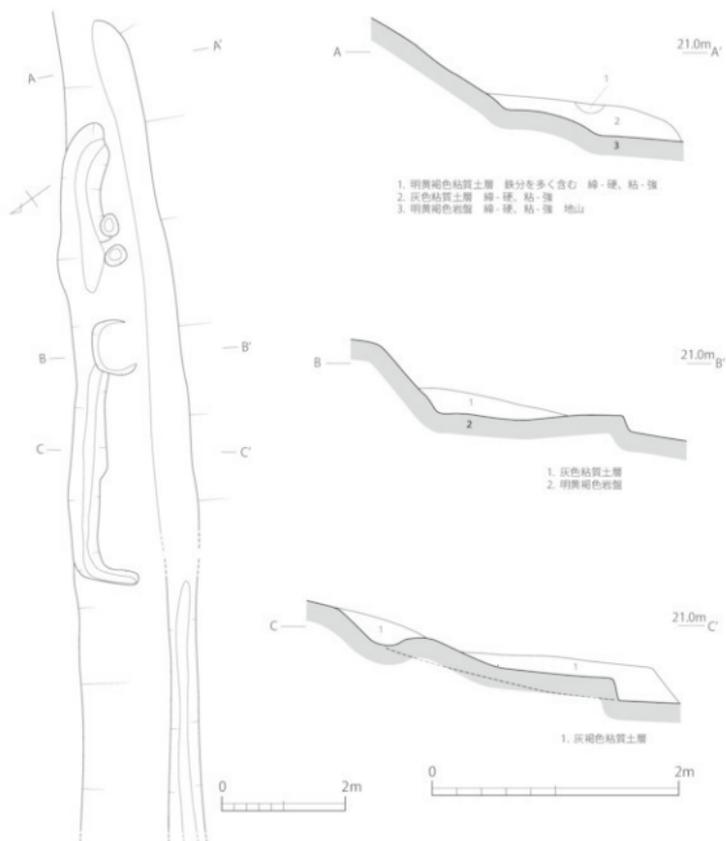


第23図 城ヶ谷遺跡SD10およびピット群実測図 (S=1/80)

第1表 城ヶ谷遺跡南西部ピット群計測表 (1, 2は欠番)

単位 cm

Pit	長径	短径	深さ	Pit	長径	短径	深さ	Pit	長径	短径	深さ
3	44	22	30	7	26	24	5	11	30	27	8
4	22	20	14	8	20	20	22	12	23	22	22
5	22	20	26	9	40	33	15	13	34	30	17
6	30	30	16	10	30	26	16	14	32	30	26



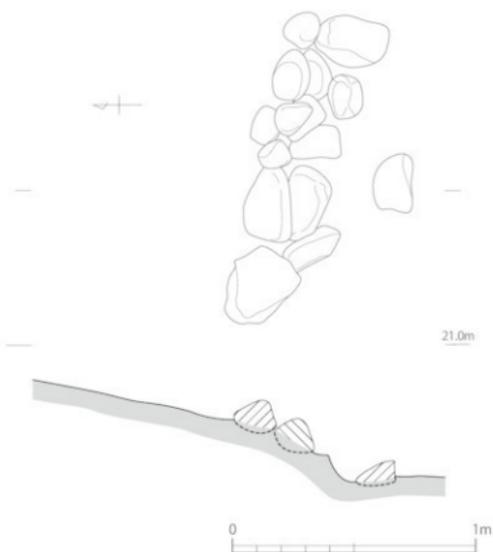
第24図 城ヶ谷遺跡SD08・09実測図 (S=1/40, 1/80)

広い平坦面を造成している。確認されたピット群は12穴で、いずれも埋土は暗褐色土であった。一定間隔に並んで建物跡や柱列をなすピットは認められない。溝状遺構SD10は長5.2m、幅40cmを測る。ピット群の上方を東西方向に走る。

SD08・09 (第24図)

調査区南辺近くで確認した遺構である。調査区の南辺に接して、近年まで使われていた赤道が走っている。SD08・09の走向はほぼこの赤道に沿っており、上方の水田の土地区画の方向とも合っている。溝状遺構の上方には、水田の造成に伴って削平された東西に長い平坦面が広がる。SD08は幅20～30cm、溝の形で確認できるのは西端から2.8mまでである。それ以東にも4m以上続いていたようであるが、細長い平坦部分としてしか認識できない。

SD08の北に接してSD09が確認された。長3.6m、幅20～30cmを測る。SD09の西側は斜面となって南へ下っている。埋土は灰色の粘土であった。



第25図 城ヶ谷遺跡S X 0 2実測図 (S=1/20)

包含層からは青磁碗 (62 図 2) などが出土しており、これらの遺構の時期は中世後期と考えられる。

S X 0 2 (第25図)

S D 0 8 の東方で確認された石積みである。径 10 ～ 30cm の自然石を疎らに積んだ石積みが東西方向に 1.2m 続く。西端から東へ向かって緩い上り傾斜になっている。出土遺物はなく、時期は不明である。

第4節 窯業関連遺構

1号窯の概要（第26～29図）

調査区中央に位置する、昭和25年に操業を終えた登り窯である。昭和30年代には覆い屋は腐朽が進行していたが窯自体の壁や天井部は残っていた。「中に入ると外から明かりが差し込んでいた」等の証言がある。分布調査では、窯壁が地表に露出した状態で観察されたが、天井部は完全に崩落していた。

調査は焼成室内に落ち込んだ天井の煉瓦の除去から開始した。窯は、最下段にある平面三角形の焚き口・燃焼室部分（大口）と、後方に続く8つの焼成室、第8室背面の煙道部からなる。焚き口に近い前方側から後方煙道側へ向かって順に「第1室」「第2室」……とする。第4～第5室にかけて徐々に幅が広くなり、それより後方はほぼ一定幅となって第8室にいたる。大口から煙道先端までの全長は16.8mを測る。最大幅は4.8mを測る。

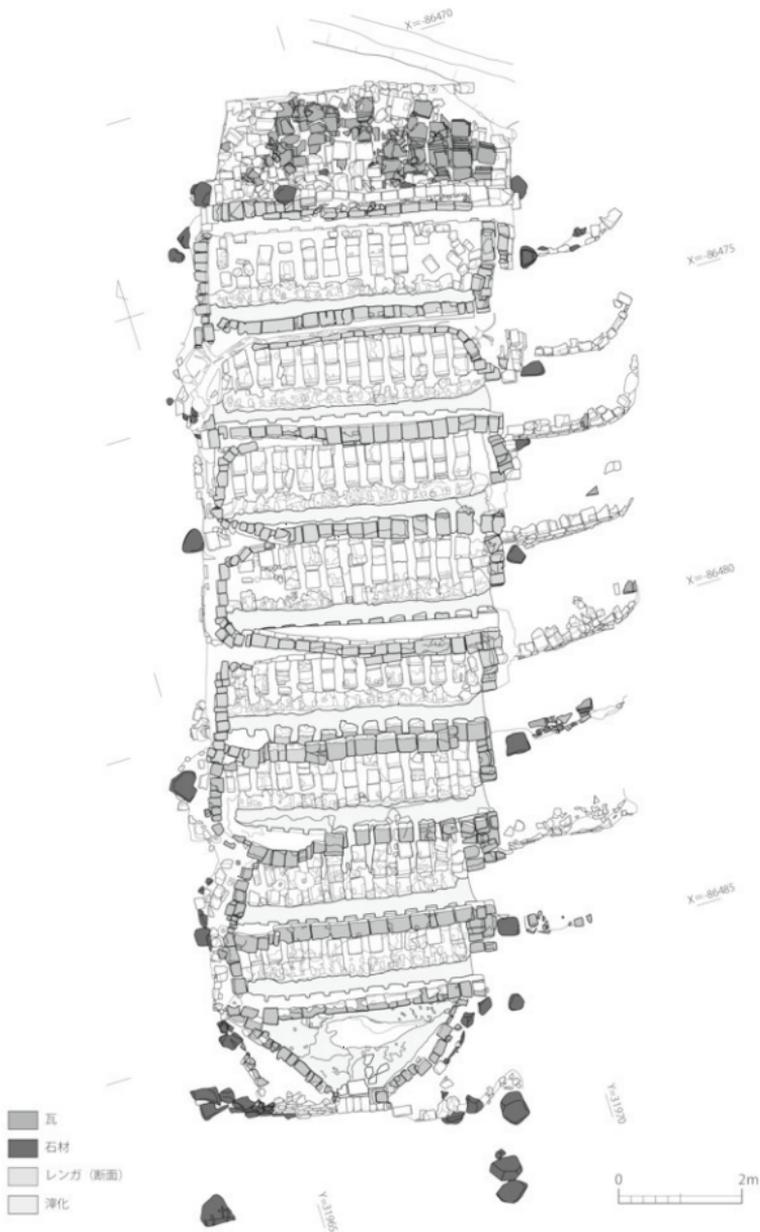
各焼成室は、前方に作業通路を兼ねる溝（焚庭）が通り、前方の焼成室側の壁の最下部には煉瓦（トンバリ）1個分の間隔をおいて火格子穴が並んでいる。焚庭より50cm前後高い焼成室床面には、煉瓦（トンバリ）が階段状に積み上げられている。前段にトンバリを2個積み上げ、後段は前段のトンバリ積みの上面の高さからさらに2個積み上げて高くする。このトンバリ積みは一定間隔をあけて1室あたり9～11列築かれる。列間の隙間は火炎の通り道となり、後方側の壁下部にもうけられた火格子穴を経て次の焼成室に至る。まとめて記せば、炎の通り道は前室からの火格子穴→焚庭→トンバリ列間の隙間→後室への火格子穴、の順となる。

このような窯構造は第1室から第8室まで共通しており、瓦窯の特徴である。遺存状況の良好な第7室の詳細図を次に示す（第28図）。乾燥のおわった瓦はトンバリを跨ぐように置かれ、隙間を上がっていく炎により焼成される。各焼成室の勾配は下表に記すとおり、4寸～5寸の勾配である。傾斜角は20°から30°の範囲内である。

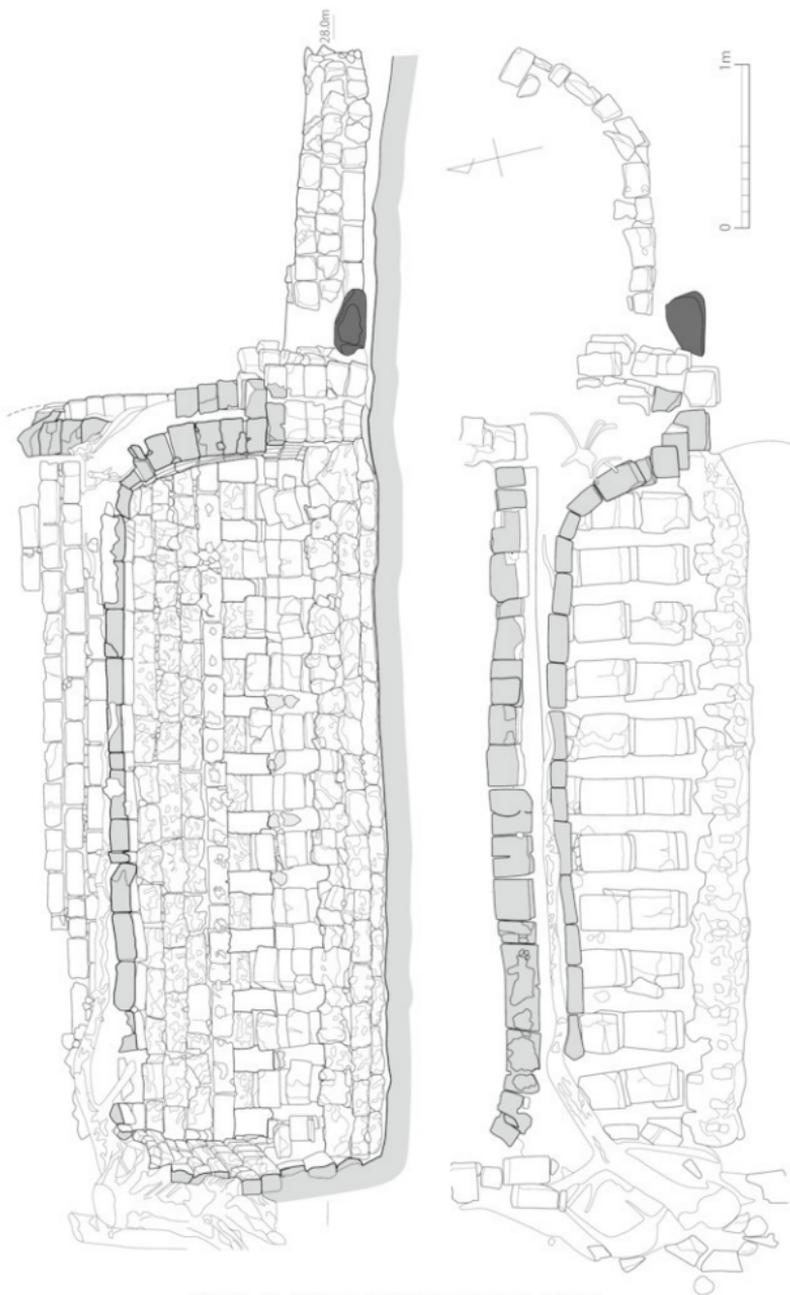
窯体の右側方（東側）には焚庭と同じ高さの作業用平坦面が造成されていた。後方の平坦面との間に段差がつき、使用済みの（ほとんどは表面が滓化している）煉瓦を4～5段積み上げ土止めとしている。各段の平坦面の幅はいずれも2.5mである。平坦面の右端は上方へカーブして作業道へとつづく。窯の外壁と土止めの煉瓦壁にはさまれた北西隅のコーナーに覆屋の礎石が置かれていた。

第2表 城ヶ谷遺跡1号窯計測表

焼成室	内 幅	奥 行	火格子数	焚庭奥行	勾 配	傾斜角	次室火格子穴までの比高差
1	3.8m	0.9m	12	0.2m	3.96寸	21.65°	0.6m
2	3.8m	1.4m	12	1.4m	5.41寸	28.39°	0.6m
3	4.1m	1.3m	12	0.2m	4.34寸	23.49°	0.7m
4	4.2m	1.4m	12	0.2m	4.67寸	25.03°	0.6m
5	4.2m	1.3m	12	0.25m	4.58寸	24.62°	0.8m
6	4.3m	1.3m	12	0.2m	3.75寸	20.55°	0.6m
7	4.3m	1.3m	12	0.2m	4.64寸	24.90°	0.8m
8	4.3m	1.3m	12	0.2m	4.55寸	24.47°	0.7m



第26図 城ヶ谷遺跡1号竪跡平面実測図 (S=1/80)



第28図 城ヶ谷遺跡1号窯跡第7房正面実測図 (S=1/30)

各焼成室・燃焼室の被熱状況、出土遺物等

焼き口に面した、平面三角形の燃焼室部分は「大口」と呼ばれる。前面の焼き口の幅は50cm、三角形の両側辺は2m、第1室側の隔壁は3.3mを測る。床面は焼成室側へ向かって上る傾斜面となっており、高熱により淬化していた。

第1室は他の焼成室に比べて奥行きが小さく、トンバリ積みも一段しか築かれていない。焼き庭前面は高熱を受け淬化が顕著で、淬化部分の深さは10～17cmに達する。

第2室は、作業用テラス側の出入口付近、および後方の第3室側で崩壊が進み、第3室側の隔壁が倒れ込んでいる。焼き庭底面の淬化が著しく、淬化部分の深さ5cmを測る。第2室では瓦やモミツチが出土している。

第3室は焼き庭底面から正面にかけて5～10cmの深さで淬化が進む。一部のトンバリには、モミツチが融着したものがあつた。第3室からも椀瓦が出土している。

第4室は淬化部分が焼き庭床面から床面の傾斜部にかけて認められる。縦断セクションでは、被熱により黒変ないし赤変した部分、および変色した焼土の堆積層(18層)が認められた。これは下層にあつた古い段階の窯(2号窯)の痕跡で、第4室より上方のセクションで徐々に明確になる。古い段階の2号窯が廃絶した後、にぶい橙色土の間層(2層)が堆積し、その上に新段階の瓦窯が構築された。第2層の堆積は、おもに第4室より上方に認められる。第4室からは瓦の重ね焼きに用いられるハセ等が出土している。

第5室は、第6室側の隔壁の一部が倒れて侵入し、また床面上の一部のトンバリが壊れていた。焼き庭の床面と前面がやや淬化している。トンバリは表面が被熱して黒変する。第5室からは壺や火鉢の素地、雁振瓦が出土しており、瓦の焼成や素焼きが行われていたことが判明する。

第6室は保存状態が良好で、トンバリ積みが完全に近い状態で観察できる。焼き庭床面から焼成室床の傾斜面にかけて淬化が顕著である。トンバリの隙間や下部には小さなトンバリ細片等を充填して安定させている。

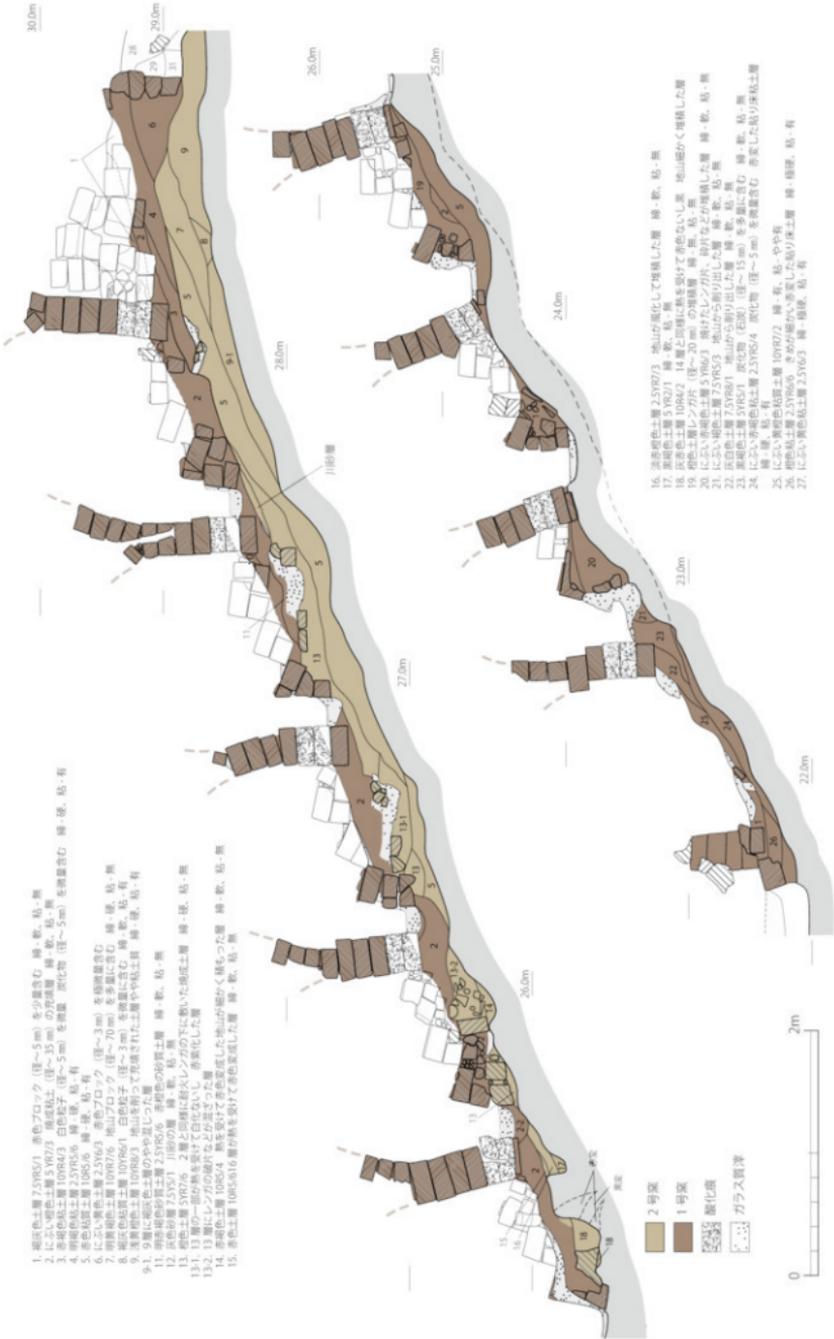
第7室はトンバリ積みや、東の作業用テラス側の壁がよく残っている。第7室からは熨斗瓦や陶器用の窯道具ヌケ、壺の素地等が出土している。

第8室は東側のテラスから焼き庭への進入口上部がアーチ状に遺存していた。他方で焼成室内床面のトンバリの多くが壊れており、残りが悪い。後方の火格子穴は煙道に続いている。第8室からはハセ、土盛り鉢、さやの蓋が出土している。

第8室後方は煙道部である。縦列に並べたトンバリの上面を跨ぐように椀瓦等を重ね置きしてトンネル状の構造を構築している。隔壁から煙道出口までの奥行きは1.5m前後である。

第1室の壁面が最も荒れており、燃焼室に近い分だけ火炎が強力だったことを示しているが、第6室以降でも焼き庭や天井の淬化が著しい箇所があり、必要に応じて追い焼きがおこなわれたことをうかがわせる。第1室からは遺物が出土しなかったが、第2～第8室では瓦焼成用の窯道具ハセがまとまって出土しており、各室で瓦が焼成されていたことが裏付けられる。ほかに第5、7室では陶器素地、第8室ではさやに入れた状態の陶器、窯業で用いる盛り鉢等が併焼されている。

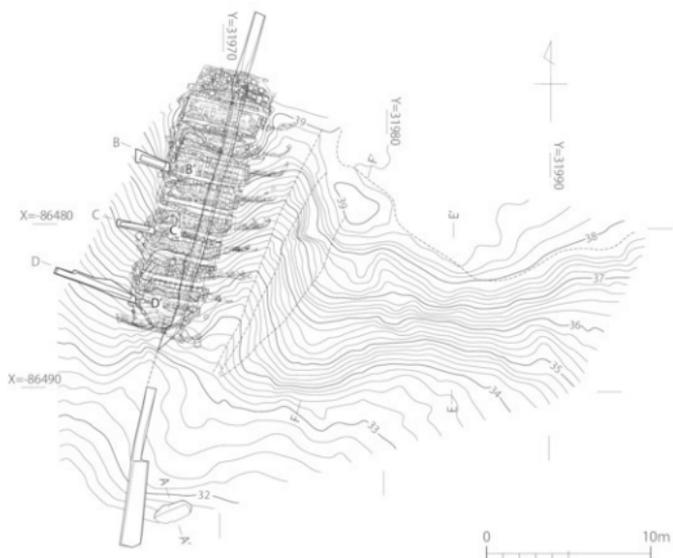
窯体の外側に接して、窯の覆い屋の礎石を検出した。確認できたのは燃焼室、第1室、3室、5室、6室、7室、8室、煙道部の側方である。焼き口前方を囲む位置に検出されたものがあり、屋根は窯の前方側へ1.5mほど伸びていたことが知られる。礎石の並ぶ間隔が一定しておらず、また左側



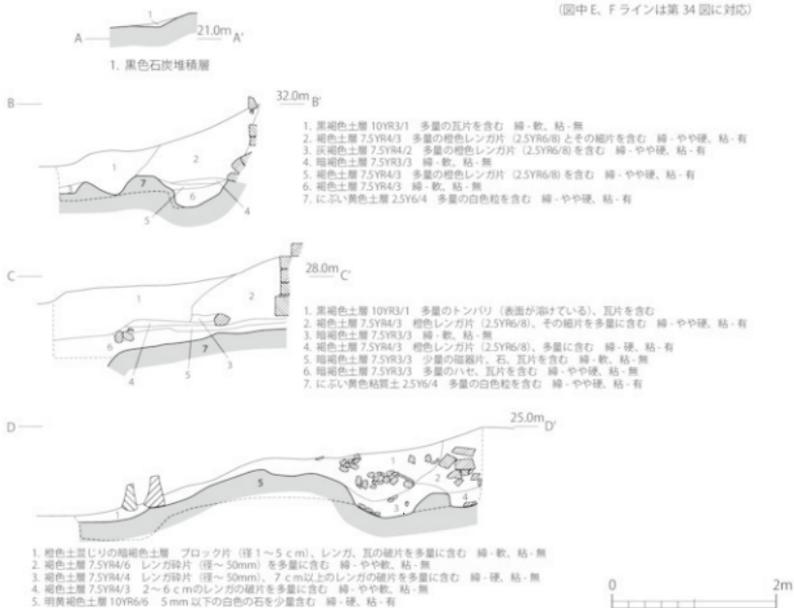
- 1. 褐色土層 2.5185/1 赤色アロソック (厚～5m) 赤少量含む 締-軟、粘-無
- 2. 赤褐色土層 5.182/3 白色粘土 (厚～3.5m) の下部層 締-軟、粘-無
- 3. 赤褐色土層 2.5185/5 赤褐色土層 (厚～5m) を覆蓋 赤化層 粘-有
- 4. 赤褐色土層 1085/6 締-硬、粘-有
- 5. 赤褐色土層 1085/6 締-硬、粘-有
- 6. 赤褐色土層 2.516/3 赤色アロソック (厚～3m) を覆蓋含む
- 7. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3m) を覆蓋含む
- 8. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3m) を覆蓋含む
- 9. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3m) を覆蓋含む
- 10. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3m) を覆蓋含む
- 11. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3m) を覆蓋含む
- 12. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3m) を覆蓋含む
- 13. 赤褐色土層 5187/6 2層と同様に赤レンガの下に敷いた面成土層 締-硬、粘-無
- 13-1. 1層の一部が赤レンガより5日ほど厚い
- 14. 赤褐色土層 1085/4 溝を穿けて赤褐色化した地山が地かく積もった層 締-軟、粘-無
- 15. 赤褐色土層 1085/6 溝を穿けて赤褐色化した地山が地かく積もった層 締-軟、粘-無

- 16. 赤褐色土層 2.5187/3 地山が赤化して堆積した層 締-軟、粘-無
- 17. 赤褐色土層 5.182/1 赤褐色土層 (厚～3.5m) を覆蓋含む
- 18. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3.5m) を覆蓋含む
- 19. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3.5m) を覆蓋含む
- 20. 赤褐色土層 5.185/3 溝から積り出した層 締-軟、粘-無
- 21. 赤褐色土層 2.5185/3 地山から積り出した層 締-軟、粘-無
- 22. 赤褐色土層 5185/1 赤褐色土層 (厚～3.5m) を覆蓋含む
- 23. 赤褐色土層 5185/1 赤褐色土層 (厚～3.5m) を覆蓋含む
- 24. 赤褐色土層 2.5185/4 赤褐色土層 (厚～5m) を覆蓋含む
- 25. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3.5m) を覆蓋含む
- 26. 赤褐色土層 1078/2 赤褐色土層 (厚～3.5m) を覆蓋含む
- 27. 赤褐色土層 2.5186/3 赤褐色土層 (厚～3.5m) を覆蓋含む

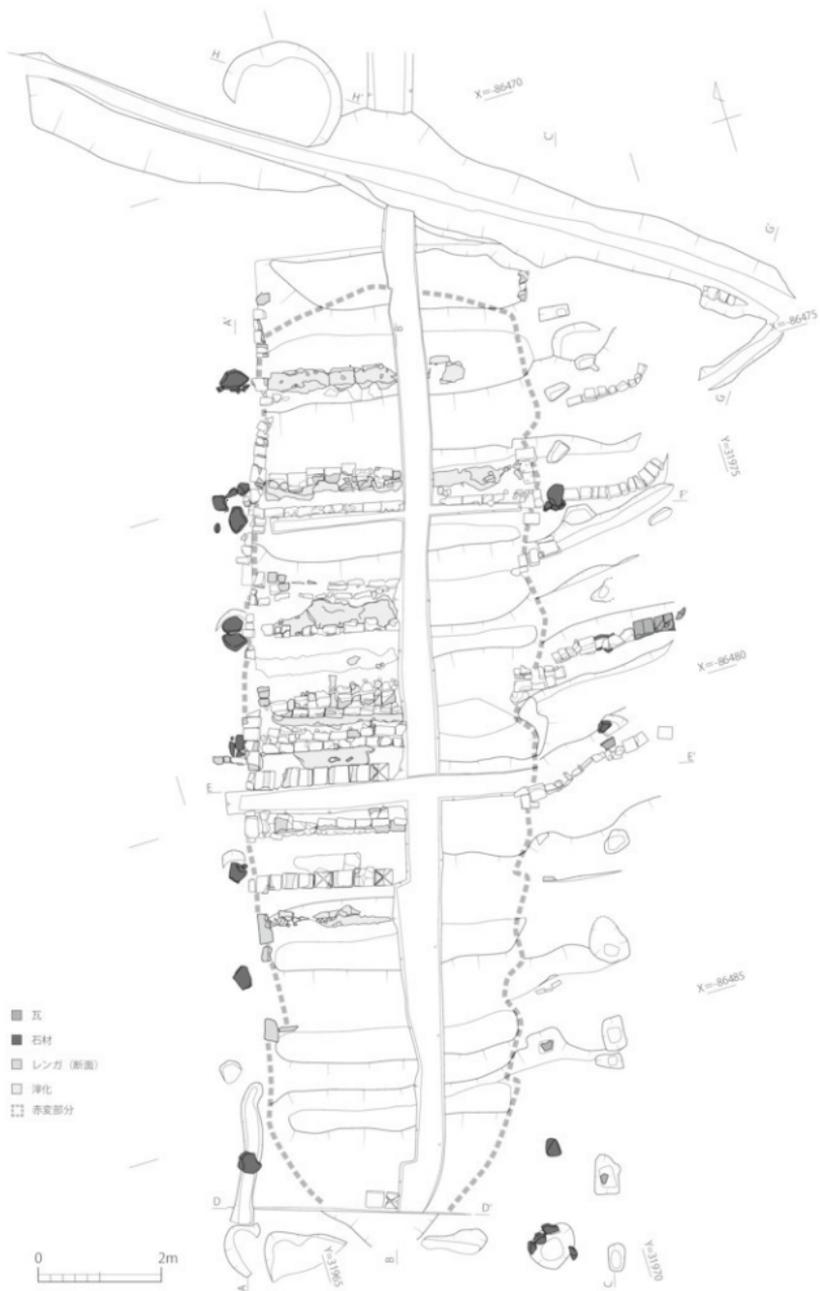
第29図 城ヶ谷遺跡1号深跡縦断面実測図 (S=1/40)



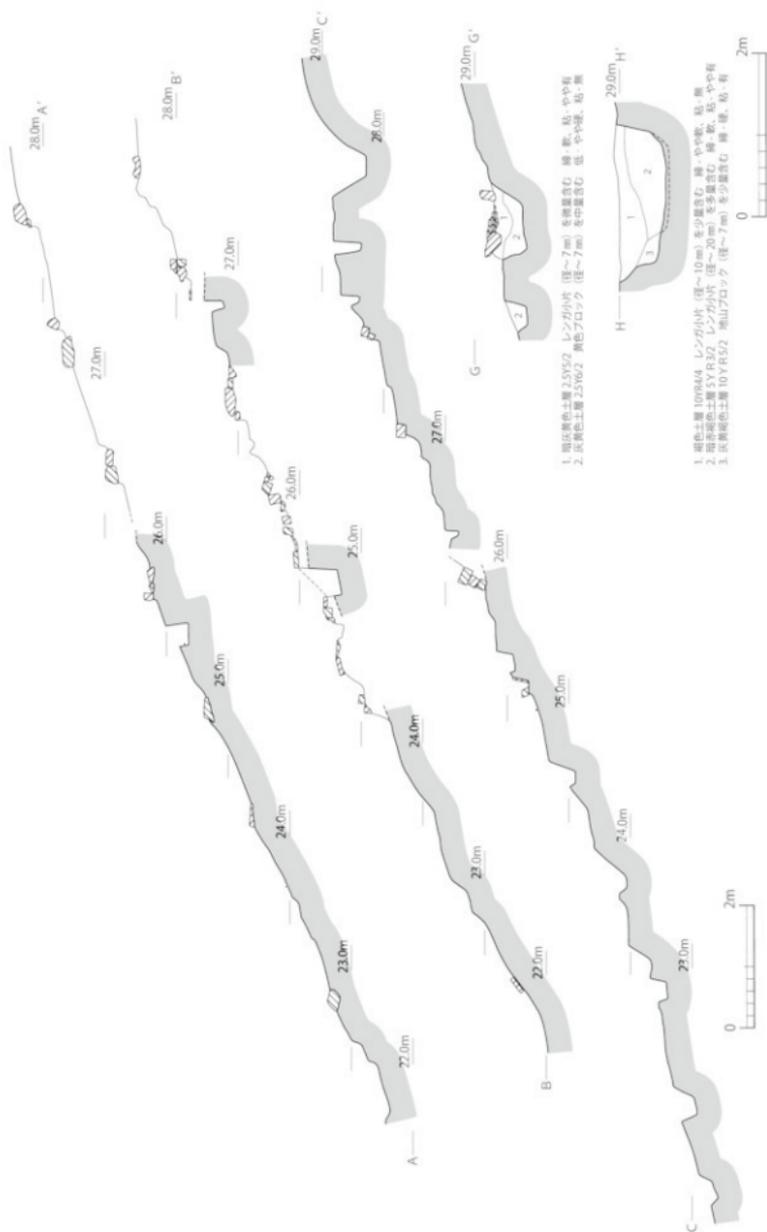
(箇中 E、F ラインは第 34 図に対応)



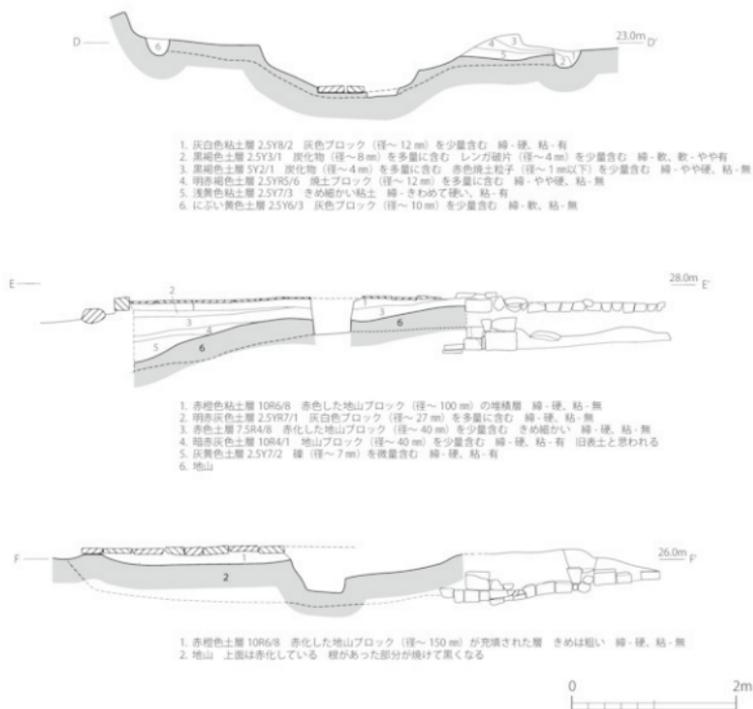
第 30 図 城ヶ谷遺跡 1号塚断面実測図 (S=1/60)



第31図 城ヶ谷遺跡2号窟跡平面実測図 (S=1/80)



第 32 図 城ヶ谷遺跡 2 号窯跡縦断面実測図 (S=1/80, 1/60)



第33図 城ヶ谷遺跡2号窯跡横断面実測図 (S=1/60)

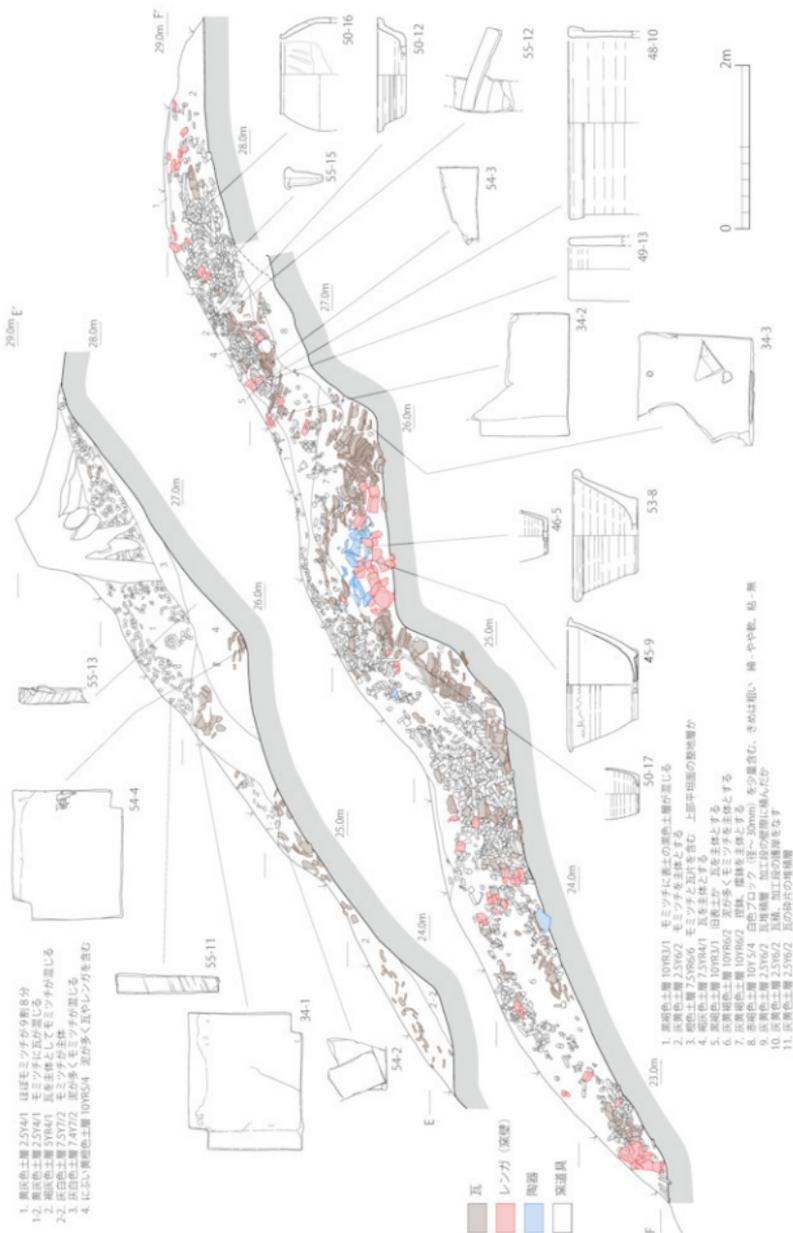
方と右側方の礎石の位置がそろわない箇所があるので、礎石の一部は失われたと思われる。

2号窯の概要 (第31～33図)

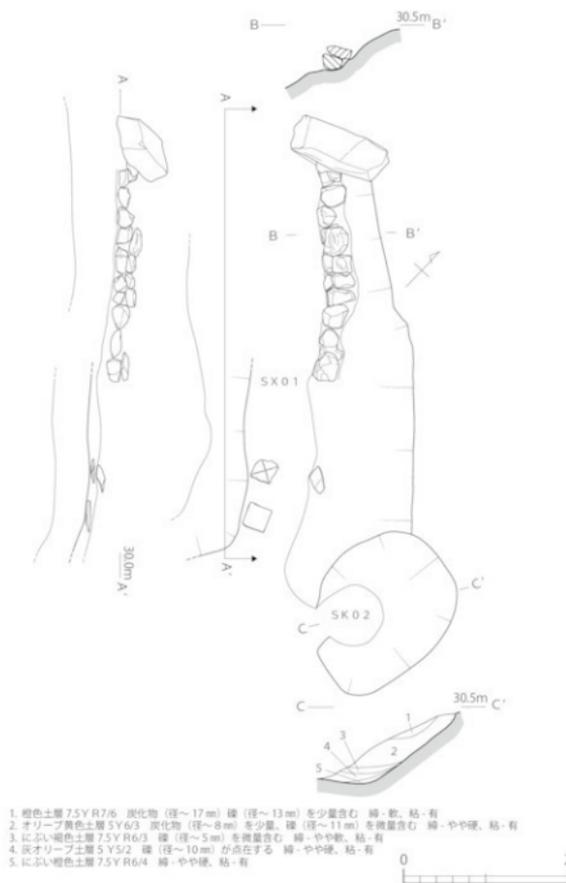
1号窯第5室から8室にかけての縦断セクションから、1号窯の下層に別の窯が存在することが判明した。下層の窯の上に橙色土層の間層(第2層)が堆積し、その上に瓦窯が構築されている。瓦窯の調査後、窯体を人力で崩し、下層の窯の全体を検出した。

焚口の平面位置は瓦窯と変わらない。構築時に粘土を張って整地された可能性がある(第33図Dラインセクション)。焚き口から4mほどは、上層に瓦窯が造られた影響で構築材がほとんど遺存せず、複数の段が確認できるのみである。隔壁や焚き庭の位置など詳細はわからない。後方の構築材が残る部分については部分的に構造が判明する。平たい煉瓦材を横に敷き並べた位置が隔壁、その奥の滓化した床面や壁面が焚き庭の痕跡である。とくに焚き庭の滓化部分は各段について比較的明瞭に残っている。これを手がかりに焼成室の規模を推測すると、前方から順に奥行1.7m、1.9m、2.3m、1.7mの少なくとも4室の焼成室が存在していたとみられる。この付近での横幅はほぼ一定して4.8mを測る。窯全体の残存長は9.0mである。地山面は被熱して赤化していたり、赤化した地山を盛って平坦にした箇所がある(第31図Fラインセクション)。

物原 (第34図)



第34図 城ヶ谷遺跡物原縦断面実測図 (S=1/60)



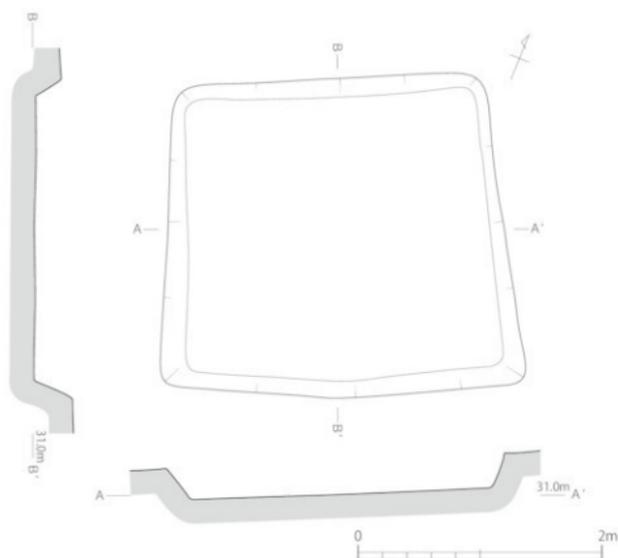
第35図 城ヶ谷遺跡Sx01、Sx02実測図 (S=1/60)

物原は窯の東方に東西20m、南北15mの範囲に広がっていた。窯の右上方の平坦面S S3で焼成品の選別が行われ、出荷できない失敗品が廃棄され、最大1.1mの厚さで堆積している。物原から種別や器種を代表する個体を抽出し、他は主に重機で調査区外へ搬出した。表面で採集された遺物の圧倒的多数は椀瓦とモミツチ・ハセ等の窯道具であり、互主体の窯であったことを裏付けている。互関係の遺物に混じって陶器用の窯道具、陶器類が比較的窯から遠い位置に集中しており、少量の陶器が併焼された状況を示している。物原の下の地山面は標高27m付近で平坦になり、平坦面の外縁は瓦を積み重ねて補強されていた。地山を削り出して造成された平坦面で、地形図(第6図)上で長さ8mの平坦部として確認される。27m付近には陶器が集中する地点があり、瓦窯下層で検出された陶器窯で焼成され、廃棄された失敗品とみられる。窯の焚き口寄りの地点では、地山面を掘り込んだ2mの土坑があり、植木鉢がまとめて坑内に廃棄されていた。

窯上方の遺構(第35図)

窯の煙道部から上方のS S2にかけての傾斜面中腹で、土坑Sx02を確認した。平面円形で径1.6mを測る。Sx02から左へのびる細長い遺構をSx01とした。地山をカットして造り出した幅0.8mの平坦部が、緩い上り傾斜を保って5.2m続いている。平坦部の一部には正方形の平たい煉瓦が残っていた。歩きやすいように置かれた(または敷かれた)煉瓦の一部が残存したものか。平坦部の山側には石列が2.4mにわたって続いていた。山側傾斜面の裾を掘りくぼめた後に石を据

り、平坦面の外縁は瓦を積み重ねて補強されていた。地山を削り出して造成された平坦面で、地形図(第6図)上で長さ8mの平坦部として確認される。27m付近には陶器が集中する地点があり、瓦窯下層で検出された陶器窯で焼成され、廃棄された失敗品とみられる。窯の焚き口寄りの地点では、地山面を掘り込んだ2mの土坑があり、植木鉢がまとめて坑内に廃棄されていた。



第36図 城ヶ谷遺跡SK03実測図 (S=1/40)

を大規模に削り出して造成された平坦面である。法面の裾のラインに沿って幅50cm、深さ30cmの溝SD02が掘削されている。SS2の中央で直角に曲がって西へ向かい、SS2を横断して9m続く。斜面を横断する部分では排水のため土管が多数埋設されていた。狭口部を山側、広口部を谷側へ向けて接続されており、雨水を谷側へ落とす機能が円滑にはたらくのかは疑問が残る。SD02の内側20cmの位置には、溝と走向を同じくして11個の礎石が並んでいた。礎石間の間隔は1mである。この礎石列はSD02が西へ曲がるコーナーまでで終わっている。SD02と同時期に礎石建物が存在したと思われるが、反対側の礎石が全て失われているため、規模等は不明の部分が多い。SD02の80cm南東側には、正方形の土坑SK03が検出された。この土坑もSD02と方向的・距離的に密接な位置関係にあり、前述の礎石列と同様SD02と同時存在していたと考えられる。

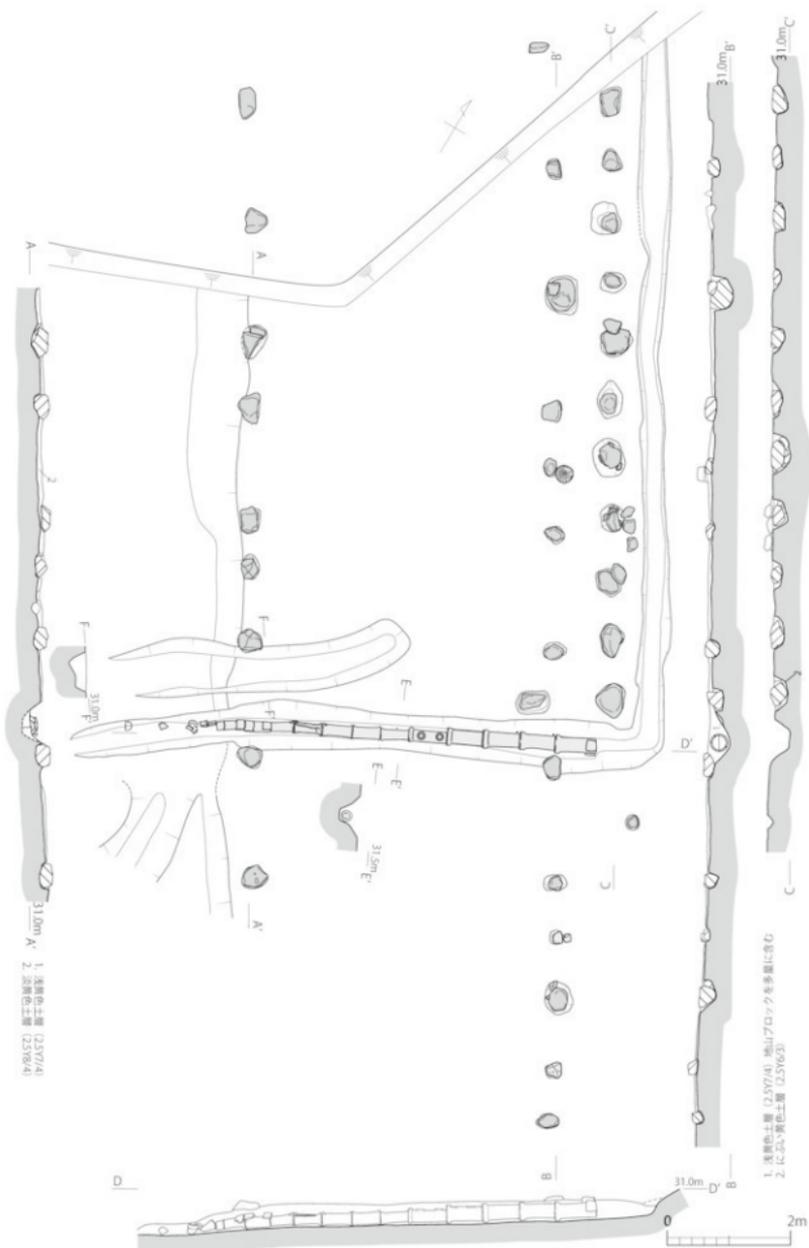
SD02と重なる位置に、礎石建物SB01を確認した。礎石の一つはSD02に土管を埋設した埋土の上面に据えられているので、SB01がSD02より新しい。北東辺の列で13個の礎石が確認できる。この中には主柱を支持する礎石ではない小さなものも含んでいる。主柱の間隔は2mと推定され、桁行9間以上の礎石建物が復元できる。対向する南西辺の礎石は9個が残存している。本来は北東辺の礎石に対応する礎石がさらに南方に続いていたが、1個は重機が進入した際に位置が動いてしまった。また、南下方の選別場を造成するための斜面のカットがこの付近から始まっており、これに伴って礎石が1～2個失われたとみられる。

このほか、精査に伴って下層で検出された溝状遺構SD07があるが、礎石建物より先行するという以外、詳細は不明である。検出長4.8m、幅80cm、深さ30cmを測る。

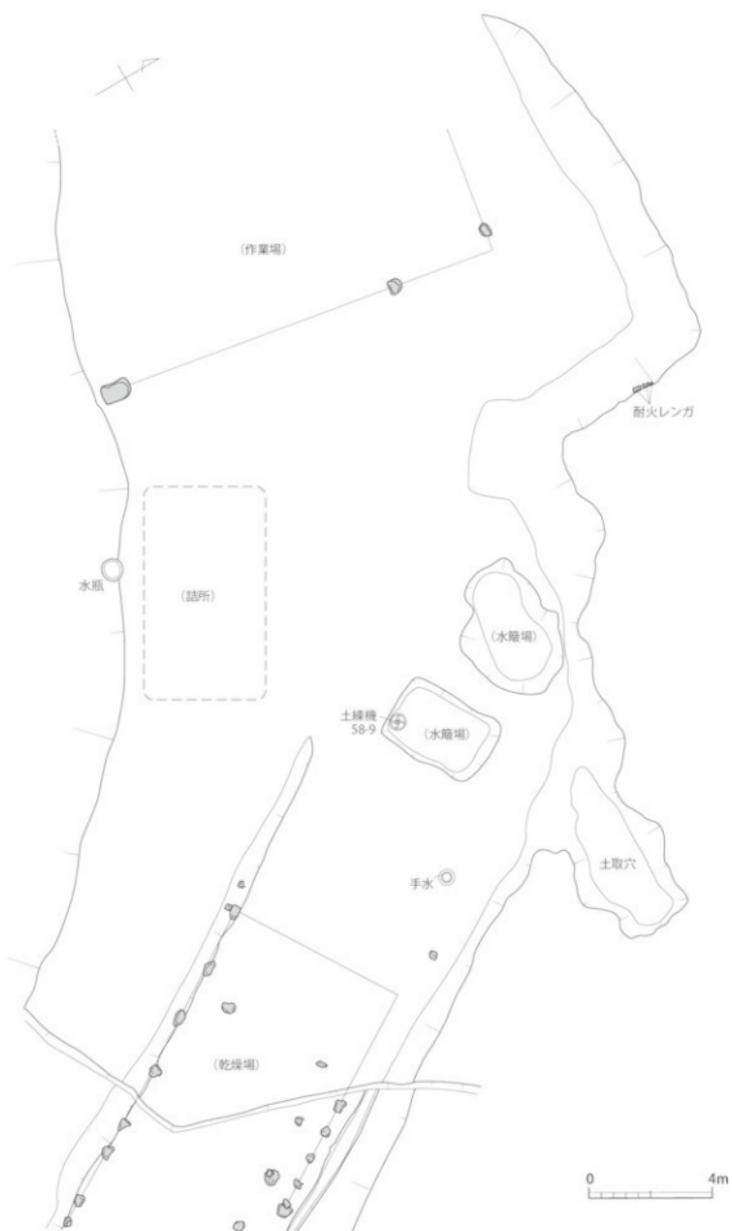
えており、部分的に二段積みされていた。西端には長1.2mの巨石が乗っている。遺構の性格は不明であるが、煉瓦が下層の陶器窯の構築材と共通しており、陶器窯と同時期の遺構である可能性がある。

SS2の遺構 (第36～38図)

SS2は、調査区上部に広がる緩斜面の一部



第37図 城ヶ谷遺跡SB01、礎石列1、SD2・07実測図 (S=1/80)



第38図 城ヶ谷遺跡 S S 2 実測図 (S=1/160)

第5節 窯業関連遺物

当遺跡は陶器や瓦を生産した窯跡(1号窯・2号窯)を含むことから、出土遺物の掲載は窯跡に伴う生産遺物を先に述べ、遺跡地で消費された遺物を後とした。ついで材質および器種・器形ごとに分類し(註1)、窯道具は陶器類と瓦類に分けてそれぞれ掲載する。

註1 分類は『新宿区内藤町遺跡』(新宿区内藤町遺跡調査会他1992)、『南町遺跡』(新宿区南町遺跡調査団1994)、『角川日本陶磁大辞典』(角川書店2002)、『窯構造・窯道具からみた窯業 - 関西窯場の技術系講をさぐる -』(関西陶磁史研究会2005)を参考にした。

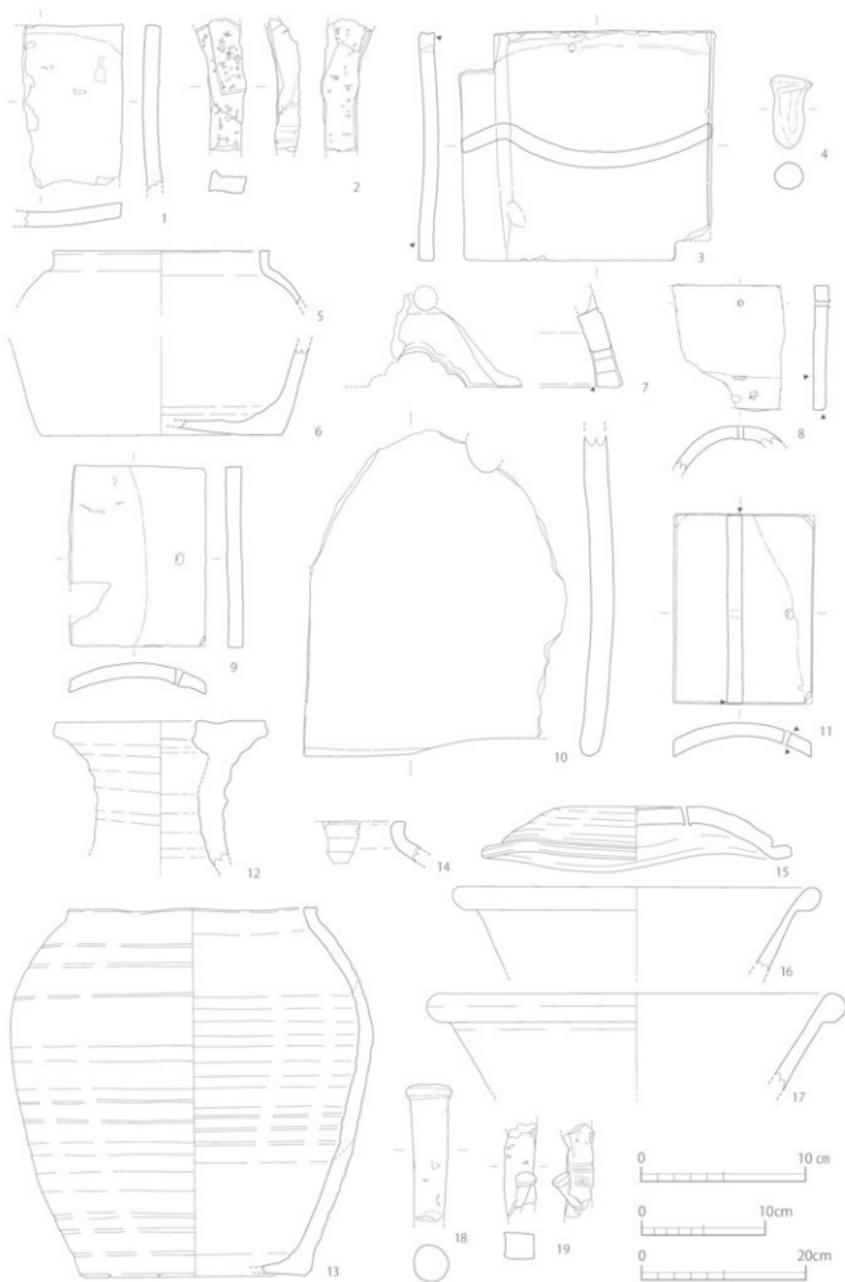
1号窯出土遺物 [図39-1～図40-4]

大口および1房からの出土遺物はない。図39-1～2は2房焼成室から出土した遺物で、1は熨斗瓦で表面には壁土がこびりついている。2は窯道具のモミツチで瓦を窯詰めした痕を伴う。図39-3は3房焼成室から出土した棧瓦である。外面には来待軸を施軸し、葺足には釘穴を1ヶ所開ける。図39-4は4房焼成室から出土した窯道具のハセである。図39-5～9は5房焼成室から出土した遺物で、5～6は土器の火消し壺である。5は直立した短頸部分、6の底部は静止糸切痕を伴う。7は火鉢と思われる陶器素地で、円孔と雲形の透かしを入れる。外面に白化粧土を施す。8は輪違ひ(素丸)である。約1/4に来待軸を漬け掛けし、無軸の葺足に釘穴を1ヶ所開ける。内外面に布目圧痕を伴う。9は熨斗瓦である。外面の約半分に来待軸を施軸し、無軸の葺足に釘穴を1ヶ所開ける。布目痕を撫で消した調整を伴う。図39-10は6房焼成室から出土した土製の火見蓋である。焼成時に木口最上部を塞ぐ蓋で、追い焚き際には差木を入れる為に取り外す。タタラ作りで成形され、表面にコビキ痕を伴う。底部に指が掛けられる袢りがあり、上部に色見孔を開ける。図39-11～13は7房焼成室から出土した遺物である。11は熨斗瓦である。内面にコビキと木型痕を伴う。外面に来待軸を施軸し、無軸の葺足に釘穴を1ヶ所開ける。来待軸は暗褐色に発色する。12は窯道具のヌケである。外面は轆轤目を伴い、天板に通気孔を開ける。13は土器の火消壺である。底部は静止糸切痕を伴い、端部を面取りする。図39-14～19は8房焼成室から出土した遺物である。14は土器の火消壺である。15は火消壺の蓋で、頂部に4ヶ所の孔が開けているが、針金の把手が取り付けられると思われる。16～17は窯道具の土盛鉢である。18～19は瓦の窯道具である。18は大型のハセで、19はモミツチである。図40-1-4は煙道の覆土から出土した遺物である。1は胴丸形火鉢である。内口縁から腰部にかけて灰軸を施軸し、底部を丸く削り円柱状の脚がつく。脚には火周りを良くするために孔を通す。2～4は窯道具の土盛鉢である。

2号窯出土遺物 [図40-5～9]

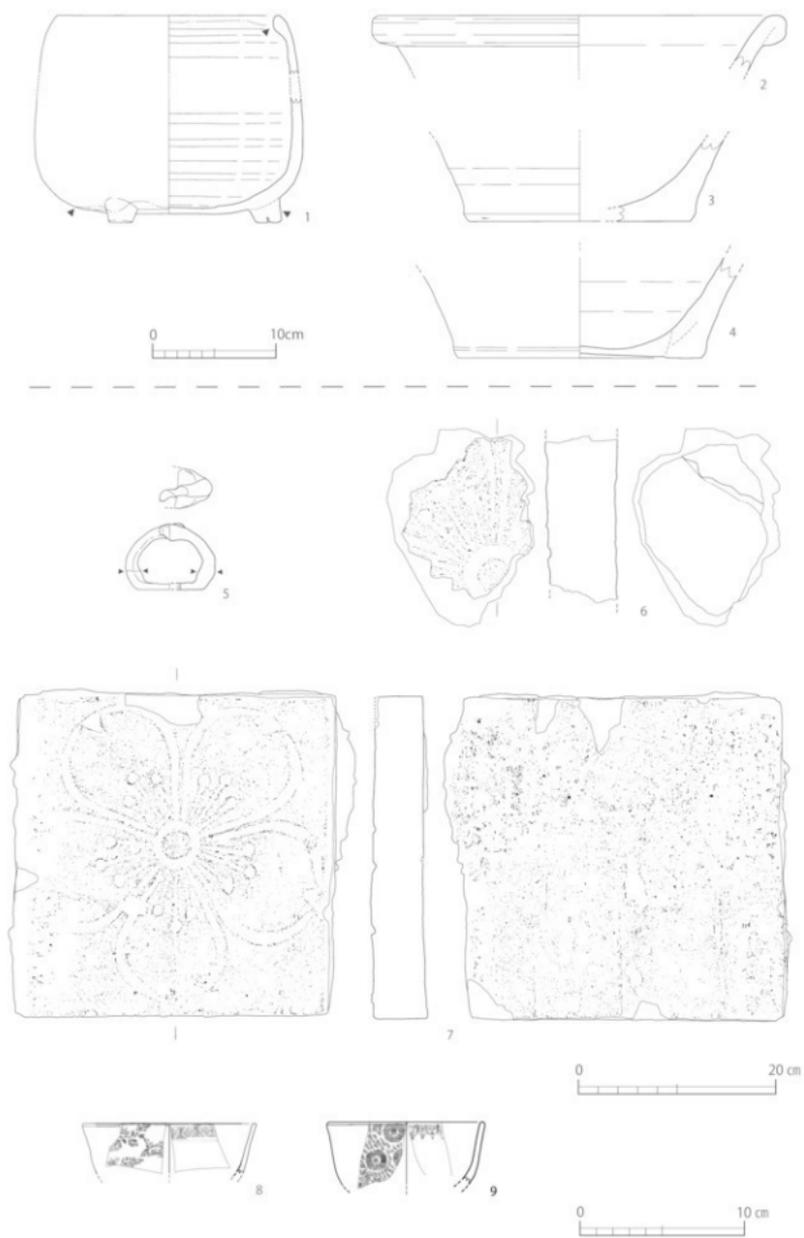
2号窯は焚庭(火床)と側壁の一部が検出された。5・8・9はいずれも側壁の耐火煉瓦の間から出土したものである。5はテストピースである。粘土紐を輪状に結び、接地面を指で押す。上半分に灰軸を施軸する。6～7は桜花文を施文した耐火煉瓦である。文様面を伏せて狭間の底部を構成していた。釘形で花卉を描き、腫しべを施印する。

8～9は伴遺物の端反形磁器碗である。化学コバルトの型紙刷で、8は外面に草花文と内口縁に雷文繫、9は外面に菊花詰文と内口縁に瓔珞文繫を施文する。いずれも推定される産地は佐賀県有田で、年代観は19世紀第4四半期である。表面に壁土が焼きついている。

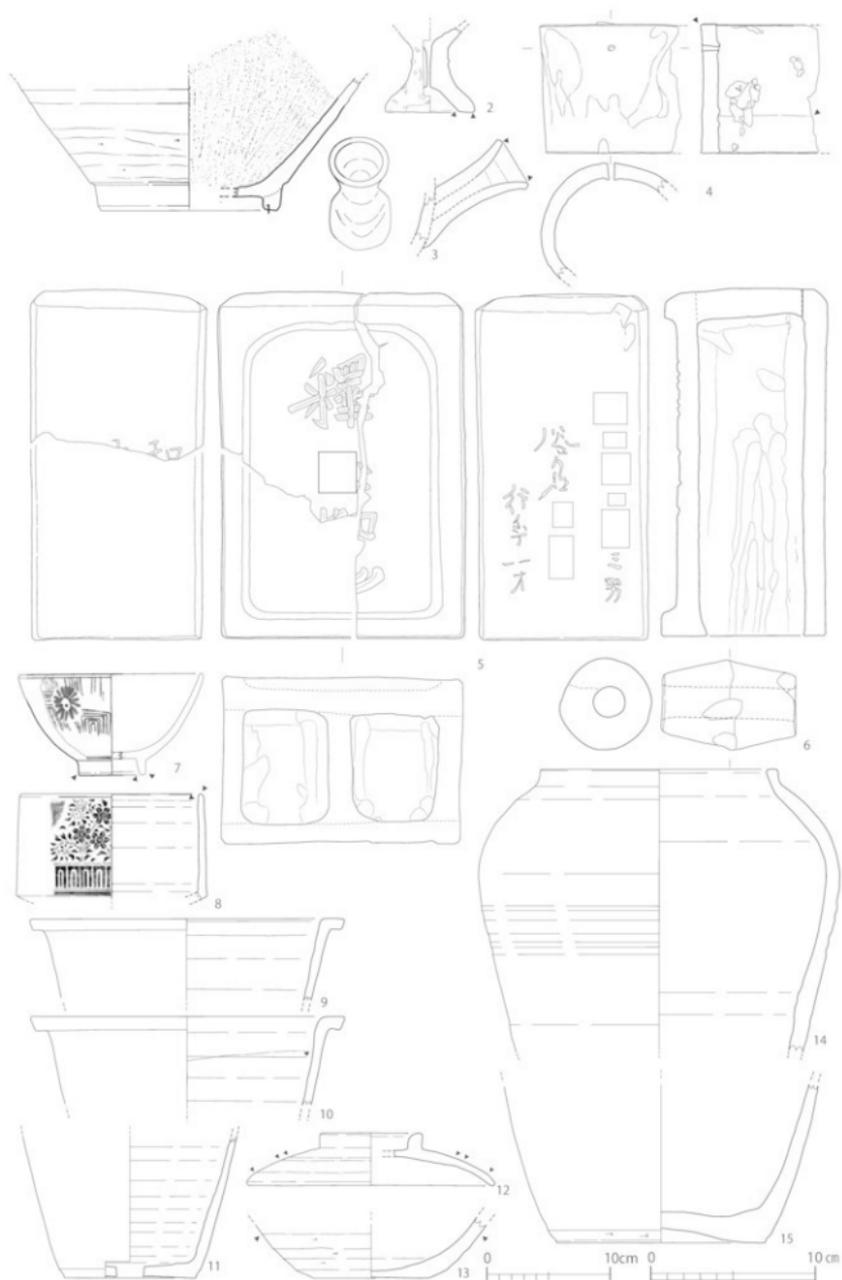


第 39 図 城ヶ谷遺跡竈体内 (1 号窯跡) 出土遺物実測図

(S=1/6、4・7S=1/3、5・6・10・12~18S=1/4)



第40図 城ヶ谷遺跡窟体内（1・2号窟跡）出土物実測図（1～4・6S=1/4、7S=1/5、5・8・9S=1/3）



第41図 城ヶ谷遺跡階段、物原土坑出土遺物実測図 (S=1/3、1・5・14・15:S=1/4)

1号窯階段遺構出土遺物 [図41-1～8]

1号窯の南側に設けられた階段から出土した遺物である。掲載遺物は窯跡に関連した生産遺物(1～6)と共存する消費遺物(7～8)に分けられる。

1は陶器素地の播鉢である。高台は輪高台で、擦目は内面に施した後、見込み部分から放射状に追加する。2は陶器の燭台である。脚部中心は孔が貫通しており、灯芯が入るものと思われる。畳付を除く内外面に來待軸を施軸する。3は行平の把手で筒状を呈する。外面に來待軸を施軸する。4は輪逾い(素丸)である。約1/3に來待軸を漬け掛けし、無軸の葎足に釘穴を1ヶ所開ける。内外面に布目圧痕を伴う。熱により変形し、軸葉は蒸発している。5は陶製の箱形墓碑である。タタラから切り出した粘土板を貼り合わせて箱型に組み、内部に仕切板を挟む。正面は型押しで段をつくり、内面に線刻の戒名と押印の蓮華文を配する。左側面は俗名と施主(父親)の名前、右側に元号の一部「昭[和]・・」を線刻で記す。外面に來待軸を施軸する。6は陶製の鍾である。粘土板を巻いて算盤玉形に成形し、來待軸を施軸する。

7・8は共存した磁器である。7は平形碗である。化学コバルトの印判で菊花文と源氏香文崩しを施文する。推定される産地は多治見・瀬戸で、年代観は20世紀第2四半期である。8は半筒形段重である。化学コバルトとクロムの型紙刷りで、器壁に花唐草文と格子文を施文する。推定される年代観は19世紀末葉から20世紀前葉頃である。

物原土坑出土遺物 [図41-9～15]

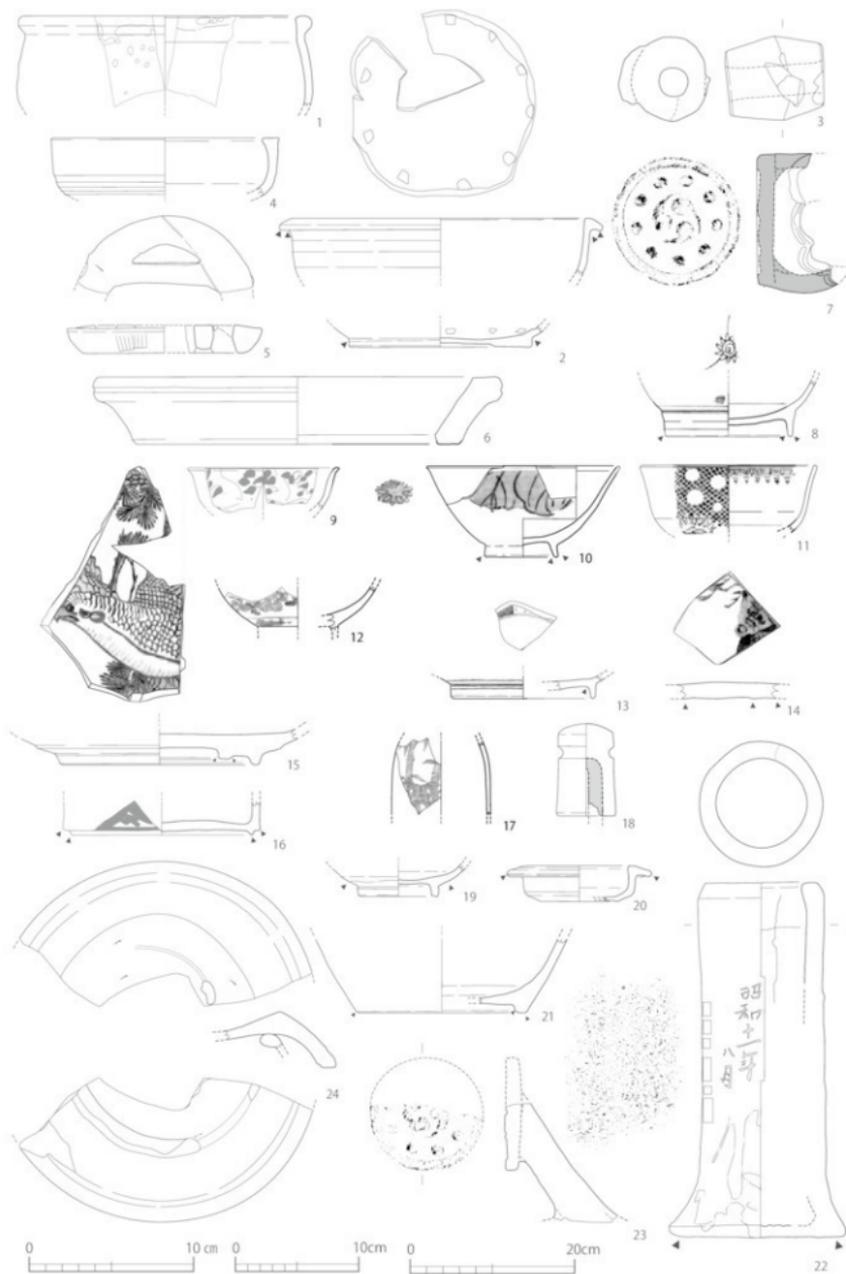
土坑内を鈔鉢筒形植木鉢(9～11)が埋め尽くしていた。9～11は鈔鉢筒形植木鉢である。10・11は來待軸を施軸する。いずれも胎土は淡褐色を呈する土器質で焼き締まっていない。軸葉の発色も悪いことから、焼成温度が低かったものと思われる。軸葉は生掛けと思われるので、無軸の9は土器の可能性が高い。上層には別器種が少量混入していた。12～13は行平である。12は行平蓋で來待軸を蛇ノ目状に施軸する。13は行平底部で内面に來待軸を施軸する。14～15は土器の火消壺である。14は直立する短頸がつき、15の底部は静止糸切痕を伴う。

1号窯焚口付近出土遺物 [図42-1～18]

掲載遺物は窯跡に関連した生産遺物(1～7)と共存する消費遺物(8～18)に分けられる。

1は陶器の胴形鉢である。外面の黒釉と内面の灰釉に掛け分ける。2は陶器の丸形捏鉢である。内面から高台脇にかけて灰釉を施軸し、見込みに筒トチン(ハリ)の目跡を伴う。3は來待軸を施軸した陶製鍾である。4は土器の浅丸形鉢である。口唇部は平らで内側にせり出し、腰部を回転削りで整形する。施軸前の陶器素地の可能性がある。5は土製のサナである。押型成形の布目圧痕と剥離剤の雲母が認められる。側面および上面は削りで整形する。6は土製の五徳である。玉縁口縁には沈線が入り、底部脇を面取りする。7は瓦当下面に頸がつく軒丸瓦で、瓦当文様は連珠三巴文である。頸の外縁を沈線が縁取る。外面に來待軸を施軸する。

8～18は磁器の共存遺物である。8は広東形碗で、呉須の染付で見込みに火炎文を描く。推定される産地は肥前系で、年代観は18世紀末葉である。9は端反形碗である。化学コバルトの染付で内外面に仙芝祝壽文崩しを描く。推定される産地は多治見・瀬戸で、年代観は1870年代以降である。10は平形碗である。化学コバルトの染付で外面に菊桐文を描く。推定される産地は佐賀県



第 42 図 城ヶ谷遺跡焚口付近・S 3 出土遺物実測図 (S=1/3、2・22・24:S=1/4、7・23:S=1/6)

有田で、年代観は1870年代頃である。11は端反形碗である。化学コバルトの型紙刷で外面に青海波地の菊花文と内口縁に瓔珞文を施文する。推定される産地は佐賀県有田で、年代観は19世紀第4四半期である。12は平形碗である。化学コバルトとクロムの銅版刷で菊樹文と根引き松を施文する。推定される産地は多治見・瀬戸で、年代観は19世紀末葉から20世紀前半代である。13は蛇ノ目凹型高台をもつ深目皿である。呉須の染付で内面に区割文を描く。推定される産地は肥前系で、年代観は18世紀後半から19世紀前半代である。14は蛇ノ目凹型高台をもつ深目皿である。呉須の染付で内面に山水文風の文様を描く。推定される産地は肥前系で、年代観は19世紀前半代である。15は二重高台をもつ大皿である。化学コバルトの染付で内面に鷹図を描く。推定される産地は佐賀県有田で、年代観は1870年代以降である。16は半筒形段重である。化学コバルト染付で外面に笹文を描く。推定される産地は肥前系で、年代観は1870年代以降である。17は燗徳利である。化学コバルトの銅版刷で竹笹文を施文する。推定される産地は佐賀県有田で、年代は19世紀末葉以降である。18は罫子で、中に電線の一部が残る。

SS03 出土遺物 [図 42-19～23]

いずれも窯跡に関連した生産遺物である。19～22は陶器である。19は碗形形碗わんがらと思われる。内面から腰部にかけて灰釉を施軸する。底部は露胎で、高台内に渦巻きの釘彫りを伴う。20は土瓶用と思われる落とし蓋である。青緑釉は熱変で白化している。21は徳利である。内外面に灰釉を施軸し、畳付けを釉刺ぎする。22は墓前用の筒形花入である。タタラから切り出した粘土板を円筒状に巻いて底板を貼り付ける。底部を除く内外面に来待軸を施軸するが、熱変で火膨れを起こす。胴部には「昭和十一年 八月」の紀年銘と施主の名前が線刻で記される。この花入と陶製墓碑(41図-5)の施主名が一致することから、セットで作られた可能性がある。共にタタラから粘土板を切り出す板作り成形で、瓦製作の工法が応用されている。23は鳥体みで棟止瓦(図 55-1)に使われたものと思われる。来待軸を施軸し、円形の瓦当面に連珠三巴文を施文する。瓦への接断面は櫛目状の工具で均す。24は匣鉢の蓋である。内面に胴丸形火鉢の口縁が熔着する。

物原出土遺物 [図 43～56]

遺物は窯跡に関連した生産遺物(図 43～55)と共存する消費遺物(図 56)に分けられる。物原に大量に堆積する生産遺物には、製品と窯道具があり、材質は陶器類、土器類、瓦類に分かれる。出土量は瓦類が圧倒的に多く、ついで陶器類、土器類となる。陶器類の多くは地山直上に薄く散乱し、その上を瓦類が厚く覆っていた(図 34)。

陶器：碗類 [図 43-1～22、図 44-1～4]

図 43-1～4は丸形碗である。釉薬は内面から腰部にかけて施軸し、底部は露胎で高台端部を面取りする。1は来待軸と鉄軸を重ね掛ける。2は薬灰軸を施軸するが、熱変により火膨れを起こしている。高台内に来待軸で「中」と記される。3は青緑釉を施軸するが、熱変で一部灰色となる。高台内に来待軸で「好(□)」と記される。図 43-5～8は端反形碗である。器壁は薄く焼き締まる。内面から腰部にかけて来待軸を施軸し、腰部以下は露胎となる。高台はやや外反し、端部を面取りする。図 43-9は丸形碗の底部と推測される。薄く灰軸を施軸し、見込みに足付輪トチンの目跡を伴う。図 43-10～11は腰折形碗である。内面から腰部にかけて薬灰軸を厚手に施軸し、腰部以下



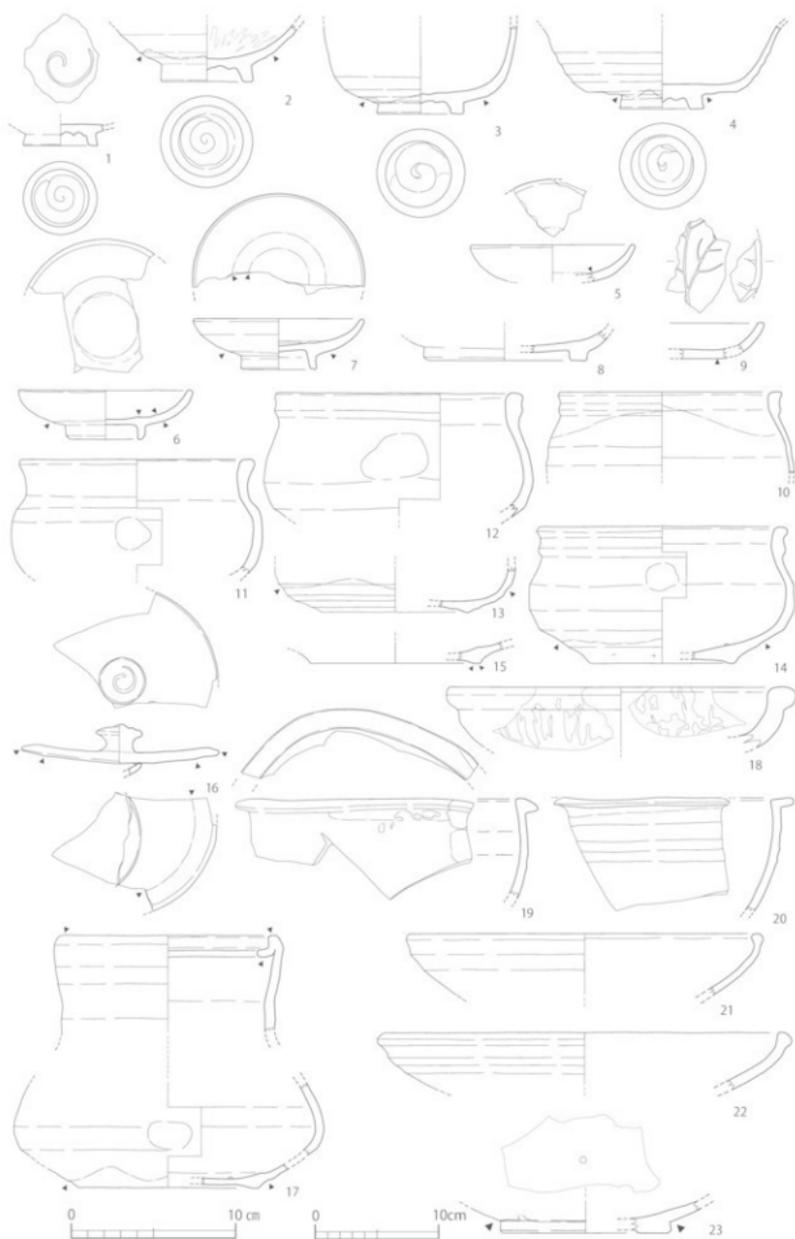
第43図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図1 (S=1/3)

は回転削りで整形する。

図 43-12 ～ 図 44-4 の碗は作行から茶道具の茶碗と思われる。器形や釉薬には幾つかの種類があるが、共通して高台内に渦巻きの釘彫りを施す特徴が見られる。図 43-12 ～ 17 は碗形碗である。開き気味に立ち上がる器形で、胴部に轆轤目ないし沈線を施す。釉薬は内面から腰部にかけて刷毛掛けで施軸し、高台周りは露胎である。腰部以下を回転削りで整形する。端部を面取りする高台はやや外反し、高台内は渦巻きの釘彫りを伴う。いずれの胎土も緻密であり、軽めの粘土を使用する。12 と 13 は施軸前の陶器素地である。胎土は灰白色を呈し、径 3mm 大の長石粒を含む。これは石はぜを意図したものである。胴部中央に 3 ～ 4 条の沈線が巡る。14 は熱変により内湾する。厚めの灰軸を施軸するが、暗灰色に焼き爛れる。見込みは灰落ちて白濁する。腰部以下は渦巻き状に回転削りで整形する。高台内の全面にわたって渦巻きの釘彫りを施す。15 は胴部に回転ナゲによる緩やかな轆轤目が施され、口縁端部はつまみ出されて細くなる。見込みを渦巻きに撫でる。釉薬は緑色を呈する灰軸を薄く施軸する。焼成後に底部を穿孔している。16 は胴部に 2 条の浅い沈線を施し、高台脇の削りはやや波打つ。白濁した藁灰軸を厚めに施軸し、軸上に微細な気泡が生じている。17 は熱変で変形しているが、高台の一部を切り欠いた“切高台”の特徴をもつ。胴部に浅い轆轤目が巡る。白濁した藁灰軸を厚めに施軸し、軸際は波打つように刷毛掛ける。高台内に小さな渦巻きの釘彫りを施す。18 は盃形碗で、熱変によって高台がめり込む。白化粧のうえに長石釉を施軸するが、焼成温度が高過ぎたことにより縮れて網目状に凝固している。軸際は波打つように刷毛掛けされ、高台周りは露胎となる。腰部以下を回転削りで整形し、高台内の全面に釘彫りを施す。19 は口縁がやや内湾する半球形碗である。白色と茶色の陶土による“練り込め技法”を用いることが特徴としてあげられる。胴部以下を回転削りで整形し、口縁付近に段を有する。釉薬は灰軸を薄掛けするので生地の縞目が透けて見える。高台内は渦巻きの釘彫りを施す。20 は胴縮形碗で、施軸前の陶器素地である。胴部以下を回転削りで整形し、縦筋の窪目を施す。胎土は淡褐色を呈し、石はぜを意図した径 3mm 大の長石を含む。図 43-21 ～ 22 および図 44-1 ～ 4 は碗底部である。いずれも外反する高台で、高台内は渦巻きの釘彫りを伴う。21 は素焼き焼成された陶器素地である。平滑な見込みは細く沈線が外周して鏡を呈する。22 の見込みに崩れ落ちた器壁が折り重なって熔着する。器壁外面に強めの轆轤目が施されている。腰部から高台にかけて渦巻き状に回転削りで整形する。釉薬は緑色を呈する灰軸を内面から腰部にかけて施軸し、高台周りが露胎となる。図 44-1 は内面に灰軸を施軸し、高台周りは露胎である。2 は内面から腰部にかけて灰軸を施軸し、そのうえから藁灰軸を重ね掛ける。3 は半球形碗と推定される。腰部以下を回転削りで整形し、見込みは丸く窪ませている。内面から腰部にかけて鮮やかな黒軸を施軸する。4 は熱変によって変形した碗形碗と思われる。器壁を浅い轆轤目が巡り、腰部以下を回転削りで整形する。内面から腰部にかけて緑色を帯びた灰軸を施軸し、高台周りは露胎となる。高台畳付けは左周りの回転糸切痕を伴い、他の碗よりも雑な整形である。

陶器：皿類 [図 44-5 ～ 9]

図 44-5 ～ 7 は、高台から丸く器壁が立ち上がる丸形皿である。腰部以下を回転削りで整形し、高台は直立し端部を面取りする。内面から高台脇にかけて灰軸を施軸し、見込部分を重ね焼きに蛇ノ目刺ぎする。6 は重ね焼きの痕跡を伴う。7 の灰軸は火膨れが生じて白化している。図 44-8 は陶器素地の皿底部で、やや大振りである。高台は直立し端部を面取りする。内面から高台脇にか



第44図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図2 (S=1/3、19~23:S=1/4)

けて白化粧を施す。図 44-9 は押型成形された木葉形皿で、内面に陽刻の葉文を施文する。下地に白化粧を施し、灰釉と黄釉を重ね掛けする。胎土は薄褐色を呈し緻密で硬く焼き締まる。

陶器：鉢類 [図 44-10～図 47-16]

図 44-10～15 は胴部が押圧された扁平形鉢である。器壁に緩い轆轤目が巡り、腰部から底部にむけて回転削りて整形する。10・12・14 の頸部には突線が入る。釉葉は内面から腰部にかけて施釉し、底部回りを露胎とする。10 は灰釉を施釉した上に藁灰釉を重ね掛ける。11～13 は微細な黒色斑が浮かぶ来待釉を施釉する。14 は藁灰釉と灰釉を左右に掛け分ける“片身替わり”で、見込みに足付トチンの目跡を伴う。15 は白化粧土のうえから灰釉を施釉し、畳付部分を拭き取る。胎土は 10～13 が灰色、14 は淡褐色、15 は暗灰色を呈する緻密な粘土を硬く焼き締めており軽い。いずれも薄作りで丁寧に仕上げられており、押圧や掛け分けなどの意匠が凝らされる。これらの鉢は茶道具の懸水として作られた可能性がある。

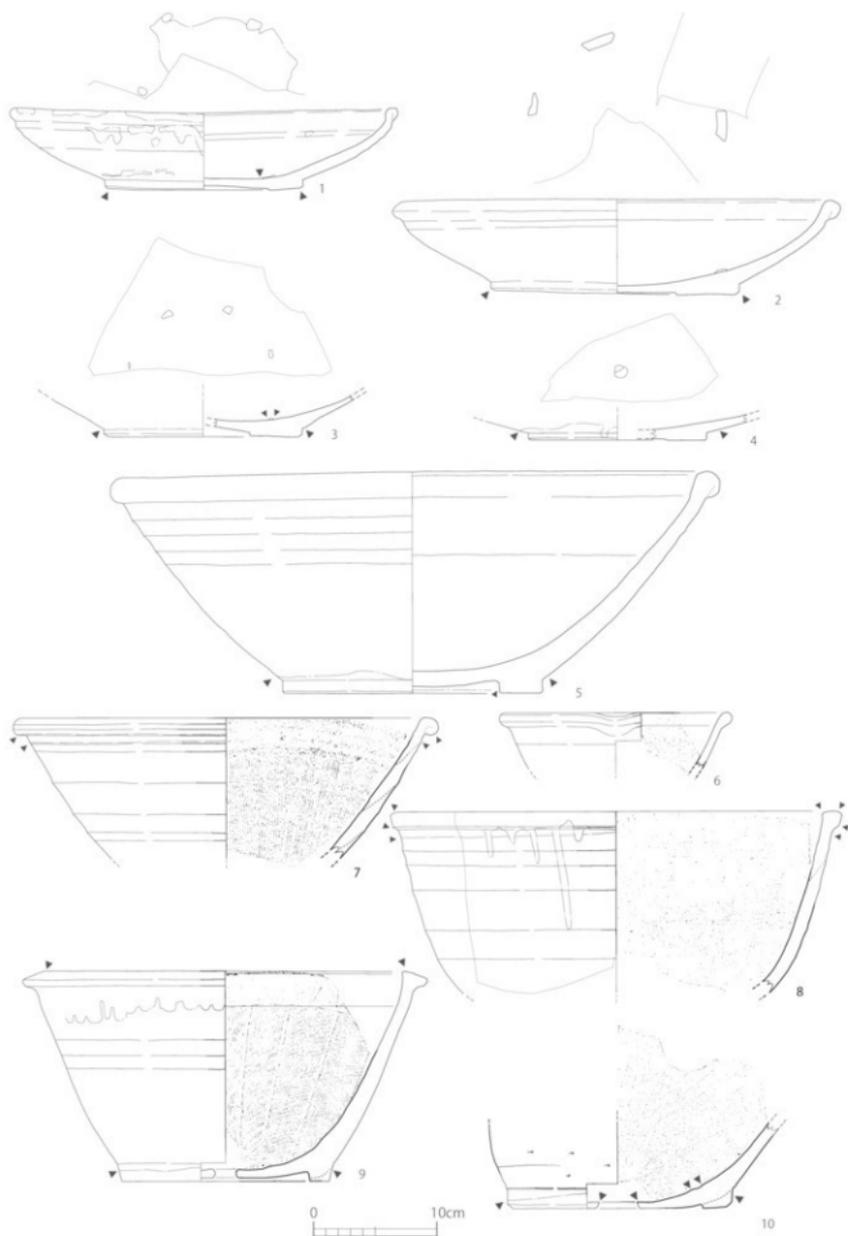
図 44-16・17 は抱桶形水指の蓋と身である。17 は張りのある胴部に直立する頸部が付き、口縁に蓋受けがみられる。頸部は浅手の轆轤目と胴部中央に押圧による窪みをもつ。見込みは浅い円形の段と足付トチンの目跡を伴う。釉葉は内面から腰部にかけて藁灰釉を施釉し、蓋受け部分を拭き取る。腰部下半に灰落ちが降りかかることから伏せ焼きしたことがわかる。16 は平板の蓋で、摘み上面は渦巻きの沈線が入る。釉葉は水指と同じく藁灰釉を施釉し口唇部を拭き取る。内面に別固体の破片が付着する。16・17 の胎土はともに灰色を呈する緻密な粘土を焼き締めている。

図 44-18 は玉縁をもつ浅丸形鉢である。外面に来待釉を施釉し、内面から口縁外帯にかけて灰釉を流し掛ける。胎土は灰色を呈した緻密な粘土を硬く焼き締める。

図 44-19～図 45-5 は捏鉢である。図 44-19～20 は罅縁がつく丸形捏鉢である。いずれも熟変によって変形している。釉葉は内外面に灰釉を施釉し、口縁の下面を拭き取る。胎土は灰色を呈した粘土を硬く焼き締めている。図 44-21～図 44-4 は幅広の蛇ノ目高台をもつ浅丸形捏鉢である。図 44-21 と図 45-1 の玉縁口縁はやや内湾する。釉葉は内面から高台脇にかけて灰釉を施釉するが、図 44-1 の見込みは露胎となる。重ね焼きの窯道具は二種類あり、輪トチンの目跡を伴う図 44-23・図 45-1・4 と、筒トチン(ハリ)の目跡を伴う図 45-2・3 がある。図 45-5 は大形の捏鉢で、口縁を外に折り玉縁に整形する。釉葉は畳付を除く内外面に来待釉を施釉する。胎土は灰褐色を呈し、細砂粒を含む粘土を使用する。

図 45-6～10 は搦鉢である。6 は小形で、口縁の一部を摘み出して注口とする。内外面に来待釉を施釉し、胎土は薄褐色を呈する。7～10 は大型の搦鉢である。胎土は砂粒を多く含む灰褐色を呈する 7～9・10 と、緻密で硬質な灰色を呈する 9 に分かれる。7 は玉縁口縁で内外に来待釉を施釉し、口縁下面の釉葉を拭き取る。器壁は直線的に立ち上がり、搦目は 8 条を単位として上端を描る。8 は帯縁口縁で内外面に来待釉を施釉し、口縁の上下面の釉葉を拭き取る。器壁は丸みをもって立ち上がり、搦目は 18 条を単位として上端は不揃いである。9 は折縁口縁で、口唇部から高台脇にかけて光沢のある来待釉を施釉する。器壁は直線的に立ち上がり、搦目は 24 条を単位として上端を削り整える。見込み中央に径 1.6cm の孔が開く。10 は搦鉢の底部である。見込みに径 2.8cm 大の孔が開く。内面から高台脇にかけて来待釉を施釉し、見込みに筒トチン(ハリ)の目跡を伴う。

図 46-1～図 47-6 は植木鉢である。図 46-1～3 は罅縁がつく丸形植木鉢である。1 は内口縁よ



第45図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図3 (S=1/4)

り外面にかけて青緑釉を施軸する。2は内口縁より高台脇にかけて白化粧を施し、灰釉を施軸する。高台には三方の半円形の切り込みを入れる。3は陶器素地の植木鉢底部である。腰部以下を回転削りて整形し、高台に半円形の切り込みを入れる。図46-4～図47-4は桶形植木鉢である。4～8は高台を伴わない糸切底で、41図-9～11と同形である。胎土は橙色を呈する土器質で、焼き締まっていない。4～6・8は内口縁から底部脇にかけて来待軸を施軸するが発色は悪い。7は無施釉である。図46-9～15は浅手の桶形植木鉢で、高台に半円形の切り込みを入れる。9・12～16は帯形口縁である。9・12～14は内口縁から高台脇にかけて白化粧を施した上から灰釉を施軸する。9の内面は灰落ちが付着し、14に陶土と思われる粘土塊が付着する。15は黒釉、16は青緑釉を施軸する。16の口縁に裏破片が付着するが、裏の内部に窯詰めしたものと思われる。10・11は突帯のつく口縁で、内口縁から外面にかけて青緑釉を施軸して内面を拭き取る。熱変によって著しく変形し、10は裏破片が熔着する。図47-1・3・4・6は深手の桶形植木鉢である。1は緻密な白色粘土を使用する陶器素地である。3は灰釉を施軸し、内面に来待軸の印(判読不明)がある。4は灰白色の粘土を使用する陶器素地である。器壁および見込みは回転削りて整形され、桶輪高台の三方に切り込みを入れる。6は大形の植木鉢で口縁外周を輪花状につまむ。内口縁から外面にかけて白化粧を施して灰釉を施軸する。外面には薄めの化学コバルトで格子文を描く。胎土は砂粒を多く含んだ粗い粘土を使用する。図47-2・5は桶形植木鉢と推定される陶器素地である。2は二段折の口縁をもつ。5は輪高台をもち、器壁および見込みを回転削りて整形する。

図47-7・8は火入である。7は口縁が内湾する胴丸形火入である。口縁から外面にかけて青緑釉を施軸する。器壁を薄く作り、暗灰色の胎土は硬く焼き締まる。8は陶器素地の筒形火入で、底部に台形状の脚を貼り付ける。

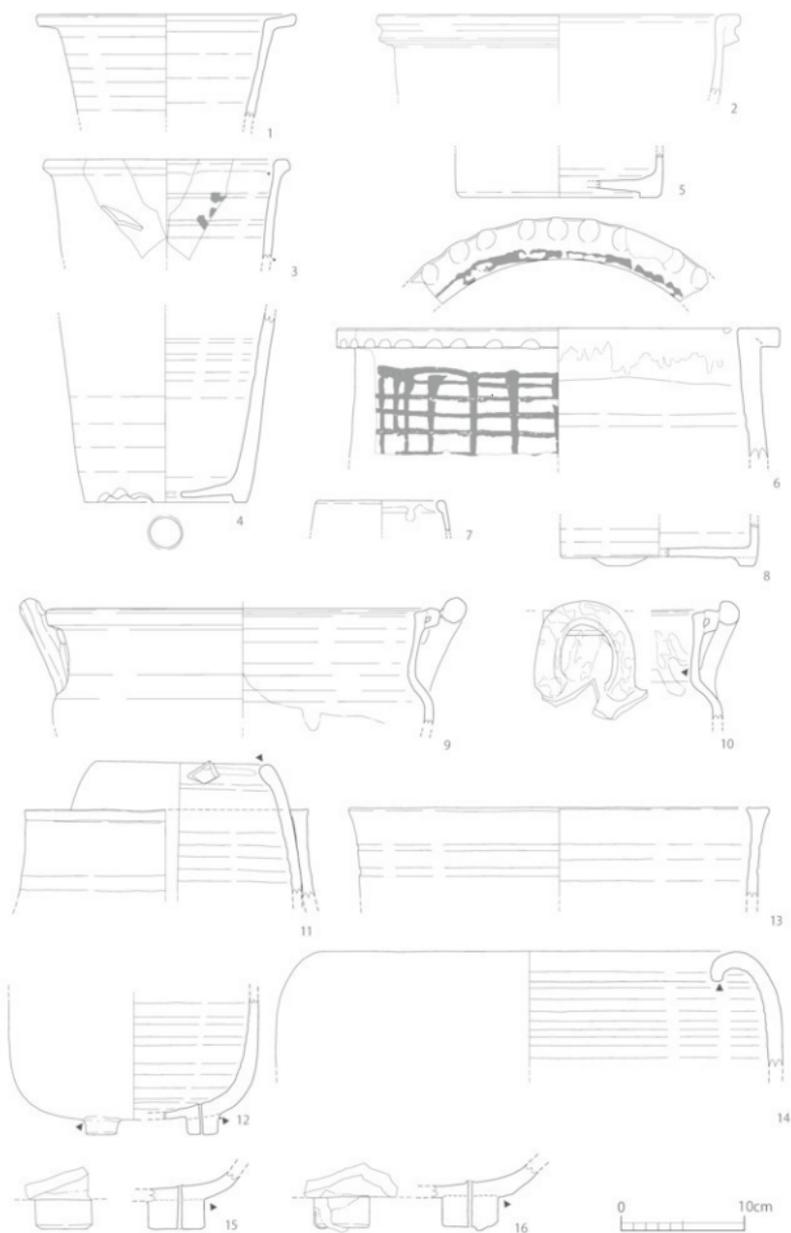
図47-9～16は火鉢である。9・10はアーチ形把手がつく鼎形火鉢で、同一固体になる可能性がある。口縁はコ字形の別パーツを貼り付ける。内口縁より外面にかけて来待軸を施軸し、そのうえに灰釉を重ね掛ける。胎土は灰色を呈する緻密な粘土を硬く焼き締める。11・12は胴丸形火鉢で、底部に円柱脚を貼付ける。焼成の効率を上げるため、底部と円柱脚を貫通する孔を開ける。口縁より底部にかけて灰釉を施軸する。11は匣鉢の破片と別固体の破片が付着する。匣鉢に胴丸形火鉢を入れ、火鉢の中にはさらに別の器を窯詰めした様子がわかる。13は筒形と思われる火鉢である。頸部に浅い二条の沈線が巡る。内外面に光沢のある来待軸を施軸する。図47-14は胴丸形火鉢で口縁は内湾する。口縁から外面にかけて黒釉を施軸する。胎土は褐色を呈した粗めの粘土を使用する。図47-15・16は火鉢類の脚部である。12と同様に火通しの孔を開ける。釉薬は銹釉を化粧掛けして黒釉を施軸する。胎土は薄褐色を呈した緻密な粘土を硬く焼き締める。この脚部の形状は布志名焼の風がに類例が認められる。

陶器：裏類 [図48-1～16]

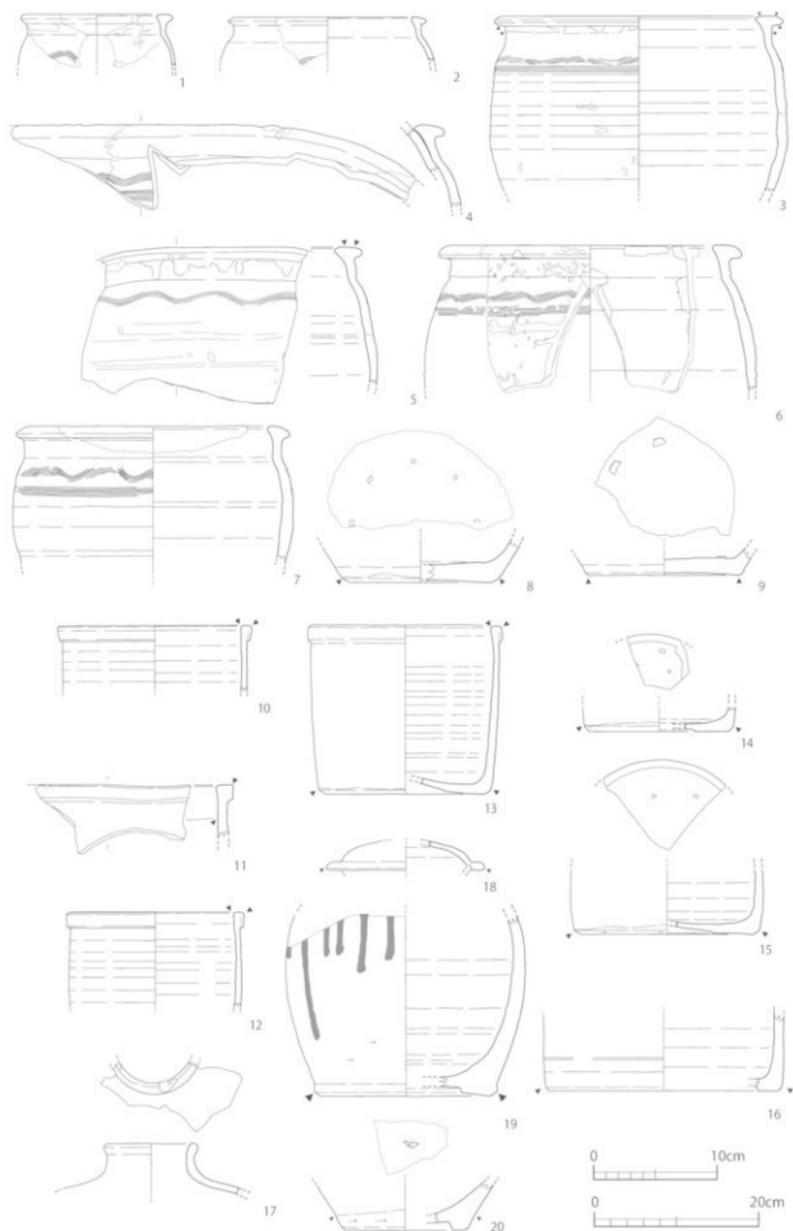
1～9は胴丸形裏である。大形のもの「はんど」と呼称される。1・2は小振りで肩部に櫛目波状文を施し、内外面に来待軸を施軸する。3～7は大形で肩部に櫛目の波状文や条線文を施す。内面から底部脇にかけて来待軸を施軸し、3と5は口縁下面の釉薬を拭き取る。裏底部の8・9の見込みには筒トチン(ハリ)の目跡を伴う。8の底面に径4cm大の粘土(板トチン)痕、9の底面に布目丘痕とアルミナ砂の付着が認められる。胎土は1～6・9が灰褐色を呈し、7は灰色を呈する。10～15は半筒形裏で、おもに出雲地方に分布する器形である。口縁を外に折り曲げて帯形に整



第 46 図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 4 (S=1/3)



第47図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図5 (S=1/4)



第48図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図6 (S=1/6、17~20:S=1/4)

形し、底部は幅広の蛇ノ目高台で端部を面取りする。内面から底部脇にかけて来待軸を施軸し、口縁端部を拭き取る。11は内口縁以下を無軸とする。14・15の見込みは筒トチン(ハリ)の目跡を伴う。同形の裏を積み重ね、裏内部に小物を窯詰めした様子がわかる。ただし、11は軸垂れの方向から伏せ焼きを行っていることがわかる。16は半筒形甕と思われるが、高台幅が狭い。内面から底部まで来待軸を施軸しているが、焼成不良で釉葉の発色は悪い。

陶器：壺類 [図 48-17～20]

17は肩衝形壺である。内外面に光沢性のある来待軸を施軸し、頸部に禾目が生じる。胎土は灰色を呈した緻密な粘土を硬く焼き締めている。18は罽緑のつく壺蓋である。外面に来待軸を施軸しているが、熱変で火膨れを起こす。19は胴丸形壺である。腰部以下を回転削りで整形し、蛇ノ目高台の端部を面取りする。内面から高台脇にかけて灰軸を施軸し、胴部に薄めた化学コバルトを流し掛ける。見込みに布目圧痕を伴う。20は壺の底部である。腰部は回転削りで整形され、削り抜きの碁筒底となる。内面から底部脇まで来待軸を施軸し、見込みに筒トチン(ハリ)の目跡を伴う。

陶器：瓶類 [図 49-1～16]

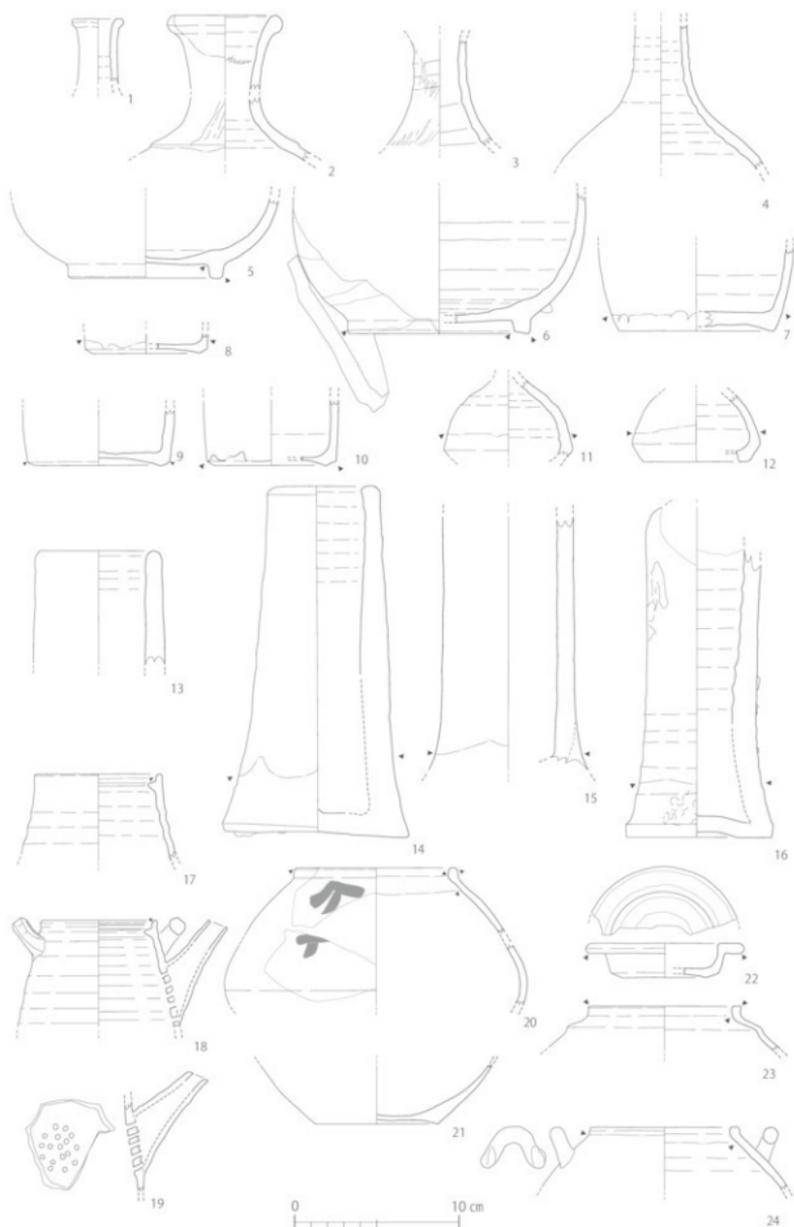
1～4は瓶の頸部である。1は玉縁がつき、内外面に灰軸を施軸する。2は頸部と胴部の境に浅手の段がある。内外面に灰軸を施軸し、その上から藁灰軸と来待軸を掛け分けている。胎土は灰色を呈する緻密な粘土を硬く焼き締めている。3は外反しながら立ち上がる頸部である。内外面に灰軸を施軸し、藁灰軸を重ね掛ける。4は辣蕪形徳利で内外面に灰軸を施軸する。5・6は辣蕪形瓶の底部で高台端部を面取りする。5は灰軸、6は黄軸を内外面に施軸し、畳付部分を軸剥ぎする。6の腰部に火鉢破片(図 47-9に類似)が付着する。7は寸胴形瓶の底部である。内面から底部脇まで灰軸を施軸する。釉隙に指痕を伴うことから漬け掛けと思われる。9・10は爛徳利の底部で、器壁および底部を薄く仕上げる。内面から底部脇まで灰軸を施軸する。胎土は薄褐色を呈した緻密な粘土を使用する。11・12は扁平した腰折形瓶で、外面に灰軸を施軸する。胴部以下を回転削りで整形し、底部は碁筒底となる。図 49-13～16は筒形花入である。墓前の供花に用いられ、使用時は約半分を地中に埋める。風倒を防ぐために底部を末広がりにする。釉葉は13～15は来待軸、16は灰軸を施軸する。製法は二種類あり、轆轤成形の14・16と、板作り成形の13・15がある。14の底面にアルミナ砂が付着し、16の底部には布目圧痕が見られる。

陶器：水注類 [図 49-17～24]

17～24は土瓶である。17～19は窄まる頸部の隠元形土瓶である。器壁に轆轤目がつき、鉄砲口の背面に茶漉し孔を開ける。口唇部より外面にかけて白斑が浮き出る青緑軸を施軸する。20～21・24は盃盤玉形土瓶である。20は内口縁から外面にかけて黄軸を施軸し、肩部に鉄絵文様を施す。21は土瓶底部で、腰部以下を回転削りで整形する。24は内口縁から外面にかけて青緑軸を施軸し、肩部にアーチ形の耳を貼り付ける。23は口縁部分が直立して肩部に段をもつ。内外面に灰軸を施軸し、蓋受け部分を拭き取る。22は土瓶用の落とし蓋である。外面に青緑軸を施軸し、釉溜りが蛇ノ目状になる。

陶器：鍋類 [図 50-1～6]

1～6は行平である。1～3は行平の蓋である。1・2は内外面に来待軸を施軸し、口唇部を拭き取り、内面を重ね焼きに蛇ノ目軸剥ぎする。3は外面に来待軸を施軸し、腰部を蛇ノ目状に塗りわけける。4～6は丸形行平である。内外面に来待軸を施軸し、蓋受け部分は無軸である。5は注ぎ



第49図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図7 (S=1/3)

口が貼り付けられる。胎土は薄褐色を呈した粗い粘土を使用する。6の肩部に筒状の横手がつく。胎土は灰褐色を呈した緻密な粘土を使用する。

陶器：蓋類 [図 50-7～8]

7～8は蓋である。7は橋摘みがつく蓋物の丸形蓋である。内外面に黄軸を施軸するが、付着した別固体から来待釉が流れ出る。胎土は淡褐色を呈した緻密な粘土を使用する。8は陶器素地の蓋である。外面を回転削りて整形し、口縁外周に浅い段をもつ。胎土は赤褐色の緻密な軽い粘土を使用する。急須ないし蓋物用の蓋と思われる。

陶器：不明 [図 50-9]

9は蓋物ないし鉢の把手と思われる。黄軸を施軸するが、付着した別固体から来待釉が流れ出す。胎土は灰褐色を呈する緻密な粘土を使用する。

土器：鉢類 [図 50-10～13]

10は平形片口で、口唇部は内側に張り出している。外面は回転削りて整形する。口縁を切り込んで注口を貼り付ける。胎土は灰白色を呈した緻密な粘土を使用する。11・12は七輪のサナである。11は円盤に灰落とし孔が開く。表面は回転ナデ、側面は回転削りて整形する。12は受けのつく鉢形サナである。轆轤で成形され、底面に回転糸切痕を伴う。胎土は淡褐色を呈した緻密な粘土を使用する。13は筒形を呈する火鉢ないし焔炉の底部で、二重底を貼り付けている。底部側面に熱逃しの孔を開ける。胎土は褐色を呈し、長石を含む粒子の粗い粘土を使用する。

土器：壺類 [図 50-14～17]

図 50-14～17は火消壺の蓋と身である。14は落とし蓋で、口唇部が鈎状に張り出し、底部外周を面取りする。胎土は灰白色を呈した緻密な粘土を使用する。全体的に器壁を厚く作る。15～17は火消壺である。15はやや肩が張り口縁が直立する。内外面は回転ナデで整形する。16は卵形の器壁に口縁が直立する。厚い器壁には、紐作りの継ぎ目と整形の絞りを伴う。17は壺底部で、静止糸切痕を伴う。内外面を回転ナデで整形する。

土器：鍋類 [図 51-1～3]

1～3は丸底に器壁が直立する焙烙である。口唇部は内側に張り出る。粘土板を二つ折りにした壁面に型作りの底部を貼り付け、接合面の腰部を面取りする。胎土は1・2が灰白色で長石を少量含む、3は灰褐色の長石を含む粗い粘土を使用する。

土器：蓋類 [図 51-4～6]

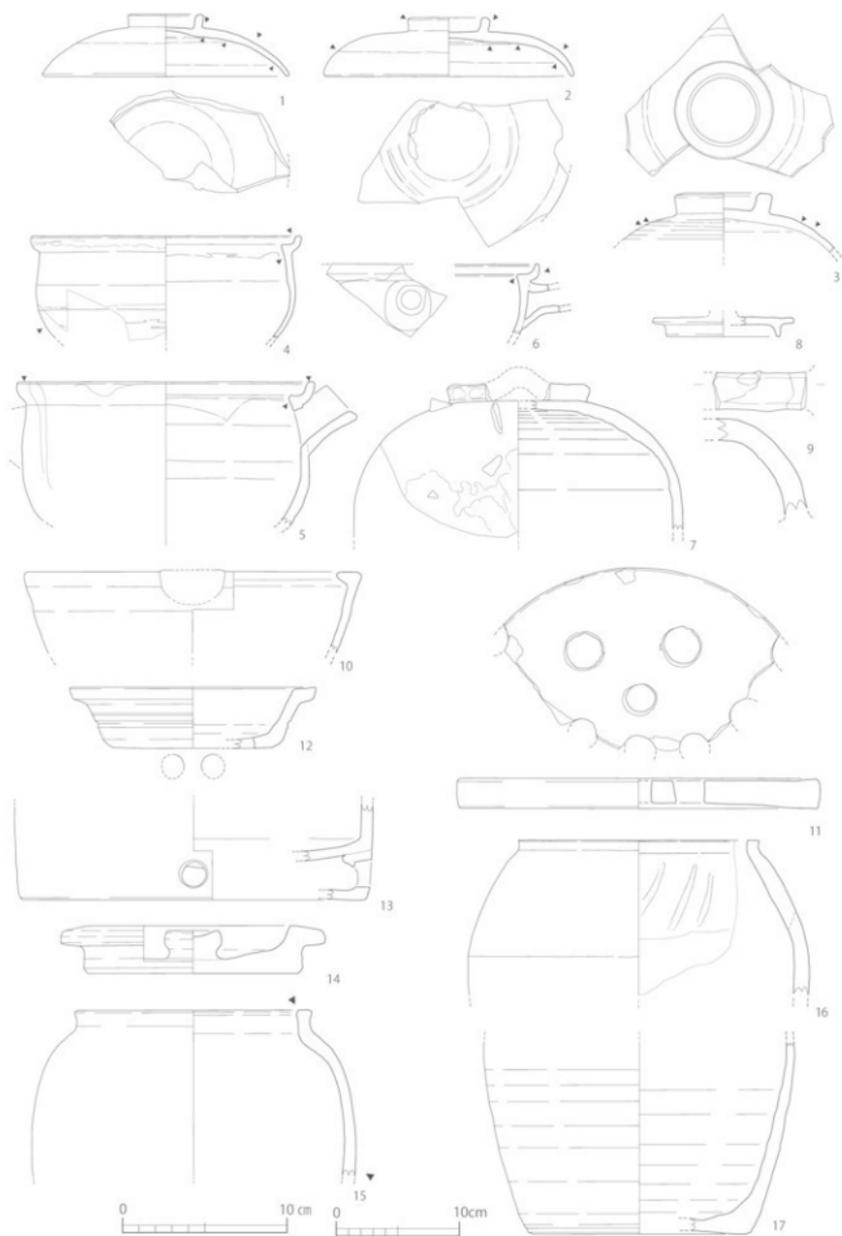
4～6は蓋である。4は被せ蓋と思われる。胎土は薄褐色を呈して長石を少量含む。火鉢底部の可能性もある。5は輪摘みが貼り付けられる。胎土は淡橙色できめ細かな粘土を使用する。6は平形蓋で輪摘みを貼り付ける。摘み内に判読不明の線刻文字が記される。胎土は淡褐色を呈し、長石を含む粗い粘土を使用する。

土製品：器台類 [図 51-7]

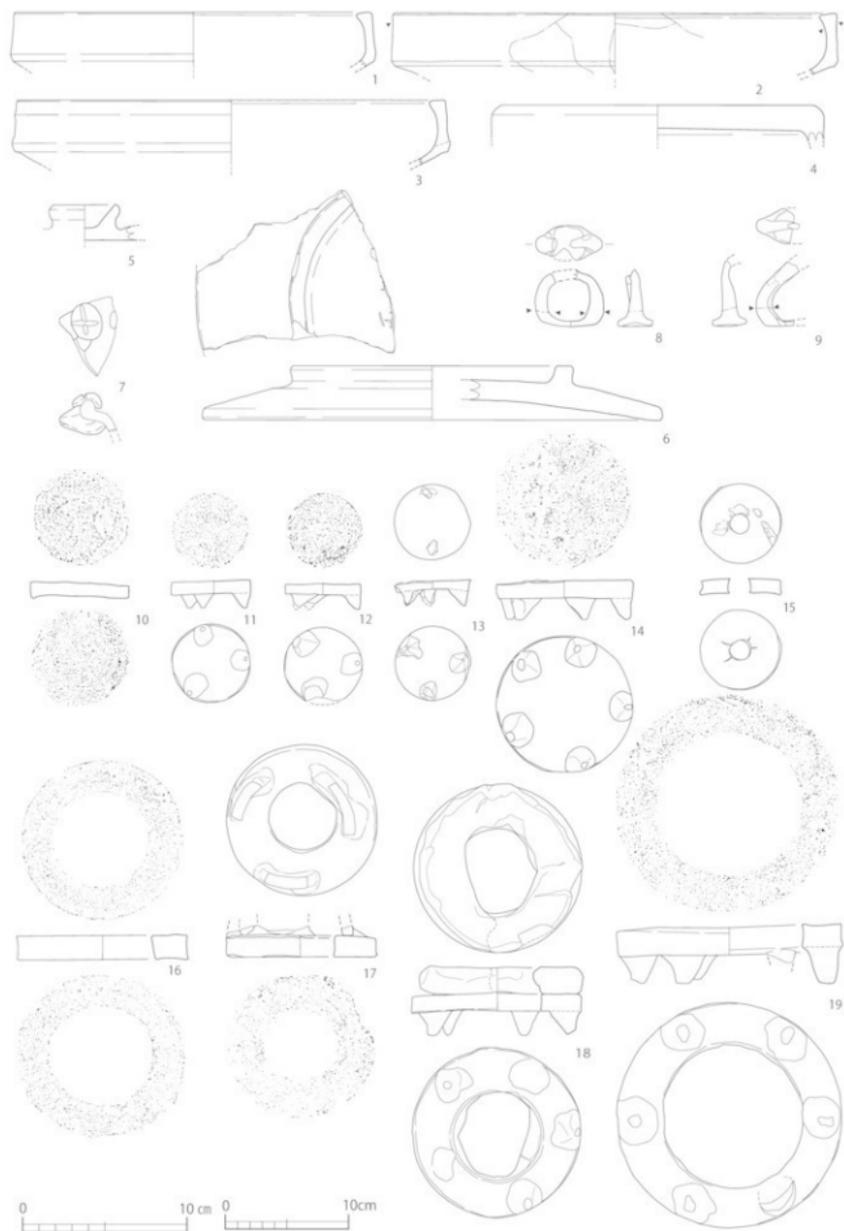
7は五徳である。内口縁に突起状の内耳がつき、その上面に「×」印のある粘土を貼り付ける。胎土は灰白色を呈した長石を少量含む粘土を使用する。

窯道具：テストピース [図 51-8～9]

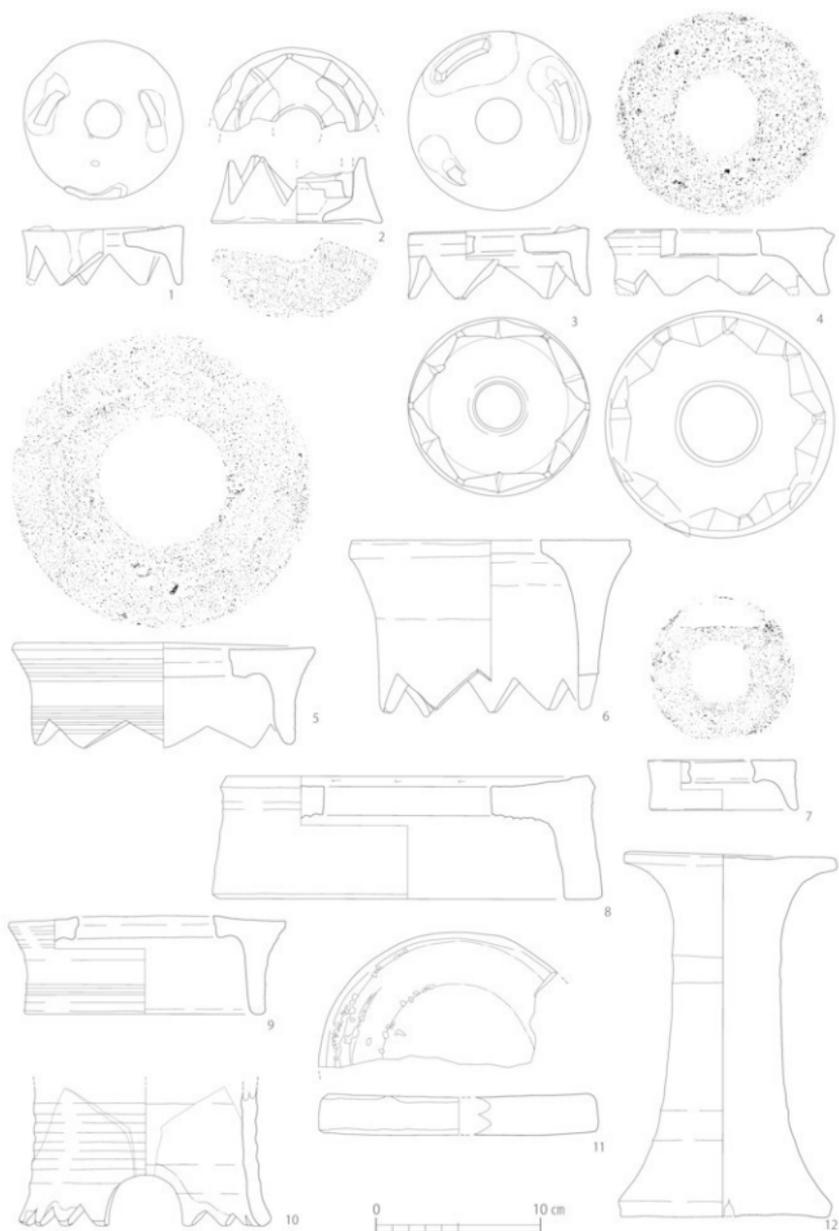
8～9はテストピース（試片）である。製品と一緒に窯詰めし、焼成具合をみるために窯壁側に開けた火見孔や差木孔から引き出す。鉄箸などで引っ掛けられるように全体はリング状を呈する。



第50図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図8 (S=1/3、13~17S=1/4)



第51図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図9 (1~7S=1/4、S=1/3)



第 52 図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 10 (S=1/3)

粘土紐を輪状に結び接地面を指で押す。上半分に灰釉を施軸する。胎土は8は灰白色、9は淡橙色を呈した緻密な粘土を使用する。

窯道具：焼成台 [図 51-10～図 52-12]

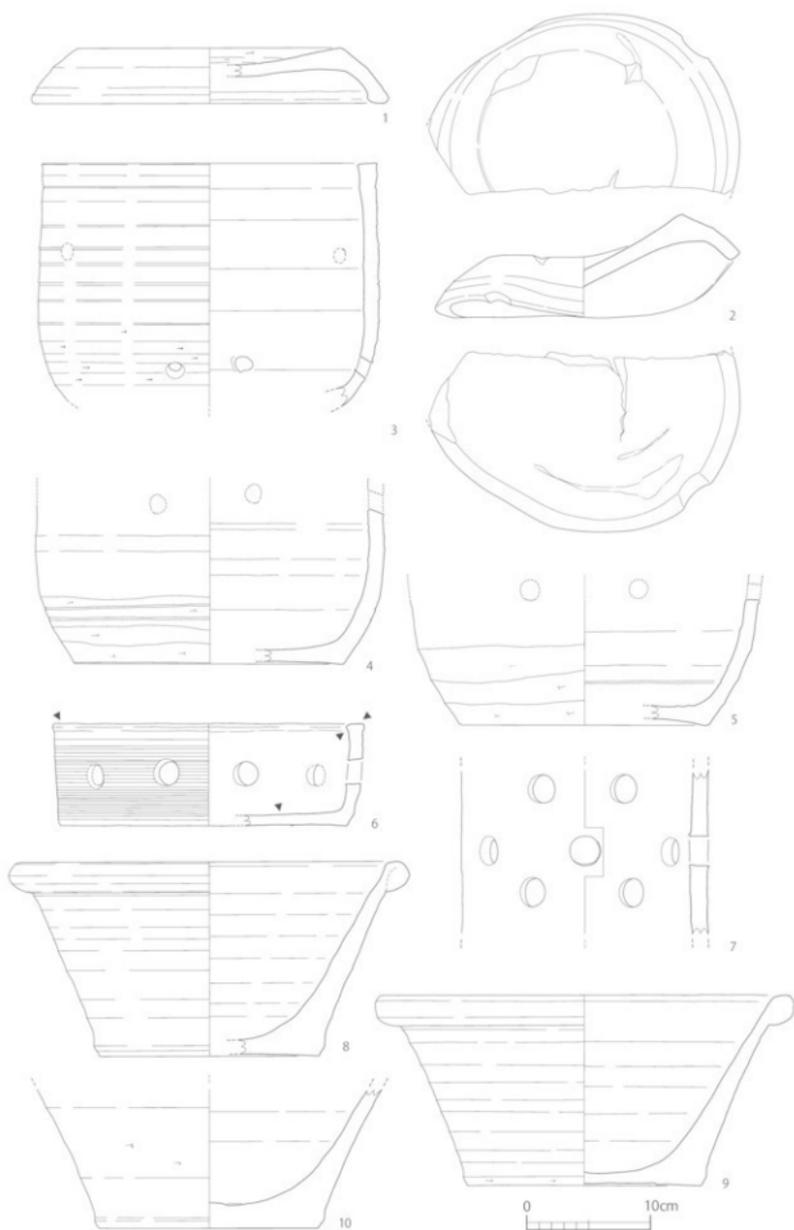
図 51-10 は板トチンや叩きハマと呼ばれる円盤状の小型焼成台である。径 6.0cm を計測し、上下面に回転糸切痕を伴う。図 51-11～14 は円盤状の焼成台に三角錐の足を貼り付けたもので、足付板トチンや足付ハマと呼ばれる。上下面に回転糸切痕を伴う。11～13 は径 4.4～4.7cm で3足、14 は径 8.2cm で5足である。12～14 に来待軸が付着する。図 51-15～17 は円盤状粘土板の中央を丸く抜いたもので、輪トチンと呼ばれる。大きさは大・中・小にわかれ、上下面に回転糸切痕を伴う。16 の内径は 10 とほぼ同じ大きさで、輪トチンから抜いた円盤状粘土板が板トチンになるものと思われる。15 に来待軸が付着し、17 には青緑釉の植木鉢の高台が付着する。図 51-18～19 は輪トチンに三角錐の足を貼り付けたもので足付輪トチンと呼ばれる。上下面に回転糸切痕を伴う。18 は上面に輪状の粘土紐(ヨリ土)を重ねており、接合部分に青緑釉が付着する。布志名焼ではこうした輪トチンを 1990 年代後半まで使用していたとされる。図 52-1～10 は轆轤成形された筒トチンである。石見焼では「ハリ」と呼ばれる。いずれも上面が開孔し、大きさや形状にバリエーションがある。1～6・10 は接地面が山切り足である。1～3 はほぼ同形で、上面に左回りの回転糸切痕を伴う。1・3 は上面に青緑釉を施軸した植木鉢の高台痕を伴う。2 は内面に植木鉢を窯詰めしている。4 は足と肩部がやや突き出ており、二条の突線が入る。上面にアルミナ砂、接地面に来待軸が付着する。5 は天板にむけて広がる形状を呈し、側面に筋目状の回転削り痕を伴う。6 は深目の筒形を呈する。天板にむけて広がる側面は、櫛目状の工具で整形する。10 は深目の筒形を呈し、山切り足をさらに半円形に切り込む。来待軸の上に白化粧土が付着しており、本来の施軸順とは異なることから窯道具であることがわかる。7～9 は輪高台がつく焼成台で、大きさは大・中・小がある。7 はやや小振りで、上面に左回りの回転糸切痕を伴う。8 は底部が台形状に広がり上端を面取りする。天板には静止糸切痕を伴い、内面を回転削りで整形する。9 は天板にむけて広がり、側面は櫛目状の工具で整形する。上面は平滑に仕上げられる。図 52-11 は厚手円盤の焼成台である。上面に搦鉢大の製品を置いた窯詰め痕跡を伴う。灰釉・来待軸・青緑釉の飛沫が付着する。図 52-12 は I 字形を呈する焼成台でトチンと呼ばれる。表面は回転ナデで整形する。破断面に来待軸が流れ込む。

窯道具：匣鉢 [図 53-1～7]

1～2 は台形の被せ蓋で匣鉢蓋となる。2 の口縁端部に半月状の抉りが入る。外面を回転削り、内面を回転ナデで整形する。2 の内面に 2 条の口縁痕(灰軸)が付着し、火鉢(図 47-11)などを窯詰めしたと思われる。図 53-3～5 は筒丸形匣鉢である。粘土紐を積み上げて成形し、腰部から底部にかけて回転削りで整形する。腰部と器壁に径 1.5cm 大の通炎孔を開ける。図 53-6 は浅い円筒状の匣鉢である。直立する側面は櫛目状の工具で整形し、径 2.1cm 大の通炎孔を開ける。胎土は灰褐色を呈し、緻密な粘土を硬く焼き締めている。口唇部と見込みに剝離材として白化粧土を塗る。7 は円筒状の器壁に径 2.3cm 大の通炎孔を開ける。側面は櫛目状の工具で整形する。

窯道具：土盛鉢 [図 53-8～10]

8～10 は土盛鉢である。持ち運びしやすいようにしっかりとした玉縁口縁がつく。底部の端部を面取りし、9 の底面には静止糸切痕を伴う。



第 53 図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 11 (S=1/4)

瓦：軒棧瓦 [図 54-1 ~ 3、図 34-2・3]

1 ~ 3 は長方形平面の左側に棧をつくる軒棧瓦である。瓦当文様は丸に十字の中心飾りに二葉の唐草が左右に広がる。側面上端は面取りされ、棧の裏面に木型痕を伴う。外面に來待軸を施釉し、無釉の葺足に釘穴を 2 ヲ所開ける。

瓦：棧瓦 [図 54-4 ~ 5、図 34-1]

図 54-4 ~ 5 は長方形平面の左側に棧をつくる棧瓦である。側面上端は面取りする。葺足部分を残した外面に來待軸を施釉し、図 54-4 ~ 5 は赤茶色に、図 34-1 は黒色に発色する。裏面に微かなコピキ痕を伴う。図 54-5 は窯詰めした棧瓦が熔着したものである。本来は直立していたものが、焼成中に將棋倒しになっている。瓦は前面を上にし、間にハセを挟んで 14 枚を並べる。ハセの上端にもモミツチが付着しており、もう一段瓦を積み上げていたことがわかる。

瓦：熨斗瓦 [図 54-6]

6 は長方形平面の熨斗瓦である。外面に來待軸を施釉し黒色に発色する。無釉の葺足に釘穴を 1 ヲ所開ける。裏面に微かなコピキ痕と布目痕を伴う。

瓦：軒丸瓦 [図 54-7・9・10]

7・9・10 は軒丸瓦で、瓦当文様は連珠三巴文である。外面に來待軸を施釉し、7・10 は赤茶色に、9 は黒色に発色する。7 の裏面は木型痕を伴い、無釉の葺足に釘穴を 2 ヲ所開ける。9・10 は瓦当下面に顎がつくが、接合部分を櫛目状の工具で均している。

瓦：棟止瓦・隅鬼（須山） [図 55-1 ~ 3]

1 ~ 2 は鳥休みがつく棟止瓦で、雲形の瓦当面に連珠三巴文を押す。軒丸瓦に相似した瓦范を使用する。外面に來待軸を施釉する。1 の雁振上面に鳥休みが剥落した痕が残り、無釉の葺足に釘穴を 2 ヲ所開ける。2 は接合部分を補修した痕があり、瓦当面裏に微かなコピキ痕を伴う。3 は覆輪雲が付く隅鬼（須山）である。押型で成形した瓦当文様と側壁と貼り合わせている。裏面に固定用の耳を伴う。外面に來待軸を施釉する。

瓦：雁振瓦 [図 55-5]

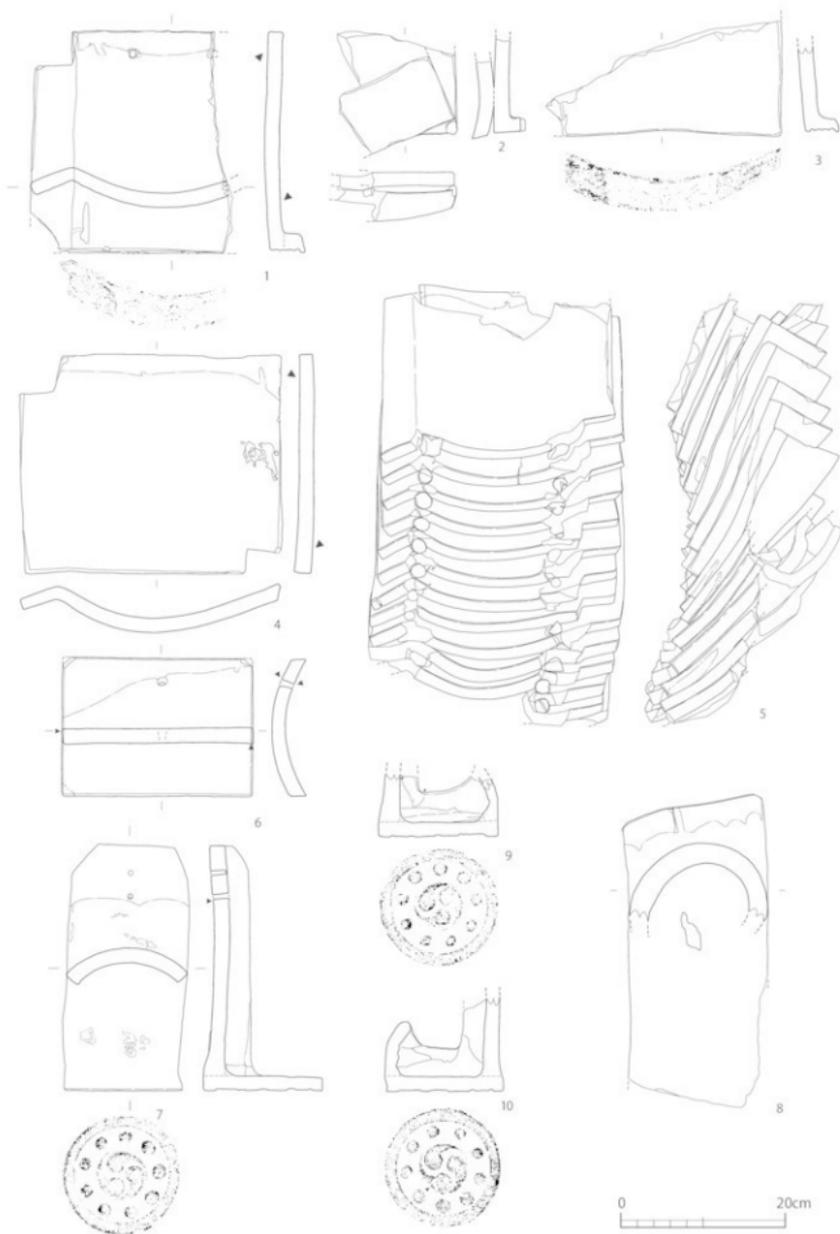
5 は横断面が緩い山形となる雁振瓦で、雨水を防ぐ棧が付く。中央に釘穴を 1 ヲ所開ける。裏面に微かなコピキ痕と木型痕を伴い、棧の裏面には布目圧痕が認められる。木型は桶のような結物である。葺足部分を残した外面に赤茶色を呈する來待軸を施釉する。

瓦：煙突瓦 [図 55-6]

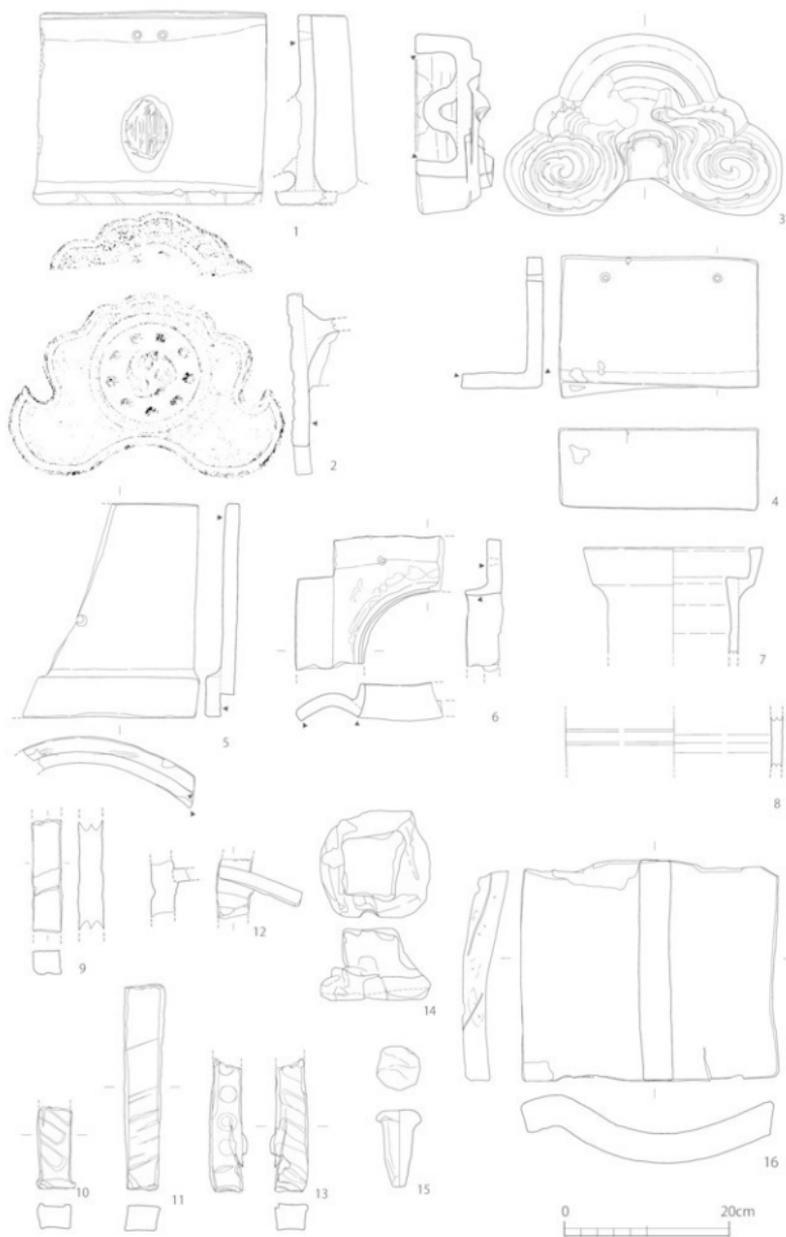
6 は棧瓦の中央に煙突穴を抜いたものである。煙突穴は円形で上向きの返しがつく。煙突の径は約 20cm 大である。葺足部分を残した外面に赤茶色を呈する來待軸を施釉する。無釉の葺足には釘穴を 1 ヲ所開ける。

陶製品：土管 [図 54-8・図 55-7 ~ 8]

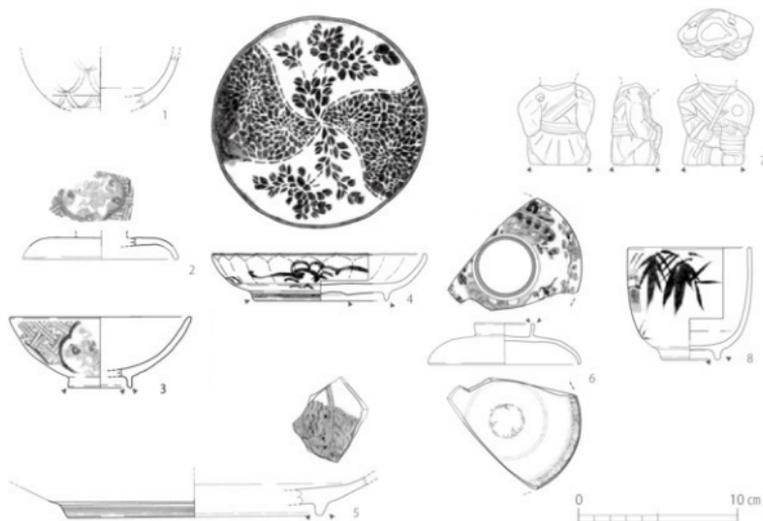
図 54-8 および図 55-7 ~ 8 は土管である。図 54-8 はタタラから切り出された粘土板を曲げて胴管部分を貼り合わせる。接統足を残した内外面に來待軸を施釉する。図 55-7 は土管の素地で、紐作りで成形し回転ナデで整形する。接統受けは貼り付けている。胴管部分の径は約 13.2cm である。図 55-8 は土管の胴部である。紐作り成形し回転ナデで整形する。内外面に來待軸を施釉するが発色は悪い。胴管部分の径は約 25.8cm である。



第54図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図12 (S=1/6)



第55図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図13 (S=1/6)



第 56 図 城ヶ谷遺跡物原出土遺物実測図 14 (S=1/3)

窯道具：モミツチ [図 55-9 ~ 14]

9 ~ 13 は長方体の形状を呈するモミツチである。幅 3 ~ 4cm、厚さ 3 ~ 2cm を計測し、長さは破損しており不明である。粘土板から切り出されたもので、表面に多数の釉を塗り、瓦の窯詰め痕が規則的に並んでいる。13 の裏面にはハセ痕があり、上下二段組された瓦の間に挟まれていた。14 はモミツチの一種と思われ、表面に多数の釉を塗している。手捏ねで成形する。

窯道具：ハセ [図 55-15]

15 は瓦と瓦の間に挟んで熔着を防ぐ窯道具である (図 54-5)。手捏ねで円錐ピン形に成形する。

窯道具：火立て (火盾) [図 55-16]

16 は棧瓦の形に似た窯道具である。厚みは瓦の約 2 倍で重量がある。焚庭前に置いて窯詰めされた製品が直接火焰を受けるのを防ぐ。焼成室内の熱効率を高める効果がある。

共伴遺物 [図 56]

1 ~ 7 は磁器である。1 は丸形碗である。呉須の染付で外面に二重網目文を描く。推定される産地は肥前系 (波佐見) で、年代観は 18 世紀後半代である。2 と 3 は平形碗とその蓋である。化学コバルトの銅版刷で、外面に綾紗地の窓絵鶴文を施文する。推定される産地は佐賀県有田で、年代観は 19 世紀末葉から 20 世紀前葉である。4 は蛇ノ目凹型高台をもつ輪花形皿である。化学コバルトの型紙刷で、見込みに牡丹風の草花文を施文する。推定される産地は佐賀県有田で、年代観は 19 世紀第 4 四半期である。5 は輪花形と思われる大皿である。呉須の染付で見込みに松文を描く。推定される産地は肥前系で、年代観は 1850 ~ 60 年代である。6 は望料形碗の蓋である。呉須の染付で外面に梅・太胡石・花彫、内面に環状松竹梅文、内口縁に雷文を描く。見込みに焼継印「イタ□」が印される。推定される産地は肥前系で、年代観は 18 世紀末葉 ~ 19 世紀前葉である。7

は白磁の兵隊形水滴である。押型成形し、前後面を貼り合わせる。背面に二孔開ける。推定される産地は多治見・瀬戸で、年代観は20世紀前半である。8は陶製の筒丸形湯呑碗である。黒軸で外面に竹笹文を描く。推定される年代は20世紀第2四半期である。

SS2 出土遺物 [図 57]

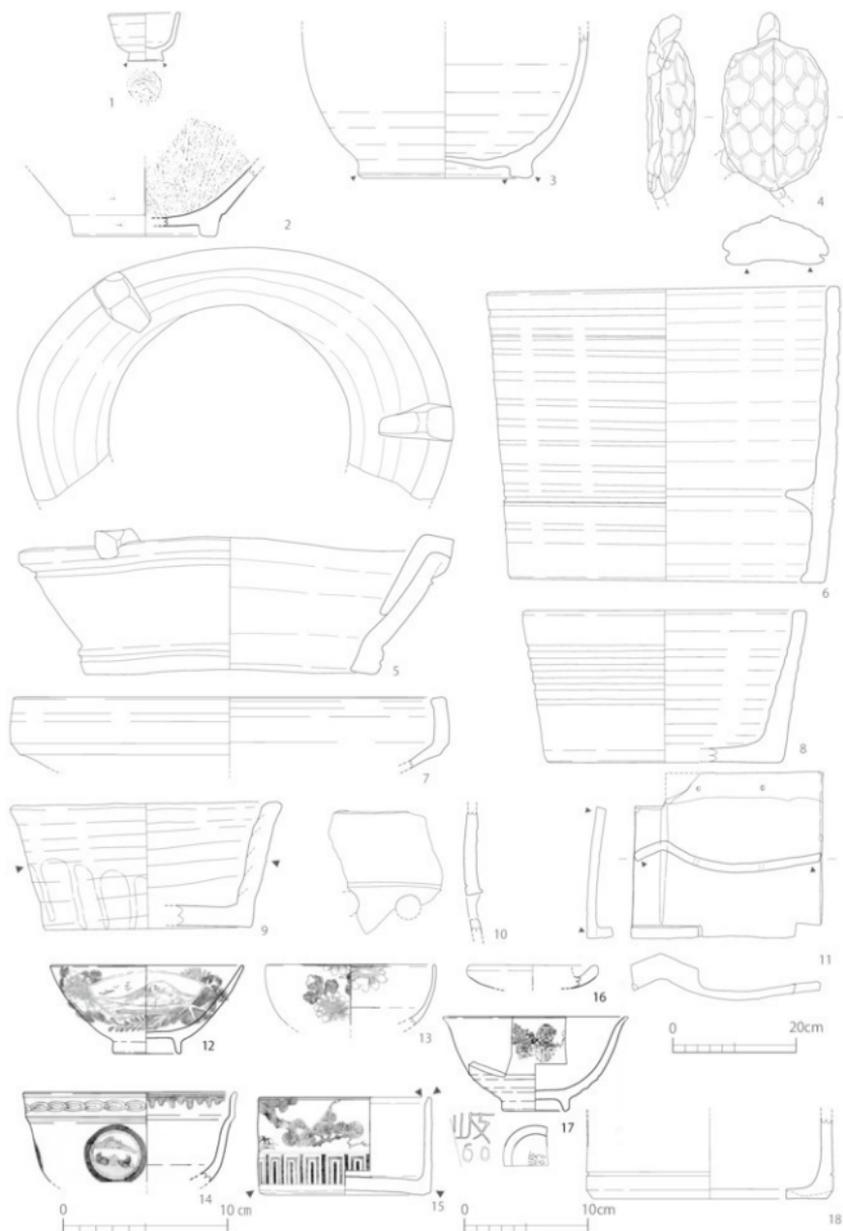
SS2は乾燥場と推定されるSBO1が立地する加工段である。遺物は窯跡に関連した生産遺物(1～11)と共存する消費遺物(12～18)に分けられる。

1は陶器の丸形小杯である。高台は左回りの回転糸切痕を伴い、腰部以下を回転削りで整形する。内面から高台脇にかけて透明釉を施軸するが、火力が強く大部分が蒸発している。2は揉鉢の陶器素地である。高台は輪高台で、擦目は内面に施した後に、見込み部分から放射状に追加する。3は陶器の辣蕪形徳利である。内外面に灰釉を施軸し、畳付部分を釉剥ぎする。高台端部を面取りする。4は陶製の亀形置物で、庭池用と思われる。手捏ね成形した甲羅や手足を貼り付ける。釘彫りで亀甲を表し、外面に來待軸を施軸する。5は土製の五徳である。円錐台形の器壁に紐状の耳を貼り付ける。玉縁口縁の下と高台脇に沈線を入れる。6は筒形の七輪である。外面に浅手の条線、口縁下と腰部に沈線を入れる。内面にサナ受けがつく。7は底丸形焙烙である。器壁断面に粘土板を折り曲げて成形した痕が明瞭に残る。8～9は窯道具の土盛鉢である。8は土器製で底部は静止糸切痕を伴う。9は筒形の陶製で、内面から腰部にかけて來待軸を施軸する。10は筒丸形の匣鉢である。11は雪止付杖瓦である。左側の棧に雪止の突起がつく。外面に來待軸を施軸し、無軸の畳足部分に釘穴を二ヶ所開ける。

12～16は磁器の共存遺物である。12は平形碗である。化学コバルトの銅版刷で、扇窓の三保松原を施文する。推定される年代は20世紀前半代である。13は半球形碗である。化学コバルトの印刷で内外面に菊花文を施文する。推定される年代は20世紀第2四半期である。14は折縁口縁の鉢である。化学コバルトの染付で外面に山水文と内口縁に雨降文を描き、クロムで口縁脇に渦巻文を描く。推定される産地は佐賀県有田で、年代観は20世紀前半代である。15は半筒形蓋物である。化学コバルトの銅版刷で、胴部に松竹梅文と雷文を施文する。推定される産地は佐賀県有田で、年代観は20世紀第1四半期である。段重になる可能性がある。16は磁器製の磚子である。17は陶器の端反形碗である。器壁に轆轤目があり、手書きの鉄絵とコバルト印刷の蕪蔓文を施文する。高台内にエンボスの生産者統制番号「岐□60」を捺す。産地は岐阜県多治見で、推定される年代観は1941～1946年頃である。18は在地系の瓦質土器の火鉢ないし焜炉である。

SD02 出土遺物 [図 58-1～2]

1～2は埋設の下水管として使われていた。1は窯道具のヌケである。円筒形の焼成台で、天板を破孔して下水管に転用する。天板に剝離材として白化粧土を塗り、胴部上端に通気孔を1カ所あける。胴部は円筒を3段貼り繋いで成形する。器壁は櫛目状の工具で整形し、山傷を來待軸で補修した痕が残る。乾燥中の生地に亀裂が入ったものと思われる。2は陶製土管である。胴管部分は2本の円筒を貼り繋ぎ、一方の口に接続受けを付ける。胴管部分の径は24.1cmである。内外面に來待軸を施軸する。



第57図 城ヶ谷遺跡S S 2出土遺物実測図 (S=1/3、2・5～10・15・18:S=1/4、11:S=1/8)

SK03 出土遺物 [図 58-3 ~ 4]

3 は窯道具の匣鉢である。筒形の器壁に円孔を開ける。4 は椀である。

SK03 出土遺物 [図 58-5 ~ 6]

5 は窯道具のハセで、ネジ状の沈線が入る。6 は外面青磁の輪花形鉢である。轆轤型打成形で陽刻文様を施す。推定される産地は多治見・瀬戸で、年代観は 20 世紀前半代である。

SB01 出土遺物 [図 58-7]

7 は石臼(下臼)である。材質は砂岩と思われ、六分画して副溝が 4 ~ 8 本彫られる。SB01 に付随した乾燥台に転用する。

水箴場採取遺物 [図 58-8 ~ 9]

8 ~ 9 は鉄製品で、土練機など動力機の部品。8 はシャフト受け、9 は動輪である。

SD01 出土遺物 [図 58-10 ~ 15]

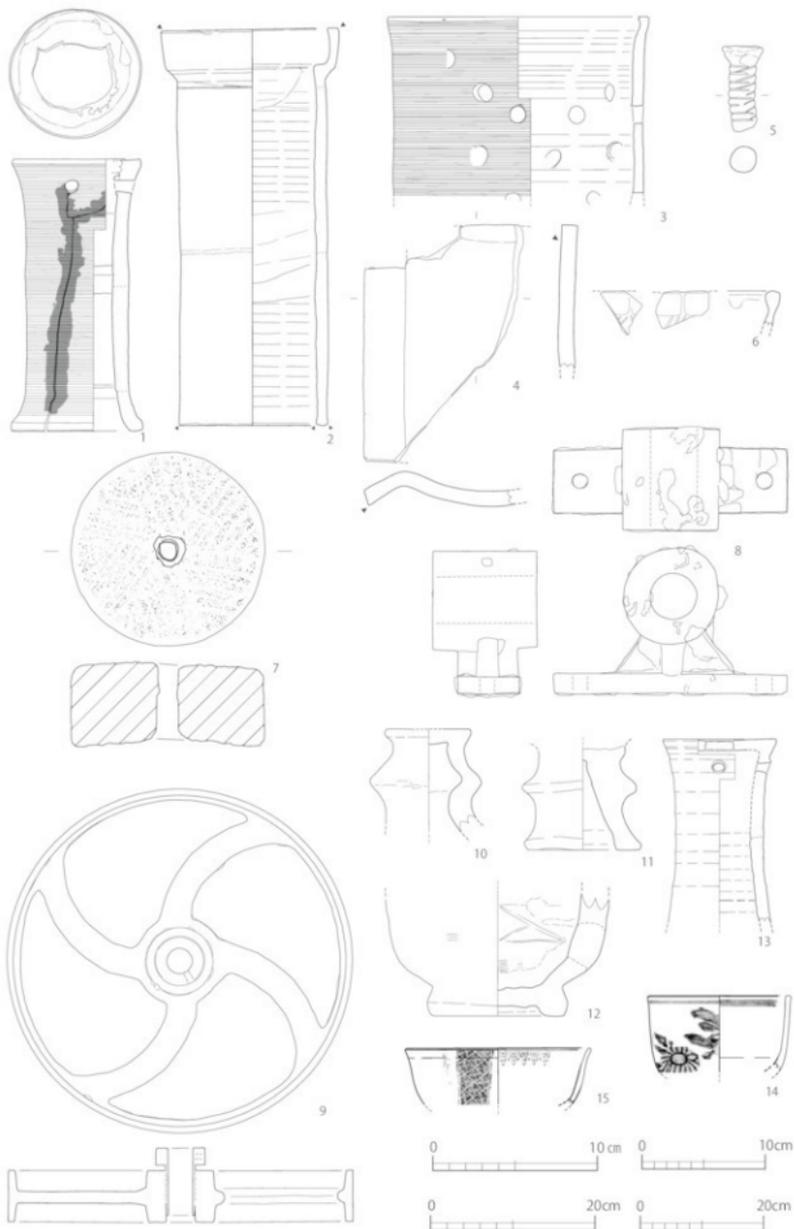
SD01 はモミツチで埋められていたが、他の遺物も少量出土している。10 ~ 12 は窯道具と思われるが用途は不明である。13 はヌケである。円筒形の焼成台で、天板と胴部上端に通気孔を開ける。胴部は円筒を貼り継いだものである。14 ~ 15 は溝底部から出土した磁器である。14 は筒丸形碗で、化学コバルトの染付で外面に秋草文を描く。推定される産地は佐賀県有田で、年代観は 1870 年代以降である。15 は端反形碗である。化学コバルトの型紙刷で外面によるけ縞の四方禪文と「壽」字文、内口縁に環珞文を施文する。推定される産地は佐賀県有田で、年代観は 19 世紀第 4 四半期である。

SD10 出土遺物 [図 62-1]

1 は白磁皿である。高台内は放射状に鉋削り痕が認められる。推定される産地は中国で、年代観は 15 世紀末から 16 世紀前半代である。

南東区包含層出土遺物 [図 62-2 ~ 5]

2 は青磁碗である。見込みに線描き文様を伴う。推定される産地は中国の龍泉窯で、年代観は 15 世紀代である。3 ~ 4 は青花皿で、高台内は放射状に鉋削り痕が認められる。3 は見込みに山水風の文様が描かれ、高台内に判読不明の角銘を伴う。4 は見込みに花樹石風の文様、外面に唐草文を描く。いずれも推定される産地は中国の景德鎮で、年代観は 16 世紀代である。5 は妬器の搦鉢である。内面に 5 条以上を単位とする擦目を施す。推定される産地は備前焼で、年代観は 15 世紀中頃から 16 世紀初頭である。6 は陶器の搦鉢である。内面に 8 条以上を単位とする擦目を施し、銹釉を施釉する。推定される産地は須佐焼で、年代観は 17 世紀後半から 18 世紀前半代である。



第58図 城ヶ谷遺跡SD01・02、SK01・03調査区外出土遺物実測図
 (1・2・7・9・13S=1/8、3・4S=1/6、5・6・10・11・14・15S=1/3、8・12S=1/4)

第6節 遺構外出土遺物

包含層からは須恵器、土師器が出土している。59 図 1 は口径 12cm を測る蓋環の身で、立ち上がりはやや内傾しているが、高さは 1.3cm あまり。口縁部内側には外傾する面を持つ。全体的に器壁は厚く、外面には回転ケズリが施されている。6 世紀中葉前後のものであろう。

2・3 は蓋の破片である。2 は輪状つまみが付き、器壁はやや厚い。3 はつまみは不明で、天井部の端から内湾して口縁部にいたっている。口縁部は鳥の嘴状を呈する。4～7 は環である。4 は体部がやや内湾している口径 9.4cm あまりの小形品。体部下方から底部にかけてケズリが施され、底部にはタタキのような痕跡が残る。5～7 は体部が外傾しているもので、口縁部は細くて丸い。5・6 は器高が 4cm 前後であるが、7 は逆「ハ」の字形に上方の向かって大きく開き、器高は 5cm あまりになる。

8～11 は高台付きの底部片。8 は環の底部で、内傾した高台は端部に若干の窪みのある外傾した平坦面を持つ。9～11 は底部の内側よりに高台が付くもので、8 より古くなるものである。9 は内傾、11 は湾曲した高台を持つ。12・13 は高環の脚部片。12 は「ハ」の字形に開く短脚。13 は長脚片で、透かしはない。12 は環部下方に 2 本の沈線がある。14 ははそうである。頸部から口縁部に向かって外側に大きく開き、頸部及び肩部に 2 条の沈線が廻る。口頸部の器壁は厚く、頸部から口縁部にかけて明確な段がないことから 7 世紀代のもと思われる。

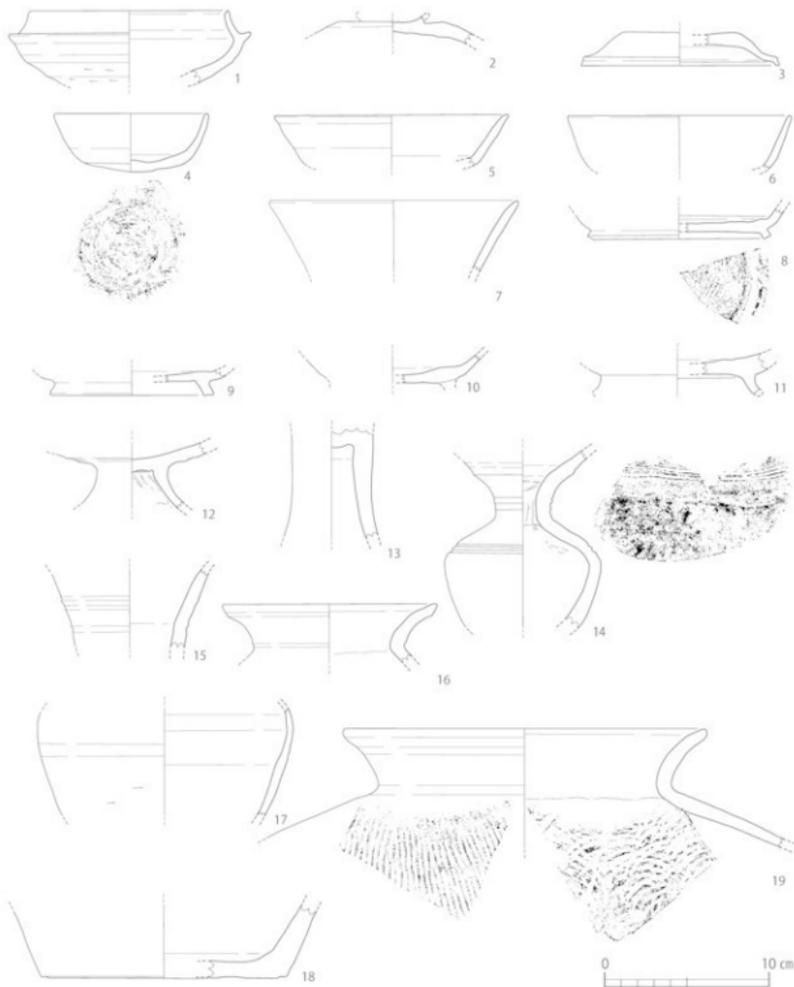
15 は長頸壺の頸部片。わずかに外側に屈曲したところとそこから 1cm あまり上方に沈線が廻る。16 は口径 13cm あまりの壺の口頸部片で、頸部は外側に反りながら開き、口縁部は外傾した面を持つ。その面には 1 本の稜線が廻り、端部はやや丸みのある三角の断面を持つ。17 は壺の胴部片と思われ、上方は内側に湾曲している。18 は底径 15cm あまりの板状工具痕が残る底部片である。19 は口径 21.5cm の肩が大きく張り出した壺で、口頸部は外反し、肩部の内外面にはタタキ痕が残る。

60 図の 1～10 は土師器の甕である。1 は肩部から口縁部にかけて大きく「く」の字形に屈曲している甕。肩部はやや湾曲し、丸みを持つ。肩部内面には横方向のケズリが施され、下方に向かって器壁が薄くなる。2 は「く」の字形の屈曲がゆるく、肩があまり張り出さない。内面はヘラ先状のもので横ナデを行っているため、器壁は比較的均一で厚い。3・4・7 は口頸部が短く外反し、肩がやや張り出すもので、厚手の作りになっている。5 の口縁部は細くとがり、6 はゆるく外反し、胴部が若干内傾する。8～10 は胴部がほぼ垂直に下っているもので、下方に行くにしたがって器壁が薄くなる。口縁部は 8 が細くとがり、9・10 はやや細くて丸い。

11 は口径 12cm あまりの短頸壺である。口縁部は三角状にとがり、肩から胴部は丸い。12 は壺か甕の胴部片。下方に向かって器壁が厚くなる。外面には部分的にハケ目が残る。13 は甕の肩部片。14 は口径 12cm、器高 3cm あまりの環で、口縁部は内湾ぎみにとがっている。

60 図 15～17・61 図 1・2 は甕の把手片である。16 は把手及び下方の胴部が残っている。胴部は内側に丸く下がり、把手が以上に大きい。壺状のものに把手が付いた特殊なものと思われる。3～5 土製支脚片。3 は底部片で、4、5 は 2 本の角状の突起を持つ上部片である。

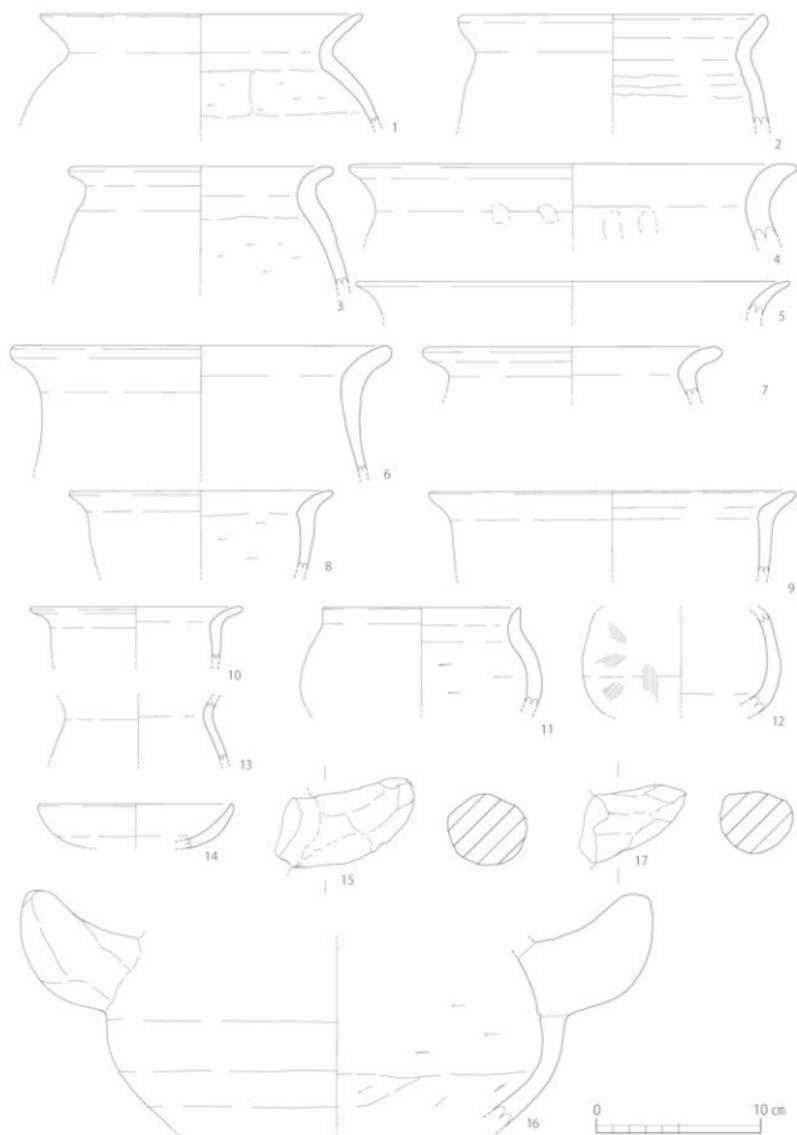
6 は口径 36cm 器高 32.5cm を測る甕である。上方部は外側に反り端部はややとがる。下方はやや内湾し、底は 5cm あまりの厚みを持つ。焚口の上方には庇がある。



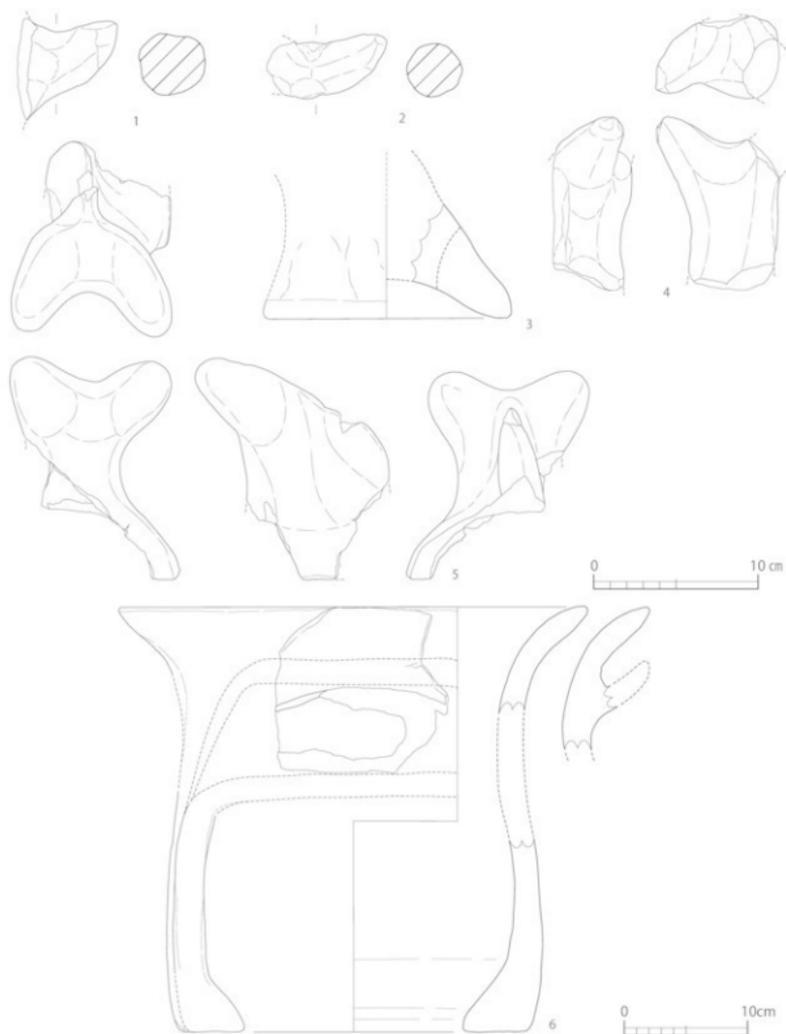
第 59 図 城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物実測図—須恵器 (S=1/3)

包含層出土遺物 | 図 62-2 ~ 5 |

掲載遺物は窯跡 (1 号窯・2 号窯) に関連した生産遺物 (7 ~ 14) と共存する消費遺物 (15 ~ 17) に分けられる。7 は陶器素地の胴丸形甕である。腰部を回転削りて整形し、蛇ノ目高台の脇を面取りする。8・9 は陶器の徳利底部で、辣蕪形と思われる。内外面に灰釉を施釉し、高台畳付部分を釉剥ぎする。10 は陶器の土瓶蓋である。丸摘みを貼り付ける落とし蓋で、外面に緑釉を施釉する。11 は陶器の蓋であり、壺用と思われる。外面に灰釉を施釉し、頂部に甕破片が付着する。12 は行平の把手で、束待釉を施釉する。13 は土製のサナである。押型で成形しており、側壁に布目圧痕



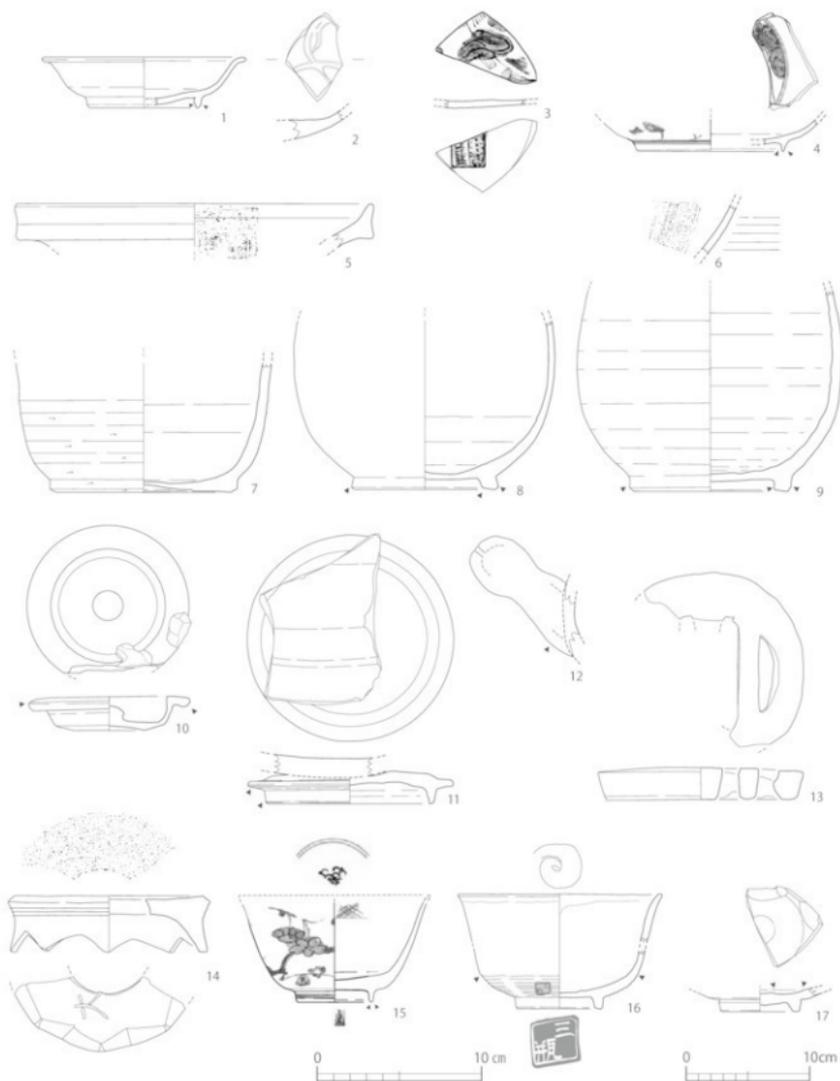
第60図 城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物実測図—土師器1 (S=1/3)



第61図 城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物実測図-土師器2 (S=1/3, 6.5=1/4)

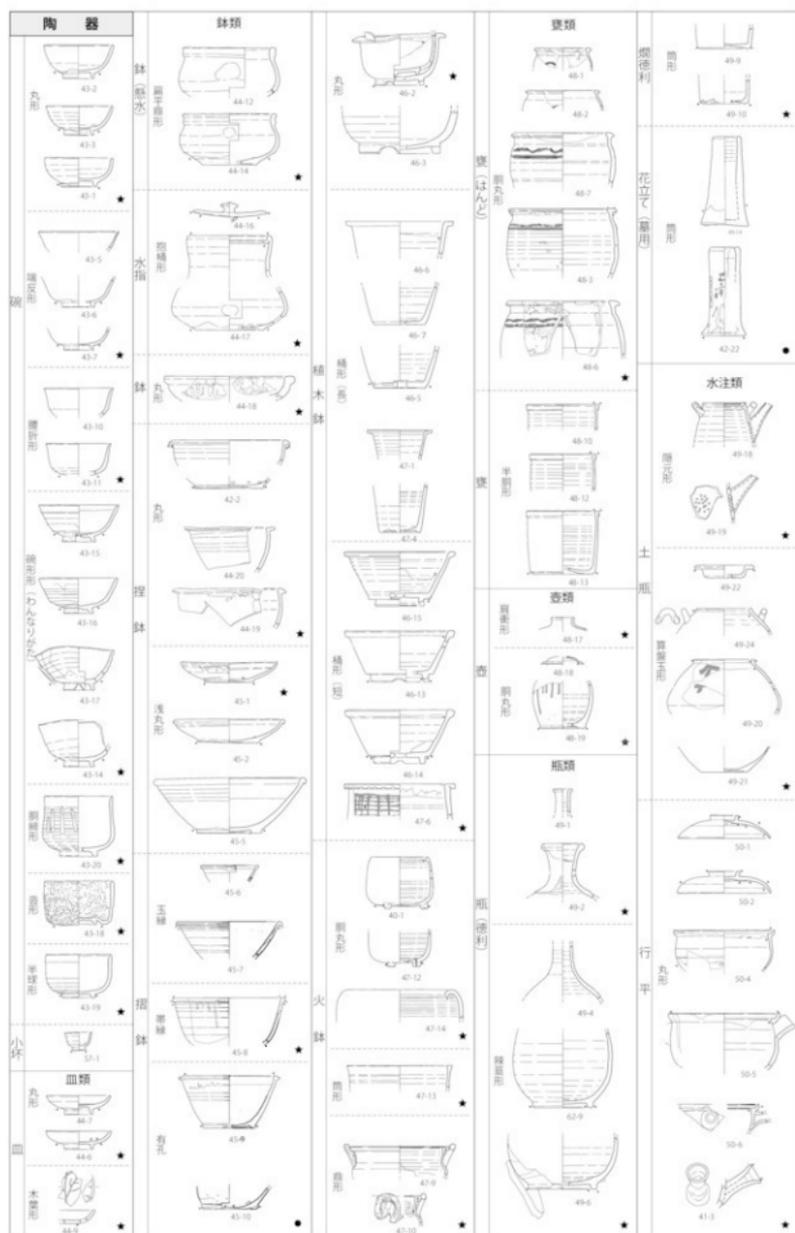
と剥離材の雲母が付着する。上面と側面は削りで整形する。14は筒トチン(ハリ)で、内面に線刻文字「大」が記される。

15は丸形磁器碗である。呉須の染付で外面に梅と雪持笹文、見込みに二重圏線内五弁花、内口縁に格子繫を描く。高台内に二重角内「満福」の銘を伴う。推定される産地は肥前系で、年代観は18世紀前葉である。16は陶器の端反形碗である。内面から腰部にかけて透明釉を施釉し、底部は



第62図 城ヶ谷遺跡 遺構外出土遺物実測図—南西区ほか出土陶磁器 (S=1/3, 5~7:S=1/4)

露胎である。腰部に「三瓶」角印を捺す。推定される産地は在地方系で、年代観は20世紀中葉である。17は陶器の平形皿である。内面に銅緑釉を施軸し、見込みを重ね焼きに蛇ノ目刺ぎする。推定される産地は肥前系で、年代観は17世紀後葉から18世紀前半代である。



第63圖 1、2号窯生産遺物器種別組成一覽(1)

第4章 神谷遺跡

第1節 発掘作業と整理作業の経過

1) 遺跡の位置

神谷遺跡は大田市北東部の久手町波根西に所在する。旧波根湖に南接して中国山地へ続く低丘陵地帯の北端近くに位置し、南北方向にのびる尾根の北側の緩斜面に広がる。

2) 試掘確認調査の概要

試掘確認調査は平成25年10月8日から平成25年11月18日まで実施した。分布調査では、痩せ尾根の頂部と緩斜面を合わせた1,800㎡を要注意箇所とした。この範囲の中で、18箇所ですべり掘削による調査を実施し、範囲東端の2箇所のトレンチ（TR1,TR13）で炭窯の煙道部と窯体、および遺物包含層を確認した。この調査結果から、320㎡について本発掘調査が必要であると判断された。

3) 発掘作業の経過

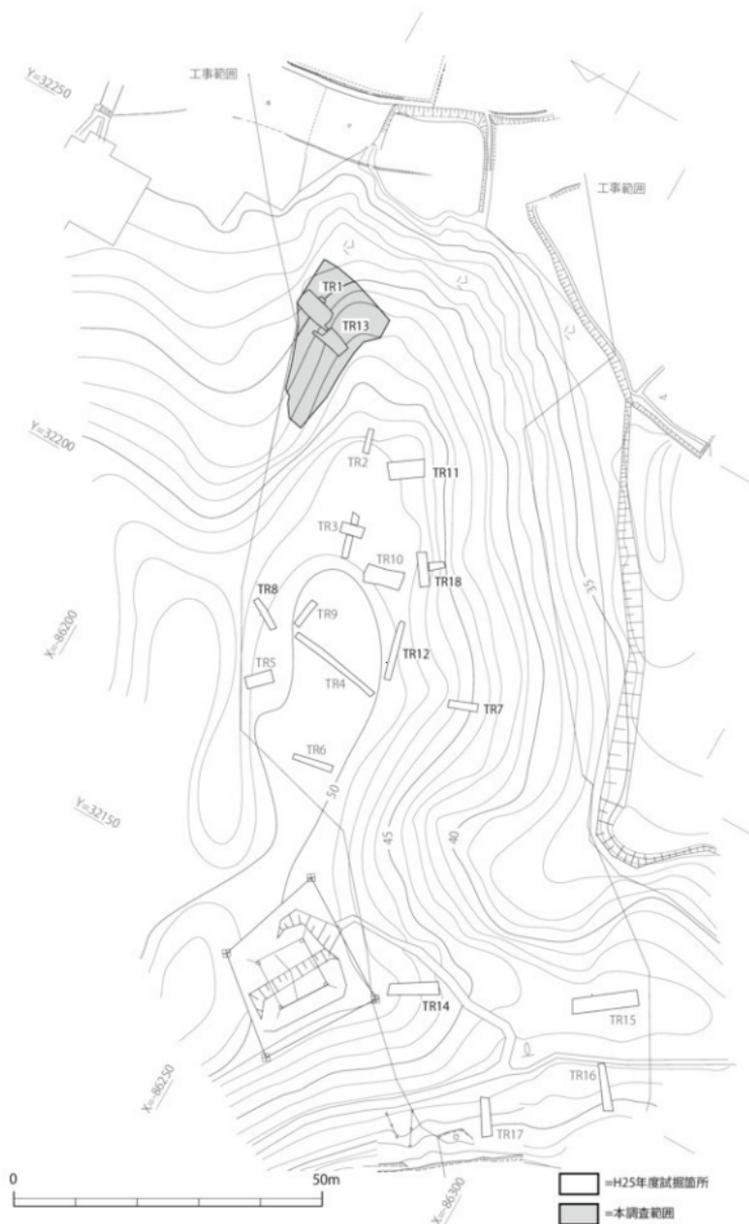
本調査は平成26年5月26日から平成26年8月11日まで実施した。表土掘削を重機で行い、遺構や遺物包含層の掘削は人力で行った。遺物包含層は近代陶磁器と土師器・須恵器が混在する包含層1と、土師器・須恵器のみ出土する下位の包含層2に分かれていた。調査区西半では、包含層と並行して掘削したサブトレンチのセクションから、天井が崩落した状態で包含層下に埋没した横口付き炭窯（1号炭窯）があることが判明した。サブトレンチ観察と並行して包含層下の土を掘り下げた結果、崩落した天井の上から流入した土のラインが検出された。炭窯の底面直上まで掘り下げたところ、わずかに残っていた窯体の立ち上がりが見出された。

この1号炭窯は、試掘調査のTR13で確認されていたものとは別の炭窯である。試掘調査で煙道が確認された炭窯はトレンチから東へのび、1号炭窯の東に位置する（2号炭窯）。TR13では2号炭窯の下位から別の炭窯の窯体を確認されていた。これが3号炭窯であり、1号、2号炭窯の下位に位置している。2,3号炭窯についても1号炭窯と同じく、①サブトレンチにより断面の状況、深さ等を確認、②崩落土のラインを検出して記録、③掘り下げて窯体の残存部分のラインを検出して記録、④窯体の平面・断面の記録、の順で調査を行った。

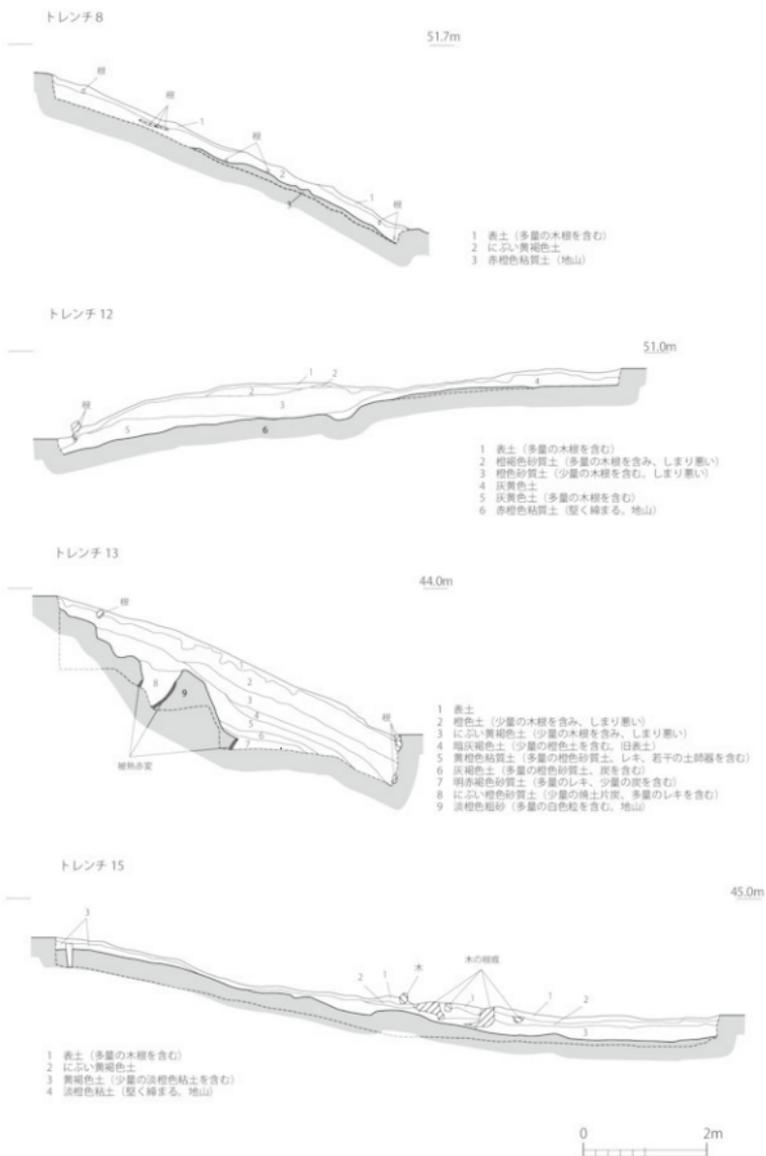
1～3号炭窯の形がわかる状態となった段階で、7月19日に現地説明会を行い、約70名の参加があった。2号炭窯については見学できるように炭を残した状態であったので、見学会終了後に完掘し、実測を行った。また、調査終盤に入って調査区北西端で4号炭窯が検出された。1号炭窯の下位から西へ延び、調査区外へ続いていた。調査区内で検出した部分について完掘し（8月6日）、8月7日全ての調査を終了した。

4) 整理作業の経過

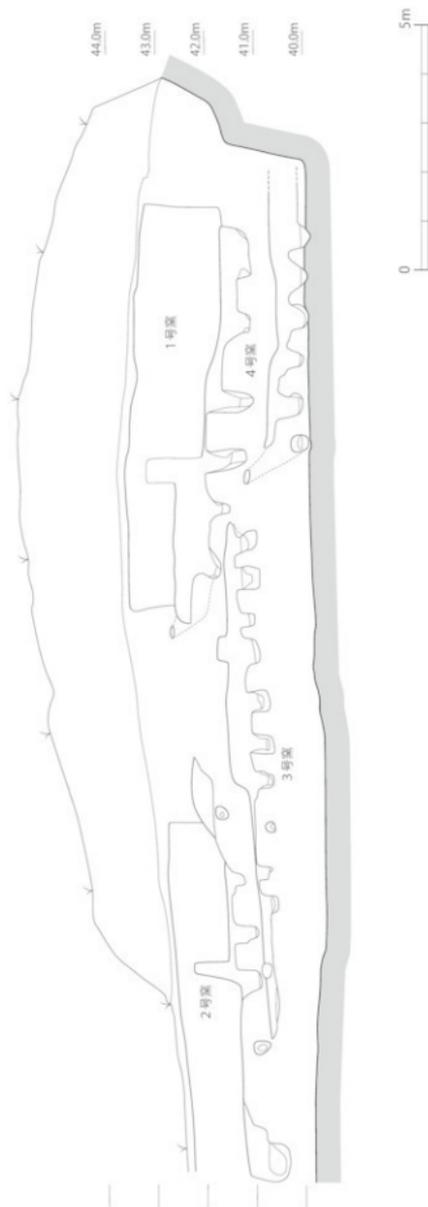
遺物の水洗、注記は発掘作業と並行して行った。遺構図の整理は平成26年度から27年度にかけて行い、遺物実測の大部分は平成27年度に行った。遺物写真撮影は平成27年度に行った。遺構から直接出土した遺物が合計3点のみであった。このため、年代の確定には自然科学的手法を併用する必要があり、炭窯内から採取した木炭を加速器分析研究所に委託して放射性炭素年代測定を行った。



第 65 図 神谷遺跡の調査前地形・試掘調査位置・調査区位置 (S=1/800)



第 66 図 神谷遺跡試掘確認調査トレンチ土層実測図 (S=1/80)



第 68 図 神谷遺跡の 1～4号炭窯立面実測図 (S=1/100)

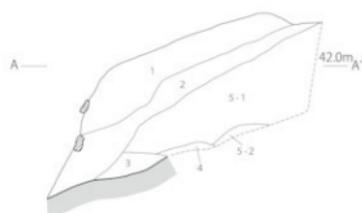
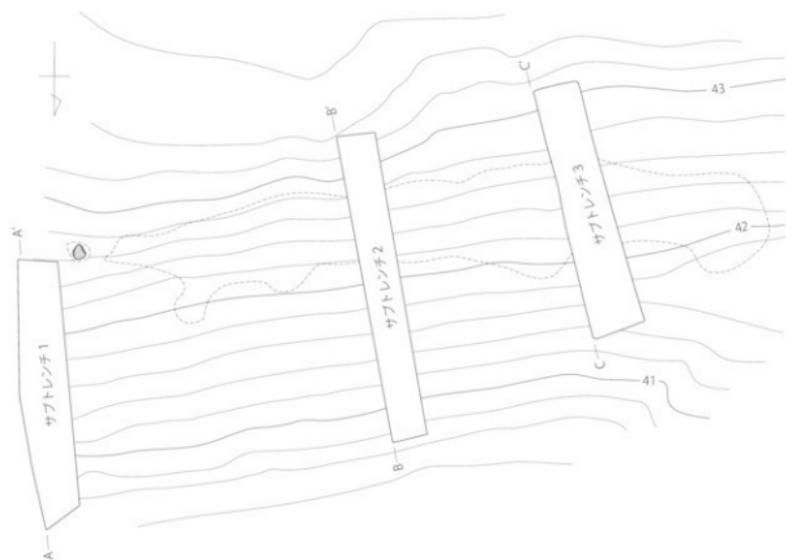
第 2 節 遺構と遺物

1号炭窯 (第 70 図)

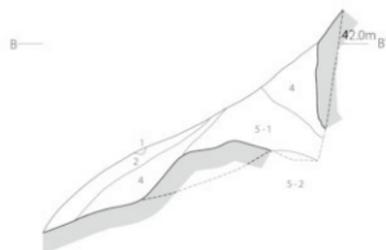
調査区西半では 1号、3号、4号の計 3基の炭窯が遺存しており、1号炭窯はこれらのうち最も上で検出された横口付き炭窯である。焼成室の全長は約 6m を測り、側面には 1.2m の間隔をおいて 5 穴の横口を伴い、西側に焚き口、東端に煙道が付く。窯体端部から東方約 40cm の位置に長径 20cm の煙出しの穴が開いており、径 16cm の石が載っていた。閉塞を目的としたものか。天井はすでに崩落して、床面に残っていた炭層の上に覆いかぶさっていた。サブレンチ掘削時に最初に確認されたのは、被熱により赤変、硬化したこの天井部分であった。天井が崩落して生じた空隙部分には地山崩落土を含む土砂が流入していた。焚き口では石積みが見つかった。石の一部は被熱していた。窯の焚き口を閉塞するため積み上げられた石が残存したとみられる。石積み内からは須恵器の高坏脚部が出土している。焚き口から 4 つめと 5 つめの横口の間には、黒変した石が残されていた。

2号炭窯 (第 71 図)

調査区東半で確認された横口付き炭窯である。焼成室の全長は約 6.2m で、1～1.2m の間隔を置いて 5 穴の横口を伴い、東側に焚き口、西端に煙道がつく。試掘時のセクション(第 66 図 13 トレンチセクション)から高さ 1m 以上の煙道であったと



1. 褐色粘質土層 7.5YR6/6 礫 (径~20mm) を少量含む 締-やや軟、粘-有
2. 灰才リブ粘質土層 7.5Y5/2 礫 (径~40mm) を少量含む 締-やや軟、粘-有
3. 炭化物混じりにぶい褐色土層 5YR6/4 礫 (径50mm) を少量含む炭化物 (径~35mm) を少量 (径~30mm) を中量含む 締-硬、粘-有
4. 黒色土層 10Y2/ 灰 (径~2mm) を多量に含む 締-無、粘-無
- 5-1. 地山 (天井崩落土)
- 5-2. 赤褐色変色地山 10R6/8



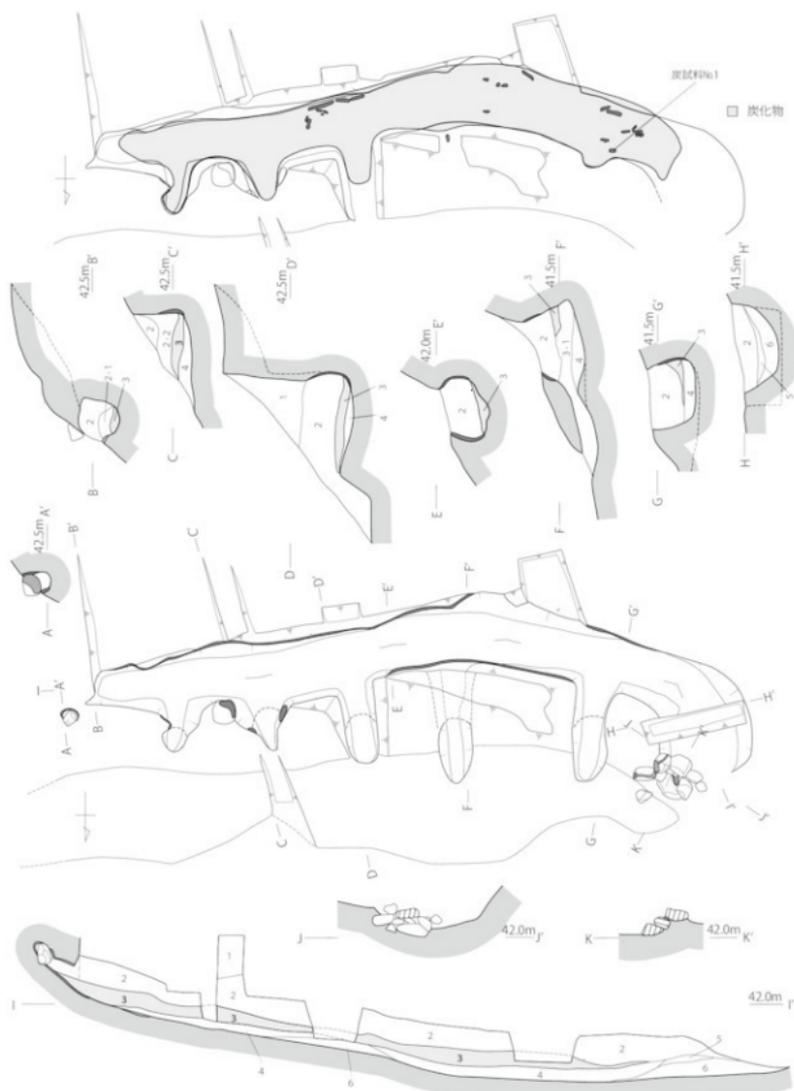
1. 褐色粘質土層 10YR5/1 締-やや有、粘-有
2. 灰才リブ粘質土層 7.5Y5/2 礫 (径~20mm) を少量含む 締-軟、粘-有
3. ぶい褐色土層 5YR6/4 礫 (径~30mm) を多量に含む 灰 (径~40mm) を少量含む 締-無、粘-無
4. 明褐色粘質土層 7.5YR5/6 締-有、粘-有
- 5-1. 地山 (天井崩落土)
- 5-2. 赤褐色変色地山 10R6/8



1. 明赤褐色土層 5YR5/6 炭化物 (径~40mm) を中量 礫 (径~60mm) を少量含む 締-無、粘-無
2. ぶい褐色土層 2.5Y6/4 礫 (径~40mm) を中量含む 締-やや硬、粘-無
- 3-1. 地山 (天井崩落土)
- 3-2. 地山変色部分 赤褐色 10R6/6



第 69 図 神谷遺跡の1号炭窯サブプロファイル断面図 (S=1/60)



1. 明褐色土層 2.5Y7/6 白色粘土ブロック (径~30mm) を少量含む 砂質土層 締・硬・粘・無
2. 明褐色土層 7.5YR5/6 白色ブロック (径~70mm) を多量に含む 締・軟・粘・やや有
2. 浅黄色土層 2.5Y7/4 白色ブロック (径~35mm) を中量含む 締・有・粘・有
2. 浅黄色土層 2.5Y7/4 灰白色ブロック (径~50mm) を中量含む 締・有・粘・有
3. 赤色土層 10R5/6 塊 (径~20mm) を少量含む 締・軟・粘・無
3. 黄褐色土層 2.5Y5/3 灰 (径~20mm) 白色ブロック (径~15mm) を少量含む 赤色地山ブロック (径~200mm) を含む 締・軟・粘・無
4. 黒色炭化物堆積層 炭化物 (径~120mm) を多量に含む
5. 黄灰色土層 灰白色ブロック (径~40mm) を中量 砂層 (径~20mm) を少量含む 締・硬・粘・無
6. にふい褐色土層 10YR 4/3 灰白色ブロック (径~30mm) を少量含む

0 2m

第70図 神谷遺跡1号炭窯実測図 (S=1/60)

考えられる。横口のうち、最も焚き口寄りの横口から順次横口1,2,…とする。横口1と煙道寄りの横口5は天井が残っていた。両者の間にある横口2～4はいずれも天井が失われており、黄褐色のかたい土が侵入していた。焼成室の床面全体に10cmの厚さで炭の層が堆積していた。固形の木炭は焚き口付近で少量残存していたが、他の箇所ではすべて破砕して粉状になっていた。横口2.5では炭層が焼成室から横口の外側まで連続していた。横口3.4では焼成室をはみ出して横口の中位まで侵入していた。ただし横口1には炭が入り込まず、焼成室内にとどまる。煙道に近い部分では、底面の薄い炭層の上に橙色土が薄く敷かれ、その上層にもう一枚の炭層が堆積していた。窯の一部を補修して作業を行った痕跡とみられる。横口の前面には幅30cmの細長い平坦面が広がり、平坦面全体に炭が散布していた。この平坦部は作業場と考えられる。横口にもこの作業場にも大量の炭が残されていたことから、横口を通して焼成室内の炭を掻き出す作業が行われたことが判明する。窯壁全体にわたって4cmの厚さで地山が被熱赤変している。横口2より煙道寄りの壁は赤変に加えて内壁にタールが付着し、黒く変色していた。

3号炭窯（第72図）

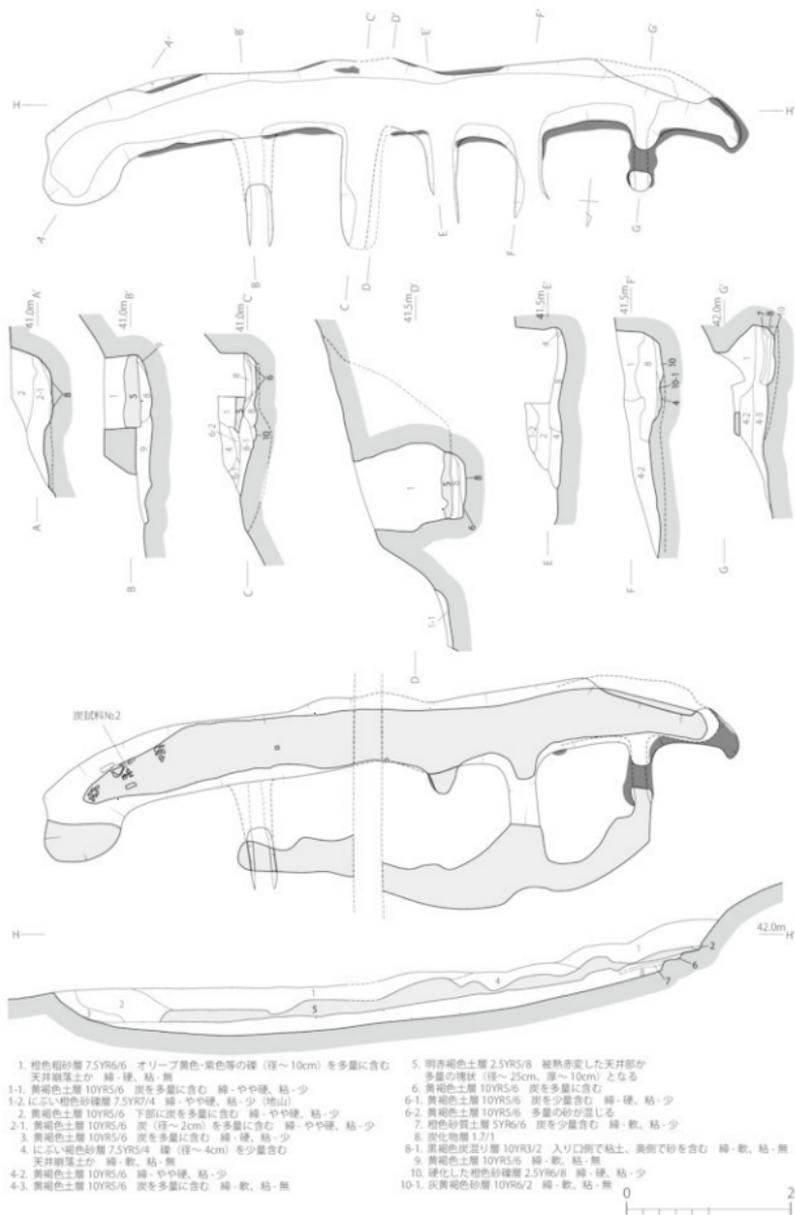
3号炭窯は試掘調査により、2号炭窯の煙道の下で窯体の横断面が一部検出された。2号炭窯の側方の平坦部（作業場）を掘り下げると、帯状にのびる橙色土の部分が最初に検出された。この橙色土は、3号炭窯の天井崩落土であり、橙色土の1m下からは被熱して赤変・硬化した窯体が検出された。底面には炭が残っている部分と残っていない部分があった。煙道側や焚き口側では5cmの非常に薄い炭層や黒褐色土層が認められた。焼成室壁面は主として煙道寄りの部分が赤変していたが、タールの付着や黒変は確認されなかった。焼成室の全長は約7.6mで、80～90cmの間隔を置いて10穴の横口を伴い、東側に焚き口、西端に煙道がつく。横口10の西方80cmの地山面には径30～50cmの煙道の出口が開口しており、周囲の壁は赤く焼けていた。横口部分のセクション（第72図C、F、Gライン）によれば、横口の床面は焼成室の床面から4～5cm下がっており、いずれも少量の炭が残っていた。横口3は天井部が残っていたが、他の横口は上部が開口して橙色土が侵入していた。横口4付近の焼成室には固形の炭が少量残存し、横口へ向かって掻き出されたような状態をとどめて出土した。焚き口付近には、直上の2号炭窯の横口2から排出された炭混じりの土が、3号炭窯内の天井崩落土を切って侵入していた。排土の傍らからは人頭大の石が出土した。2号炭窯の横口の閉塞に使われた石とみられる。

4号炭窯（第73図）

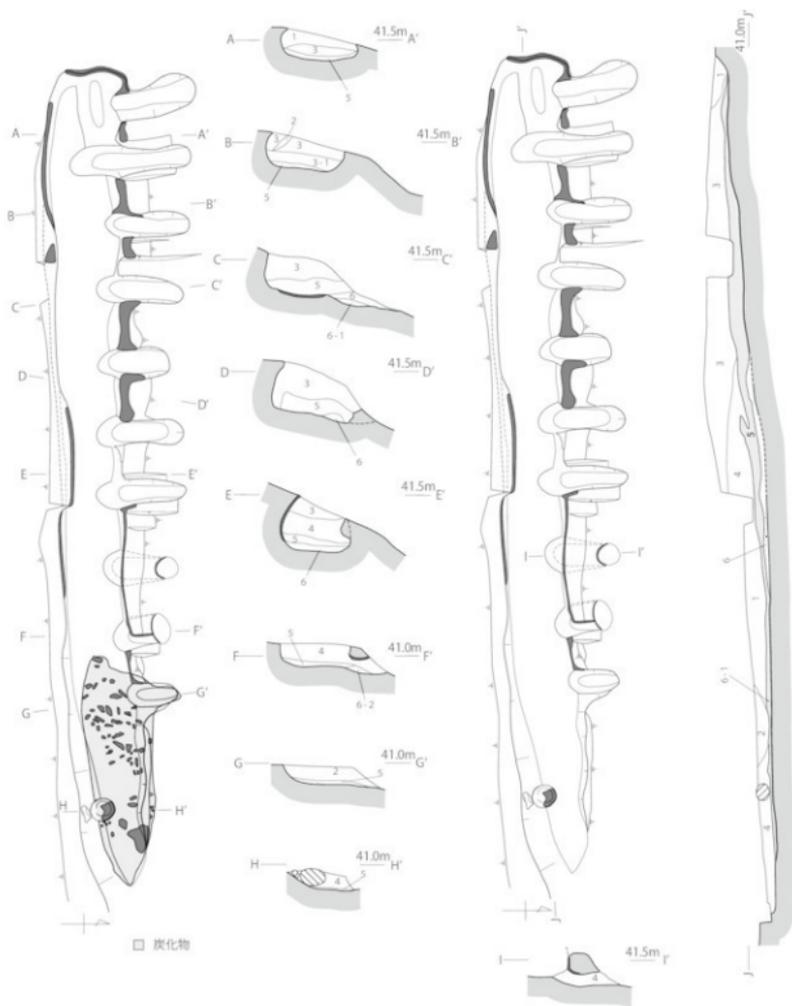
4号炭窯は調査の終盤に、調査区西端付近で検出された。煙道が東端につく形で、焼成室は西へ伸びて調査区の外へ続いている。確認できる焼成室の長さは約6mで、80～90cmの間隔を置いて6穴の横口を伴い、東端に煙道がつく。開口している煙道の出口は径30～40cmあり、周囲の壁は赤く焼けていた。また、幅14～16cmの工具痕が煙道内壁に多数残っていた。天井部が遺存していたのは東端の横口のみで、他は天井部が失われ開口状態になっていた。焼成室の中央部セクションでは、崩落した天井部を整形し、その上で再び作業を行った痕跡が確認された。炭化物を含む層は床面上に20cmとやや厚く堆積していた。

SD01（第74図）

3号炭窯の下で検出された、東西方向に長い溝状遺構である。調査区の北半分は、炭窯の上層に厚く堆積した包含層をカットして緩い傾斜面に改変されており、溝状遺構はこの傾斜変換線に

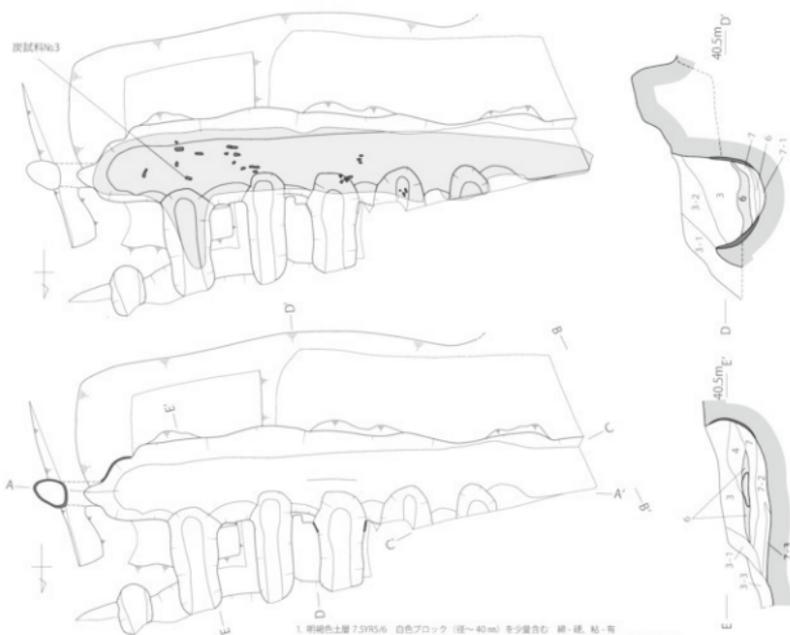


第71図 神谷遺跡2号炭質層実測図 (S=1/60)

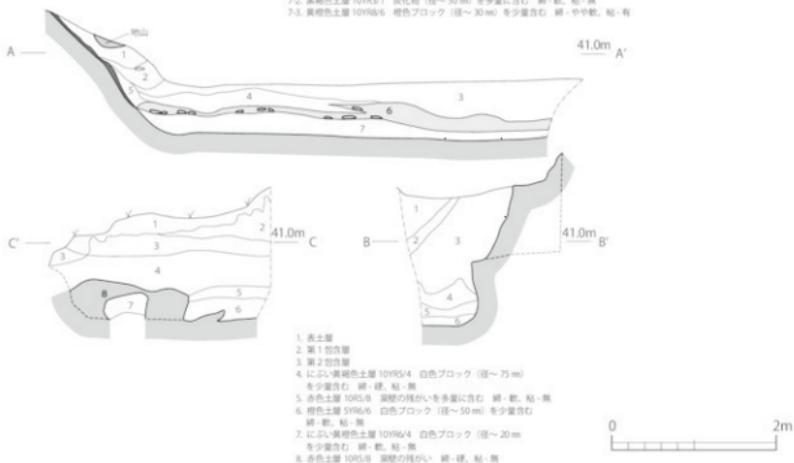


1. におい橙色土層 2.5YR6/3 白色ブロック (径~70mm) を多量に含む 締-硬、粘-有
2. 橙色土層 5YR6/6 白色ブロック (径~30mm) を少量含む、炭化物 (径~60mm) を中量含む 締-硬、粘-やや有 (2号窯横口)
3. 橙色土層 5YR6/6 白色ブロック (径~50mm) を中量含む 締-硬、粘-やや有 (天井崩落土)
- 3-1. 橙色土層 5YR6/6 きめが粗い 締-軟、粘-無
- 3-4. におい黄橙色土層 10YR7/4 白色ブロック (径~30mm) を中量含む 締-軟、粘-無
5. 赤色土層 7.5R4/8 締-軟、粘-無 (天井崩落土と赤黄色土)
6. 黄赤土層 2.5Y3/1 炭化物 (径~60mm) を多量に含む 締-硬、粘-やや有
- 6-1. 淡黄赤土層 10YR6/2 炭化物 (径~10mm) を少量含む 締-軟、粘-無

第72図 神谷遺跡3号炭塚実測図 (S=1/60)



1. 赤褐色土層 259R5.6 白色ブロック (厚～40cm) 少量含む 餅・礎、粘・瓦
2. 浅黄褐色土層 25974 竪穴の一部 (厚～70cm) 丸縁 (厚～40cm) 少量含む 餅・礎、粘・瓦
3. にぶい黄褐色土層 109R5/4 白色ブロック (厚～30cm) 少量含む 餅・礎、粘・瓦
- 3-1. にぶい黄褐色土層 259R5/4 白色ブロック (厚～70cm) 少量含む 餅・礎、粘・瓦
- 3-2. にぶい黄褐色土層 109R5/4 白色ブロック (厚～40cm) 少量含む 餅・礎、粘・瓦
- 3-3. 浅黄褐色土層 109R5/2 灰化物 (厚～30cm) 少量含む 餅・礎、粘・瓦
4. 浅黄褐色土層 109R8/4 赤色ブロック (厚～40cm) 丸縁 (厚～40cm) 少量含む 餅・きわめて粘、粘・瓦
5. 浅黄褐色土層 109R5/2 灰化物 (厚～30cm) を挿入含む 餅・礎、粘・瓦
6. 赤色土層 10R5.8 竪穴 (厚～100cm) を多量に含む 餅・礎、粘・瓦
7. 黄褐色土層 109R4/1 灰化物 (厚～150cm) を多量に含む 餅・礎、粘・瓦
- 7-1. 黄褐色土層 109R3/1 灰化物 (厚～40cm) を多量に含む 餅・礎、粘・瓦
- 7-2. 黄褐色土層 109R3/1 灰化物 (厚～50cm) を多量に含む 餅・礎、粘・瓦
- 7-3. 黄褐色土層 109R8/6 褐色ブロック (厚～30cm) 少量含む 餅・中平敷、粘・瓦



1. 表土層
2. 第1包土層
3. 第2包土層
4. にぶい黄褐色土層 109R5/4 白色ブロック (厚～75cm) 少量含む 餅・礎、粘・瓦
5. 赤色土層 10R5.8 竪穴の残骸を多量に含む 餅・礎、粘・瓦
6. 赤色土層 59R6.6 白色ブロック (厚～50cm) 少量含む 餅・礎、粘・瓦
7. にぶい黄褐色土層 109R6/4 白色ブロック (厚～30cm) 少量含む 餅・礎、粘・瓦
8. 赤色土層 10R5.8 竪穴の残骸を 餅・礎、粘・瓦

第73図 神谷道跡4号炭窯実測図 (S=1/60)

沿って掘削されていた。長12m、幅56cm、深さ14cmを測る。上層に堆積した包含層は古代から近代までの遺物を含んでおり、溝状遺構が掘削された時期は比較的新しいと思われる。

SK01

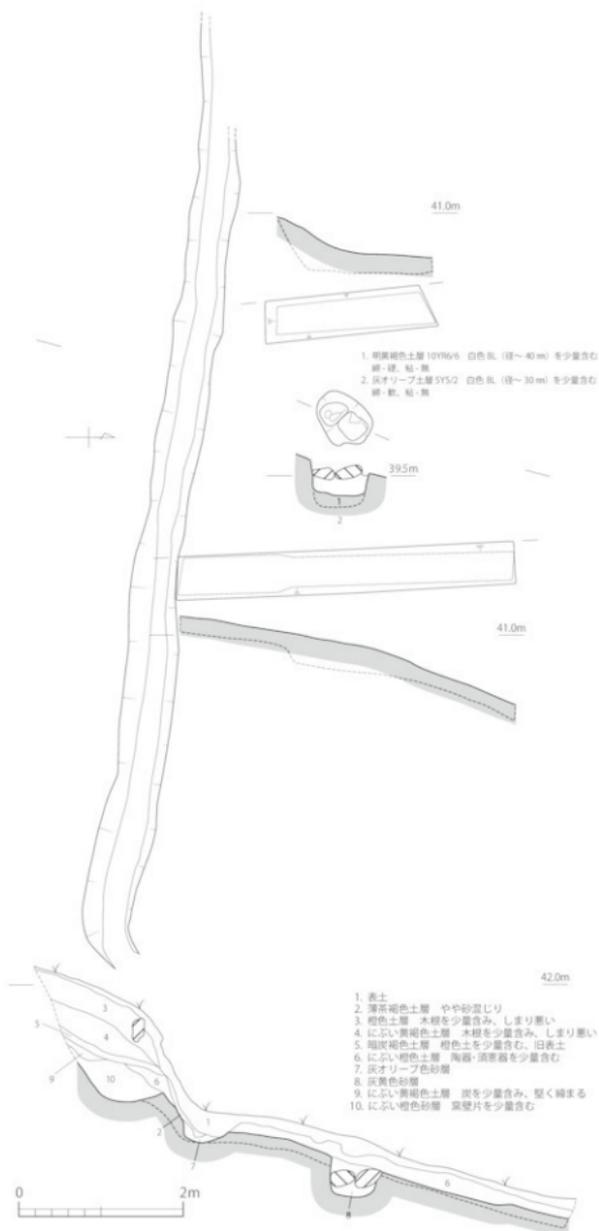
(第74図)

溝状遺構の下方で検出された土坑である。径50cm、深さ50cmを測る。試掘調査では土坑の東半分が検出され、内部から人頭大の石が2個出土した。土坑の埋土は上層の近代陶磁器を含む包含層に切られていることから、この包含層よりは古い遺構である。人頭大の石が柱の根石である可能性を考えたが、SK01と対になるピットは検出されず、性格は不明である。

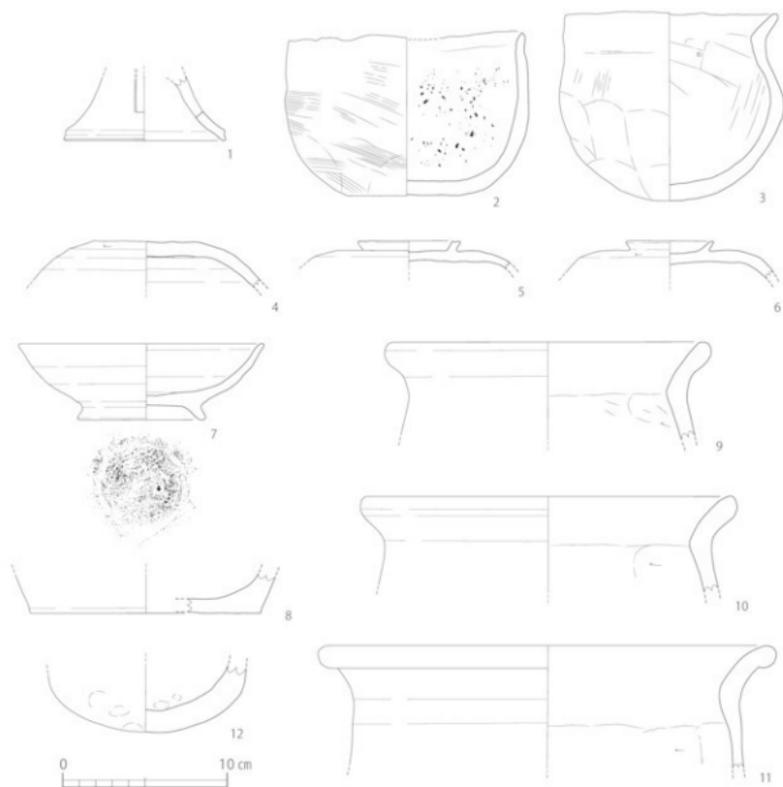
出土遺物

(第75・76図)

第75図の1は



第74図 神谷遺跡SD01・SK01実測図 (5=1/60)



第75図 神谷遺跡出土遺物実測図1 (S=1/3)

1号炭焼窯の焚口付近から検出された須恵器の高環脚部片である。底径は9.5cmあまりで、「ハ」に字形に開いて端部にいたっている。端部は短く外反した面を持ち、断面三角形を呈する。脚部は低く、方形の透かしを持つ。この高環は透かしや端部の形態から7世紀後半頃のものと考えられる。2・3は2号炭焼から検出した土師器。これらの土器は、2の鉢の中に3の小壺が入った、いわゆる入れ子の状態で出土した。窯廃棄時に天井部に置いたものと思われる。2の鉢は、口縁部はややとがり気味で、胴部、底部に向かって器壁が厚くなる。底部は平底、外面にはタタキとハケ目が施され、上部にススが付着。3は丸底の壺である。頸部から口縁にかけては「く」の字形に屈曲し、口縁端部は太くて丸い。胴部は玉ねぎ状に張り出し、外面には指かへら状のものでナデた痕跡がある。内面にはケズリが施され、外面の一部にススが付着している。また、この壺の中には何か不明であるが炭化物が入っていた。2・3の土器は口縁部の形態から7世紀後半～8世紀ころのものと思われる。4～8は包含層から出土した須恵器である。4は天井部に回転ケズリが施された蓋環の蓋天井部片。6世紀～7世紀にかけてのものと思われる。5・6は外傾した輪状つまみを持つ蓋で、



第76図 神谷遺跡出土遺物実測図2 (S=1/3)

5はつまみ端部にややくぼんだ面を持ち、6は細くとがっている。7は「ハ」の字形の高台が付き、体部はやや丸みを持ち、口縁部近くでわずかに外反して端部にいたっている。底部には静止糸切の痕跡が残る。5～7は7世紀末～8世紀のものと思われる。9～11・第75図の1は土師器の甕片。いずれも頸部から口縁部にかけて「く」の字形に屈曲し、胴部があまり張り出さないものである。内面にはケズリが施され、口縁部は丸い。11は胴部の器壁が薄く、口縁部が玉縁状を呈している。76図の1は外面がゆるく外反し、胴部がほぼ垂直に下がる。76図の12は土師器の丸底片。内外面に指圧痕状の痕跡があり、器壁は厚い。76図の2は甕の把手。指でナデた痕跡がある。3は土製支脚である。上部はYの字形を呈している突起を持つが、片方を欠く。胴部に中央から脚部内側に向かって2cm前後の穿孔が穿たれ、全面に指かへら状のものでナデた痕跡が残る。

第5章 涼見E遺跡

第1節 発掘作業と整理作業の経過

1) 遺跡の位置

涼見E遺跡は大田市北東部の久手町刺鹿に所在し、丘陵から北西方向へのびる尾根の先端頂部に位置する。本調査範囲は尾根頂部の平坦な部分である。

2) 試掘確認調査の概要

試掘確認調査は平成25年10月23日から平成25年11月15日まで実施した。

朝山大田道路建設が予定されていた範囲について、数次にわたり分布調査を行った。用地境界南端に近い尾根頂部では、小規模なマウンドを2基確認され、古墳の可能性が考えられた。マウンドが所在する尾根を中心に、北へ向かって緩やかに傾斜する斜面が続いて北に隣接する丘陵も、頂部には一辺20mを超える広い平坦面が認められ、平坦面の南側にも緩斜面が続いていた。これらの平坦面や緩斜面には、集落が存在する可能性が考えられた。

上記のマウンド、平坦面、これらに挟まれた緩斜面部分を合わせた1,600m²を要注意箇所とした。この範囲の中で、14箇所でのトレンチ掘削による調査を実施した。平坦面、緩斜面からは遺物は出土しなかった。また、南北の丘陵に挟まれた谷部では少量の遺物が出土したが、明確な遺構に伴うものではなかった。古墳の可能性が考えられた尾根頂部のマウンドにかかるトレンチでは、人為的とみられる石の集積を確認した。試掘調査では遺物が出土せず時期が確定しなかったが、古墳あるいは中世墓の可能性があることから、マウンドを中心とする140m²について本発掘調査が必要であると判断された。

3) 発掘作業の経過

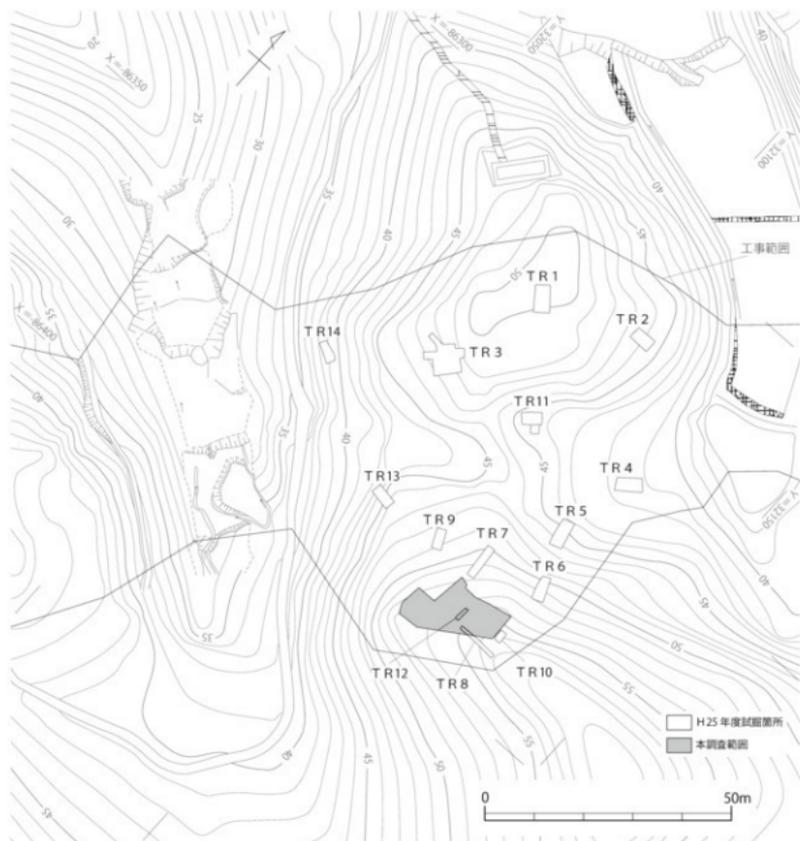
本調査は平成26年7月1日から平成26年8月11日まで実施した。調査前地形を測量後、表土から人力で掘削を行った。表土を除去すると、2基のマウンドの間にある鞍部から、集中的に石が出土した。石が原位置をとどめているか、いないか判断がしにくかったため、当初は表面に現れた石をすべて実測した。測り終わった石を取り上げる過程で、石の多くは地山面から浮いていることが判明した。マウンド斜面から転落して鞍部にたまった状態であると判断し、これら原位置を動いたとみられる石は除去した。最終的にマウンド裾に沿って地山直上に整列する石を、墳裾に並べられた石と考え、記録した。2基のうち、東を1号墳、西を2号墳とした。

試掘調査では、1号墳の中心部に周囲と土色の異なる箇所があり、主体部と思われた。ただし、工事で切削される範囲からは外れるため、発掘は行わず埋め戻して現状で保存している。2号墳は、墳頂部の集石付近を中心に、表面に水を撒いてシートで覆いをして湿らせ、検出を繰り返したが、主体部は検出されなかった。最終的にサブトレンチを3箇所設定して断面を観察したが、主体部とみられるセクションは確認できなかった。

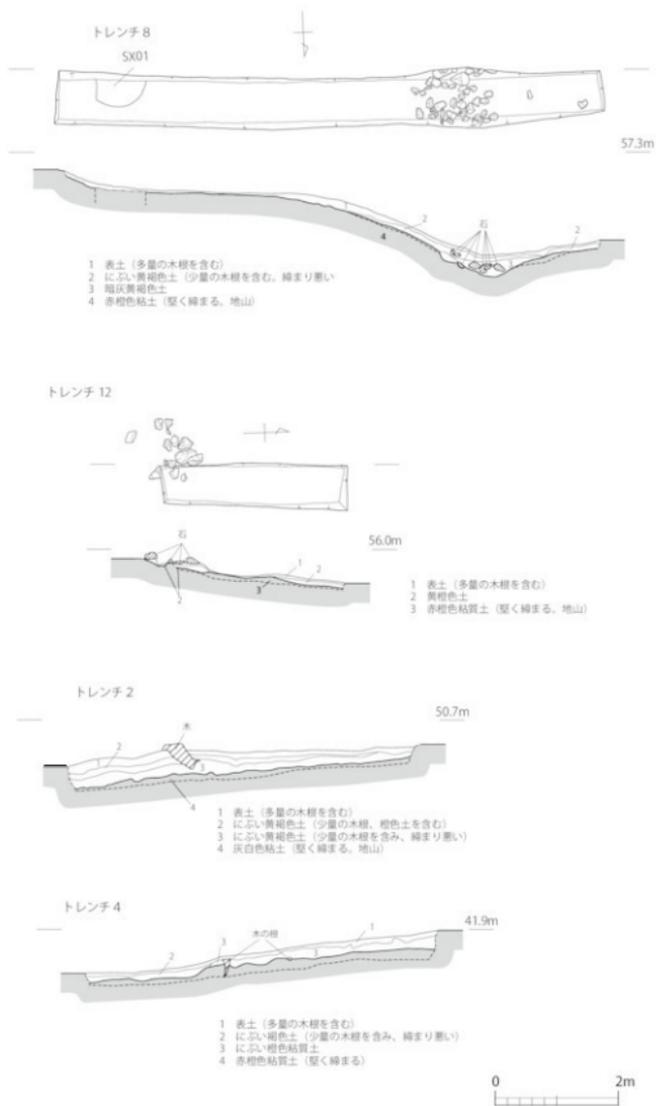
1, 2号墳の調査・撮影終了後、石列の補則を行った。なお、墳丘は調査区外へも続いているので、地権者の許可を得て調査終了後墳丘の地形計測を行い、8月26日に調査を終了した。

4) 整理作業の経過

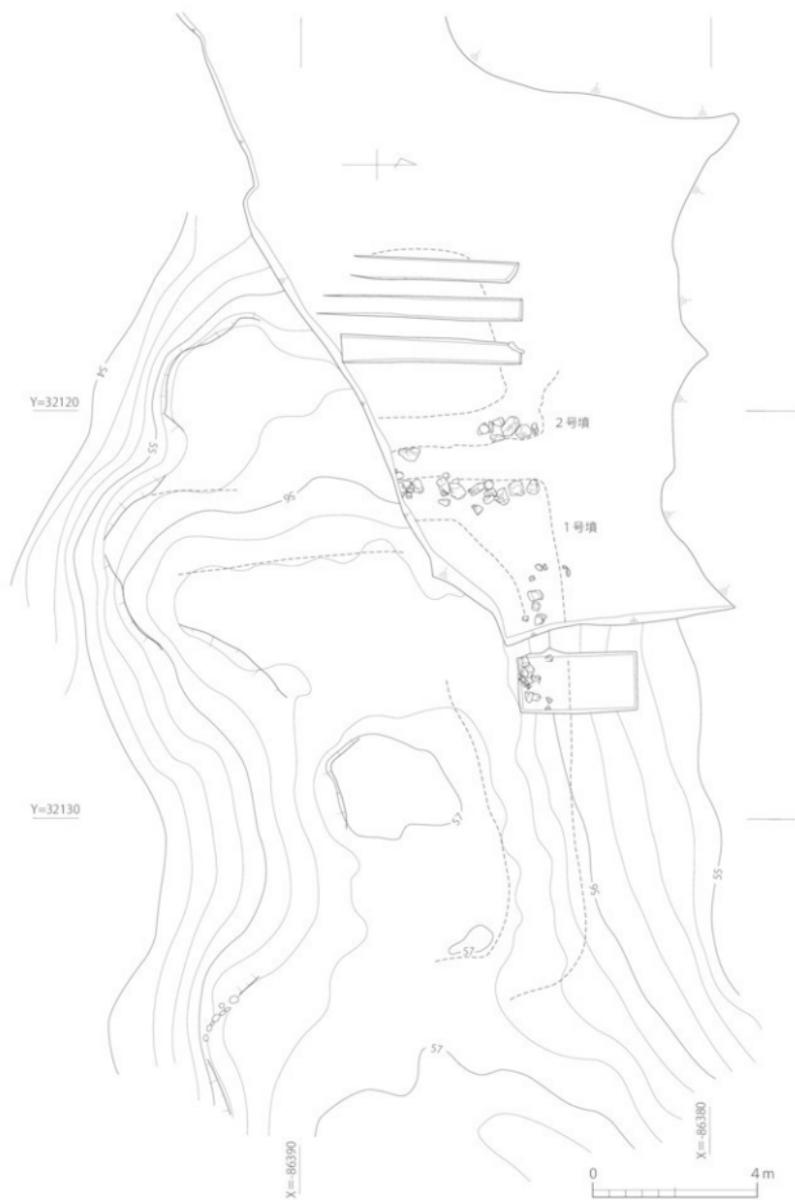
遺構図面の整理、浄書は26年度から27年度にかけて行った。墳丘から出土した遺物は土師器の小型壺1点のみである。平成27年度に遺物実測、撮影を行った。



第77図 涼見E遺跡の調査前地形・試掘確認調査位置・調査区位置 (S=1/1000)



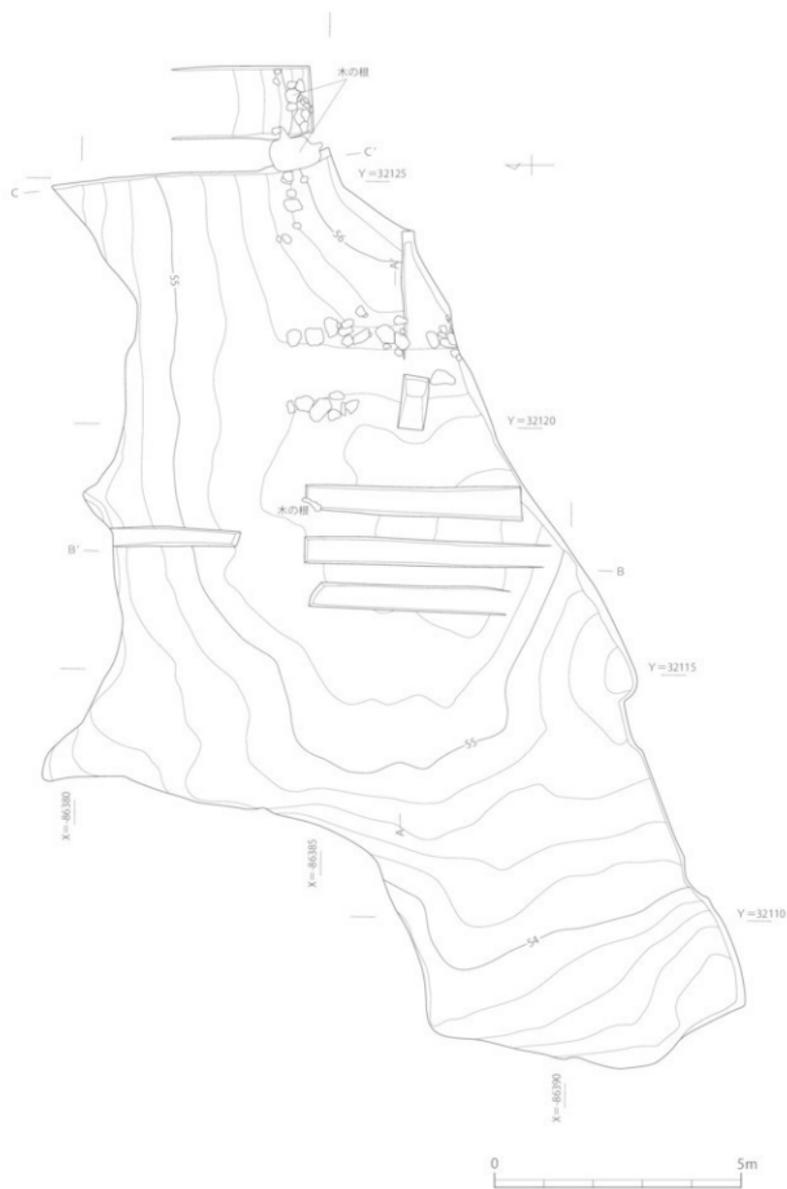
第 78 図 涼見 E 遺跡試掘確認調査トレンチ土層実測図 (S=1/80)



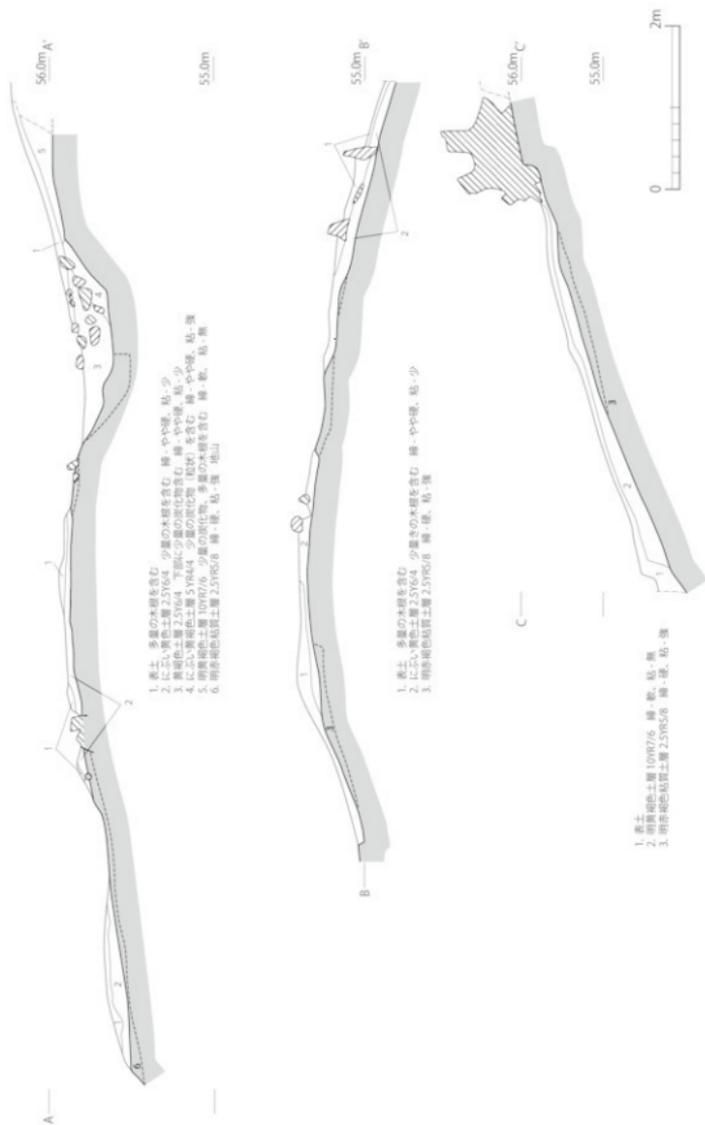
第79図 涼見E遺跡調査区および周辺地形測量図 (S=1/120)



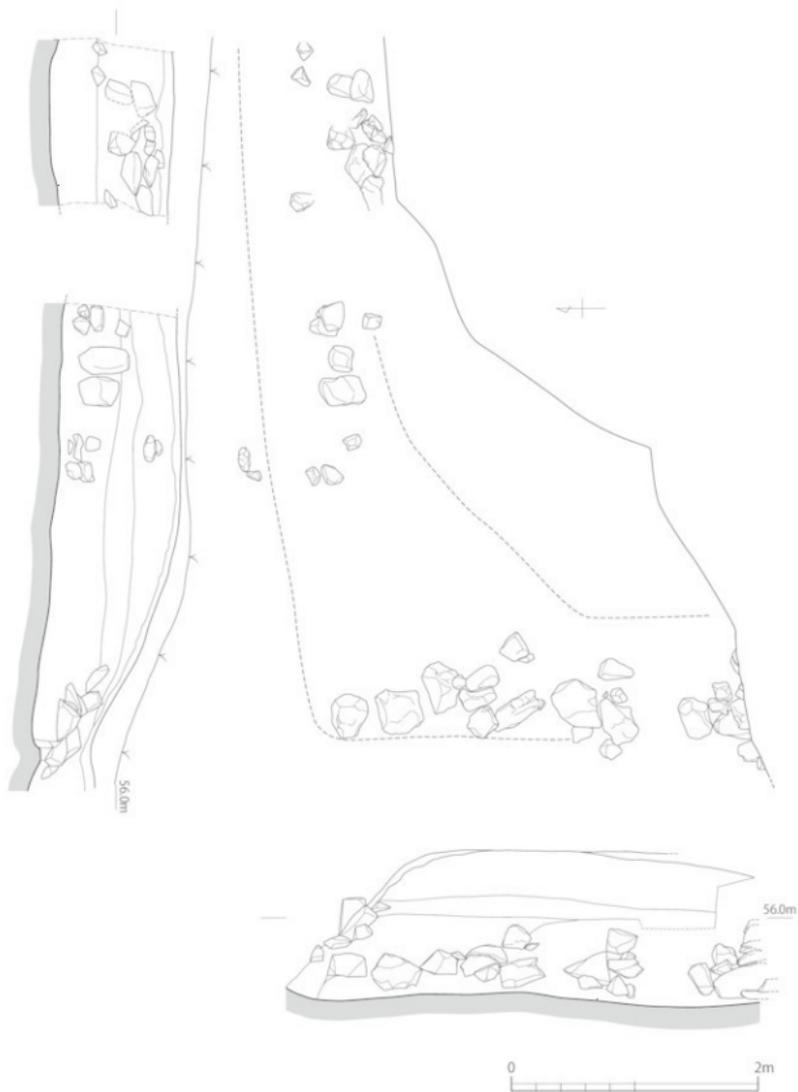
第 80 図 涼見E遺跡調査前地形測量図 (S=1/100)



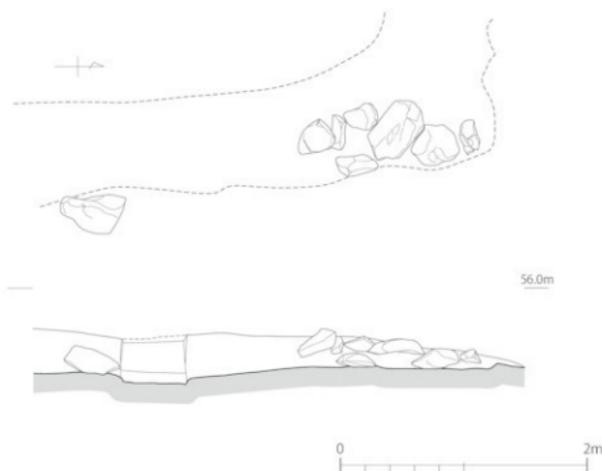
第 81 図 涼見 E 遺跡調査後地形測量図 (S=1/100)



第 82 図 涼見E遺跡1号墳・2号墳断面実測図 (S=1/60)



第 83 図 涼見E遺跡1号墳平面・立面実測図(S=1/40)



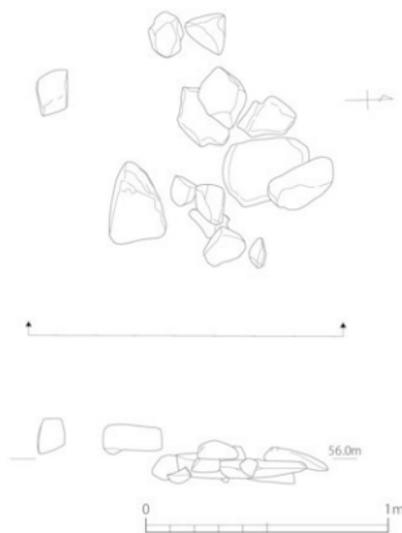
第 84 図 涼見E遺跡2号墳平面・立面実測図 (S=1/40)

第 2 節 遺構と遺物

1号墳 (第 83 図)

1号墳は、尾根の西端近くに築かれた方墳で、各辺は東西南北の正方位にほぼ合っている。分布調査時から明瞭な高まりが観察された。本調査を実施したのは、工事により切削される古墳北西隅の部分である。尾根の西端の高まり(2号墳)とは上面幅 2.5m、下面幅 70～80cmの溝で画される。溝内からは石が多数出土した。30～40cm 大の石を主とし、10cm 前後の小さめの石が間に挟まる。溝の中央部からは原位置を動いて転落してきたとみられる石が、地山から浮いた状態で多数出土した。溝とマウンドの傾斜変換線に沿って、地山に密着した状態の石が列状に並んで出土していた。1号墳西辺の墳裾部に貼られていた石が残存したものと考えられる。また、北辺では傾斜変換線から 50～80cm 上方の斜面部に貼り付いた状態の石が出土した。これらは墳丘の北辺を覆っていた石と考えられる。墳丘西辺にかかるトレンチの一部で、多量の炭化木等を含む軟質の明黄褐色土が認められた。赤橙色粘土からなる地山とは異質の土であり、墳丘構築に用いられた盛土と考えられる。盛土部分を含めた区画溝底から現存する墳頂部までの高さは 1.2m である。試掘調査では、墳丘頂部に灰黄色のプランが認められており、主体部の可能性がある。工事の切削範囲にはかからないため、掘削せず現状保存とした。

本調査の終了後、周辺を含めた地形測量図を作成した。南辺は急峻な谷に面しており、複数箇所



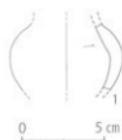
第85図 涼見E遺跡2号墳頂部集石平面・立面実測図(S=1/20)

2号墳（第84図）

1号墳の西方、尾根の先端に位置する。調査前は、1号墳ほど明瞭でないが高まりが観察された。試掘調査では、高まりの中央部に石の集積が認められ、調査ではこの石の集積を中心に平面およびサブトレンチ断面で遺構検出を行ったが、明確な主体部のプランは検出できなかった。しかし、1号墳との間を画する溝では、溝底と高まりの間の傾斜変換線に沿って、地山に貼り付いた状態の石の列が確認できた。古墳の東辺裾部の石が残存したものと考えられたので、この高まりを2号墳とした。

2号墳の東辺裾部では、主として30～40cmの石が数個確認された。墳裾は地山の傾斜変換線として確認される。1号墳との間の区画溝底からの高さは現状で60cmである。試掘調査時にマウンド上面で確認された集石は、30cmから10cmまでの大小様々の石が集められていたものである。主体部が確認できなかったこと、また、石室や石棺を構成するような顕著な大きさの石、板状の石、整形された石を含まないことから、主体部の構築材である可能性は低い。貼り石が二次的に集積された可能性が考えられる。南辺の崩壊が著しいため不明瞭な部分があるが、現存地形から東西辺が8.4mの方墳とみられる。

第86図1は、貼り石内部から出土した土師器の小型壺の肩から胴部にかけての破片で、外面にはナデ、内面にはヘラケズリが施される。祭祀用の土器か。



第86図 涼見E遺跡出土遺物実測図(S=1/3)

で生じた崩落により原地形が失われている。北辺の地形はマウンド状の地形が比較的良好に残っていた。調査区から8m東方では、尾根を横断する方向に溝状の窪みが確認された。墳丘の東辺を画する区画溝の痕跡と思われる。溝の南方では、墳丘の石の可能性のある石が7個確認された。

これら調査区内・外に残存する石や地形から、1号墳は東西12m、南北9mの長方形の方墳と考えられる。

第6章 総括

第1節 涼見E遺跡の古墳について

涼見E遺跡では2基の古墳を確認した。尾根頂部の1号墳は長辺12m、短辺9mの方墳で、先端側の2号墳は一辺8.4mの方墳である。墳裾間の間隔は80cmであった。区画溝内からは多量の石が出土した。それぞれの墳裾に石列が認められたことから、築造時は葺石で覆われていた可能性が高い。墳丘からの出土遺物はなく、区画溝内から出土した遺物は土師器の小型壺の胴部1点のみである。墳丘の築造時期はこの1点によって推定せざるを得ない。内面ヘラケズリで肩が強く張り出す土師器の小型壺は松江市の大角山遺跡竪穴住居^[18]などで出土しており、大東式（古墳時代中期）に属するとみられる^[19]。

古墳時代の旧波根湖周辺において、横穴墓が多数確認される反面、墳丘を伴う古墳は円墳である竹原古墳しか知られていなかった。涼見E遺跡の事例が加わることで、丘陵地帯でも古墳が存在することが確認された。また、円墳と方墳が混在する様相も明らかになった。

第2節 城ヶ谷遺跡の竪穴住居・造付け竈について

調査区中央部は竈本体、竈業関連施設に伴う大幅な地形改変を受けているため、近代以前の遺構は調査区の縁辺部で検出された。調査区上部では、7世紀後半の竪穴建物を3棟確認した。調査区下部からは、6世紀後半から8世紀後半にかけての遺物が出土しており、確認できた竪穴建物よりも年代幅が広い。おそらく、調査区周辺でも集落は継続して営まれており、そこから斜面下方へ遺物が転落して（あるいは廃棄されて）堆積した可能性が高い。

城ヶ谷遺跡西方の低丘陵地帯に位置する市井深田遺跡では、6世紀後半から9世紀前半にかけての集落が調査されている。城ヶ谷遺跡も市井深田遺跡と同様、低丘陵上の緩斜面を利用して継続的に営まれた集落であったと考えられる。

城ヶ谷遺跡の竪穴建物は、検出された3棟がいずれも造付け竈を伴っていた。芯材として石を用い、石の周囲に粘土を貼り付けた構造であったとみられるが、残存していたのは石のみであった。構築材として用いられた石は、火元側よりも火元の反対側の面が被熱によって顕著に赤変しているのに対し、火元側に当たる下面は強く焼けていなかった。これは竈の造り替えが行われ、その際に前の竈の構築材が転用された結果と考えられる^[20]。

竪穴建物内の出土遺物はいずれも7世紀後半に属し、住居の廃絶時期を示すとみられる。煮炊きの状況を示す遺物としては、甕、甗、土製支脚が竪穴建物内から出土し、遺構では造付け竈が確認された。包含層出土遺物ではこれに移動式竈が加わることから、遺構が残らなかった調査区中央部では、移動式竈を用いる住居もあったと推測される。このような出土遺物の組成は、市井深田遺跡と共通する。城ヶ谷遺跡は、市井深田遺跡と同様に土製支脚・移動式竈が卓越する石見海岸地域にあって、造付け竈を用いた集落と位置づけられる^[21]。

市井深田遺跡と共通の様相をもつ城ヶ谷遺跡の事例が加わることで、甕、甗、土製支脚、移動式竈、造付け竈を併用するという生活様式をもつ地域が、大田市東部において一定の広がりを持っていた可能性がある。

第3節 神谷遺跡の炭窯について

築造順と年代

神谷遺跡では横口付き炭窯を検出した。県内の横口付き炭窯の発見例として、布志名大谷Ⅱ遺跡2基（松江市玉湯町）、白石大谷Ⅰ遺跡1基、屋敷古墳群1基（松江市穴道町）、三井Ⅱ遺跡2基（出雲市斐川町）の4遺跡6基が知られており、神谷遺跡は石見部で初の横口付き炭窯の検出事例となる。⁽¹⁸⁾

神谷遺跡では、4基の炭窯が次々に構築されており、構築順の検討がある程度可能である。

横口付き炭窯4基の配置は、東に焚き口をもつ窯と西に焚き口をもつ窯が対向する位置関係で2段にわたって築かれる形をとる。上下の位置関係にある2号炭窯と3号炭窯は、2号炭窯の横口から排出された土が3号炭窯の天井崩落土を切って侵入している関係から、3号→2号の前後関係が明らかである。1号炭窯の床面が煙道側で急にながくなっているのは、3号窯を避けた結果とみられるので、3号→1号の前後関係も認められるであろう。これらの関係から、炭窯の築造は下位の炭窯から順次上へ進んだと考えられる。上位の1、2号炭窯に伴う作業面は、3、4号炭窯が後から築かれたのであれば破壊や攪乱を受けているはずであるが、実際には3、4号窯を覆う位置で良好な状態で検出された。燃料を搬入し、生産された炭を搬出する便利の上からも、最初は出入りに便利な山麓の斜面が使われ、徐々に条件の劣る斜面上方へ移っていったであろう。なお、2号炭窯が掘削されている地山は、窯の下半が粗砂、上半が硬質の橙色土という脆弱な構造になっており、地質的にも条件の劣る箇所を選ばざるを得なくなっている。以上の理由から、炭窯は標高の低いほうから4号→3号→1号→2号の順に構築されたことが想定される。

なお、1、3、4号炭窯底部から採取した炭の放射性炭素年代測定により、1号窯は calAD664～762、2号炭窯 calAD664～761、4号炭窯 calAD661～761（いずれも暦年較正年代）の値が得られている。この値に基づいて窯の前後関係を推定するのは難しいが、3基とも操業されていた絶対年代が7世紀後半～8世紀前半にかかると認められるであろう。1号炭窯出土の須恵器や、2号炭窯の天井崩落土を壊して埋納された土師器、炭窯を被覆して堆積している包含層出土遺物の年代と併せると、炭窯の操業年代は7世紀半ばから8世紀前半の間と推定される。

窯構造

横口付き炭窯の変遷については、同遺構が高密度に分布する岡山県の事例を基に上祐武氏（岡山県古代吉備文化センター）等によって検討が進められている。横口付き炭窯を特徴付ける側面の多数の横口は、成立時は炭の掻き出し口として機能していた。窯内部の炭を全て掻き出すために、横口は比較的狭い間隔で多数開口する。時代が下降するに従って、横口の主たる機能は掻き出し口から空気の入力口へ移っていったという⁽¹⁹⁾。

神谷遺跡においては、古い段階の3、4号炭窯の横口の間隔が80cmであるのに対し、後出の1、2号炭窯では1.2mに開いている。横口数は、総数のわかる3号炭窯で10穴、1、2号炭窯では6穴と少なくなっており、岡山県で見出されたのと同様な傾向が神谷遺跡においても確認できる。ただ、各炭窯とも焼成室内から横口まで炭を含む層が連続している箇所が多く、横口から炭を掻き出したような固形炭の出土状況が認められる箇所もある。当遺跡の場合、横口は炭の掻き出し口の機

能を完全に失うことはなかったと思われる。

1号炭窯や2号炭窯の横口や煙道付近には、閉塞に用いられたとみられる被熱痕跡（赤変あるいは黒変）のある石がしばしば認められた。2号炭窯の煙道付近の内壁にタールが付着して黒く変色しており、各開口部を閉塞して煙し焼きを行った結果とみられる。

当該時期の炭生産、鉄生産における位置づけ

長大な焼成室をもち、一度に大量の炭を生産できる横口付き炭窯は、日常生活を支える炭焼きとは明らかに性質を異にする。横口付き炭窯の分布の中心である岡山県では、製鉄遺跡に接して窯が築かれる事例が確認されることから、製鉄炉が必要とされる大量の炭を供給するための窯であったと指摘されている¹⁸⁷⁾。

ただし、県内では当該時期の製鉄遺跡と横口付き炭窯が同一遺跡内で、あるいはごく近接して発見された事例は確認されていない。鳥根県内の状況を見ると、これまで見つかった当該時期の製鉄遺跡は、粟目1遺跡（雲南市吉田町）、羽森第3遺跡（雲南市掛合町）、玉ノ宮地区D-2製鉄遺跡（松江市玉湯町）、今佐屋山遺跡（邑南町市木）など、山間に集中している。砂鉄や燃料の供給の便から当然の選択であろう。一方で、県内の横口付き炭窯の発見例は布志名大谷Ⅱ遺跡2基（松江市玉湯町）、白石大谷Ⅰ遺跡1基、屋敷古墳群1基（松江市穴道町）、三井Ⅱ遺跡2基（出雲市斐川町）の4遺跡6基があつて平野部・海岸部に位置しており、製鉄遺跡の分布とは重ならない¹⁸⁸⁾。岡山県でみられた、横口付き炭窯と製鉄遺跡が直接的に結びついた状況は、鳥根県では確認されず、様相を異にしている。

神谷遺跡の事例は、上記のような問題を含め、当時の生産活動について詳細な検討が可能になる材料を加えることとなった。

第4節 城ヶ谷遺跡の窯業関連遺構と遺物

城ヶ谷遺跡では近現代の連房式登窯が上下に重なって2基（1号窯、2号窯）検出された。今回、大田市内で初めて調査された石州瓦・石見焼関連の遺跡である。切り合いの状況から2号窯を取り壊し、その上に1号窯を築造していたことが判明した。

1号窯は大口、8室の焼成室、煙出からなり、全長は16.8m、最大幅は4.8mを測る。焼成室は焚口から上に行くにつれて横幅が広がる（最大50cm差）。天井の形態は所謂かまぼこ形とよばれるアーチ状で、各焼成室の小口は西側に開かれる。火格子（狭間・通煙孔）の数は大口が10、各焼成室は12である。狭間形態は横狭間で、焼成室の壁に長方形の火格子を設け、焚庭（火床）で火焔の流れを上曲げる。火格子は焼成室ごとに位置をずらして配置しているため、平面からみた火焔の流れは蛇行する。主要部材は耐火煉瓦で、大口の周囲に石材、煙出内部に瓦が使用される。焼成室床面（砂床）の傾斜は3.75寸（21.65°）～5.41寸（28.39°）を計測し、おおむね5寸勾配前後となる。室内には火溝を設けて階段状に耐火煉瓦を積み上げる瓦窯特有の構造をもつ。登窯の周りを礎石列が囲い、覆屋（カマツヤ）を伴っていたことがわかる。

2号窯は構造の大部分を失い、焚庭と窯壁の一部が残る状態で、残存長は9m、最大幅は4.8mを測る。焚庭から少なくとも4室以上の焼成室をもつ連房式登窯であったことがわかる。焼成室の傾斜は約4.17寸(22°66′)を計測するが、平均すると1号窯より緩かったようである。この2号窯に伴う礎石列と柱穴列が検出され、1号窯とほぼ同規模の覆屋が建っていたと推定される。窯体内からテストービス(40-5)と型紙刷の磁器碗2点(40-8・9)が出土している。

焼き損じた製品と窯道具を廃棄した物原が窯の西側に堆積する。物原の大部分は瓦に関連するもので、最下層から陶器や土器が出土した。この堆積状況と階段状の焼成室から1号窯は瓦窯であり、2号窯は陶器窯と推定される。物原のほか選別場や階段付近でも製品や窯道具が堆積する。出土した瓦は棧瓦を主体とし、ほかに軒棧瓦・鬼瓦・雁振瓦・熨斗瓦などが見つかっている。また瓦の成形技術を応用した、昭和銘を伴う陶製墓碑(41-5)と花入(42-22)が出土している。陶器の種類は豊富で、碗類・皿類・鉢類・甕類・壺類・瓶類・水注類・鍋類がある。なかでも茶碗・水指・懸水といった茶道具のセットが含まれるのが注目される。こうした製品には茶道具としての作行⁽⁴⁰⁾を踏まえたもので、ある程度習熟した陶工が製作したものと思われる。茶道具や黄釉製品(44-9、49-6)、浅丸形掬鉢(44-21～23・45-1～4)や半胴形甕(48-10～16)には出雲焼⁽⁴¹⁾の特徴がみられる。一方で「はんど」と呼ばれる胴丸形甕(48-1～7)や流し掛けの胴丸形甕(48-19)は石見焼にみられる器種である。これらのことから当遺跡における陶器生産は、出雲焼と石見焼の技術がそれぞれ持ち込まれた可能性が考えられ、「出雲から大田の間は、出雲焼と石見焼の陶工が入り混じる⁽⁴²⁾」状況を示している。

窯道具の大部分は瓦の窯詰め用いるモミツチであった。陶器では匣鉢(53-1～7)が出土したことから匣鉢積みが行われ、大小のヌケ(52-12、58-2)や丸ハマ(52-11)を使う天秤積みと併用していた様子がわかる。

1号窯は花入(42-22)に記載された紀年銘より昭和11年(1936)には操業していたことを示している。また操業当時を知る関係者と地元住民からの聞き取りでは、戦時中の生産統制により昭和14年(1939)頃に一時中断したが、その後再開したものの、昭和26年(1951)に廃窯となった⁽⁴³⁾。以上のことから、1号窯の操業時期は20世紀第2四半期頃と推定される。また2号窯は共伴する型紙刷の磁器碗(40-8・9)から19世紀第4四半期頃と推定される。

明治期に入るとそれまでの封建的な規制が消失して全国的に窯数が急増するが、当遺跡もその動向のなかに位置づけられる。この窯跡にみられる近代的な要素として、①釉薬に科学コバルトを使用(47-6、48-19)、②近代的なインフラ材である土管の生産(55-7、58-1)、③通煙設備の変化を示す煙突用瓦の生産(55-6)、④窯焚きの燃料として石炭の使用(SS05)、⑤土練機の導入(58-8・9、42-18)があげられる。①は2号窯、②～⑤は1号窯に関わる。一方で連房式登窯や成形技法といった基本的な生産技術は旧来のものを踏襲しており、生産される製品の大部分も近世以来のモデルを引き継ぐものである。当遺跡における窯業生産の近代化が部分的に進んだ様子を示している。

聞き取り調査では、この登窯に関連する遺構はそれぞれ乾燥場(SB01)・選別場(SS03)・石炭貯蔵所(SS05)に比定され、調査区外には関連する作業場・水箪場・土取り穴・詰所跡などが続いている(38図)。陶土は後背地の北側丘陵部で採掘されていたとのことである。山の斜面を下降しながら、順次、原料入荷―製品加工―出荷を行う合理的な配置となっている⁽⁴⁴⁾。

1号窯で生産された瓦は、遺跡周辺の祠や地藏堂に葺かれているのが散見された。この窯の瓦は

近郊の需要に応えていたといわれ、地元市場を中心に流通していたのではないと思われる。

当遺跡は石見焼と出雲焼のほぼ中間に位置し、明治期に双方の影響を受けた陶器業が成立した。昭和期には石州瓦窯に移行しているが、比較的残りの良い1号窯の窯構造を含め近世以来の生産技術を色濃く引き継ぐものであった。大田市久手地区における近代産業史の側面をうかがわせる事例である。

【註】

- (1) 『大角山遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会、1988年。
- (2) 松山智弘「大東式の再検討」『島根考古学会誌』8、島根考古学会、1992年。同氏の時期区分における「2期」に比定される。
- (3) 石の被熱状況と竈の造り替えの可能性については、大橋泰夫氏（島根大学法文学部教授）の指導を得た。
- (4) 岩橋孝典「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について―土製支脚・移動式竈を中心として―」『古代文化研究』11、島根県古代文化センター、2009年。岩橋孝典「土製支脚の分布状況と古代行政境界―6世紀～8世紀の出雲国東部・伯耆国西部の状況から―」『出雲国の形成と国府成立の研究―古代山陰地域の土器様相と領域性』島根県古代文化センター、2010年。『市井深田遺跡 荒横遺跡 鈴見B遺跡1区』島根県教育委員会、2014年。
- (5) 『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡』島根県教育委員会、1997年。『白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡・掘田ヶ谷遺跡・地蔵院遺跡・熊谷遺跡』島根県教育委員会、2002年。『屋敷古墳群・鋤崎古墳群・足頭古墳群・長迫古墳群・海部城跡・杵子観音Ⅰ古墳群・杵子観音Ⅱ遺跡』島根県教育委員会、2001年。『杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』斐川教育委員会2001年。
- (6) 上橋武氏（岡山県古代古備文化センター）の御教示による。
- (7) 穴沢義功1984「製鉄遺跡からみた鉄生産の展開」『季刊考古学』8、上橋武2001「横口式窯跡の基礎的研究」(『たたら研究』41)。典型としてあげられるのは津山市の緑山遺跡で、製鉄炉2基に横口付炭窯9基が伴うという。
- (8) 『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―掘田上・今佐屋山・米屋山遺跡の調査―』、島根県教育委員会、1991年。勝部衛「玉湯町玉ノ宮地区製鉄遺跡の調査」『古代金属生産の地域的特性に関する研究―1山陰地方の銅・鉄を中心にして―』1992年。『羽森第2・第3遺跡発掘調査報告書』掛合町教育委員会、1998年。『粟目Ⅰ遺跡・粟目Ⅱ遺跡』島根県教育委員会、2013年。
- (9) 茶道具としての形状・釉薬・色調・土質といった特徴を踏まえた出来具合。
- (10) 近世以降、旧出雲国内に成立した陶窯。
- (11) 故山本梅生氏（松溪山窯元）の御教示による。
- (12) 金子徹克氏、岡田達己氏、根宜康男氏の御教示による。
- (13) 田中義昭氏の御教示による。

参考文献

- 『石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会、1992年
- 『平野窯跡』浜田市教育委員会、2005年
- 『石見焼関連遺跡調査報告 1(飯田 A 遺跡・長東坊師窯跡)』島根県教育委員会、2001年
- 渡辺芳郎「鹿児島における窯業の近代化 - その考古学的アプローチのための素描 -」『鹿児島考古』第 44 号、2015 年
- 『京都府宇治市 炭山窯 SUMIYAMA KAMA - 近代京焼登窯の構造 -』大手前大学史学研究所研究報告第 16 号、大手前大学史学研究所 2015 年

第7章 自然科学分析

神谷遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

神谷遺跡は、鳥根県大田市久手町波根西 2537-3 外 (北緯 35° 13' 21", 東経 132° 31' 15") に所在する。測定対象試料は、炭窯から出土した木炭 3 点である (表 1)。

試料が出土した炭窯の年代は、1 号と 4 号炭窯が 7 ~ 8 世紀、2 号炭窯が 8 世紀と推定され、4 号炭窯は他の 2 基より先行するとされる。

2 測定の意義

炭窯の操業年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 $1\text{mol}/\ell$ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) δ 13C は、試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) 14C年代 (Libby Age:yrBP) は、過去の大気中 14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。14C年代は δ 13Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい(14Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(14Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も δ 13Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 δ 13C補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCal4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の14C年代は、No.1、2が 1310 ± 20 yrBP、No.3が 1320 ± 20 yrBPとなっており、3点とも誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で一致する。暦年較正年代(1σ)は、No.1が664~762cal AD、No.2が664~761cal AD、No.3が661~761cal ADの間に各々複数の範囲で示される。3点とも推定される年代に一致するが、ほぼ同年代となっており、炭素間の前後関係を年代値上に認めることは難しい。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

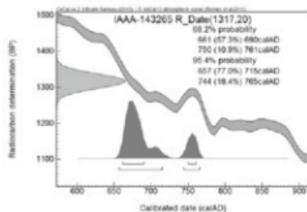
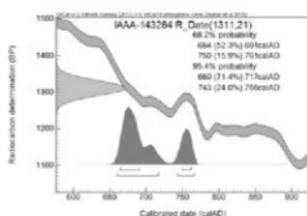
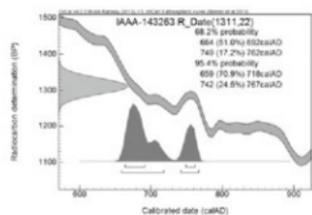
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869-1887
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data. Radiocarbon 19(3), 355-363

1.

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正済み	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-143263	No.1	1号炭室 竈底前直上の炭堆積層	木炭	AAA	-31.52 ± 0.33	1,310 ± 20	84.94 ± 0.24
IAAA-143264	No.2	2号炭室 竈底前直上の炭堆積層	木炭	AAA	-28.88 ± 0.28	1,310 ± 20	84.94 ± 0.23
IAAA-143265	No.3	4号炭室 竈底前直上の炭堆積層	木炭	AAA	-26.96 ± 0.32	1,320 ± 20	84.88 ± 0.22

2.

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-143263	1,420 ± 20	83.81 ± 0.23	1,311 ± 22	664calAD - 692calAD (51.0%)	659calAD - 718calAD (70.9%)
				749calAD - 762calAD (17.2%)	742calAD - 767calAD (24.5%)
IAAA-143264	1,380 ± 20	84.26 ± 0.22	1,311 ± 21	664calAD - 691calAD (52.3%)	660calAD - 717calAD (71.4%)
				750calAD - 761calAD (15.9%)	743calAD - 766calAD (24.0%)
IAAA-143265	1,350 ± 20	84.54 ± 0.21	1,317 ± 20	661calAD - 690calAD (57.3%)	657calAD - 715calAD (77.0%)
				750calAD - 761calAD (10.9%)	744calAD - 765calAD (18.4%)



図版：暦年較正グラフ（参考）

採出番号	遺跡番号	出土位置	種別	器種	法量				胎土	成形	胎薬	文様	装飾	産地	年代	備考		
					A	B	C	D										
42	12	笑口付込	磁器	早稲飯	-	-	-	-	白色	轆轤成形	透写彫-化学コバルト・フロム	刺繍文・刺繍七宝	刺繍彫	多治産・美濃	19世紀前半代	-		
42	13	笑口付込	磁器	皿	-	-	8.4	-	白色	轆轤成形	透写彫-高透	平瀬	漆付	京都系	19世紀後半～19世紀前半代	-		
42	14	笑口付込	磁器	皿	-	-	-	-	白色	轆轤成形	透写彫-高透	山本又八	染付	京都系	19世紀前半代	-		
42	15	笑口付込	磁器	皿	-	-	12.2	-	白色	轆轤成形	透写彫-化学コバルト	墨文	コバルト染付	信濃有田	19世紀後半～19世紀前半代	二重高台		
42	16	笑口付込	磁器	平茶碗高足	-	-	11.0	-	白色	轆轤成形	透写彫-化学コバルト	墨文	コバルト染付	信濃有田	19世紀後半～19世紀前半代	-		
42	17	笑口付込	磁器	燗徳利	-	-	-	-	白色	轆轤成形	透写彫-化学コバルト	竹葉文	刺繍彫	信濃有田	19世紀後半～19世紀前半代	-		
42	18	笑口付込	磁器	餅子	-	-	5.6	3.6	白色	揉込み成形	透写彫	-	平瀬	京都系	19世紀後半～19世紀前半代	-		
42	19	5000	陶器	浅鉢形煎鍋	-	-	4.8	-	灰色	轆轤成形	灰釉	-	-	京都系	2号窯	-		
42	20	5000	陶器	土瓶・壺	8.8	2.2	4.8	-	灰色	轆轤成形	青磁釉	-	-	金子家	2号窯	-		
42	21	5000	陶器	徳利	-	-	13.4	-	灰色	轆轤成形	灰釉	-	-	金子家	-	-		
42	22	5000	陶器	餐前花入	8.5	2.7	13.5	-	淡青色	製作引・貼付造	染付彫	-	-	金子家	昭和11年	需用・福新「昭和十一年 八月 〇〇〇〇 〇〇〇〇」の文庫		
42	23	5000	瓦	瓦体のみ	-	-	-	-	13.8	淡青色	9つ作り	染付彫	裏面三日月	神谷	金子家	2号窯	図5-12図別	
42	24	5000	瓦道具	煎釜	-	-	-	-	灰褐色	轆轤成形	-	-	-	金子家	2号窯	-		
43	1	物産	陶器	丸形碗	10.7	4.8	5.5	-	淡青色	轆轤成形	染付彫	-	-	金子家	-	-		
43	2	物産	陶器	丸形碗	10.9	5.5	5	-	淡青色	轆轤成形	染付彫	-	-	金子家	-	-		
43	3	物産	陶器	丸形碗	10.5	4.8	4.8	-	淡青色	轆轤成形	青磁釉	-	-	金子家	2号窯	高台内二重特懸で「中」字		
43	4	物産	陶器	丸形碗	11.0	-	-	-	褐色	轆轤成形	染付彫	-	-	金子家	-	-		
43	5	物産	陶器	球反形碗	11.0	-	-	-	灰色	轆轤成形	染付彫	-	-	金子家	-	-		
43	6	物産	陶器	球反形碗	-	-	3.2	-	灰褐色	轆轤成形	染付彫	-	-	金子家	-	-		
43	7	物産	陶器	球反形碗	-	-	4.8	-	灰色	轆轤成形	染付彫	-	-	金子家	-	-		
43	8	物産	陶器	球反形碗	-	-	4.4	-	黄灰色	轆轤成形	染付彫	-	-	金子家	-	右側縁に球反付付		
43	9	物産	陶器	丸形碗	-	-	4.6	-	灰色	轆轤成形	目録×2	灰釉	-	-	金子家	-	-	
43	10	物産	陶器	燈形煎鍋	11.2	-	-	-	灰色	轆轤成形	染付彫	-	-	金子家	2号窯	-		
43	11	物産	陶器	燈形煎鍋	10.6	-	-	-	灰色	轆轤成形	染付彫	-	-	金子家	2号窯	-		
43	12	物産	陶器	燈形煎鍋	12.2	-	-	-	白色	轆轤成形	-	-	刺繍目	金子家	2号窯	-		
43	13	物産	陶器	燈形煎鍋	-	-	5.2	-	白色	轆轤成形	-	-	刺繍目	金子家	2号窯	-		
43	14	物産	陶器	燈形煎鍋	-	-	7.6	5	緑灰色	轆轤成形	灰釉	-	-	刺繍目・灯籠	金子家	2号窯	焼跡あり	
43	15	物産	陶器	燈形煎鍋	13.0	6	5.2	-	褐色	轆轤成形	灰釉	-	-	刺繍目・灯籠	金子家	2号窯	透射穿丸	
43	16	物産	陶器	燈形煎鍋	12.4	-	4.8	-	淡青色	轆轤成形	染付彫	-	-	刺繍目	金子家	2号窯	-	
43	17	物産	陶器	燈形煎鍋	12.7	7	5	-	淡青色	轆轤成形	染付彫	-	-	刺繍目・灯籠	金子家	2号窯	焼跡あり・右側縁に	
43	18	物産	陶器	燈形煎鍋	11.2	6.1	5.8	-	緑灰色	轆轤成形	長石粉・白化粧土	-	-	びつ刺し・灯籠・白化粧	金子家	2号窯	焼跡あり・右側縁に	
43	19	物産	陶器	平鉢形碗	10.6	7.1	5.2	-	白色・黄	轆轤成形	灰釉	刺繍目	刺繍目	金子家	2号窯	-		
43	20	物産	陶器	煎鉢形碗	11.0	9.8	6.2	-	淡青色	轆轤成形	-	刺繍目	刺繍目・灯籠	金子家	2号窯	-		
43	21	物産	陶器	煎鉢形碗	-	-	5.3	-	白色	轆轤成形	-	-	刺繍目	金子家	2号窯	-		
43	22	物産	陶器	煎鉢形碗	-	-	4.8	-	灰色	轆轤成形	灰釉・染付彫	-	-	うのふ刺・灯籠	金子家	2号窯	焼跡あり・内割二重	
44	1	物産	陶器	煎鉢形碗	-	-	4.5	-	灰色	轆轤成形	透写彫	-	-	刺繍目	金子家	2号窯	-	
44	2	物産	陶器	煎鉢形碗	-	-	5.6	-	灰色	轆轤成形	灰釉・染付彫	-	-	うのふ刺・灯籠	金子家	2号窯	-	
44	3	物産	陶器	平鉢形碗	-	-	5.2	-	淡青色	轆轤成形	染付彫	-	-	刺繍目	金子家	2号窯	-	
44	4	物産	陶器	煎鉢形碗	-	-	5.2	-	灰色	轆轤成形	灰釉・染付彫	-	-	うのふ刺・刺繍目・灯籠	金子家	2号窯	焼跡あり	
44	5	物産	陶器	丸形盆	10.0	-	-	-	乳白色	轆轤成形・切目割削子	灰釉	-	-	-	金子家	2号窯	-	
44	6	物産	陶器	丸形盆	10.6	3	4.4	-	淡青色	轆轤成形・切目割削子	灰釉	-	-	-	金子家	2号窯	-	
44	7	物産	陶器	丸形盆	10.2	3.1	4.4	-	淡青色	轆轤成形・切目割削子	灰釉	-	-	-	金子家	2号窯	-	
44	8	物産	陶器	煎鉢形碗	-	-	8.0	-	淡青色	轆轤成形	-	-	-	-	金子家	2号窯	-	
44	9	物産	陶器	木蓋煎鉢	-	-	-	-	淡青色	押印成形	黄釉・灰釉	木蓋文	押印彫刺文	金子家	2号窯	-		
44	10	物産	陶器	蓋平蓋煎鉢	14.8	-	-	-	灰色	轆轤成形	白化粧・灰釉	-	-	刺繍目	金子家	2号窯	清水	
44	11	物産	陶器	蓋平蓋煎鉢	12.4	-	-	-	灰色	轆轤成形	染付彫	-	-	高台・押印	金子家	2号窯	清水	
44	12	物産	陶器	蓋平蓋煎鉢	15.0	-	-	-	灰色	轆轤成形	染付彫	-	-	押印	金子家	2号窯	清水	
44	13	物産	陶器	蓋平蓋煎鉢	-	-	8.0	-	灰色	轆轤成形	染付彫	-	-	-	金子家	2号窯	清水	
44	14	物産	陶器	蓋平蓋煎鉢	15.2	8.4	8.8	-	淡青色	轆轤成形	目録×4	灰釉・灰釉	-	-	押印・平蓋裏面木蓋	金子家	2号窯	清水
44	15	物産	陶器	蓋平蓋煎鉢	-	-	20.2	-	緑灰色	轆轤成形	白化粧土・灰釉	-	-	刺繍目	金子家	2号窯	清水	

標記 番号	遺物 番号	出土位置	種類	器種	寸法				胎土	成形	胎素	文様	装束	産地	年代	備考		
					A	B	C	D										
44	16	物原	陶器	水筒蓋	12.0	2.4	-	-	灰色	罐轆成形-紐付筒	黒瓦胎	-	-	金子塚	2号窯	内面に緑釉の破片が埋 入。17号中ナ。		
44	17	物原	陶器	色絵磁石水筒	14.0	-	10.0	-	灰色	罐轆成形-口縁×1	黒瓦胎	-	押込	金子塚	2号窯	-16号中ナ		
44	18	物原	陶器	蓮丸形甕鉢	11.2	-	-	-	灰色	罐轆成形	灰胎-黒持胎	-	流し掛付	金子塚	-	-		
44	19	物原	陶器	丸形甕鉢	-	-	-	-	灰色	罐轆成形	灰胎	-	-	金子塚	-	植物家形		
44	20	物原	陶器	丸形甕鉢	-	-	-	-	灰色	罐轆成形	灰胎	-	-	金子塚	-	植物家形		
44	21	物原	陶器	蓮丸形甕鉢	20.4	-	-	-	緑灰色	罐轆成形	灰胎	-	-	金子塚	-	-		
44	22	物原	陶器	蓮丸形甕鉢	32.0	-	-	-	灰白色	罐轆成形	灰胎	-	-	金子塚	-	-		
44	23	物原	陶器	蓮丸形甕鉢	-	-	13.0	-	緑灰色	罐轆成形-口縁×1	灰胎	-	-	金子塚	-	-		
45	1	物原	陶器	蓮丸形甕鉢	31.0	6.6	15.0	-	薄灰褐色	罐轆成形-口縁×2	灰胎	-	-	金子塚	-	-		
45	2	物原	陶器	蓮丸形甕鉢	35.0	7.5	19.4	-	灰白色	罐轆成形-口縁×2	灰胎	-	-	金子塚	-	-		
45	3	物原	陶器	蓮丸形甕鉢	-	-	15.2	-	薄灰褐色	罐轆成形-口縁×4	灰胎	-	-	金子塚	-	-		
45	4	物原	陶器	蓮丸形甕鉢	-	-	14.4	-	緑灰色	罐轆成形-口縁×1	灰胎	-	-	金子塚	-	-		
45	5	物原	陶器	蓮丸形甕鉢	49.8	17.2	20.0	-	灰褐色	捺作り-付蓋台	黒持胎	-	-	金子塚	-	-		
45	6	物原	陶器	玉縁形甕鉢	18.2	-	-	-	薄褐色	罐轆成形	黒持胎	-	-	金子塚	-	標目8号単位		
45	7	物原	陶器	玉縁形甕鉢	34.4	-	-	-	灰褐色	捺作り成形	黒持胎	-	-	金子塚	-	標目8号単位		
45	8	物原	陶器	華縁形甕鉢	36.6	-	-	-	淡灰褐色	捺作り成形	黒持胎	-	-	金子塚	-	標目10号単位		
45	9	物原	陶器	折縁有孔甕鉢	32.8	17.2	16.1	-	灰色	捺作り成形-付蓋台	黒持胎	-	-	金子塚	1号窯	標目24号単位-成形 有孔		
45	10	物原	陶器	有孔甕鉢	-	-	17.4	-	灰褐色	捺作り成形-付蓋 台-口縁×4	黒持胎	-	-	金子塚	1号窯	標目10号単位-成形 有孔		
46	1	物原	陶器	丸形甕鉢	16.2	-	-	-	灰白色	罐轆成形	青緑胎	-	-	青地	金子塚	2号窯		
46	2	物原	陶器	丸形甕鉢	15.0	8.3	7.9	-	灰褐色	罐轆成形	灰胎-白化粧土	-	-	七郎新ヶ	金子塚	-		
46	3	物原	陶器東地	丸形甕鉢	-	-	12.0	-	白色	罐轆成形	-	-	-	金子塚	-	内面に緑釉の破片が埋 入		
46	4	物原	陶器	精形甕鉢	16.0	-	-	-	褐色	罐轆成形	黒持胎	-	-	金子塚	-	磨痕不良ナ		
46	5	物原	陶器	精形甕鉢	-	-	8.3	-	褐色	罐轆成形	黒持胎	-	-	金子塚	-	磨痕不良ナ		
46	6	物原	陶器	精形甕鉢	16.0	-	-	-	褐色	罐轆成形	黒持胎	-	-	金子塚	-	磨痕不良ナ		
46	7	物原	土器	精形甕鉢	-	-	8.2	-	褐色	罐轆成形	-	-	-	金子塚	-	磨痕不良ナ		
46	8	物原	陶器	精形甕鉢	-	-	9.0	-	褐色	罐轆成形	黒持胎	-	-	金子塚	-	磨痕不良ナ		
46	9	物原	陶器	精形甕鉢	17.6	-	-	-	灰色	罐轆成形	灰胎	-	-	金子塚	2号窯	-		
46	10	物原	陶器	精形甕鉢	-	-	-	-	灰褐色	罐轆成形	青緑胎	-	-	青地	金子塚	2号窯	外面に緑釉の破片が埋 入	
46	11	物原	陶器	精形甕鉢	-	-	-	-	灰褐色	罐轆成形	青緑胎	-	-	青地	金子塚	2号窯	-	
46	12	物原	陶器	精形甕鉢	-	-	8.0	-	灰白色	罐轆成形	灰胎	-	-	青地	金子塚	2号窯	-	
46	13	物原	陶器	精形甕鉢	17.8	-	9.4	-	灰白色	罐轆成形	灰胎-白化粧土	-	-	七郎新ヶ	金子塚	2号窯	-	
46	14	物原	陶器	精形甕鉢	17.8	8.8	6.0	-	灰白色	罐轆成形	灰胎-白化粧土	-	-	七郎新ヶ	金子塚	2号窯	内面に粘土の破片が 付着	
46	15	物原	陶器	精形甕鉢	17.8	9.9	7.8	-	薄褐色	罐轆成形	黒胎	-	-	金子塚	2号窯	-		
46	16	物原	陶器	精形甕鉢	18.0	9.0	8.0	-	薄褐色	罐轆成形	青緑胎	-	-	金子塚	2号窯	口縁部に緑釉の破片が 付着		
47	1	物原	陶器東地	精形甕鉢	21.0	-	-	-	白色	罐轆成形	-	-	-	金子塚	-	-		
47	2	物原	陶器東地	精形甕鉢	23.0	-	-	-	淡褐色	罐轆成形	-	-	-	金子塚	2号窯	-		
47	3	物原	陶器	精形甕鉢	20.0	-	-	-	薄褐色	罐轆成形	黒瓦胎-灰胎	-	-	金子塚	-	外面に赤鉄質の破片が 付着。内面に黒持 胎文字ナ。		
47	4	物原	陶器東地	精形甕鉢	-	-	13	-	灰白色	罐轆成形	-	-	-	金子塚	-	-		
47	5	物原	陶器東地	精形甕鉢	-	-	8.2	-	褐色	罐轆成形	-	-	-	金子塚	-	-		
47	6	物原	陶器	精形甕鉢	35.6	-	-	-	褐色	罐轆成形	透漉製-毛字ナ(丸 下)-白化粧土	雉子文	-	流漉製-同 定-白化粧土	金子塚	-	-	
47	7	物原	陶器	頭丸形火鉢	10.0	-	-	-	灰色	罐轆成形	青緑胎	-	-	金子塚	2号窯	-		
47	8	物原	陶器東地	頭形火鉢	-	-	15.2	-	灰白色	罐轆成形-紐付筒	-	-	-	金子塚	-	-		
47	9	物原	陶器	頭形火鉢	30.4	-	-	-	灰色	罐轆成形-紐付	黒持胎-灰胎	-	-	灰釉敷付	金子塚	2号窯	11号同一器種	
47	10	物原	陶器	頭形火鉢	-	-	-	-	灰色	罐轆成形-紐付	黒持胎-灰胎	-	-	灰釉敷付	金子塚	2号窯	10号同一器種	
47	11	物原	陶器	頭丸形火鉢	14.0	-	-	-	灰色	罐轆成形	灰胎	-	-	金子塚	2号窯	外面に緑釉の破片が 埋入		
47	12	物原	陶器	頭丸形火鉢	-	-	13.4	-	灰色	罐轆成形-紐付筒	灰胎	-	-	金子塚	2号窯	-		
47	13	物原	陶器	頭形火鉢	34.0	-	-	-	薄灰褐色	罐轆成形	黒持胎	-	-	条線文	七郎新ヶ	金子塚	-	
47	14	物原	陶器	頭丸形火鉢	34.0	-	-	-	褐色	罐轆成形	黒持胎	-	-	金子塚	-	-		
47	15	物原	陶器	火鉢	-	-	-	-	薄褐色	罐轆成形-紐付筒	黒胎-黒胎	-	-	七郎新ヶ	金子塚	2号窯	黒胎	
47	16	物原	陶器	火鉢	-	-	-	-	薄褐色	罐轆成形-紐付筒	黒胎-黒胎	-	-	七郎新ヶ	金子塚	2号窯	黒胎	
48	1	物原	陶器	頭丸形甕	11.5	-	-	-	淡褐色	罐轆成形	黒持胎	-	-	条状文	標目	金子塚	2号窯	-
48	2	物原	陶器	頭丸形甕	22.2	-	-	-	灰褐色	罐轆成形	黒持胎	-	-	条状文	標目	金子塚	2号窯	-
48	3	物原	陶器	頭丸形甕	25.4	-	-	-	灰褐色	捺作り	黒持胎	-	-	条状文-条線文	標目	金子塚	2号窯	-
48	4	物原	陶器	頭丸形甕	-	-	-	-	灰褐色	捺作り	黒持胎	-	-	条状文-条線文	標目	金子塚	2号窯	内面に赤鉄質の破片が 付着。植物家形
48	5	物原	陶器	頭丸形甕	-	-	-	-	灰褐色	捺作り	黒持胎	-	-	条状文	標目	金子塚	2号窯	植物家形
48	6	物原	陶器	頭丸形甕	37.2	-	-	-	灰褐色	捺作り	黒持胎	-	-	条状文-条線文	標目	金子塚	2号窯	磨痕および断面に 灰胎付着

採出 番号	遺物 番号	出土位置	種類	器種	度量				胎土	成形	胎薬	文様	装飾	産地	年代	備考
					A	B	C	D								
46	7	物原	陶器	須丸形壺	30.2	-	-	-	灰白色	捺作付	灰被胎	波状文・条線文	模目	金宇家	2号裏n	-
46	8	物原	陶器	(須丸形)壺	-	-	18.4	-	灰褐色	捺作付・青白土被・ 目録×1	灰被胎	-	-	金宇家	2号裏n	-
46	9	物原	陶器	(須丸形)壺	-	-	18.6	-	灰褐色	捺作付・目録(内) ×2、(透)×4	灰被胎	-	-	金宇家	2号裏n	-
46	10	物原	陶器	半梨形壺	22.2	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	11	物原	陶器	半梨形壺	-	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	12	物原	陶器	半梨形壺	20.2	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	13	物原	陶器	半梨形壺	23.4	20.7	19.0	-	深褐色	糊羅成胎・泥ノ目 黒土	灰被胎	灰被胎・白化粧土	-	金宇家	-	-
46	14	物原	陶器	半梨形壺	-	-	17.0	-	灰褐色	糊羅成胎・目録×2	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	15	物原	陶器	半梨形壺	-	-	11.0	-	灰赤褐色	糊羅成胎・目録×1	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	16	物原	陶器	(半梨形)壺	-	-	27.8	-	深黄褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	信成平瓦
46	17	物原	陶器	筒形壺	7.6	-	-	-	灰白色	糊羅成胎	灰被胎	-	朱目	金宇家	-	-
46	18	物原	陶器	壺	-	-	12.8	深褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	-	金宇家	-	大黒丸
46	19	物原	陶器	須丸形壺	-	-	14.8	-	灰白色	糊羅成胎・(内)青 目録	科学コ/ムト・透被胎	-	流し取付	金宇家	-	須部瓦版
46	20	物原	陶器	壺	-	-	9.8	-	深褐色	糊羅成胎・目録×1	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	1	物原	陶器	徳利	3.0	-	-	-	灰白色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	2	物原	陶器	徳利	7.0	-	-	-	灰白色	糊羅成胎	灰被胎	灰被胎・蒸気胎	灰被胎	金宇家	-	-
46	3	物原	陶器	徳利	-	-	-	-	灰白色	糊羅成胎	灰被胎	灰被胎	5のふ輪	金宇家	-	-
46	4	物原	陶器	鎌倉形徳利	-	-	-	-	灰白色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	5	物原	陶器	鎌倉形徳利	-	-	8.0	-	灰白色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	6	物原	陶器	鎌倉形徳利	-	-	11.0	-	灰黄色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	大鉢徳利付磁器
46	7	物原	陶器	徳利+	-	-	8.4	-	灰褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	大黒丸
46	8	物原	陶器	徳利	-	-	6.6	-	灰白色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	9	物原	陶器	徳利	-	-	7.4	-	灰褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	10	物原	陶器	徳利	-	-	6.6	-	灰褐色	糊羅成胎	透被胎	-	-	金宇家	-	-
46	11	物原	陶器	徳利形瓶	-	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	透香n
46	12	物原	陶器	徳利形瓶	-	-	6.4	-	灰褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	透香n
46	13	物原	陶器	梨形花入	6.0	-	-	-	灰褐色	捺作付成胎	灰被胎	-	-	金宇家	1号裏	蓋用・信成平瓦
46	14	物原	陶器	梨形花入	6.9	2.1	10.8	-	灰白色	糊羅成胎・アノミ子 目録	灰被胎	-	-	金宇家	1号裏	蓋用
46	15	物原	陶器	梨形花入	-	-	-	-	深褐色	捺作付成胎	灰被胎	-	-	金宇家	1号裏	蓋用・信成平瓦
46	16	物原	陶器	梨形花入	-	-	8.6	-	灰白色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	1号裏n	蓋用
46	17	物原	陶器	随光形土瓶	7.8	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎	青被胎	-	青地	金宇家	2号裏	-
46	18	物原	陶器	随光形土瓶	6.6	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎・貼付注 口	青被胎	-	青地	金宇家	2号裏	英蘭土瓶×13
46	19	物原	陶器	随光形土瓶	-	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎・貼付注 口	青被胎	-	青地	金宇家	2号裏	英蘭土瓶×17
46	20	物原	陶器	莖梨形土瓶	9.8	-	-	18.4	灰褐色	糊羅成胎	黄胎・鉄胎	不明	鉄結	金宇家	-	-
46	21	物原	陶器	莖梨形土瓶	-	-	7.4	-	深褐色	糊羅成胎	黄被胎	-	-	金宇家	-	-
46	22	物原	陶器	土瓶	9.6	2.1	5.0	-	灰褐色	糊羅成胎・貼付注 口	灰被胎・青被胎	泥ノ目文	-	金宇家	2号裏	-
46	23	物原	陶器	土瓶	9.2	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
46	24	物原	陶器	莖梨形土瓶	9.0	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎	青被胎	-	青地	金宇家	2号裏	-
50	1	物原	陶器	行平蓋	14.8	3.8	4.6	-	灰褐色	糊羅成胎・泥ノ目 録取付	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
50	2	物原	陶器	行平蓋	13.2	3.6	5.0	-	深灰褐色	糊羅成胎・泥ノ目 録取付	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
50	3	物原	陶器	行平蓋	-	-	5.8	-	深褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
50	4	物原	陶器	丸形行平	16.6	-	-	-	灰白色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
50	5	物原	陶器	丸形行平	18.1	-	-	-	深褐色	糊羅成胎・貼付注 口	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
50	6	物原	陶器	丸形行平	-	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎・貼付注 口	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
50	7	物原	陶器	(蓋物)蓋	-	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎・貼付注 口	灰被胎	-	-	金宇家	-	別録徳利付磁器
50	8	物原	陶器	蓋	8.6	-	6.8	-	赤褐色	糊羅成胎	灰被胎	-	-	金宇家	-	-
50	9	物原	陶器	不明	-	-	-	-	灰褐色	捺作付	黄胎	-	-	金宇家	-	-
50	10	物原	土器	平形片口	10.0	-	-	-	灰白色	糊羅成胎	-	-	-	金宇家	-	-
50	11	物原	土器品	守子	9.8	1.6	9.6	-	灰褐色	捺作付	-	-	-	金宇家	1号裏n	-
50	12	物原	土器品	守子	13.6	3.6	9.0	-	灰褐色	糊羅成胎	-	-	-	金宇家	1号裏	丸×2
50	13	物原	土器	火鉢・徳利	-	-	28.0	-	褐色	糊羅成胎・貼付	-	-	-	金宇家	-	丸×11・二重蓋
50	14	物原	土器	火洲壺	21.4	3.9	17.0	-	灰白色	糊羅成胎・貼付注	-	-	-	金宇家	1号裏n	-
50	15	物原	土器	火洲壺	17.2	-	-	-	灰褐色	糊羅成胎	-	-	-	金宇家	1号裏n	-
50	16	物原	土器	火洲壺	19.4	-	-	-	深黄褐色	捺作付(取付)	-	-	-	金宇家	1号裏	-
50	17	物原	土器	火洲壺	-	-	15.7	-	灰褐色	糊羅成胎・静止止 付	-	-	-	金宇家	1号裏	-
51	1	物原	土器	漢丸形磁器	28.8	-	-	-	灰白色	捺作付	-	-	-	金宇家	1号裏n	-
51	2	物原	土器	漢丸形磁器	35.8	-	-	-	灰白色	捺作付	-	-	-	金宇家	1号裏n	-

棟号 建物 番号	出土位置	種別	器種	法量			胎土	成形	胎素	文様	装飾	産地	年代	備考	
				A	B	D									
31	3	物器	土器	黒丸形磁器	342	-	-	淡青色	胎作り	-	-	合子窯	1945年	-	
31	4	物器	土器	蓋	252	-	-	淡青色	胎作り-胎付足	-	-	合子窯	-	-	
31	5	物器	土器	蓋	-	-	5.0	淡青色	襷織成形	-	-	合子窯	-	-	
31	6	物器	土器	蓋	36.4	43	22.0	淡青色	胎作り-胎付足	-	-	合子窯	1945年	境内(新宮「□□」)	
31	7	物器	土製品	蓋	-	-	-	灰白色	襷織成形-胎付足	-	-	合子窯	1945年	-	
31	8	物器	家道具	テスミンソング	-	38	3.3	灰白色	手捏ね	反輪	-	合子窯	2945年	試陶片	
31	9	物器	家道具	テスミンソング	-	-	-	淡青色	手捏ね	反輪	-	合子窯	2945年	試陶片	
31	10	物器	家道具	箱トナシ(明香ハバ)	6	6	0.0	薄青色	襷織成形	-	-	合子窯	2945年	-	
31	11	物器	家道具	足付トナシ(足付ハバ)	48	47	1.7	薄青色	襷織成形-胎付足	-	-	合子窯	2945年	足×1	
31	12	物器	家道具	足付トナシ(足付ハバ)	44	43	1.8	薄青色	襷織成形-胎付足	-	-	合子窯	2945年	足×2	
31	13	物器	家道具	足付トナシ(足付ハバ)	46	45	1.6	薄青色	襷織成形-胎付足	-	-	合子窯	2945年	足×3	
31	14	物器	家道具	足付トナシ(足付ハバ)	42	41	2.2	薄青色	襷織成形-胎付足	-	-	合子窯	2945年	足×5	
31	15	物器	家道具	箱トナシ	5	5	1.2	薄青色	襷織成形	-	-	合子窯	2945年	葉巻筒が付着	
31	16	物器	家道具	箱トナシ	10.4	10.4	1.5	薄青色	襷織成形	-	-	合子窯	2945年	-	
31	17	物器	家道具	箱トナシ	9.1	9.1	1.3	淡青色	襷織成形	-	-	合子窯	2945年	破木録破片が認め	
31	18	物器	家道具	足付箱トナシ	102	102	2.7 (4.2)	灰色	襷織成形-胎付足	-	-	合子窯	2945年	粘土層が付着-青緑粉状物。足×5	
31	19	物器	家道具	足付箱トナシ	13.8	13.8	3.6	灰白色	襷織成形-胎付足	-	-	合子窯	-	足×6	
31	1	物器	家道具	箱トナシ(ソビ)	8.7	5.8	0.5	2.2 淡灰黄色	襷織成形	-	-	合子窯	2945年	足×6-破木録足縁	
32	2	物器	家道具	箱トナシ(ソビ)	10.4	3.8	0.2	3.0 淡灰黄色	襷織成形	-	-	合子窯	2945年	足×2-内面に破木録破片が認め	
32	3	物器	家道具	箱トナシ(ソビ)	10	41	3.0	2.8 淡灰黄色	襷織成形	-	-	合子窯	2945年	足×6-破木録破片が認め	
32	4	物器	家道具	箱トナシ(ソビ)	12.6	4	3.0	4.0 橙褐色	襷織成形	-	-	合子窯	-	足×3-アルミ箔付	
32	5	物器	家道具	箱トナシ(ソビ)	18.1	6.4	15.4	6.0 橙褐色	襷織成形	-	-	合子窯	-	足×8	
32	6	物器	家道具	箱トナシ(ソビ)	16.8	10.4	12.4	6.0 橙褐色	襷織成形	-	-	合子窯	-	足×7	
32	7	物器	家道具	箱トナシ	5.1	3.1	0.6	3.4 灰白色	襷織成形	-	-	合子窯	-	-	
32	8	物器	家道具	箱トナシ	22.0	2.5	23.6	10.2 淡黄褐色	襷織成形	-	-	合子窯	-	-	
32	9	物器	家道具	箱トナシ	16.7	6.1	14.5	9.2 灰色	襷織成形	-	-	合子窯	-	-	
32	10	物器	家道具	箱トナシ(ソビ)	-	-	15.2	薄青色	襷織成形	-	-	合子窯	-	-	
32	11	物器	家道具	箱トナシ(丸ハバ)	16.8	16.0	2.5	3.0 淡黄褐色	赤点	-	-	合子窯	2945年	-	
32	12	物器	家道具	トナシ	13.0	22.4	12.6	3.0 淡黄褐色	襷織成形	-	-	合子窯	-	-	
33	1	物器	家道具	漆鉢蓋	28.0	45	11.2	-	淡青色	襷織成形	-	合子窯	2945年	-	
33	2	物器	家道具	漆鉢蓋	-	-	-	灰色	襷織成形	-	-	合子窯	2945年	破木録破片-内面に胎付足	
33	3	物器	家道具	黒丸形漆鉢	27.0	-	-	-	薄青色	胎作り成形	-	合子窯	-	上下両側に字跡あり	
33	4	物器	家道具	黒丸形漆鉢	-	21.6	-	-	薄青色	胎作り成形	-	合子窯	-	穴×1	
33	5	物器	家道具	黒丸形漆鉢	-	20.0	-	-	薄青色	胎作り成形	-	合子窯	-	穴×1	
33	6	物器	家道具	黒丸形漆鉢	25.2	63	24.0	-	黄灰色	襷織成形	-	合子窯	-	穴×2-白色粘土塗色	
33	7	物器	家道具	黒丸形漆鉢	-	-	-	-	淡青色	襷織成形	-	合子窯	-	穴×12	
33	8	物器	家道具	土漆鉢	30.4	15.0	17.0	-	淡黄褐色	胎作り成形	-	合子窯	1945年	-	
33	9	物器	家道具	土漆鉢	34.0	15.0	19.0	-	淡黄褐色	胎作り成形	-	合子窯	1945年	-	
33	10	物器	家道具	土漆鉢	-	-	17.6	-	淡青色	胎作り成形	-	合子窯	1945年	-	
34	1	物器	瓦	軒杭瓦	-	26.5	1.8	-	淡黄褐色	タタラ作り	葉持輪	遠東文物。	1945年	釘穴×2	
34	2	物器	瓦	軒杭瓦	-	-	-	-	薄青色	タタラ作り	葉持輪	-	合子窯	-	破瓦が埋着
34	3	物器	瓦	軒杭瓦	-	-	1.0 (4.3)	-	黄褐色	タタラ作り	葉持輪	遠東文物。	1945年	1945年	-
34	4	物器	瓦	軒杭瓦	31.7	27	1.8	-	薄青色	タタラ作り	葉持輪	1945年	1945年	-	
34	5	物器	瓦	軒杭瓦	38.2	25	1.6	-	淡青色	タタラ作り	葉持輪	-	合子窯	1945年	原形が状態で埋着- 破瓦×14
34	6	-	瓦	軒杭瓦	23.6	20	1.7	-	淡青色	タタラ作り	葉持輪	-	合子窯	1945年	釘穴×1
34	7	物器	瓦	軒杭瓦	30	14.4	2	-	褐色	タタラ作り	葉持輪	遠東三巴文	1945年	1945年	穴×2
34	8	物器	陶器	土器	-	-	-	-	灰色	タタラ作り	葉持輪	-	合子窯	1945年	破瓦の埋着物あり
34	9	物器	瓦	軒杭瓦	-	14.5	1.8	-	淡青色	タタラ作り	葉持輪	遠東三巴文	1945年	1945年	-
34	10	物器	瓦	軒杭瓦	-	14	1.8	-	黄灰色	タタラ作り	葉持輪	遠東三巴文	1945年	1945年	-
35	1	物器	瓦	破止瓦	28.3	23.7	1.6	-	淡青色	タタラ作り	葉持輪	遠東三巴文	1945年	1945年	高低あり
35	2	物器	瓦	破止瓦	32.8	22.2	2	-	淡青色	タタラ作り	葉持輪	遠東三巴文	1945年	1945年	高低あり
35	3	物器	瓦	隅形滑山	33.7	22.1	2	9.5	淡青色	押型成形	葉持輪	遠東	1945年	1945年	墨輪裏付
35	4	物器	瓦	軒杭瓦	24.2	16	1.0	3.0	褐色	タタラ作り	葉持輪	-	合子窯	1945年	穴×2
35	5	物器	瓦	破止瓦	-	26	1.7	-	黄灰色	タタラ作り	葉持輪	-	合子窯	1945年	穴×1
35	6	物器	瓦	破止瓦	-	-	1.7	4.3	淡青色	タタラ作り	葉持輪	-	合子窯	1945年	-

種別 番号	造り 番号	出上位置	種別	器種	寸法				胎土	成形	胎薬	文様	装飾	産地	年代	備考
					A	B	C	D								
55	7	物産	陶器品類 地	土管	21.8	-	-	-	褐色	輪郭線作り成形	-	-	-	金子家	1994年	-
55	8	物産	陶器	土管	36.2	-	-	-	淡褐色	輪郭線作り成形	染付軸	-	-	金子家	1994年	清成平皿
55	9	物産	陶器具 (瓦)	モヒツチ	2.1	-	2.7	-	淡褐色	タタラ作り	-	-	-	金子家	1994年	焼瓦(庄瓦×1)
55	10	物産	陶器具 (瓦)	モヒツチ	4.2	-	2.5	-	淡褐色	タタラ作り	-	-	-	金子家	1994年	焼瓦(庄瓦×3)
55	11	物産	陶器具 (瓦)	モヒツチ	3.7	25.2	3.1	-	淡褐色	タタラ作り	-	-	-	金子家	1994年	焼瓦(庄瓦横敷)
55	12	物産	陶器具 (瓦)	モヒツチ	4.2	-	2.6	-	淡褐色	タタラ作り	-	-	-	金子家	1994年	焼瓦(庄瓦片が揃)
55	13	物産	陶器具 (瓦)	モヒツチ	4	-	3.1	-	淡褐色	タタラ作り	-	-	-	金子家	1994年	焼瓦(庄瓦×5)
55	14	物産	陶器具 (瓦)	(モヒツチ)	3.5	4.4	6.7	-	淡褐色	タタラ作り	-	-	-	金子家	1994年	-
55	15	物産	陶器具 (瓦)	ハセ	2.6	4.7	0.6	-	淡褐色	手捏ね	-	-	-	金子家	1994年	-
55	16	物産	陶器具	火立て	20.7	27	3.6	-	淡褐色	タタラ作り	-	-	-	金子家	1994年	-
56	1	物産	磁器	丸形碗	-	-	-	-	灰白色	輪郭成形	呉漆・透明釉	二重網目文	染付	紀前系 (奈良)	19世紀後半～	-
56	2	物産	磁器	平形深皿	9.4	-	-	-	白色	輪郭成形	化学コバルト・透明釉	点刺網文・線刺文	顔彩刷	佐賀県 佐賀市	19世紀末～	56-2セット
56	3	物産	磁器	平形碗	11.4	4.5	4.0	-	白色	輪郭成形	化学コバルト・透明釉	点刺網文・線刺文	顔彩刷	佐賀県 佐賀市	19世紀末～	56-2セット
56	4	物産	磁器	輪花形鉢	13.3	3	8.4	-	白色	輪郭型打ち成形	化学コバルト・透明釉	草書文	型刷	佐賀県 佐賀市	19世紀第4四半期	-
56	5	物産	磁器	輪花形皿	-	-	15.4	-	白色	輪郭成形	呉漆・透明釉	紅文	染付	紀前系 佐賀市	1800～60年代	-
56	6	物産	磁器	資料形深皿	9.4	2.6	3.6	-	白色	輪郭成形	呉漆・透明釉	輪花文・環状松竹 輪花文・雲文	染付	紀前系 佐賀市	19世紀末～19世紀 初葉	複製出「イロコ」
56	7	物産	磁器	高脚和木皿	-	-	3.7	-	白色	押型成形	透明釉	長脚	白磁・押型 薄紅文様	多治米・ 瀬戸	20世紀前半代	丸×2
56	8	物産	陶器	筒形形碗	7.2	6.8	3.5	-	灰白色	輪郭成形	透明釉・黄釉	竹葉文	牧童・真人	子瀬	20世紀第4四半期	-
57	1	502	陶器	丸形小鉢	5.4	3.6	2.6	-	淡褐色	輪郭成形	透明釉	-	-	金子家	1994年	-
57	2	502	陶器系地	磁鉢	-	-	12.4	-	淡褐色	輪郭成形	-	-	-	金子家	1994年	徳目多摩位
57	3	502	陶器	縁取平徳利	-	-	10.6	17.4	灰白色	輪郭成形	灰釉	-	-	金子家	2004年	-
57	4	502	陶器	亀形蓋物	-	3	6	6.5	淡褐色	手捏ね・結合せ	染付軸	亀	釘形	金子家	1994年	平足および既製焼付 矢筈
57	5	502	土器	五徳	35.1	11.9	23.5	-	褐色地	輪郭成形・型付内 底	-	垂刺文	波線	金子家	1994年	縁取茶形
57	6	502	土器	笠形七輪	26.6	24.2	25.6	-	淡褐色	輪郭成形・型付	-	垂刺文	波線	金子家	1994年	-
57	7	502	土器	丸底形七輪	34.6	-	-	-	淡褐色	型作り	-	-	-	金子家	1994年	-
57	8	502	陶器具	土徳利	22.0	7.4	19.0	-	淡褐色	輪郭成形・跡止 目	-	-	-	金子家	1994年	-
57	9	502	陶器具	土徳利	24.4	10.2	16.6	-	淡褐色	型作り	染付軸	-	-	金子家	1994年	-
57	10	502	陶器具	丸形形深皿	-	-	-	-	灰白色	輪郭成形	-	-	-	金子家	1994年	丸×2
57	11	502	瓦	管笠形瓦	30.8	27.3	1.5	-	淡褐色	タタラ作り	染付軸	-	-	金子家	1994年	釘丸×2
57	12	502	磁器	平形碗	12	5.5	4.2	-	白色	輪郭成形	透明釉・化学コバルト・ トクロム	扇形・三巻の松 扇・垂刺文	顔彩刷	-	20世紀前半	-
57	13	502	磁器	平形形碗	10.2	-	-	-	白色	輪郭成形	透明釉・化学コバルト・ トクロム	扇形	紅文	-	20世紀第2四半期	-
57	14	502	磁器	平縁形鉢	12.6	-	-	-	白色	輪郭成形	透明釉・化学コバルト・ トクロム	扇形山文・扇形 文	コバルト染付	佐賀県 佐賀市	20世紀前半	-
57	15	502	磁器	平縁形深物	13.8	7.9	13.6	-	白色	輪郭成形	透明釉・化学コバルト	松竹梅文・雲文	顔彩刷	佐賀県 佐賀市	20世紀第1四半期	両面一両面
57	16	502	磁器	磁子	-	-	-	0.0	白色	揉込み	透明釉	-	-	多治米・ 瀬戸	20世紀前半	-
57	17	502	陶器	縁取形碗	10.9	5.6	3.6	-	灰白色	輪郭成形	透明釉・化学コバルト・ トクロム	高麗文	型刷・輪郭 線	紀前系 佐賀市	1800～20年	縁取(印・C80)
57	18	502	瓦葺土器	(瓦葺・形切)	-	-	19.0	-	灰褐色	輪郭成形	-	扇形	波線	佐賀県 佐賀市	-	-
58	1	5000	陶器具	次ケ	20.7	44.6	21.3	-	淡褐色	輪郭成形・結合せ	白七土	干煎	磨目	金子家	1994年	湯火等記と配内・矢 筈形・山岳系染付 軸で縁飾
58	2	5000	陶器	土管	35.5	44.6	24.1	-	淡褐色	輪郭線作り成形・ 結合せ	染付軸	-	-	金子家	1994年	-
58	3	5003	陶器具	縁取形深皿	11.3	-	-	-	淡褐色	輪郭成形	-	-	-	金子家	1994年	内丸×5
58	4	5003	瓦	枝瓦	1.9	-	2.8	-	黄褐色	タタラ作り	染付軸	-	-	金子家	1994年	-
58	5	5003	陶器具	ハセ	2.4	-	-	-	淡褐色	手捏ね	-	-	-	金子家	1994年	-
58	6	5003	磁器	輪花形鉢	-	-	-	-	白色	輪郭型打ち成形	透明釉・クロム	-	-	金子家	1994年	-
58	7	5001	初製品	若白(下口)	31.5	33.2	31.3	-	新緑	型刷	-	-	-	-	-	瓦葺土器の土台・六角 筒(深さ1.8)
58	8	水産場	磁器品	シヤット受け	19.0	12.0	-	-	緑色	-	-	-	-	-	-	土縁飾の製品
58	9	水産場	磁器品	磁鉢	28.0	10.0	-	4.0	-	緑色	-	-	-	-	-	土縁飾の製品
58	10	5001	陶器具	平形	5.0	-	-	-	淡褐色	手捏ね	-	-	-	金子家	1994年	-
58	11	5001	陶器具	平形	-	-	6.8	-	淡褐色	手捏ね	-	-	-	金子家	1994年	-
58	12	5001	陶器具	平形	-	-	10.4	-	褐色	型作り	-	-	-	金子家	1994年	-
58	13	5001	陶器具	次ケ	16.4	-	-	-	灰白色	輪郭成形	-	-	-	金子家	1994年	丸×2
58	14	5001	磁器	丸形形碗	7.2	-	-	-	白色	輪郭成形	透明釉・化学コバルト	刺書文	コバルト染付	佐賀県 佐賀市	1870年代～	-
58	15	5001	磁器	縁取形碗	10.6	-	-	-	白色	輪郭成形	透明釉・化学コバルト	書字文・内方環 形・環状文	型刷	佐賀県 佐賀市	19世紀第4四半期	-

採出 番号	遺物 番号	出土位置	種別	器種	法量				胎土	成形	釉薬	文様	装飾	基底	年代	備考
					A	B	C	D								
42	1	SI01	磁器	白磁土	12.0	3.1	6.6	-	白色	繻織成形・捺付状 刷り	透明釉	-	白磁	唐磁類	15世紀末～16世紀 前半代	-
42	2	美濃式	磁器	青磁土	-	-	-	-	白色	繻織成形	青磁釉	平刷	青磁・緑彩	唐磁類	15世紀代	-
42	3	美濃式	磁器	青花土	-	-	-	-	白色	繻織成形・捺付状 刷り	青黄・透明釉	山水風	青花	唐磁類	16世紀代	-
42	4	美濃式	磁器	青花土	-	-	8.0	-	白色	繻織成形・捺付状 刷り	青黄・透明釉	花梨石風	青花	唐磁類	15世紀末～16世紀 前半代	-
42	5	美濃式	磁器	磁土	29.0	-	-	-	赤褐色	捺作り	-	-	-	唐磁類	-	-
42	6	美濃式	陶器	磁土	-	-	-	-	淡褐色	捺作り	鉄釉	-	-	唐磁類	17世紀後半～19世紀 前半代	-
42	7	色釉期	陶器兼地	緑丸形(漆)	-	-	14.0	-	淡褐色	繻織成形	-	-	-	金平窯	-	土器*
42	8	色釉期	陶器	練蓋形(漆)	-	-	9.0	-	灰色	繻織成形	灰釉	-	-	金平窯	-	-
42	9	色釉期	陶器	練蓋形(漆)	-	-	9.0	16.1	灰色	繻織成形	灰釉	-	-	金平窯	-	-
42	10	色釉期	陶器	土瓶蓋	9.8	2.1	4.4	1.8	淡褐色	繻織成形	青磁釉	-	青地	金平窯	24号窯	形像残片が磁器
42	11	色釉期	陶器	壺蓋	12.5	-	10.2	-	灰色	繻織成形	灰釉	-	-	金平窯	24号窯	蓋縁片が磁器
42	12	色釉期	陶器	行巾	-	-	-	-	濃褐色	繻織成形	茶葉釉	-	-	金平窯	-	-
42	13	色釉期	土製品	サナ	12.8	1.7	11.8	-	灰白色	捺作り	-	-	-	金平窯	-	-
42	14	色釉期	灰土質	胴(タンゴ)	19.6	10.0	4.8	-	淡褐色	繻織成形	-	-	-	金平窯	-	足*3・内面に刺書 文)
42	15	色釉期	磁器	丸形蓋	-	-	4.4	-	白色	繻織成形	青黄・透明釉	幾文・雲母斑文・ 花卉文	染付	磁器系	19世紀前半	胴・二重弁内・溝内)
42	16	色釉期	陶器	磁瓦形碗	-	-	5.2	-	赤褐色	繻織成形	透明釉	-	渦巻	在来系	20世紀中葉	蓋部に刷印(二重弁 内・三瓶)
42	17	色釉期	陶器	平形蓋	-	-	4.0	-	灰色	繻織成形・刷・目 刷刺書	鉄釉	-	-	磁器系	17世紀後半～19世紀 前半代	内野山北麓陶器

採出 番号	遺物 番号	出土 地点	出土層 位	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	構成	胎土	色調	調整及び文様等	備考(cm)
10	1	SI01	-	須置器	高杯	(16.0)	(3.7)	-	-	良	精製	(内) オリーブ灰 (外) ナブー灰	(内) 田記ナデ・ナデ (外) 田記ナデ	-
10	2	SI01	-	須置器	高杯	(15.7)	(3.1)	-	-	やや 不良	10cm前後の白色 砂粒を少し含む	(内) 灰白 (外) 灰白	(内) 田記ナデ・ナデ (外) 田記ナデ	全体にス入付
10	3	SI01	-	土器器	壺	(15.0)	(8.4)	-	-	良	5cm以下の砂粒を 少し含む	(内) にふいふ赤褐 (外) 赤	(内) ケズリ・横ナデ (外) -	-
10	4	SI01	-	土器器	壺	(17.0)	(8.6)	-	-	良	5cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 淡黄緑 (外) 赤	(内) ケズリ・横ナデ (外) ハタヒ	-
10	5	SI01	-	土器器	壺	(16.0)	(9.7)	-	-	良	5cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 赤黒 (外) 赤	(内) ケズリ・横ナデ (外) -	-
10	6	SI01	-	土器器	壺	-	(7.6)	-	(15.0)	やや 不良	5cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 淡黄緑 (外) 赤	(内) - (外) -	胴部破片
10	7	SI01	-	土器器	壺	-	(8.0)	-	-	やや 不良	5cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 照赤褐 (外) -	(内) - (外) -	胴部破片
10	8	SI01	-	土器器	瓶	-	-	-	6.4	良	3cm以下の砂粒を 少し含む	(内) - (外) 緑	(内) - (外) ナデ	取っ手部
13	1	SI02	-	土器器	壺	(25.0)	(4.3)	-	-	良	4cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 緑 (外) 緑	(内) ケズリ (外) -	-
13	2	SI02	-	土器器	壺	(25.0)	(3.2)	-	-	やや 不良	5cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 照黄緑 (外) にふいふ赤褐	(内) ケズリ・横ナデ (外) -	-
13	3	SI02	-	土器器	壺	(14.8)	(5.0)	-	-	良	4cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 緑 (外) 緑	(内) ケズリ (外) -	-
13	4	SI02	-	土器器	壺	(21.0)	(3.1)	-	-	良	4cm以下の砂粒を 少し含む	(内) にふいふ赤褐 (外) にふいふ赤褐	(内) ケズリ・横ナデ (外) -	-
13	5	SI02	-	土器器	壺	(17.9)	(4.1)	-	-	良	10cm以下の砂粒 を少し含む	(内) 緑 (外) 緑	(内) ケズリ・横ナデ (外) -	-
13	6	SI02	-	土器器	壺	(14.0)	(7.2)	-	-	良	5cm以下の砂粒を 少し含む	(内) にふいふ赤灰 (外) 照赤灰	(内) ケズリ・横ナデ (外) 横ナデ	-
17	1	SI04	-	須置器	高杯	(14.0)	(3.2)	-	-	良好	密	(内) 灰 (外) 灰	(内) 田記ナデ (外) 田記ナデ	-
17	2	SI04	-	土器器	壺	(17.4)	(12.5)	-	-	良	4cm以下の砂粒を 多く含む	(内) 緑 (外) 緑	(内) ケズリ・横ナデ (外) 横ナデ	-
17	3	SI04	-	土器器	壺	(21.8)	(16.5)	-	(24.6)	良	3cm以下の砂粒を 多く含む	(内) 緑 (外) 緑	(内) ケズリ (外) -	-
17	4	SI04	-	土器器	壺	(16.5)	(18.5)	-	(17.9)	良	8cm以下の砂粒を 多く含む	(内) 緑 (外) 照赤灰	(内) ケズリ・横ナデ (外) ナデ	-
17	5	SI04	-	土器器	壺	(20.0)	(12.5)	-	-	良	3cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 緑 (外) 緑	(内) ケズリ・横ナデ (外) 横ナデ	-
17	6	SI04	-	土器器	壺	(19.5)	(8.8)	-	-	良	赤黄母・大粒の 砂粒を含む	(内) 緑 (外) 緑	(内) ケズリ・横ナデ (外) 横ナデ	-
17	7	SI04	-	土器器	鉢	(20.0)	(4.7)	-	-	やや 不良	10cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 赤 (外) 赤	(内) ケズリ・横ナデ (外) -	-
17	8	SI04	-	土器器	瓶	-	-	-	3.8	良好	4cm以下の砂粒を 少し含む	(内) 照赤 (外) 照赤灰	(内) - (外) ナデ	取っ手部
17	9	SI04	-	土器器	瓶	-	-	-	-	良	6cm以下の砂粒を 多く含む	(内) 赤 (外) 赤	(内) - (外) ナデ	取っ手部
17	10	SI04	-	土器器	瓶	-	-	-	-	良	7cm以下の砂粒を 多く含む	(内) 赤 (外) 赤	(内) - (外) ナデ	取っ手部
18	1	SI04	-	土器器	瓶	24.2	27.0	13.2	-	良好	5cm以下の砂粒を 多く含む	(内) 緑 (外) 照黄緑	(内) ケズリ (外) -	-
18	2	SI04	-	土器器	瓶	-	-	-	(4.8)	良	10cm以下の白色 砂粒を含む	(内) 赤黄 (外) 赤	(内) ナデ (外) ナデ	取っ手部
18	3	SI04	-	土製品	支脚	-	(8.0)	(3.2)	-	良	5cm以下の砂粒を 多く含む	(内) にふいふ赤褐 (外) 赤	(内) ナデ (外) ナデ	-

検出番号	運物番号	出土地点	出土部位	種別	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	構成	胎土	色調	調査及び文様等	備考 (cm)
59	1	G-6	包含層	須恵器	高坏 (蓋)	(12.0)	(4.5)	-	-	良好	灰	(内) 青灰 (外) 青灰	(内) 面刺ナデナデ (外) 面刺ナデナデ	
59	2	表層	-	須恵器	高坏 (蓋)	-	(2.6)	-	-	やや不良	6mm以下の砂粒を多く含む	(内) 灰白 (外) 灰白	(内) 面刺ナデナデ (外) 面刺ナデナデ	
59	3	南西区	包含層	須恵器	高坏 (蓋)	(12.0)	(2.1)	-	-	良好	灰	(内) 灰 (外) 灰	(内) 面刺ナデナデ (外) 面刺ナデナデ	
59	4	B-7	包含層	須恵器	坏	9.4	3.5	-	-	やや不良	1mm前後の白色粘土を少し含む	(内) 灰 (外) 灰	(内) 面刺ナデナデ (外) 面刺ナデナデ	
59	5	C-8	包含層	須恵器	坏	(14.0)	(3.2)	-	-	良好	灰	(内) 灰 (外) 灰	(内) 面刺ナデナデ (外) 面刺ナデナデ	
59	6	C-6	包含層	須恵器	坏	(13.5)	(3.2)	-	-	良好	1mm前後の白色粘土を少し含む	(内) 灰白 (外) オリーブ灰	(内) 面刺ナデ (外) 面刺ナデ	
59	7	C-8	包含層	須恵器	坏	(15.0)	(4.3)	-	-	良好	2mm前後の黒色粘土を少し含む	(内) 灰白 (外) 灰	(内) 面刺ナデ (外) 面刺ナデ	
59	8	北東区	包含層	須恵器	坏	(10.0)	(2.0)	-	-	良好	1mm前後の黒色粘土を少し含む	(内) 灰白 (外) 灰	(内) 面刺ナデナデ (外) 面刺ナデナデ	底面破片。
59	9	北東区	包含層	須恵器	坏	(10.0)	(1.7)	-	-	良好	2mm前後の白色粘土を少し含む	(内) 灰白 (外) 灰	(内) 面刺ナデ (外) 面刺ナデナデ	
59	10	F-7	包含層	須恵器	坏	-	(1.8)	-	-	良好	5mm以下の砂粒を少し含む	(内) 灰白 (外) 灰白	(内) 面刺ナデナデ (外) 面刺ナデナデ	
59	11	南西区	包含層	須恵器	坏	-	(2.3)	-	-	良好	黒炭	(内) 明緑灰 (外) 明緑灰	(内) 面刺ナデナデ (外) 面刺ナデナデ	
59	12	E-5	包含層	須恵器	高坏	-	(4.1)	-	-	やや不良	5mm以下の黒色粘土を少し含む	(内) 灰白 (外) 灰白	(内) シロ色 (外) 面刺ナデ	
59	13	南西区	包含層	須恵器	高坏	-	(6.5)	-	-	やや不良	2mm以下の砂粒を少し含む	(内) 灰白 (外) 灰	(内) - (外) -	
59	14	D-8	包含層	須恵器	罎	-	(10.7)	-	(9.3)	やや不良	1mm前後の黒色粘土を少し含む	(内) 灰白 (外) 灰白	(内) 面刺ナデ、シロ肌、つなぎ色あり。 (外) 面刺ナデ、黒肌、黒筋にこまげつた模様。	
59	15	D-7	包含層	須恵器	罎・壺	-	(4.8)	-	(9.5)	良好	灰	(内) 灰 (外) 灰	(内) 面刺ナデ (外) 面刺ナデ	底面破片。
59	16	D-8	包含層	須恵器	壺	(13.0)	(3.6)	-	-	良好	灰	(内) 灰白 (外) 灰白	(内) 面刺ナデ (外) 面刺ナデ	
59	17	C-6	包含層	須恵器	壺	-	(6.6)	-	(15.5)	良好	灰	(内) オリーブ灰 (外) 緑オリーブ灰	(内) 面刺ナデ (外) 面刺ナデナデ	
59	18	F-8	包含層	須恵器	壺	-	(4.3)	(15.0)	-	良好	灰	(内) 灰 (外) 灰	(内) 面刺ナデ (外) 面刺ナデ	底面破片。
59	19	G-8	包含層	須恵器	罎	(21.5)	(7.2)	-	-	やや不良	2mm以下の白色粘土を少量含む	(内) 灰白 (外) 灰	(内) 青黄皮埋土・面刺ナデ (外) 厚皮埋土・カキ目状頭蓋・面刺ナデ	
60	1	北東区	包含層	土師器	罎	(19.6)	(6.7)	-	-	良好	2mm以下の砂粒を多く含む	(内) 明赤褐色 (外) 明赤褐色	(内) ケズノ・横ナデ (外) -	
60	2	B-7	包含層	土師器	罎	(19.0)	(6.7)	-	-	良好	3mm以下の砂粒を多く含む	(内) 淡黄褐色 (外) 淡黄褐色	(内) ケズノ・横ナデ (外) 横ナデ	横ナデ、ハウ状工具による強いナデ
60	3	C-7	包含層	土師器	罎	(16.0)	(7.3)	-	-	やや不良	4mm以下の砂粒を多く含む	(内) 橙 (外) 橙	(内) ケズノ・横ナデ (外) ナデ・横ナデ	
60	4	G-6	包含層	土師器	罎	(27.0)	(4.7)	-	-	良好	6mm以下の砂粒を多く含む	(内) にごい濁 (外) にごい濁	(内) ケズノ・横ナデ (外) 横ナデ	
60	5	B-7	包含層	土師器	罎	(16.4)	(2.0)	-	-	良好	2mm以下の砂粒を少し含む	(内) にごい赤褐色 (外) 赤褐色	(内) - (外) -	
60	6	北東区	包含層	土師器	罎	(23.0)	(7.6)	-	-	良好	5mm以下の砂粒を少し含む	(内) 褐色 (外) 明赤褐色	(内) - (外) -	
60	7	C-8	包含層	土師器	罎	-	-	(4.8)	-	良好	2mm以下の砂粒を少し含む	(内) 橙 (外) 橙	(内) ケズノ・横ナデ (外) 横ナデ	
60	8	C-8	包含層	土師器	罎	(16.0)	4.7	-	-	良好	2mm以下の砂粒を少し含む	(内) 橙 (外) 橙	(内) ケズノ・横ナデ (外) 横ナデ	
60	9	B-8	包含層	土師器	罎	(22.0)	(5.0)	-	-	やや不良	2mm以下の砂粒を少し含む	(内) 褐色 (外) にごい赤褐色	(内) ケズノ・横ナデ (外) 横ナデ	
60	10	B-6	包含層	土師器	罎	(12.4)	(3.2)	-	-	良好	2mm以下の砂粒を少し含む	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	(内) ケズノ・横ナデ (外) ナデ	
60	11	H-6	包含層	土師器	短頸壺	(12.0)	(6.1)	-	-	良好	3mm以下の砂粒を多く含む	(内) 赤褐色 (外) 赤褐色	(内) ケズノ・横ナデ (外) -	
60	12	C-6	包含層	土師器	罎	-	(9.8)	-	(12.0)	良好	6mm以下の砂粒を多く含む	(内) 明赤褐色 (外) 明赤褐色	(内) ケズノ (外) ハケ目	
60	13	B-6	包含層	土師器	罎	-	(3.4)	-	-	やや不良	6mm以下の砂粒を多く含む	(内) にごい濁 (外) 黄褐色	(内) - (外) -	
60	14	G-6	包含層	土師器	坏	(12.0)	(2.7)	-	-	やや不良	灰	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	(内) - (外) -	
60	15	C-8	包含層	土師器	罎	-	-	-	(4.4)	良好	11mm以下の砂粒を少し含む	(内) 橙 (外) 橙	(内) ナデ (外) ナデ	取っ手部
60	16	C-8	包含層	土師器	罎	-	(11.2)	-	(27.8)	良好	5mm以下の砂粒を少し含む	(内) にごい濁 (外) にごい濁	(内) ケズノ (外) ナデ	
60	17	D-8	包含層	土師器	罎	-	-	-	(4.2)	良好	5mm以下の砂粒を多く含む	(内) 赤 (外) 赤	(内) ケズノ (外) ナデ	取っ手部
61	1	表層	-	土師器	罎	-	-	-	5.5	良好	3mm以下の砂粒を多く含む	(内) - (外) -	(内) ナデ (外) ナデ	取っ手部
61	2	G-6	包含層	土師器	罎	-	-	-	3.4	良好	6mm以下の砂粒を多く含む	(内) 黄赤褐色 (外) 明褐色	(内) ナデ (外) ナデ	取っ手部
61	3	C-8	包含層	土製品	支脚	-	(7.0)	14.4	-	良好	7mm以下の砂粒を多く含む	(内) 赤褐色 (外) 明赤褐色	(内) ナデ (外) -	
61	4	G-6	包含層	土製品	支脚	-	(10.6)	-	-	良好	11mm以下の砂粒を多く含む	(内) - (外) 橙	(内) ナデ (外) ナデ	
61	5	G-6	包含層	土製品	支脚	-	(12.3)	-	-	良好	12mm以下の砂粒を多く含む	(内) 明赤褐色 (外) 明赤褐色	(内) ナデ (外) ナデ	
61	6	G-6	包含層	土製品	移動式甕	-	-	-	-	良好	1mm前後の白色砂粒を多く含む	(内) 黄赤褐色 (外) 黄赤褐色	(内) ケズノ (外) -	

第4表 神谷遺跡出土遺物観察表

採掘 番号	遺物 番号	出土 地点	出土 層位	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	構成	胎土	色調	調整及び欠損等	備考(cm)
75	1	1号土 窯仕立 口	-	須恵器	高坏	-	(4.0)	(9.5)	-	良	精製	(内) 灰白 (外) 灰	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ	
75	2	2号土 窯天井	-	土師器	鉢	14.2	9.6	5.7	14.8	良	180前後の白色粒 子を少し含む	(内) 胡黄褐色 (外) 胡黄褐色	(内) ナデ (外) ハケ目	全体にスス付
75	3	2号土 窯天井	-	土師器	甕	13.9	11.5	2.9	14.7	良	180前後の白色粒 子を少し含む	(内) 胡黄褐色 (外) 胡黄褐色	(内) ケズリ (外) ナデ	
75	4	-	包含 層2	須恵器	蓋押蓋	-	(2.8)	-	-	良	精製	(内) 灰白色 (外) 胡緑灰	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転ケズリ	
75	5	-	包含 層2	須恵器	蓋押蓋	-	(1.7)	-	-	良	300以下の砂粒を 少し含む	(内) 灰 (外) 緑オリーブ	(内) 回転ナデ (外) -	
75	6	-	包含 層2	須恵器	蓋押蓋	-	(2.3)	-	-	良	180以下の白色粒 子を数量含む	(内) 灰色 (外) 緑黄灰色	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転ケズリ	
75	7	-	包含 層2	須恵器	杯	(14.8)	4.7	7.4	-	やや 不良	300以下の砂粒を 少し含む	(内) 灰 (外) 灰白	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・静止未切り (底面)	
75	8	-	包含 層2	須恵器	壺	(9.0)	(2.4)	-	-	良	精製	(内) 灰白 (外) 灰白	(内) ナデ (外) 回転ナデ	
75	9	-	包含 層2	土師器	甕	(19.0)	(5.3)	-	-	良	300以下の砂粒を 少し含む	(内) 橙 (外) 橙	(内) ケズリ (外) -	
75	10	-	包含 層2	土師器	甕	(22.2)	(5.7)	-	-	良	300以下の砂粒を 少し含む	(内) 胡黄褐色 (外) に近い黄橙	(内) ケズリ・緑ナデ (外) 緑ナデ	
75	11	-	包含 層2	土師器	甕	(29.0)	(7.5)	-	-	やや 不良	300以下の砂粒を 少し含む	(内) 胡赤褐 (外) 胡赤褐	(内) ケズリ・緑ナデ (外) 緑ナデ	
75	12	-	包含 層2	土師器	甕	-	(4.1)	-	-	良	300以下の砂粒・ 雲母粒を少し含む	(内) 胡赤褐 (外) 生黄橙	(内) 回転圧成 (外) 回転圧成	底面破片
75	1	-	包含 層2	土師器	甕	(29.7)	(7.9)	-	-	良	300以下の砂粒を 少し含む	(内) 胡赤褐 (外) 胡赤褐	(内) ケズリ・緑ナデ (外) 緑ナデ	
75	2	-	包含 層2	土師器	甕	-	-	-	-	不良	200以下の白色・ 黒色粒子を少量含 む	(内) 灰オリーブ色 (外) 灰オリーブ色	(内) - (外) 回転圧成	取っ手部
75	3	-	包含 層2	土製品	支脚	-	(16.0)	(12.0)	-	良好	180以下の白色粒 子を少量含む	(内) 胡赤褐 (外) 胡赤褐	(内) ナデ (外) ナデ	前面の大部分 が剥落する
75	4	-	包含 層1	磁器	中碗	(11.0)	(4.2)	-	-	良	密	(胎) 白 (染付) 青	(内) - (外) -	
75	5	-	表探	陶器	鉢	(14.2)	(6.6)	6.6	-	良	密	(胎) オリーブ黄 (無釉) に近い黄褐	(内) - (外) -	玉縁
75	6	-	表探	磁器	鉢	(19.2)	(3.9)	-	-	良	密	(胎) 白 (染付) 青	(内) - (外) -	八角形
75	7	-	包含 層1	磁器	碗	-	-	(4.4)	-	良	密	(胎) 黄磁釉	(内) - (外) -	

写真図版

城ヶ谷遺跡近景
(調査前)



城ヶ谷遺跡近景
(調査後・南から)



城ヶ谷遺跡近景
(調査後・南西から)





城ヶ谷遺跡上部土層



城ヶ谷遺跡中部土層



城ヶ谷遺跡竪穴住居群

城ヶ谷遺跡
S101検出



城ヶ谷遺跡
S101造付け竈



城ヶ谷遺跡
S101完掘





城ヶ谷遺跡
S102 検出



城ヶ谷遺跡
S102 造付け竈



城ヶ谷遺跡
S104 造付け竈

城ヶ谷遺跡
S104完掘



城ヶ谷遺跡
土器溜まり



城ヶ谷遺跡
SX02





城ヶ谷遺跡南西区の遺構群（西から）



城ヶ谷遺跡南西区の遺構群（南から）



城ヶ谷遺跡1号窟全景



城ヶ谷遺跡2号窟全景



城ヶ谷遺跡
1号竈第6房



城ヶ谷遺跡
1号竈第7房



城ヶ谷遺跡
1号竈第8房
(東から)

城ヶ谷遺跡
2号窯側面



城ヶ谷遺跡
SD01セクション



城ヶ谷遺跡
SD01完掘





城ヶ谷遺跡
物原（調査前）



城ヶ谷遺跡
物原西壁セクション



城ヶ谷遺跡
物原西壁セクション

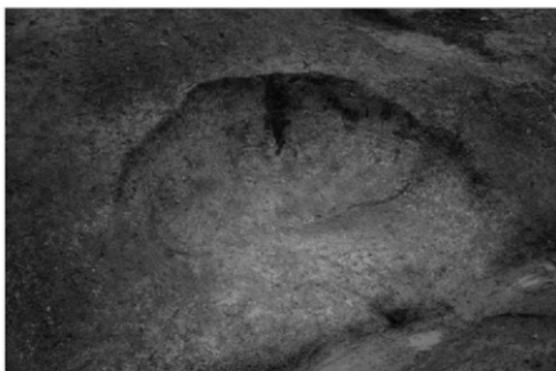
城ヶ谷遺跡
SX01



城ヶ谷遺跡
SK02セクション



城ヶ谷遺跡
SK02完掘

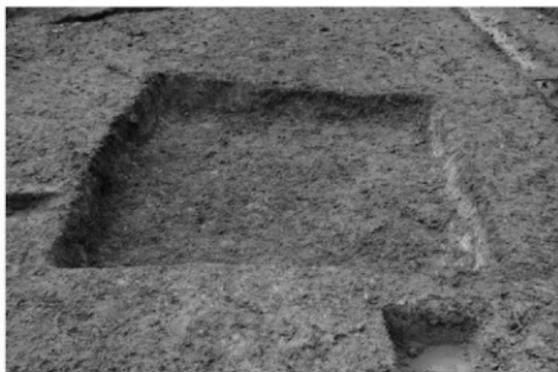




城ヶ谷遺跡
SS3



城ヶ谷遺跡
SD02



城ヶ谷遺跡
SK03完掘



城ヶ谷遺跡SB01（礎石建物）



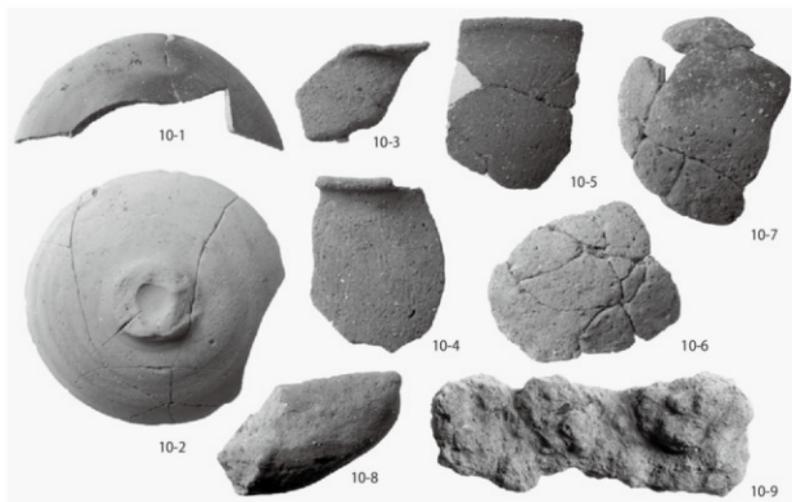
城ヶ谷遺跡SS2（調査区外）



城ヶ谷遺跡土練機出土状況



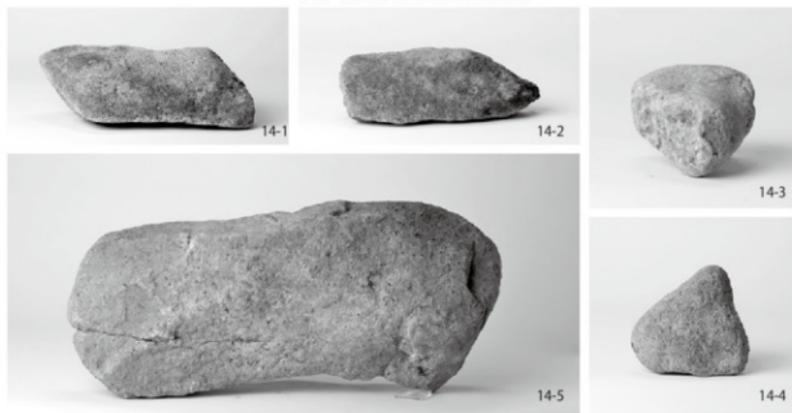
城ヶ谷遺跡SS2（西から）



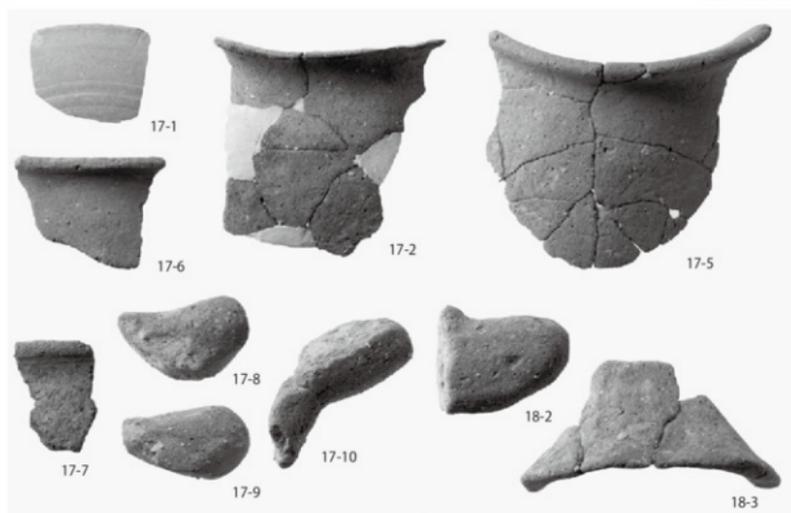
城ヶ谷遺跡S101出土遺物



城ヶ谷遺跡S102出土遺物



城ヶ谷遺跡S101・02出土遺物

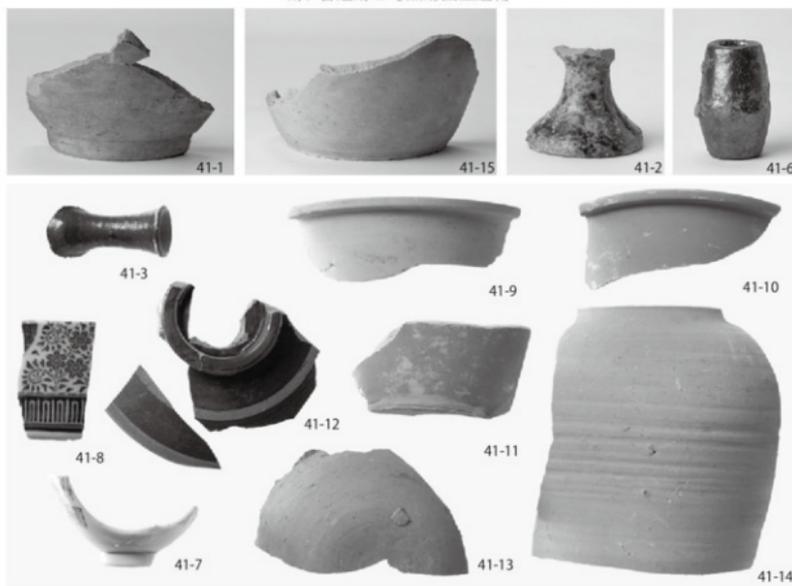




城ヶ谷遺跡 1 号窯跡出土遺物



城ヶ谷遺跡 2号窯跡出土遺物



城ヶ谷遺跡窯付属階段、物原下土坑出土遺物①

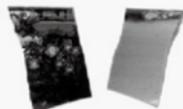


41-4



41-5

城ヶ谷遺跡窯付属階段、物原下土坑出土遺物②



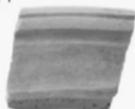
42-1



42-5



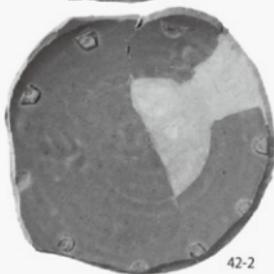
42-4



42-6



42-21



42-2



42-19



42-20



42-8



42-9



42-11



42-12



42-13



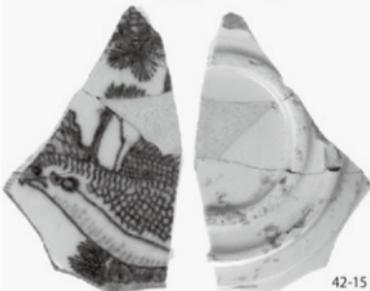
42-14



42-16



42-17



42-15



42-3



42-10



42-18

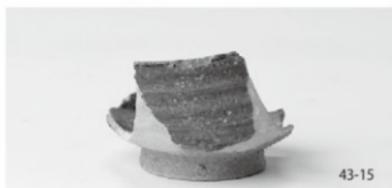


42-24

城ヶ谷遺跡窯付属焚き口付近、SS3出土遺物①

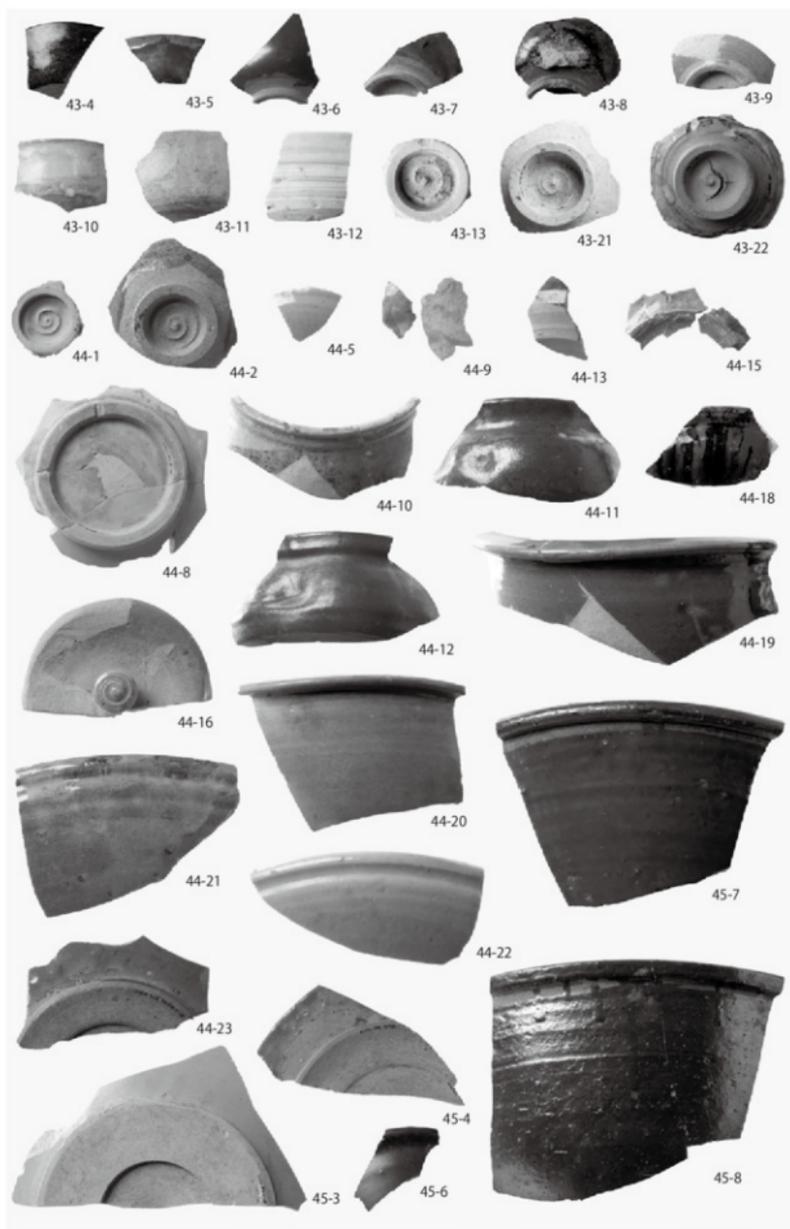


城ヶ谷遺跡窯焼き口付近、SS3 出土遺物②

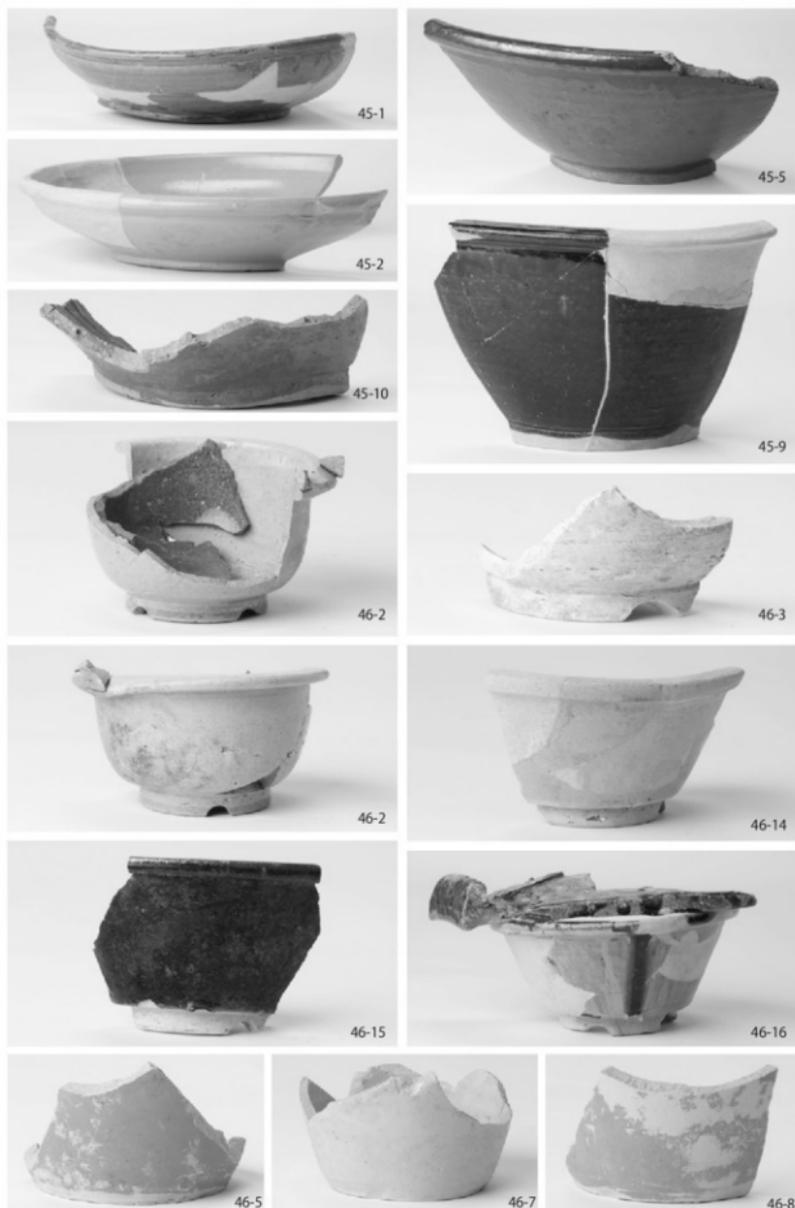


城ヶ谷遺跡物原出土遺物①

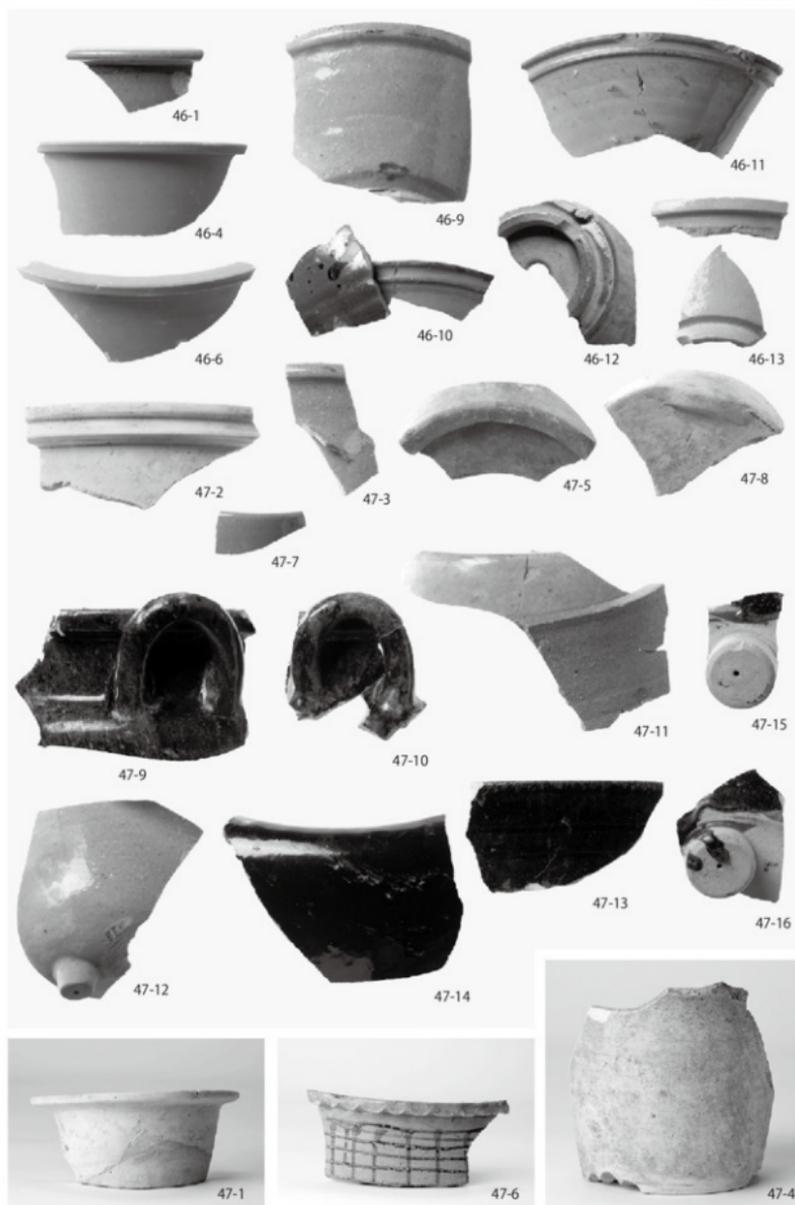




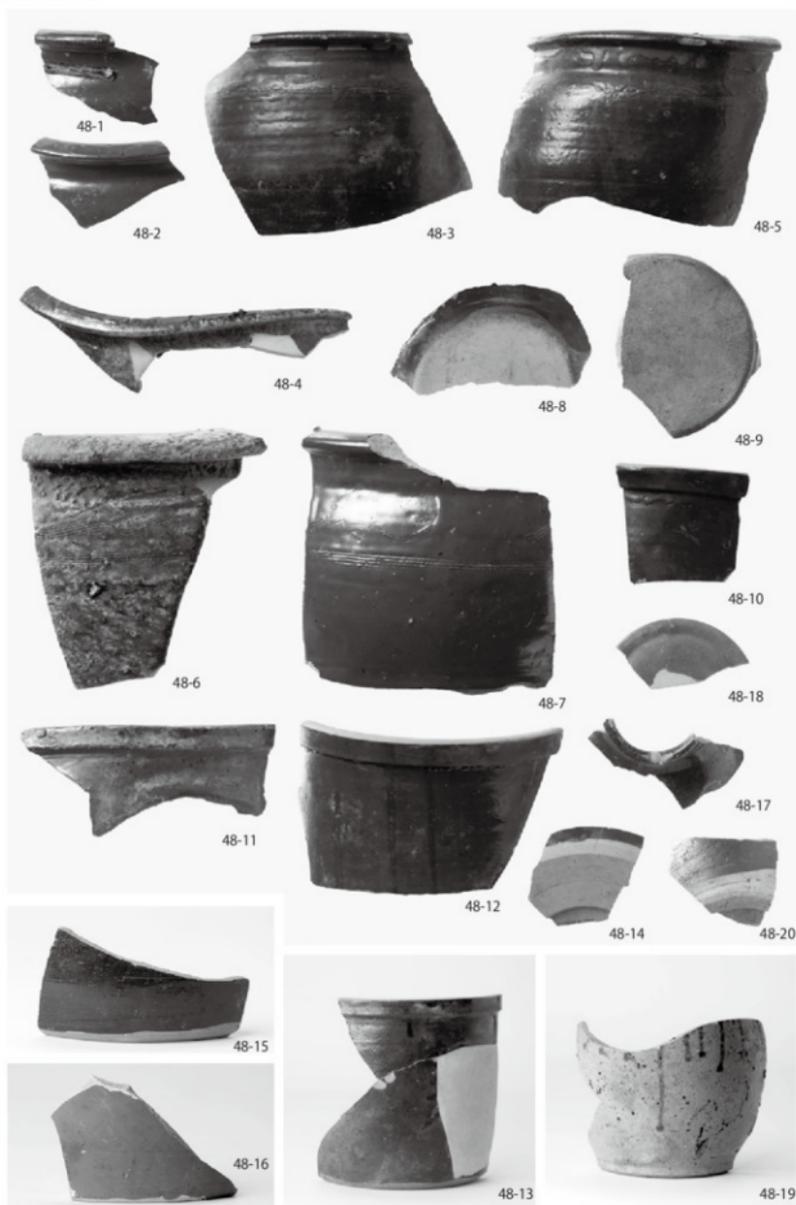
城ヶ谷遺跡物原出土遺物③



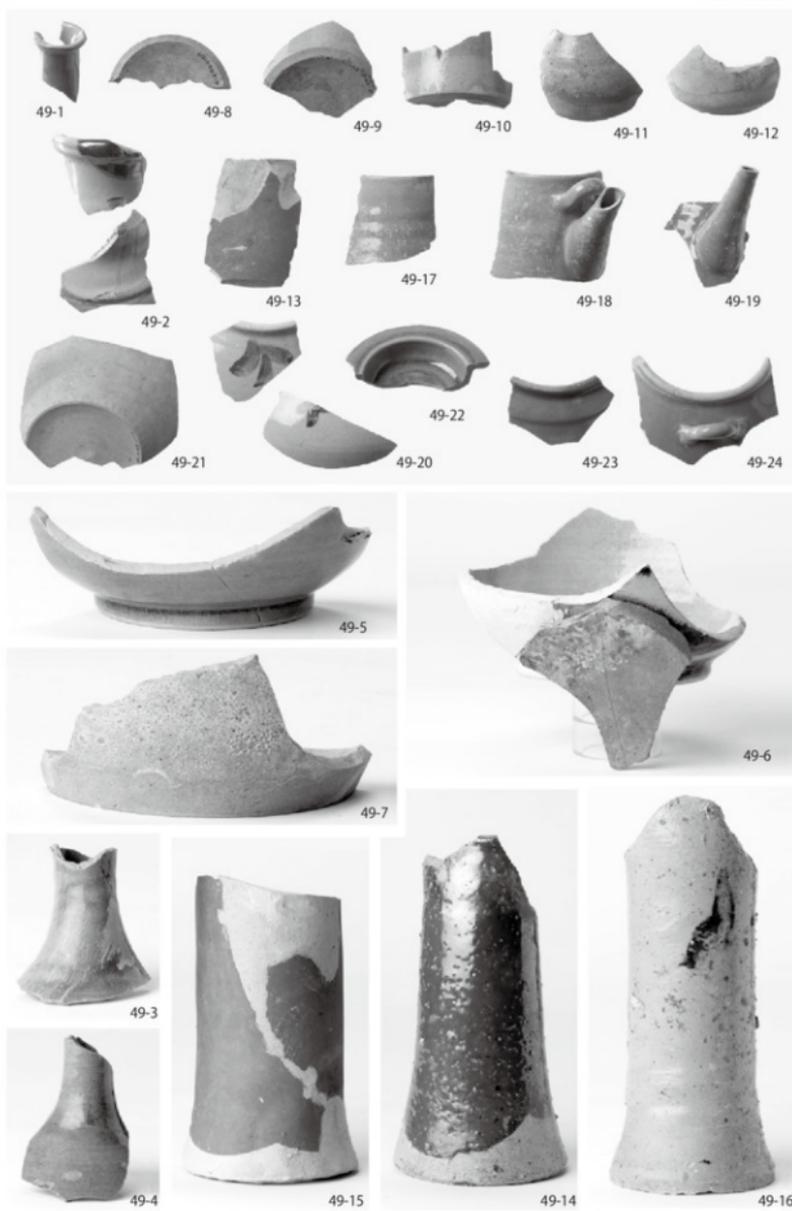
城ヶ谷遺跡物原出土遺物④



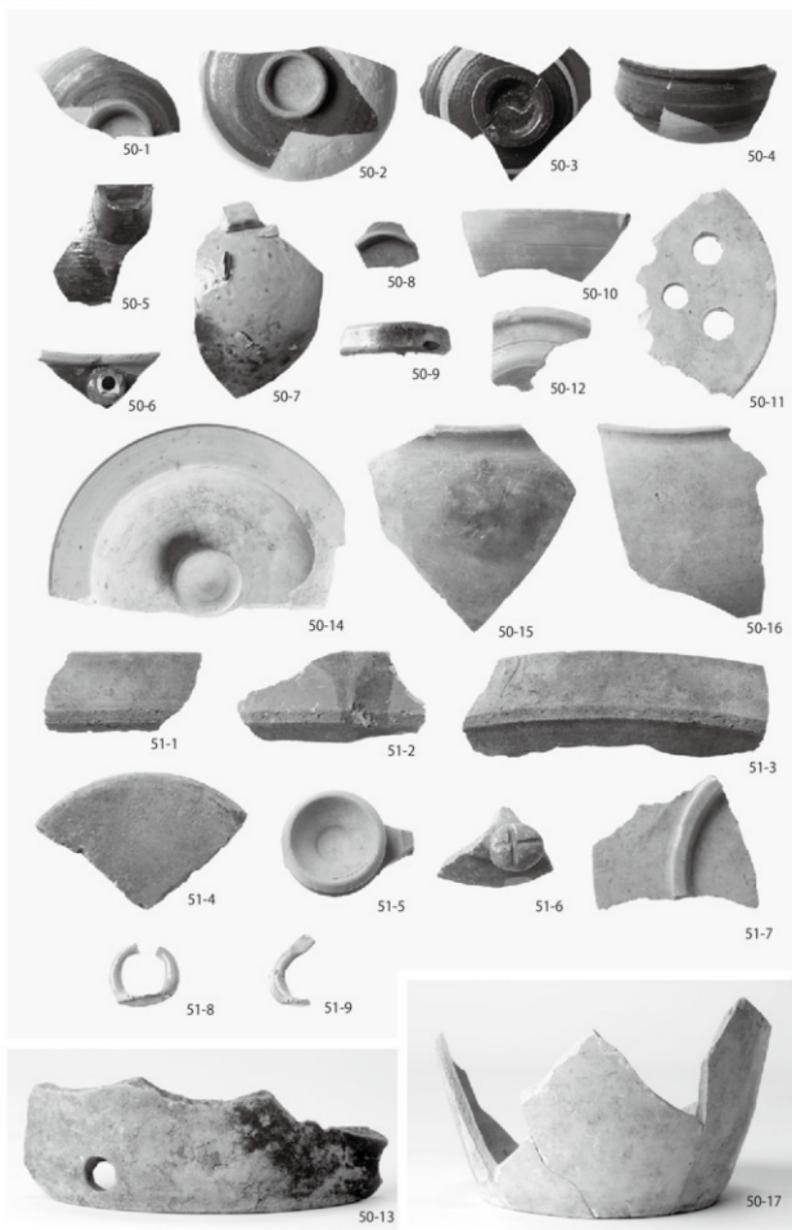
城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑤



城ヶ谷遺跡物原出土遺物©



城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑦



城ヶ谷遺跡物原出土遺物®







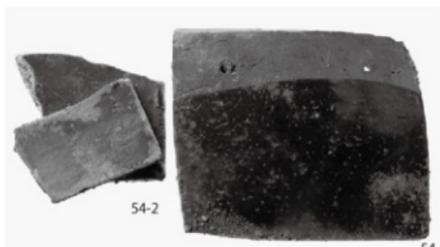
54-1



54-4



54-3



54-2

54-6



54-8



54-5



54-7



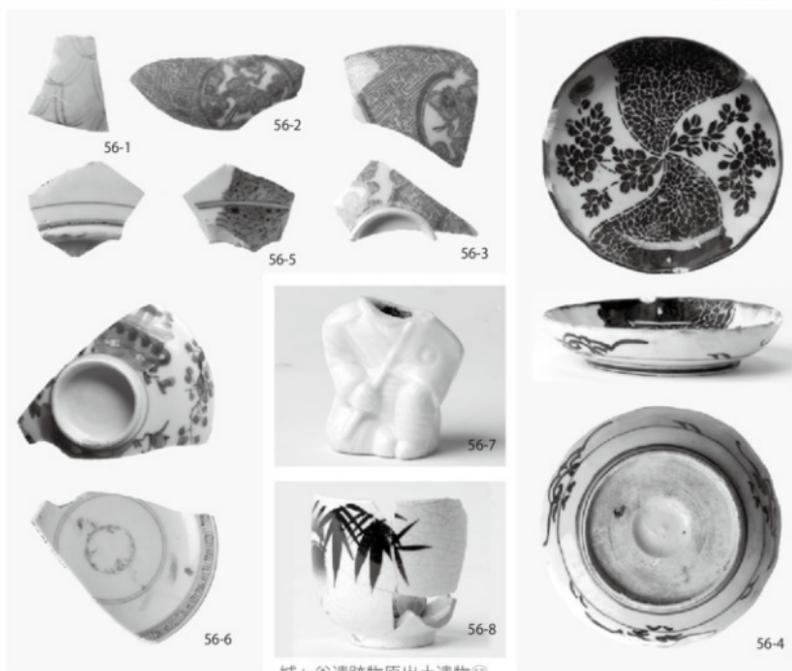
54-9



54-10



城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑬



城ヶ谷遺跡物原出土遺物⑬



城ヶ谷遺跡SS2出土遺物①

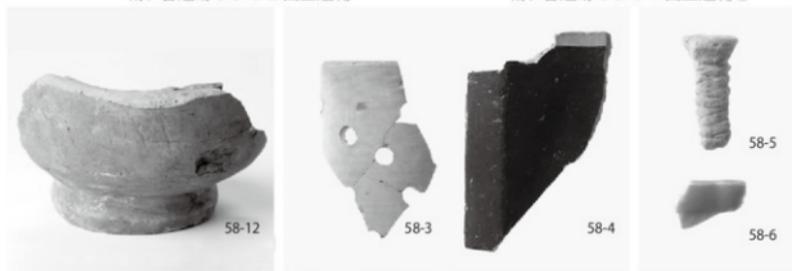


城ヶ谷遺跡 SS 2 出土遺物②



城ヶ谷遺跡 SD 0 2 出土遺物

城ヶ谷遺跡 SD 0 1 出土遺物①



城ヶ谷遺跡 SK 0 1, 0 3 出土遺物



58-7



58-8



58-9

城ヶ谷遺跡 S S 2 調査区外出土遺物



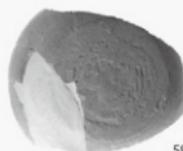
59-1



59-2



59-3



59-4



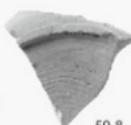
59-5



59-6



59-7



59-8



59-9



59-10



59-11



59-13



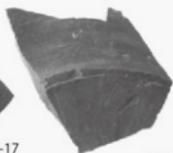
59-15



59-16



59-17



59-18



59-12

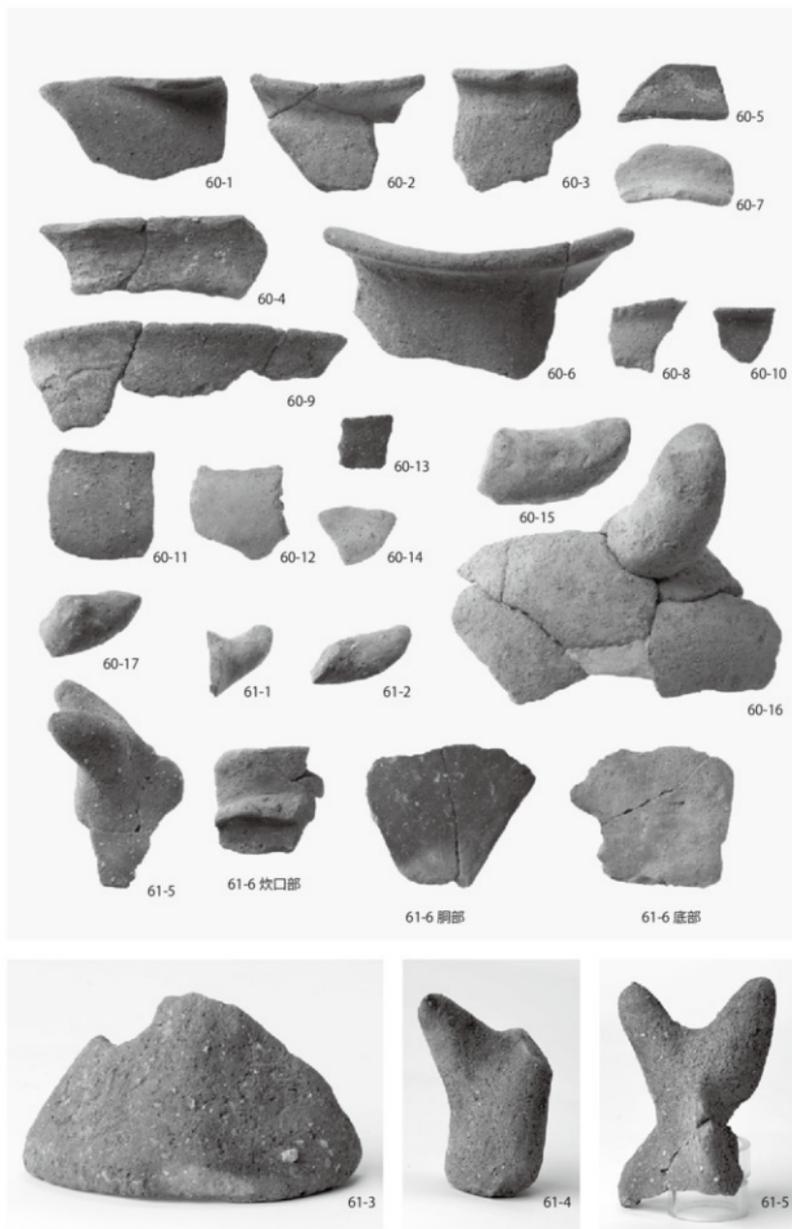


59-14



59-19

城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物①



城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物②



城ヶ谷遺跡遺構外出土遺物③



神谷遺跡全景(真上から)



神谷遺跡遠景(南から)



神谷遺跡遠景(北から)

神谷遺跡近景 (調査前)



神谷遺跡土層 (東部)



神谷遺跡土層 (西部)





神谷遺跡1号炭窯検出



神谷遺跡1号炭窯
焚き口付近石積み



神谷遺跡1号炭窯
縦断セクション

神谷遺跡1号炭窯
セクション (横口)



神谷遺跡1号炭窯
完掘 (西から)



神谷遺跡2号炭窯
煙道検出





神谷遺跡 2号炭窯
土器出土状況



神谷遺跡 2号炭窯
完掘（北から）



神谷遺跡 3号炭窯
横口 4 付近



神谷遺跡 2号炭窯底面炭出土状況



神谷遺跡 2号炭窯完掘 (西から)



神谷遺跡 2号炭窯、3号炭窯



神谷遺跡4号炭窯
検出（西から）



神谷遺跡4号炭窯
煙道部



神谷遺跡4号炭窯
煙道付近の横口

神谷遺跡 4号炭窯
完掘 (西から)



神谷遺跡 4号炭窯
完掘 (東から)



神谷遺跡 SK01
石出土状況





神谷遺跡4号灰窯完掘（東から）



神谷遺跡SD01



神谷遺跡調査後（東から）



神谷遺跡出土遺物

涼見E遺跡出土遺物



涼見E遺跡近景
(調査前)



涼見E遺跡近景
(調査前)



涼見E遺跡近景
(調査前)

涼見E遺跡
東西セクション(西)



涼見E遺跡
東西セクション(東)



涼見E遺跡
区画溝セクション





涼見E遺跡
南北セクション(南)



涼見E遺跡
南北セクション(北)



涼見E遺跡
墳裾部石出土状況

涼見E遺跡
1号墳北辺貼り石

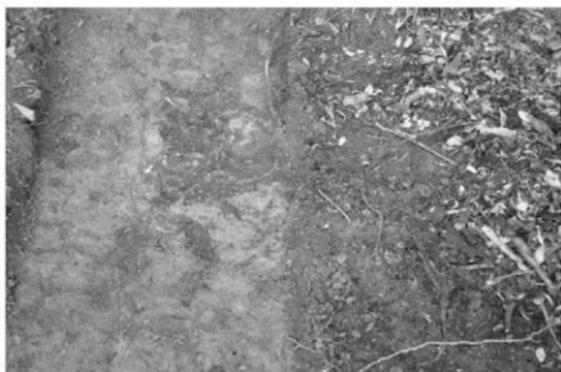


涼見E遺跡
1号墳北辺貼り石



涼見E遺跡
1号墳西辺貼り石
(南から)





涼見E遺跡
1号墳頂部
主体部プラン



涼見E遺跡
1号墳西辺貼り石
(西から)



涼見E遺跡
2号墳頂部集石



涼見E遺跡2号墳東辺貼り石（東から）



涼見E遺跡1号墳、2号墳調査後（北から）

報告書抄録

ふりがな	じょうがたにいせき(1く) かにだにいせき すずみEいせき								
書名	城ヶ谷遺跡(1区) 神谷遺跡 涼見E遺跡								
シリーズ名	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号	6								
編著者名	久保田一郎・川原和人・阿部賢治・株式会社 加速器分析研究所								
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/								
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33 Tel10852-36-8608 E-mail:maibun.shimane.lg.jp								
発行年月日	2016(平成28)年3月15日								
ふりがな	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地		市町村	遺跡番号					
じょうがたにいせき 城ヶ谷遺跡	しまねけんおおいしくてちようさつか 島根県大田市久手町刺鹿		32205	石A 359	35° 13' 22"	132° 30' 55"	20140806~ 20141226	3,500㎡	道路 建設
かにだにいせき 神谷遺跡	しまねけんおおいしくてちようさつか 島根県大田市久手町波根西		32205	石A 388	35° 13' 32"	132° 31' 05"	20140526~ 20140811	340㎡	道路 建設
すずみEいせき 涼見E遺跡	しまねけんおおいしくてちようさつか 島根県大田市久手町刺鹿		32205	石A 389	35° 13' 25"	132° 31' 01"	20140701~ 20140811	140㎡	道路 建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城ヶ谷遺跡	集落跡 生産遺跡	古墳時代 近代	竪穴住居3基 窯跡2基		土師器 須恵器 陶磁器 窯道具		竪穴住居3基 連房式登窯2基		
神谷遺跡	生産遺跡	古墳時代 奈良時代	炭窯4基		土師器 須恵器		横口付炭窯4基		
涼見E遺跡	古墳	古墳時代	方墳2基		土師器		方墳2基		
要約	<p>城ヶ谷遺跡では7世紀後半の造付け竈を伴う竪穴建物を検出した。また、近代では、明治期の陶器窯と昭和初期の瓦窯、および作業用の礎石建物跡を検出した。物原からは、多量の陶器、瓦、窯道具が出土した。当地域の近代産業史を考える上で貴重な資料が得られた。</p> <p>神谷遺跡では7世紀後半から8世紀前半の横口付き炭窯を検出した。4基が連続して構築されていた。涼見E遺跡は、古墳時代中期の方墳を2基検出した。両者を区画する溝からは転覆した多数の葺石が出土した。</p>								

城ヶ谷遺跡1区・神谷遺跡・涼見E遺跡
一般国道9号（朝山大出道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書6

2016年3月発行

編集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒690-0131

島根県松江市打出町33

TEL 0852-36-8608

印刷

島根印刷株式会社

